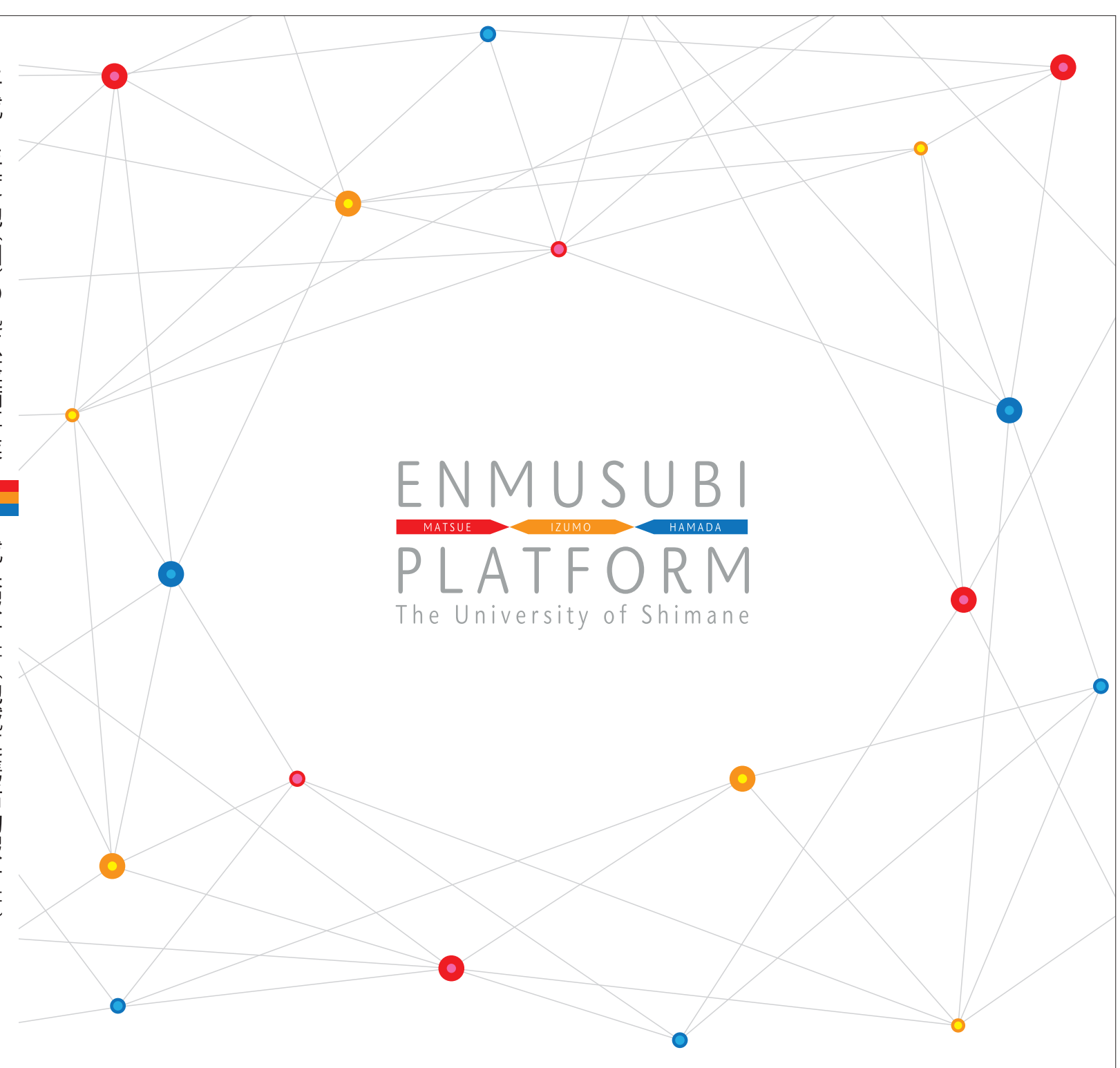


平成26年度地(知)の拠点整備事業



成果報告書(地域連携活動報告書)



ENMUSUBI
 MATSUE IZUMO HAMADA
 PLATFORM
 The University of Shimane



マスコットキャラクター
「オロリン」



公立大学法人 島根県立大学

文部科学省 地(知)の拠点 平成26年度 地(知)の拠点整備事業 成果報告書
 —— 地域連携活動報告書 ——
**地域と大学の共育・共創・共生に向けた
 縁結びプラットフォーム**



はじめに

島根県立大学は文部科学省が実施する地域を志向し、地域の再生・活性化に貢献する大学を支援するという「地（知）の拠点整備事業」に、「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」（COC事業）を主題として応募し、平成25年度に事業採択されました。本学のCOC事業は平成26年度で2年目となり、本格的な事業推進の時期に入った年であったということが出来ます。

COC事業は、2本の柱からなり、地域の課題を解決するニーズと大学が有する知的資源であるシーズのマッチングを図り、大学と地域が共同研究を実施することによって、地域課題の解決に向けた取り組みを進めること、そして、地域の再生、活性化に貢献する人材を養成する教育改革を実行することです。本学では、既に、地域志向の教育である「フレッシュマン・フィールド・セミナー」のように、地域をフィールドとする体験型学習を実施しています。さらに、本年度は、地域を志向した一連の教育科目を履修することによって、「しまね地域マイスター」の資格が授与される認定制度の構築に向けた取り組みを強めました。その基礎となる「しまね地域共生学入門」は、本学の全ての1年次生に必修として課す授業で、3つのキャンパスから、それぞれの専門分野を有する教員が参加し、島根の現状と課題について、「共生」という視点から解説し、学んでもらう科目です。本年度は授業担当者を決め、授業時間を3キャンパスで統一することによって、COC²-Netを活用した遠隔授業を行うための準備がほぼ完成しました。

研究面では、「9月連携会議」における地域ニーズと大学シーズのマッチングに基づき、「しまね地域共創基盤研究費」を活用した共同研究が実施されています。これらの研究の成果は、「第2回全域フォーラム」の場で発表され、広く公表されました。「第2回全域フォーラム」では、同時に、浜田市及び益田市と島根県立大学との共同研究の成果も発表されています。

島根県における地域の再生と活性化を推進する担い手となる人材の育成にむけて、「松江キャンパス」では、現場専門職者と大学教員が過疎地域の課題解決に向けて研鑽し合う専門職者向け履修証明プログラム「地域共生専門コース」の開設に向けた準備を進めました。「出雲キャンパス」では、「しまね看護交流センター」が中心となり、「地域とともに歩む看護・福祉の専門職」の育成に取り組んでいます。「浜田キャンパス」では総合政策学の学びと実践のもと、地域事情に精通し、地域を繋ぎコーディネートしながら課題解決に取り組む「実践力のある専門人材」の育成に努めています。

これらの地域での取組をさらに発展させ、「縁むすびプラットフォーム」を基盤として地域課題を解決し、地域の再生・活性化という共通課題の解決に向けて、大学が関係する自治体や団体等の間を繋ぎ合せる接着剤の役割を果たすことができると願っています。

公立大学法人島根県立大学

理事長・学長 本田 雄一

— 目 次 —

はじめに	1
I. 3キャンパス合同事業	
1. 「地(知)の拠点整備事業」平成26年度全域プラットフォームの実施状況	5
1) 9月連携会議	5
2) 縁結びプラットフォーム運営委員会総会	6
3) 第2回全域フォーラム	7
4) しまね地域マイスター認定制度	27
5) しまね地域共育・共創研究助成の研究成果	28
6) 浜田市と島根県立大学の共同研究成果報告会	87
7) 益田市と島根県立大学の共同研究成果報告会	88
8) 3キャンパス研究交流会	89
2. 3キャンパス合同学生ボランティア	90
1) 3キャンパス合同学生ボランティア企画	90
2) 3キャンパス合同学生ボランティア報告会・研修会	91
3) 3キャンパス合同学生ボランティア交流会	92
3. 学生災害ボランティア	94
1) 東日本大震災に伴う災害ボランティア活動2014記録	94
2) 広島市における土砂災害ボランティア活動2014記録	95
II. 各キャンパスの活動	
1. 浜田キャンパス	97
1) 学生の地域貢献活動	99
(1) 学生ボランティア活動(震災ボランティア以外)	99
(2) ボランティア・ポイント抽選会	102
(3) 地連café OPEN!	103
2) 地域に関する教育・研究活動	107
(1) 地域振興に関する提言を含む優秀卒業研究・論文の発表会	107
(2) 山陰地域フィールド体験学習一里山と食の繋がり	108
(3) フレッシュマン・フィールド・セミナー	109
3) 地域から/地域への応援・情報発信	112
(1) 公開講座	112
(2) 特別公開講座	116
(3) 学生研究発表会	117
(4) はまだ灯2014	120
(5) 島根中央高等学校学習支援	121
(6) 匹見中学校学習等支援	122
(7) 県大農園「すこっぷ」	123
(8) みすみフェスティバル出展	125
(9) きっかけバス47「震災ボランティア」報告会	126

(10) MAKE DREAM 2014	127
(11) 高大連携の取り組み	128
(12) 大学生による小中学校学習支援事業の取り組み	129
(13) NEARセンター市民研究員制度	130
(14) 講演会講師等・審査会委員等	132
2. 出雲キャンパス	135
1) 出雲キャンパスプラットフォーム会議	136
2) 研究に関する取り組み	136
3) 地域連携活動報告	138
(1) 生涯教育	138
① 公開講座	138
② 地域・団体主催による出前講座	140
③ ぎんざんテレビ出前講座	142
(2) 学生の地域交流・地域貢献	143
① 学生ボランティア活動の促進	143
1. 学生ボランティア研修会	143
2. 学生ボランティア・マイレージ制度・ボランティア保険の実施	144
3. 学生へのボランティア情報提供	145
4. 3キャンパス合同学生ボランティア交流会	145
② 受託事業および地域活動への学生参加促進	146
(3) 教育機関との連携	147
① オープンキャンパス・看護セミナー	147
② 高大連携講座	148
③ 高校訪問	149
④ 小中高校等出前講義	149
⑤ 小中学校体験学習	150
(4) 産公学連携	151
① 包括協定締結自治体との連携	151
② 受託事業	152
1. 出雲市 日御碕地区介護予防教室事業(うみねこの会)	152
2. 出雲市 児童虐待防止推進研修事業	153
③ NPO法人・関係団体・企業との連携	154
1. 北浜地域包括ケア支援検討会の活動	154
2. 出雲産業フェア2014への出展	155
④ 各種審議会・委員会等への参加	156
(5) 広報・広聴活動	158
① ホームページ等を活用した最新情報発信	158
1. ホームページ等を活用した最新情報発信	158
2. IZUキャンLife	158
② 出雲キャンパスモニター会議	159
③ 第4回島根県立大学出雲キャンパス タウンミーティング in 川本町	160

④シニア・ジュニアキャンパスツアー	161
⑤施設開放	162
3. 松江キャンパス	163
1) 地域連携推進委員会の活動	165
2) 地域に関する教育・研究活動	165
3) 公開講座等の開催	169
4) 地域活性化支援	173
(1)企業・団体・NPO法人等との連携	173
(2)自治体等との連携	181
5) 学生による地域貢献活動	186
6) 教育機関等との連携—保・幼・小・中・高・大の教育連携	194
7) 教育課程のための地域の施設・機関との連携	199
8) おはなしレストランライブラリーの地域連携活動	203
Ⅲ. 縁結びプラットフォーム事業	
1. 事業概要	213
3キャンパス共通の事業概要	
2. 事業の主な具体的取組	214
島根県立大学／島根県立大学短期大学部	
Ⅳ. その他の地域活動	
1. 地域貢献プロジェクト助成事業	215
2. 島根県との連携	216
3. 中村元記念館と公立大学法人島根県立大学との連携に関する協定書締結	217
おわりに	218
参考	
1. 大学憲章	219
2. 自治体・学校との協定・覚書	220

I. 3 キャンパス合同事業

1.「地(知)の拠点整備事業」平成26年度全域プラットフォームの実施状況

1) 9月連携会議

地域ニーズと大学シーズのマッチングを図る、実務者レベルによる話し合いの場として、またお互いにサジェスチョンを行い、課題解決の糸口を模索する場として、平成26年度「9月連携会議」を開催しました。

鳥根県立大学浜田キャンパスを主会場として、出雲キャンパス・松江キャンパスに遠隔講義システムを利用し中継を行いました。

連携自治体等関係団体と本学の教職員65名が出席し、それぞれ地域課題と研究内容を説明し、質疑応答・意見交換を行い、マッチングの出発点としてカップリングの議論を進めました。

当日は地域ニーズ、大学シーズとも案件が多く、会議は長時間となりましたが、大変熱心な議論が行われました。

日 時:平成26年9月30日(火) 13:00～17:45

会 場:浜田キャンパス 大講義室1(主会場)

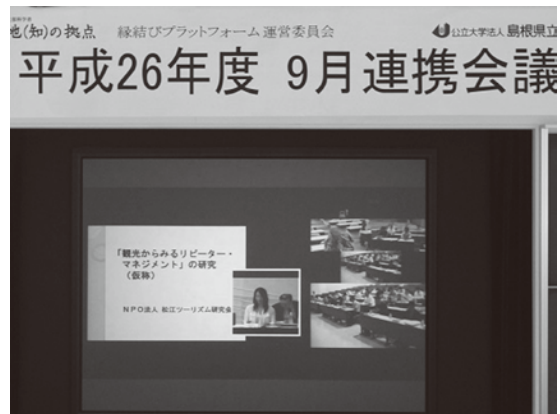
出雲キャンパス 大講義室(副会場)

松江キャンパス 大講義室(副会場)

参加者:65名 浜田キャンパス 50名

出雲キャンパス 4名

松江キャンパス 11名



2) 縁結びプラットフォーム運営委員会総会

平成26年5月26日(月)、島根県立大学浜田キャンパスにて、平成26年度縁結びプラットフォーム運営委員会総会を開催しました。

以下の議事について審議し、承認されました。

- ・平成25年度事業実績の報告
- ・平成25年度事業評価(自己評価・外部評価)の報告
- ・平成26年度事業計画



平成26年度縁結びプラットフォーム運営委員会総会次第

日時:平成26年5月26日(月)

13:30~15:30

会場:島根県立大学 浜田キャンパス

本部棟会議室

1 開会

2 あいさつ

3 議事

【第1号議案】 平成25年度事業実績の報告について

【第2号議案】 平成25年度事業評価(自己評価・外部評価)の報告について

【第3号議案】 平成26年度事業計画について

4 その他

○意見交換

5 閉会

3) 第2回全域フォーラム

平成27年2月17日(火)、島根県立大学浜田キャンパス講堂にて、平成26年度島根県立大学「地(知)の拠点整備事業」成果報告会『第2回全域フォーラム』を開催しました。

島根県をはじめ、副申をいただいた自治体や関係団体のみなさま、県外の高等教育機関、一般企業など計197名のご来場をいただきました。

本学の本田雄一理事長のあいさつに始まり、「浜田市共同研究報告」「益田市共同研究報告」「基調講演」「しまね地域共育・共創研究報告」を行いました。

次第

日時:平成27年2月17日(火)10:00~17:30

会場:島根県立大学 浜田キャンパス 講堂

司会:島根県立大学 豊田知世 講師(浜田キャンパス)

<開会のあいさつ> 公立大学法人島根県立大学 理事長 本田雄一

<浜田市共同研究報告>

商店街活性化に関する調査 - 4つの分析軸から見る中心市街地活性化 -

島根県立大学 久保田典男 准教授(浜田キャンパス)

地元の食を再考する「まち弁」企画 - 浜田市のイカを活用して -

島根県立大学 田中恭子 准教授(浜田キャンパス)

浜田市の商店街活性化を目指して

- 大学と地域の融合の場としての中心市街地再生計画 -

島根県立大学 藤原真砂 教授(浜田キャンパス)

高齢者の介護予防のための検討会

島根県立大学短期大学部 酒元誠治 教授(松江キャンパス)

<益田市共同研究報告>

災害時においても稼働可能な情報通信技術の調査とデモンストレーション

島根県立大学 金野和弘 准教授(浜田キャンパス)

石見空港におけるビジネス客獲得にむけたモビリティ・マネジメントの提案

島根県立大学 西藤真一 講師(浜田キャンパス)

講評

浜田市 久保田章市市長 ・ 益田市 山本浩章市長

<基調講演>

地域が元気になるには ～地域連携の処方箋～

東京農業大学 生物産業学部 地域産業経営学科 木村俊昭 教授

<しまね地域共育・共創研究の成果報告>

高津川と人々の暮らしの繋がりから探る地域の魅力

-地域活性化のための基礎調査1-(川の地名調査)

島根県立大学 寺田哲志 准教授(田キャンパス)

農医連携による限界集落の活性化に関する試み

～島根県出雲市吉野集落の実践を通して～

島根県立大学 松本亥智江 准教授(出雲キャンパス)

児童文化財の現状をふまえた保育者養成プログラムの展開

島根県立大学短期大学部 福井一尊 准教授(松江キャンパス)

ヘルスツーリズムによる地域活性化の可能性 ～島根県邑智郡川本町における事例～

島根県立大学 山下一也 副学長(出雲キャンパス)

島根県立大学 小村智子 助手 (出雲キャンパス)

<閉会のあいさつ>

島根県立大学 地域連携推進センター長 林 秀司 教授(浜田キャンパス)

<開会のあいさつ>

公立大学法人島根県立大学 理事長 本田 雄一

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました島根県立大学の本田でございます。「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)第2回全域フォーラム」の開会にあたり、一言、ご挨拶を申し上げます。

本日は東京農業大学の木村俊昭教授に基調講演の講師としておいでいただきました。木村教授にはのちほど「地域が元気になるには～地域連携の処方箋」と題して基調講演をお願いしています。

木村教授は元々、北海道小樽市入庁、地域政策、産業振興課長などを歴任された後、内閣官房に出向され、地域活性化を担当されました。その後農林水産省大臣官房企画官となり、農商工連携や6次産業化などを担当された経験をお持ちの方で、私が島根大学に勤務していた当時、地域活性化についての特別講義を担当していただき、松江においでいただいたことがあります。現在でも地域活性化などの専門家として全国を飛び回り、年間に120回も講演を行っておられます。超多忙な方であり、年間300回は飛行機に乗っておられるという、まさに雲の上で仙人のような生活をしておられます。本日は本学のために雲の上から降りてきていただいて、貴重なご講演をしていただきます。「地域を元気にする地域連携の処方箋」について、いろいろな角度から示唆に富むお話をお聞きすることができるものと期待しております。木村先生には、何かとご多用中にもかかわらず、本学の「COC事業 第2回全域フォーラム」のために、遠路北海道から、島根県の浜田市までお出でいただきまして、誠に有難うございます。

また、本日は、COC事業の関係者の皆さんのみならず、島根県内を中心として、自治体関係者、大学関係者、保育関係者、企業の皆さん等にご参加頂いております。島根県立大学を代表しまして、ご参加頂きました皆様を心から歓迎し、厚く御礼申し上げます。

島根県立大学は、大学憲章で「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を目指すことを明らかにしています。文部科学省が実施している地域を志向し、地域の再生・活性化に貢献する大学を支援する「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」を主題として応募、採択されたのも本学の理念に合致しているからです。本年度は2年目となり、本格的に取り組み、推進する時期になっていると言えます。

本学は地域を志向した各種の取り組みを行っています。教育面では「フレッシュマン・フィールド・セミナー」で新入生全員が地域に出かけて地域から学ぶ姿勢を養い、各演習でも地域活性化をテーマにした取り組みを続けています。研究面では、自治体、企業との共同研究などで地域課題の解決に向けた提言を行っており、各キャンパスの専門性を生かした地域貢献を積み重ねています。



人材育成の取り組みとして松江キャンパスでは、現場専門職者と大学教員が過疎地域の課題解決に向けて研鑽し合う専門職向けの履修証明プログラム「地域共生専門コース」を開設する予定としています。出雲キャンパスでは、これまで多くの看護職者を地域に輩出していますが、今後、しまね看護交流センターが中心となって地域とともに歩む看護職、地域福祉専門職を養成していきます。浜田キャンパスでは総合政策学の学びと実践の下、地域事情に精通し、地域をつなぎ、コーディネートしながら課題解決に取り組む実践力のある専門人材を育成しています。こうした取り組みをより組織的に実践し、その実践力を保証する制度として「しまね地域マイスター」の認証制度を新設する予定にしているところです。こうした地域での取り組みをさらに発展させ、「縁結びプラットフォーム」に基づいて地域課題を解決し、我々が目指している持続可能な共生社会を実現したいと考えています。

本フォーラムでは、地元自治体との共同研究成果発表で、浜田市、益田市と鳥根県立大学との共同研究の成果を発表していただくこととなっています。発表にあたっては、浜田市の久保田章市市長、益田市の山本浩章市長に、発表後、それぞれの成果の講評をお願いしています。その後、木村先生の基調講演をいただき、引き続いて「しまね地域共育・共創研究の成果報告」が行われます。COCの基盤研究費を活用して本学教員が取り組んでいた地域活性化に関する研究成果を報告させていただきます。また、口頭による発表以外にも、講堂ホワイエでポスターによる成果発表も実施しています。フロアからも地域活性化について多くのご意見をいただきながら、地域課題の解決に向けて大学が関係する自治体や団体等の間をつなぐ接着剤の役割を果たすことができるよう願っています。

本日は最後まで、どうぞよろしくお願いたします。ありがとうございました。

◇基調講演

「地域が元気になるには～地域連携の処方箋」

東京農業大学 生物産業学部地域産業経営学科 木村 俊昭 教授

地域づくりは地域の産業、歴史、文化を掘り起こし
次代を担う子どもたちとともに研ぎ、
世界発信すること！

■地域を元気に

私が生まれたのは北海道オホーツク地域の西興部村。人口は1,100人余り、年間の一般会計予算は約23億円の小さな村だが、「貯金」はある。人口の少ない村になぜ「貯金」があるのか。それは「自分たちですべきことは、よく話し合い決める。一致しなければ決して行わない」ことを実践しているからだ。役場職員も少ない。そこで村ではそれぞれが役割分担をして、事業構想をしていく。つまりどう稼いでいくか、を知恵を出し合い考えている。自分たちでできることは自分たちでやるが、できないことはパートナーやブレンと連携し、役割分担をして実施している。



私が小学校から高校まで過ごしたのは、西興部村の南に位置する遠軽町。人口が約2万2,000人の町。私が高校1年生の時、生徒会の役員を務めたが、生徒会活動として高校生が地域に役立つことはないかと、まちの人たちに聞いて回ったことがある。しかし、私たちの問いに対して地域の人たちの共通した答えが「高校生はそんなことをしている場合ではない」というものだった。つまり、高校の間に必死で勉強するか、スポーツで成績を残して「このまちを出なさい」と言う。「働くところがないので、まちに残っても暮らせない」ということだった。本当は残ってほしいのだが、子どもたちのことを考えたらそう言わざるを得ないというのが地域の人たちの思いだったのだろう。それを聞いて私たちはとても悲しい気がした。

私は、小学校、中学校のころは幼稚園か保育所の先生になろうと考えていたが、地域の人たちの「まちには残るな」という声を聞き、どうすることがいいのか考え、悩み抜いた。そこで役場の職員になって、なんとかこの町を盛り上げたいと考えるようになった。高校3年時、自己分析をした結果、大切なことに気づいた。それは、自分は地域を全く知らないということだった。北海道に生まれながら北海道のことを知らなかった。そんな自分が町役場に入って、地域に場をつくって、活性化しようなどいうと「本当に実践できるのか」と言われるだろう。そこで北海道をはじめ全国の地域を学ぶため、大学に進学しようと考えた。

私は、理論だけではなく、実学、現場重視の視点で地域活性化を実践している大学の先生を探し、手紙を書き、目標とする大学へ入学した。大学ではフィールドワークに明け暮れたが、3年生になったころ、自ら知り、気づいたことがある。それは「地域の産業、歴史、文化を

徹底に掘り起し、研ぎをかけ、世界発信するキラリと光るまちづくり」と、これを実践するときには「次世代を担う子どもたちに愛着心を持ってもらうよう地域一体で育むひとづくり」を推進する必要があることだ。そして、部分や個別ではなくそれを全体に広げる、「全体最適」を実践することだと理解した。

私は、こうした考え方を行動に移すことにし、4年生の時、地域に入っていった。心掛けていたのは、地域の産業、歴史、文化を掘り起こすことであり、それも子供たちだけでなく、大人たちだけでなく、地域の皆さんが一緒になって取り組むことだった。

■あだ名は「2貫王」

就職活動では自分の目標を実現させようと小樽市職員に出願、2次の面接で私は「産業、歴史、文化を掘り起し、研ぎをかけて世界に発信するキラリと光るまちづくりと、未来を担う子どもたちを地域一体で育むひとづくりを実践したい」とし入庁となった。

ところが私の希望とは違って、最初の配属は納税課だった。驚いたが、超プラス思考の私は、すぐに頭を切り替え、本業は仕事とライフワークと考えることにした。仕事はしっかり勤めるが、目標は休みの日に実践することにした。

ライフワークとして私が最初に取り組んだのは、地域の産業、歴史、文化を徹底的に掘り起こすため、例えば小樽のラーメン屋、すし屋、そば屋が何軒あるのか、などから調べることにした。なぜなら自分のまちでありながら市の職員も市民も関心を持っていない、知らないことが多いと分かったからだった。そこでまずそば屋の調査から始めた。そば屋マップを作って1軒ずつあたっていくことにした。自分のまちのそば屋をすべて知っていないと比較もできないと思ったからだ。次にラーメン屋、うどん屋。あつという間に調べ上げた。マップに落とし、特徴を書いて、店主からコメントをもらった。コメントをもらおうと考えたのは、店主が自分の店の特徴をどう把握しているかや、こだわりを知りたかったからだった。人は自ら知り、気づかなければ行動に移さないものだ。

大変だったのはすし屋の調査だった。まず、保健所へ聞きに行くと市内に134軒あることが分かった。手作りマップを作成し、1軒1軒食べ歩く。それぞれ同じにぎりを2、3貫ずつ食べては次の店に行き、同じにぎりをまた、2、3貫食べる。30軒ほど回ったところで、すし屋に知られるようになった私に「2貫王」というあだ名がついた(笑)。そして、50軒過ぎたころ回ったすし屋に顔を出したところ即座に「出すネタがないから帰れ」と言われて驚いた。常連客の対応でいっぱいだったのだろう。お客さんには言いようもあろう。そこでサービス向上のための寿司評価基準チェックリストを作成した。これもすし屋の店主が店の特徴、評価などを自ら知り、気づき、改良すべき点があれば、自ら行動してもらうための知り気づきリストだ。

■歴史的建造物の利活用

歴史的建造物の現地調査も積極的に行った。小樽市は明治時代から大正時代にかけて北海道開拓の拠点となった場所で、この時代の建物が多く残っており、市指定歴史的建造物として現在76件が指定されている。私は調査の結果、この歴史的建造物が2,000～3,000万円、あるいは1億円以上もかけて修復されていながら、倉庫として利用されていることを知った。

あまりにももったいない、と考えた。倉庫として利用するのではなく、経済産業活動の拠点として利活用できないだろうか。例えばレストランや制作体験工房などの提案をした。湿気の少ない小樽市では歴史的建造物の内部の素材が劣化せず残っており、また、工学部の前身・工部大学校建築学科第1期卒業生4人のうちの3人が小樽の建造物を設計している事実などが分かってきた。経済産業活動をする建物が1棟から2、3棟と増えていき、10、20棟となっていく。民間中心にその動きが広がっていった。行政の役割分担として歴史的建造物を利活用し博物館がスタートした。歴史的建造物に全国で初めてライトアップを行った。海外から視察者が訪れ、歴史的建造物群を案内すると感動してくれた。小樽のように小さなまちで歴史的建造物が修復されているだけでなく、経済産業活動も行われ、利活用され、ライトアップもしていることに視察者は驚いていた。さらに、こうした活動をDVDに収録して小学校、中学、高校に配布して子供たちにも見てもらった。大人たちだけではなく子どもたちに愛着心を持ってほしかったからだ。地域の人たちが一緒になって汗を流してきたことが、まちの歴史として残っていく。仕事を通じて自分が楽しくワクワクすれば、周りも楽しい場になるとこのころから私は感じていた。

■商店街の将来はまち全体で考えよう！

中小企業庁の平成24年商店街実態調査の結果によると、全国8,000の商店街にアンケート調査し、3,066から回答があった。中でも「商店街は繁栄しているか」の設問に「YES」と答えた商店街は、わずか1%だった。驚くほど少ない。なぜそうなのか？ why so?

私がヒアリング調査をしたところ、商店街の認識では客数が伸びない、あるいは儲からない理由として「駐車場がないから」を挙げている。そこで「駐車場をつくったがどうか」というと今度は「駐車場が分かりにくいから客が来ない」という。それでは「駐車場のマップを作ったがどうか」というと「駐車場が有料だからやはり客が来ない」という。それでは「無料にしたらどうか」と考えるが、原因は本当にそうなのだろうか。一方、お客さんに「なぜ商店街で買い物をしないのか」とヒアリング調査をすると、答えは「買う物やほしい物がない」のが一番の理由だった。2つ目の理由は「商店街に行くと暗くなる」。3つ目は商店街の店に入ると「何か買わないと失礼ではないかと思ってしまう」という。

これから「商店街が繁栄する兆しはないのか」という問いには2.3%が「ある」と答えている。これも少ない数字だ。ただ、ここで考えなければならないのは、まち全体の中での商店街の役割は何か、ということだ。個別の商店街の存立だけを考えるのではなく、まちの中での商店街の在り方、位置づけを考えて繁栄する方向性、方策を立てなくてはいけないということだ。私に関わる商店街は体験工房など、動きのあるものへと変化させている。

■「五感六育モデル」の推進

私はまちづくり関係者と「五感六育ファーム」を設立し、代表理事を務めている。人体に必要な五臓六腑をイメージしたもので、五感とは「見る」「聞く」「かぐ」「味わう」「触る」であり、「六育」とは「食育」「職育」「木育」「遊育」「健育」「知育」をいう。例えば商店街の中に五感を取り入れていくと面白いのではないか。「六育」のうち「食育」では、海外では4味「甘い」「苦い」

「しょっぱい」「すっぱい」、日本ではもう一つ「旨み」がある。この味を12歳までの子どもたちに体験してもらうようにする。つまり、小学校の給食や自宅で味わってもらうようこれを実践する。これは小脳、大脳に刺激を与えるためだ。

「遊育」は遊びながら何が危険かを自ら察知する力を養う。集団行動のうえで何をしてはいけないのかを自分で気づききっかけを子どもたちに考えさせる。例として山形県東根市は人口増のまちだが、市役所前に遊育施設がある。屋内施設だが、天井にロープが張っており、大きな滑り台もある。約34億5,000万円で建設した施設だ。驚くことにこの施設を利用する子供たちは年間約34万人にも上る。半分は地元、半分は地元以外の子どもだ。地元以外の子どもたちが訪れる施設として、ここに住みたいと考えるきっかけになっていると考える。

昨年5月には5億円で屋外施設が完成した。ザリガニのいる川がある。畑や自分で工作のできる木工施設、ジャングルジムもある。あつという間に10万人の利用者を数えた。最初はザリガニを持って帰る子どもがいたが、次第に少なくなり、そのうちにザリガニを持って来る子がいるようになった。他のこどものためにザリガニを持って帰ってはいけないと子どもたちが気づき始めた。さらに金魚を持ってくる子どもが現われ、今では金魚の池となった。子どもには教える場よりも、自ら知り、気づき、考える場づくりが重要となる。

■行政に頼らないむらおこし

鹿児島県鹿屋市の柳谷集落の地域づくりについて紹介したい。地元の人は「やねだん」と呼ぶが、130戸、312人の小さな集落だ。17年前、集落では人口流出が続き、このままだと集落が消えてしまうとの危機感が住民から沸き上がった。そこで住民は当時、うなぎ店を営んでいた豊重哲郎さんに町内会長をお願いした。豊重さんは当時55歳。

住民はなぜ豊重さんに白羽の矢を立てたのか？ それは町内会には経営力が必要なことを知っていたからだ。当時、町内会の通帳にはわずか1万円しかなく、町内会としての活動が何もできない状態だったからだ。もう一つ理由があった。町内会長には指導力が必要ということだった。豊重さんは中学校の男子バレー部の監督を務めたことがあり、弱小だったチームを県大会準優勝まで導いた実績があったからだ。豊重監督の指導は、スパルタ式で叱咤激励するのではなく、子どもの長所を誉め、その子の力を伸ばし、励ましながら能力を引き出していた。住民は豊重さんの経営力と指導力を期待し、町内会長に推したのだ。

町内会長に請われた時、豊重さんは目標を掲げた。1つはみんなが笑顔になるには文化振興が必要だ。2つ目に集落として大切なことは、未来の担う子どもたちの養成。3つ目にこれをするためには稼がないとだめだ。自主財源を確保しなくてはならない、という点だった。同時に豊重さんは、住民に「急ぐな、焦るな、慌てるな」「決してあきらめず、じっくりやろう」「お互いに目配り、気配り、心配りをしよう」と呼びかけた。

「やねだん」の最初の取り組みは町内の工場跡地を自分たちの力で公園にすることだった。行政に頼ることなく進めた結果、公園はわずか約8万円で完成した。住民の結束力は高まり、サツマイモを栽培し、自分たちで味噌や土着菌などを作り、販売した。

「やねだん」では、空き家を修復した後にアーティストを誘致して住んでもらっている。現在は7人のアーティストとその家族が「やねだん」に住み、住民として創作活動に励んでい

る。彼らに作品を作ってもらい、町内会主催の芸術祭を5月に開催している。町外からも多くの来場者がある。文化振興によって笑顔でまちづくりをすることを実践している。子供たちのために寺子屋を作った。寺子屋は公民館が会場で、公民館は太陽光発電と風力発電で電源を確保し、避難所としても活用している。私は豊重さんとパートナーを組んで、お互いに連携して取り組んでいる。

産業、歴史、文化を徹底的に掘り起こして、自分たちのまちの宝ものを全員で確認し合う。未来を担う子どもたちと地域が一体となって考え、知り、気づき、行動に移していくことだ。自分たちでできないところはパートナーやブレンに手伝ってもらって進化することが重要といえよう。

「笑顔、感動と感謝のまちづくり・ひとづくり」を実践しましょう！

〈しまね地域共育・共創研究の成果報告〉

○高津川と人々の暮らしの繋がりから探る地域の魅力

—地域活性化のための基礎調査1(川の地名調査)—

島根県立大学 寺田 哲志 准教授(浜田キャンパス)

地名は人とのかかわりの証左

GPSを使って位置を特定、聞き取りで生活も明らかに

高津川は島根県吉賀町の源流から北流し、益田市で日本海に注ぐ流域面積1,090平方キロ、延長81キロの川である。途中で津和野川、匹見川が合流する。流域の人口密度は50人/平方キロと少なく、こうした環境もあって近年では国土交通省の「全国一級河川の水質現況」で6回も清流日本一に選ばれている。これを受けて地元の人たちも「地域の魅力の源泉になる」として高津川を活用しようと試みており、地元のNPO法人が舟で川下りの実験を行って流域の調査を行い、地元の名産品の販売も試みている。



河川の魅力には、景観、水産資源、レジャー、生活文化、水資源利用、水運などが挙げられる。高津川でも流域の多くの人々がそれぞれ魅力を訴えようとしているが、より効果を発揮するためには、多種にわたる河川の魅力に関わった活動をする人々の連携が重要ではないだろうか。川と流域の魅力を理解し語れるのは、高津川流域と関わり暮らしてきたこの人たちであり、その連携によって全体像が見えてくるであろうと考えた。

■位置情報付きカメラで撮影し、特定

そこで私たちは、高津川の魅力を探る手がかりとして、川の地名を特定しようと考えた。地名が付いている場所は、その場所が川を利用していた人と関わりがあるという証拠であり、調査に当っては地元のNPO法人や、高津川の川漁師さんに協力を求めた。

調査方法としては、川の地名が判明している場所において位置情報付きカメラで撮影し、特定・保存していく。これによって将来資料や図面が紛失したとしても場所と地名は特定できる。来年度以降は、特定できた範囲について流域の人たちの話を聞き、川と人がどのように暮らしてきたか、その場所でどのようなことがあったかを記録する。さらに、景観のよいところは絵画として記録し、パンフレットなどに使用することも考えている。

■聞き取りも交えて

今回の調査方法では、撮影した場所をグーグルアースでそのまま記録している。現地調査に併せて、近隣の人たちの証言から地名の由来や生活ぶりなどを聞き取り、約70か所の調査を終えた。

一例を挙げると、津和野町日原に塔岩という地名がある。近くの人によると元々、塔のよ

うな形をした岩が立っていたのだが、国道9号の工事で無くなったということだった。上流までさかのぼってみると、高津川の源流点は吉賀町の中国自動車道のすぐ脇にある。写真で見ると一本杉のすぐそばで湧いているのが源流であり、このように源流点が明確に分かる河川は珍しい。

益田市飯田町には飯田橋という赤い吊り橋がある。老朽化が進み通行止めとなっていたが、最近補修された。景色の良いところだったので学生に絵を描いてもらった。津和野町には「滝の前」という地名があるが、以前はこの河原で誰ともなく、火を焚き、酒を飲み、目の前の川で採ったアユを焼いたりしていた。そのうち酔いが回ると、滝の前の淵の深さを確かめようと潜ってみたりしたという。それは、少し下流にあって以前は高津川で最も深い淵と言われていた明神淵とどちらが深いかという話から始まったことである。実際は流域に多数つくられた、砂防ダムの影響で中流域の流れが細くなり、明神淵は浅くなってしまっているということである。

青原には、三つ岩という岩がある。この三つ並んでいる岩が流れに隠れるほど高津川が増水する日は舟を出さず、漁を休むという川漁師の慣習がある。益田市横田地区には「漕ぎの河原」という地名がある。以前は桜の木がたくさんあって、春になると子どもは弁当を持たせてもらい、皆で花見をする場所だった。以前は地名のとおり渡し船もあり、横田地区から対岸の向横田地区に渡ったことがある、というのが近くのお年寄りの話だった。しかし今は何もない場所となっている。近くに安富橋という橋もあるが、ここにも昔は渡し船があり、兩岸に針金が渡してあり、舟に乗った人はそれを手繰って渡ったという。地名に生活文化の名残が見える。

これまでの調査の結果、流域の人たちは高津川を愛しそれぞれ地域を盛り上げようとしていることが分かった。流域の人たちの話を聞いていると、話の中には必ず川の地名や川辺に住む知り合いの名前が登場し、地域の人だからこそその冗談が出てくる。そこには石見の人



たちの強さと面白みがベースになっているように感じられた。

今後、高津川の魅力を訴えたとすれば、都会から借りてきたようなアイデアではなく、石見の人の面白みが表現できるような形が好ましいと感じる。この点を、来年度以降の聞き取り調査において留意したい。

○農医連携による限界集落の活性化に関する試み

～島根県出雲市吉野集落の実践を通して～

島根県県立大学 松本 亥智江 准教授(出雲キャンパス)

地域、住民は大学を育むフィールド

健康実態調査も実施、対策を検討へ

■吉野地区の概要

出雲市佐田町は出雲市南西部にあり、湖陵町、多伎町、雲南市、飯南町、大田市と周囲を接している。吉野地区は24世帯、70人ほどの集落で、標高350mの高地に位置していることから夏は涼しく、エアコンもいらぬほどで過ごしやすい。夏は星空が美しく、ホテルが飛び交う土地柄でもある。地域の人は出雲市の中心部に近い場所に生活拠点を移している人もいますが、地域の行事には帰ってきて参加したり、地区の草刈りなどには都会に出ている子どもが帰って来て参加するほど地元愛の強い地域である。



同地区の課題としては、保健医療機関が少ないことから医療に不安を抱いていること、高齢化率が41.9%と高いため地域の伝統行事も住民だけでは維持できないこと、後継者不足による休耕地の増加などがある。

■「縁」が産んだ取り組み

本学のCOC事業は平成25年度後期から始まっており、本年度も活動させてもらっているが、同地区とはCOC事業の取り組み以前からの縁がある。

平成24年10月、私が地域連携推進委員会のメンバーの時に、地域貢献活動として出前講座の依頼を受けたことがある。その際、活動の中心となる地元の「笑顔プロジェクト」のメンバーが「地域が活性化するためには女性が生き生きと活動できるような環境をつくっていききたい」と話していたことから、単に出前講座を開いて終わりにするのではなく、線から面へと広がりを持たせ、継続性のある関わりを持つ必要があると考えた。さらに、地域が元気になるだけでなく、大学も元気になるような関わりも必要であり、教員だけでなく学生にも関わってもらう双方向性が必要として活動を始めたのが、同地区との縁となった。

同地区の「笑顔プロジェクト」では、自主グループ「よしの笑顔塾」をつくり、大学教員、学生も参加して活動がスタートした。平成25年度は教員が地区に出向く出前講座のほか、地区の人たちが大学で行われる公開講座にも参加していただいた。同地区と大学との交流を地区内の他の方々に知っていただく機会として、夏祭りを企画し、花火、そうめん流しなどを行い、学生は浴衣を着て地元の若者との交流もできた。また、1月13日には高齢化によって担い手不足となり、開催できなくなっていた「とんど祭」を8年ぶりに復活させ、このことは新聞にも取り上げられた。

■平成26年度の活動目標

25年度の取り組みを基礎に平成26年度の目標として休耕地を活用した農作業体験、交流会を通して限界集落の活性化を図ること、地域住民の教育力を活用して地域を志向する看護職の育成を目指すこと、地域にも大学にも双方にメリットがあることを目指す活動を行うことにした。本学の看護学部、短期大学部専攻科の学生に呼びかけ、塾生として「笑顔塾」の活動に参加するメンバーを公募した。現在約20人の学生が登録している。

農作業体験では休耕地を活用して農作物を栽培することにした。まず、農地の確保、整備を行った。約7アールの水田を地主の好意で無償で借り、田起こしを行い、原肥を入れるなど整備を行い、現在は半分ほどの広さの土地で作物を栽培している。地区住民の指導で植えつけから管理、収穫までを体験した。4月から10月までの6か月間、教員、学生が2週間に1回程度地区に出向き、農業体験を積んだ。栽培作物は、管理しやすいカボチャ、ジャガイモ、落花生などだったが、その後、住民の勧めもあって栽培品目は増えている。

住民との交流会は農業体験とセットで実施している。農業体験の前日、金曜日の夜に地区に出向き、交流会を実施し、公民館に宿泊し、翌朝、農業体験を実施した。交流会の内容は、地域を知る試みとして住民から地域の歴史や伝統行事の様子などを教えてもらった。一方で学生が大学で学んだことを住民に聞いてもらおうとの計画もあるが、まだ実現していない。

地区行事への参加も積極的に行った。参加に当っては学生が企画段階から加わることができるように計画、平成25年度と同様夏祭り、とんど祭に参加し、平成26年度は「感謝祭」として農業体験、交流会でお世話になった方を招待し、収穫した農作物を活用した料理も味わっていただいた。

冬期活動としてはテレビ会議システムを使って住民を対象にした健康教室を開催することができた。

■平成26年度の活動実績

農作業体験には地元住民延べ50人、学生27人、教員18人が参加した。学生が出向かない間は住民が自主的に肥料を施してくれ、管理もしてもらった。4月26日の苗の定植の際には地元有志の発案で大学と地区の連携記念としてハナミズキ、八重桜の記念樹の植樹も行った。農業体験への学生の参加は1回あたり2、3人である。農園は学生が「いずキャンスマイル農園」と名付け、看板も設置した。こうした取り組みの結果、農園では立派な野菜が収穫でき、地元の人たちも驚くほどだった。

農作業体験の前日には交流会「夜話の会」を開いた。7月、9月には「吉野歴史ヒストリア」として地域の歴史に詳しい住民に、神話の時代から昭和初期までの歩みを話してもらった。交流会への参加は延べ住民51人、学生15名、教員7名の参加があった。



地区行事への参加は夏祭りに住民51人など60人近い参加があった。学生が企画した感謝祭、今年1月のとんど祭ではそば打ち体験などを行った。

冬期のテレビ健康教室は月2回開催した。14時半から15時半の1時間を充てた。まず住民に血圧測定をしてもらった後、ストレッチ体操や講話などを行った。3人の教員が中心に担当しているが、大学の他の教員にも協力を得て、さまざまなテーマで実施している。テレビ会議システムは双方向のやり取りが可能で、住民の様子を見たり、聞いたりすることができる。住民の1回あたりの参加者は5～6人である。

■活動の評価と成果

これらの取り組みの成果として地区住民との交流の促進が図られた。農作業体験では住民の知恵を借り、夜話の会では地区の歴史を教えてもらうなど、地域住民の教育力を活かした活動になったと思われる。地区行事への参加は、行事そのものの復活と活性化が挙げられる。

一方、学生の変化も見られた。学生が吉野地区に出かけ住民と交流を深めることで、学生自身の自分の出身地への思いを新たにしようとする。また、参加する学生は学部、学科、学年も異なるため、大学では感じる事のない横断的な一体感を感じてくれているようだ。

学生にとって農業体験によって食物を栽培することは、プロセスや結果として、作物をどう食べていくか、どう健康とつながっていくのかを考えることにつながり、食を通しての健康への意識が大きく育つ効果も生まれている。

さらに地区に出向き、さまざまな体験、交流、参加することによる人的ネットワークの拡大も大きい。例えば、サツマイモ栽培ではサツマイモ博士と言われていた人にも知恵を借り、エゴマ栽培では川本町の栽培農家の人に指導してもらった。交流を通じて出雲商工会議所の方々との関係も深まった。県職員の方々にも農作業に来ていただき、本事業を通して人の輪が広がっている。

地元の行事に協力しているということでは、地元消防署のAED講習会にも学生と共にスタッフとして参加した。このようにCOC事業の取り組みが地域を活性化させていく種となり、大学を活性化させる種も播いているのではないかと感じている。

■今後の課題

課題として平成26年度は農業体験で多くの作物を栽培したが、今後は地域の特産につながるような作物栽培ができればと考えている。交流の活性化では「夜話の会」で学生からの情報発信ができるよう充実させたいと考えている。食との関係では地元婦人会との連携を深めてレシピの掘り起し、料理教室の開催を進めたい。吉野地区の高齢者が元気なので、健康生活の実態調査を行い、健康課題の明確化と対策を考えたい。

活動にあたっては出雲キャンパスだけでなく、松江、浜田キャンパスの知恵も借りながら進めていきたいと考えている。大学が地域の皆さんの知恵袋となり、地域住民も大学の知恵袋となってお互い協力し合っていきたい。地域住民は学生を育てていくフィールドであり、大地である。地域の力を借りて大学、学生を育てていきたい。

○児童文化財の現状を踏まえた保育者養成プログラムの展開

島根県立大学短期大学部 福井 一尊 准教授(松江キャンパス)

41年の歴史を刻む「ほいくまつり」

学生の手作りで学科の学びと連動

■児童文化財とは

「児童文化財」は「大人が子どものためにつくり、与えるもの」の総称として使われている。一般的には絵本や紙芝居、手遊び、歌、おもちゃなどをいう。本学短期大学部保育学科でも児童文化財を学ぶ児童文化という授業を設けている。この授業は1、2年生約100人全員の学生が合同で受けているが、その根幹が「ほいくまつり」という行事だ。この行事を通して教員は協働、学生は学びを体験している。



「ほいくまつり」は、40年以上の伝統ある行事で、平成26年度は41回目を開催することができた。地域でもなじみのある行事として親しまれ、今回も6月下旬、松江市の島根県民会館大ホールに約1,700人の子どもたち、保護者、保育関係者が参加した。歴史を積み上げてきたのは「ほいくまつり」が単なるお祭りとしてではなく、本学科が長年にわたって改善してきた教育プログラムとしてである。保育学科の全教員8人が、それぞれ専門の立場から指導、助言を行い、学生も授業時間だけではなく、自主的で、自治的活動であることが大きな特徴として挙げる事ができる。ステージでの演目は歌唱、影絵劇、演劇、キャラクターを使った司会ステージで構成されている。

■「ほいくまつり」の構成と特性

歌唱のステージは選曲、演出も学生のアイデアで作りに上げている。舞台衣装や小道具、大道具もすべて学生の手作りである。影絵劇は幅4 m以上、縦約3 mの大きなスクリーンをステージに設置、大きな人形1体を3、4人の学生で操っている。テレビやアニメが子どもの生活の隅々まで行きわたっている世の中だからこそ手作りの温かさが伝われば、と取り入れている。演劇は、資料の年には「オオカミと7匹の子ヤギ」を演じた。ステージ後ろの大きな壁画や手前のベニヤ板のオオカミも学生の手作りだ。学生の努力と工夫が見られる。司会のステージでは、キャラクターが登場して手遊びやゲームをして楽しむ。被り物も発砲スチロールを削って着色し、穴を開けて作っている。

「ほいくまつり」の特性の一つは、すべてが手作りで行われることにある。舞台を作り上げるために7つのパートがあるが、それを支えるパートも加えると11のパートに分かれており、学生はそれぞれのパートに属して2年間活動する。1年生はフォロアーシップを、2年生はリーダーシップを学んでいくことになる。

裏方のパートでは、例えば衣装パートでは入学までに経験の少ない衣装づくりを実践する。先輩が後輩に縫い方を教え、工夫を重ねて、デザインした服の型紙を起こし、もらってき

たり買ってきた布を使って作っていく。素材はさまざまに手縫いすることもある。大道具パートは大きな壁画を描くが、幅10m以上の作品に仕上げる。1年生は入学後2か月半しか経っていない時期だが、短期間で入場者にも見てもらえる絵に仕上げるレベルまでスキルを高めている。

松江キャンパスでは大きな絵を描くスペースはないため、屋外に出て描いたり、雨天時には廊下で描いたりしている。このような共有スペースの中で学生が活動することで、共に学びあうことが本取り組みの教育的効果をより高めている。

「ほいくまつり」の活動は学生の発想、工夫のかたまりであるといえる。音響効果、照明も自分たちでデザインを考える。ポスター&ペンダントパートは広報を担い、ポスターや、たくさんチラシなどを作り、配布する。ポスターは500枚制作するが、すべては1枚1枚学生の手作りで、その素朴さ、良さで保護者などに関心を持ってもらい来場してもらっているのではないかと。記録パートは学内リハーサルを記録し、改善につなげていく役割を担っている。「ほいくまつり新聞」も配り、進行状況を共有している。このようなスキルは保育現場に出たときにすぐに求められるスキルとなる。このように各パートはその役割から網の目状につながっている「ほいくまつりネット」でもあり、学生にはこの「ほいくまつりネット」で子どもたちの期待を受け止めようと呼びかけている。

2つ目の特性は、子ども主体の表現プログラムであることだ。子どもの生活という文脈の中に位置づけて、なじみのある手遊びやゲームを行い、聞いたことのある話や歌を取り上げている。子ども視線を第一に考えている。リハーサルは学生100人全員が舞台を見て子どもの反応を返すという取り組みをしている。仲間の発表を見て「子どもだったら」との立場で学生がコメント用紙に記入し、舞台パートに託し、舞台が改善されるという繰り返しを行っている。

特性の3つ目は「6月開催のインパクト」である。通常、学習の成果を発表する機会は年度の終わりに設定されることが多いが、「ほいくまつり」は毎年6月末に開催されている。1年生にとっては入学間もない時期であり、保育の責任、難しさ、喜び、夢などに衝撃的に出会う機会になっている。2年生にとっては学外実習や就職などの動機づけ、自信につなげることができている。本学科では「ほいくまつり」のひとつの成果発表だが、学びのゴールではなく、スタートとして位置づけている。

■改善に向けての視点

「ほいくまつり」にこれまで不足していた部分もあった。それは、保育現場の子どもたちがどのような児童文化財に触れているのかという点については学ぶ機会がなかった。そこで、本年度はCOC事業の地域活動経費を使って「保育現場における児童文化財に関するアンケート調査」を松江市内全域の45園を対象に実施した。設問内容は、子供たちが触れている絵本、手遊びなど、どのような時間に行っているか、保育者が考える受け継ぎたい児童文化財、子どもたちが親しんでいる歌、児童文化財の変化、種類、室内遊びなどについて一とした。

アンケート結果は学生たち自身でまとめ、1、2年生全員100人の学生で勉強会を行った。一例だが「どのような時間に手遊びを行うか」は、朝夕のあいさつの時に行うが、多くが本の読

み聞かせの前や集いの前などが多いということが明らかになった。実際に「ほいくまつり」のプログラムでは、劇や影絵をする前に手遊びをすることによって子どもたちに無理のない形で次にプログラムに移るよう配慮しており、この方向が現実に即していることが確認できた。「保育者が考える受け継がせたい児童文化財」については童謡、わらべ歌が挙げられた。これらのように、「ほいくまつり」のプログラムに取り上げられる内容の広がりの可能性を示す結果も得られた。

現在の保育現場で取り扱われている児童文化財の種類は多様であることもアンケートによって分かった。室内での自由遊びはままごと、ブロック、絵を描く、体を動かして遊ぶことが日常的に行われていた。この結果を反映させるため、本年度の「ほいくまつり」では、エントランスに段ボールで作ったトンネルなどを設置して、体を動かして遊ぶことができるよう考え、また、塗り絵コーナーも設けた。その結果、子どもたちが楽しそうに色を塗ったり、描き加えたりと喜んでくれ、大いに盛り上がった。

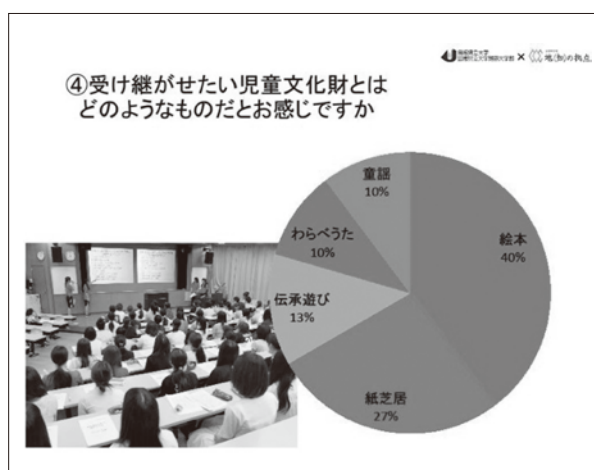
■保育者養成に貢献する「ほいくまつり」

「ほいくまつり」の取り組みではさまざまな場面で学生の評価活動を行った。作り上げる中での形成的評価、終わったあとに行う総括的評価などだ。パートでの自己評価、全体での評価もある。常に計画を立て、行い、チェックし、次につなげていくというPDCAのサイクルを意識させながら活動させていることが、学生の学びをより深いものにしているのではないかと。すべてが終わったあとの自己評価表では自らを振り返り、言葉として綴る活動をしている。

授業評価は独自の表を使用している。これらを数年分まとめると「自主的に活動できた」と評価する学生の割合が非常に高く、自己成長実感、学びの有意義実感も90%を超える高さだった。「児童文化理解」「感性の高まり」「指導法上の学び」についても高い数値となっている。一方、伸び悩んだ項目としては「コミュニケーションを取る」「学年を超えて協力する」が挙げられる。

1年生、2年生の「学び実感」の違いは、2年生になったときの方が、仲間とコミュニケーションを取りながら活動できたという実感を得ている。下がった項目は「保育基盤」で、2年生は実習で現場の子どもたちに触れていることから自分たちの活動への見目が厳しくなっているのではないかと。

「ほいくまつり」の活動は学科の学びとどのように連動しているのか、「ほいくまつり」から学ぶことによって他の教科がどのように充実していくのか、他の授業が充実することによって「ほいくまつり」のレベルが上がっていく。保育学科のポリシーである「豊かな人間性と確かな専門性」が保育者として必要な力である。「ほいくまつり」によって育む力が多くの部分でそのポリシーと重なるのではないかと。保育者の養成に「ほいくまつり」が貢献していると実感している。



○ヘルスツーリズムによる地域活性化の可能性

～島根県邑智郡川本町における事例～

島根県立大学 山下 一也 副学長・教授(出雲キャンパス)

島根県立大学 小村 智子 助手(出雲キャンパス)

特産のエゴマを前面にモニターツアーを実施

参加者からは評価の声

■認知症予防教室の効果

川本町は、中国山地の中山間地域に位置する人口3,500人余りの町である。特産品はエゴマであり、エゴマをテーマに本学と川本町とはすでにいくつかの研究に取り組んでいる。地中海料理が認知症予防に効果があるのではないかと、言われているが、私たちはエゴマの油を使用した地中海料理を食べてもらう「認知症予防教室」を2年間にわたって川本町で実施してきた。

この教室は、地元病院から管理栄養士を月1回派遣してもらい、料理の献立づくりにはエゴマ油を1本使ってもらうことをお願いしてきた。提供する料理は地中海料理で、リゾットやスープなどで食べてもらって健康管理を行った結果、確かに認知機能は向上し、2年後の赤血球脂肪酸分析の比較で α -リノレン酸が非常に高くなっていることが分かった。 α -リノレン酸は血液をサラサラにする成分であり、エゴマ油を使うと確実に上がるという初めての結果が得られた。EPA成分も上がっている。体の中で α -リノレン酸がEPAに変換していることが分かり、動脈硬化などにも大きな影響があるのではないかと考えている。

■モニターツアーを企画、実施

川本町は古くは陰陽を結ぶ街道、幹線の宿場町であり、にぎやかな商店街があったが、今は衰退している。観光資源もほとんどなく、観光入込客延べ数は島根県内では隠岐の知夫村に次いで少ない。

一方で、特産品としてのエゴマの認知度は高まり、最近の町のホームページを見るとエゴマの注文が全国から殺到し、対応しきれないほどの人気を呼んでいる。そこで私たちは、これまでの研究の経過を踏まえた上で、観光資源としてのエゴマに注目し、「健康ツーリズムモニターツアー」を企画し、昨年10月26日に実施した。2008年に町が主催して2泊3日の同様のツアーを実施したことがあったようだが、当時はエゴマや地中海料理の提供はなく、9人の参加を数えたが、継続できなかった経緯がある。

今回のツアーモニターとしてお願いしたのは、出雲市十六島北浜地区の20歳台から60歳



台の人たち16人で、8時半にバスで出発、10時に川本町の宿泊施設「音戯館」に到着。血圧測定後、ウォーキング、エゴマ油を使った昼食を食べていただいた後、健康講話「アンチエイジングな生活とは」では、エゴマ油の効用についてお話しした。その後町内の温泉に入っていた、帰途についていただいた。

その際、参加者の反応を客観的に見るため、アンケート調査を実施した。集計、分析結果を見ると、まず「ヘルスツーリズムの場所として川本町はどうか」という問いに対しては「非常によい」「ややよい」がほとんどだった。川本町は観光地ではないのでヘルスツーリズムの開発は地域活性化に有効だと考える。「健康に対する関心は」との問いには「非常に関心があった」「やや関心があった」が大半であり、ツアーに参加したことで健康に対する関心が高まったと言える。「今後の健康管理に関してはどうか」の問いには、ほとんどの人が「非常に役立った」と回答。「エゴマを使って健康管理をしたい」という女性もいた。

「今回のツアーについて」の感想を尋ねたところ、「非常に楽しめた」という人が多かった。「ストレスを解消できた」という男性の声もあった。幅広い年齢層の参加者だったが、どの年齢層にも楽しんでもらえたツアーだったと言える。

このように健康の要素と旅行の楽しみの要素が高い評価が得られたことで今回のツアーは、ヘルスツーリズムとしてのバランスが取れていたと考える。「今回のツアーの時間配分について」もほぼ評価されており、バスの移動時間にも同行した職員がエゴマや食事メニューについての説明やガイドも行ったため、効果的だった。

また、「川本町で本格的なヘルスツーリズムツアーが始まったら参加するか」との問いには、参加者全員が「参加したい」と回答。うち半数は「ぜひ参加したい」と回答した。「夫婦で参加したい」との希望もあった。「ツアーの参加費は」の問いには3,000円から7,000円まで幅があったが、5,000円が最も多かった。「いくらで販売すれば利用してもらえるか」の問いには、4,000円から5,000円が多く、この価格帯が目標と言える。

ツアーで行った健康チェックは脈拍、血圧を測定し、入浴後再度測定したが、結果では血圧は低下、脈拍は増加した。脈拍の増加は全身の血管拡張と血流改善を促した効果であろう。「エゴマを使った地中海料理」は満足度が高かった。ほとんど全員が満足していた。食事は魅力的なメニューが必要だが、今回のようなバイキング形式は、幅広い年齢層に対応できるため効果的だった。「エゴマを使った料理を作りたい」「エゴマ料理づくりを体験してみたい」との希望があった。今後の参考にしたい。

健康講話も健康によい食材、健康によい油を得る方法を説明したため効果があった。予定にはなかったが道の駅に立ち寄り買い物をしてもらった。参加者のほとんどがエゴマ製品を購入していた。

■エゴマヘルスツーリズムを提案

今回のツアーはバス代込みで8,000円の想定だったが、この商品売るためには参加しやすい料金の設定が求められるため、なんらかの補助が必要だと考える。また、今回のような温泉入浴と抗アレルギー作用のあるエゴマ油の組み合わせは、気管支ぜんそくの患者には効果があると言われている。



このモニターツアーの結果を踏まえて川本町の観光資源として「エゴマヘルスツーリズム」の提案をしたい。脳トレ中の認知症の方々や、気管支ぜんそくの方々をターゲットにする。さらに、商品化に近づいているエゴマを使った化粧品や、町内に自生するエゴマから作ったエゴマ油などの新しいエゴマ製品を付加することも必要だ。ツアーの内容は、エゴマ油を使った食事、10月から11月のエゴマの収穫体験、

健康講話、温泉入浴もある日帰りツアーを開発したらどうかと考えている。

本年度の研究、ツアー実施にあたっては、COC事業として松江キャンパスから観光資源の位置づけやデータ、浜田キャンパスからはツーリズムの資料提供や各種の指摘もいただいた。今後の展開に当っては、川本町の活性化に向けて協力しつつ、応援していきたい。

4) しまね地域マイスター認定制度

本制度は、島根地域のあらゆる分野へ精通した学生を認定する、本学独自の学士認定制度です。1年次に3キャンパス共通科目『しまね地域共生学入門』にて、島根県の地域課題を概論的に学びます。2年次以降では(一部、1年次含む)『選択専門科目』として、地域課題を専門的に研究・学習する機会を設け、『地域共生演習』としてフィールドワーク(現場に飛び出した学習)を取り入れて地域課題について学べるゼミを選択していきます。また、より地域に精通した人材育成の為に、高度な専門科目の取得、キャンパスを越えての『地域課題総理解』(他キャンパスとのディスカッション等)にて、他方向からアプローチする視点を養います。



『しまね地域マイスター』に認定された学生は、卒業時には自ら課題に対して向き合い、考え、課題解決に向けた行動力のある人材として社会に飛び出すことができる事を目標としています。

地域に対しては『地域事情に精通した人材』、『地域や人をつなぐ、コーディネート力を持つ人材』、『熱意をもち課題解決に取り組める実践力を持った人材』を育成することにより、自ら課題に対して考え・行動できる人材として受け入れられることを目指していきます。

『しまね地域マイスター』認定を受けた学生が、将来的に自治体・企業等に就職を希望する際に有利にはたらく等、環境整備を行っていきます。

カリキュラムマップ		CURRICULUM MAP			
学年	1年	2年	3年	4年	
演習科目				地域共生卒業研究	
		地域共生演習			
専門科目	選択専門科目				
		地域課題総理解			
基礎科目	しまね地域共生学入門				

『しまね地域マイスター認定制度』各カリキュラムについて

しまね地域共生学入門

複雑な地域課題において、複数の専門からの知見により学ぶことで、実際に地域に出て実践する力を養います。

地域課題総理解

キャンパスを跨ぎ、それぞれの専門を交えて演習形式で議論・報告を行うことで、学際的に考えることの必要性を理解・学習します。

選択専門科目

『しまね地域マイスター』を取得するための認定対象科目です。

地域共生演習

関心のある地域課題の解決に向けて自らの仮説を設定し、フィールドワーク等を用いた客観的な論証を通じ、その解決策の提案力を養います。



地域共生卒業研究

地域課題について学んできたこれまでの知識を踏まえ、受講することで『しまね地域マイスター』取得が実現します。

5) しまね地域共育・共創研究助成の研究成果

(1)

【しまね地域共創基盤研究費】

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 教授 井上厚史
研究テーマ	「大学生がつくる“田舎暮らしマニュアル”」の制作

1. 研究目的	
<p>深刻な過疎高齢化問題を抱える島根県(西部地域)において、「どうすればUターン者・Uターン者の定住を促進させることができるのか」という課題の解決</p>	
2. 方法	
<p>島根県へのUターン・Iターン希望者、中でも特に若者の移住を促進させるために、大学生の目線から見て、(1)何が島根県の魅力であり、(2)何が島根県へのU・Iターンの障害になっているか、を調査研究し、それを『県大生がつくる田舎暮らしマニュアル』にまとめ、島根県へUIターン希望者の増加に貢献するよう努力する。</p> <p>具体的には、①ゼミの学生を島根県の全19市町村にそれぞれ割り当て、学生の眼から見た各市町村の魅力をピックアップし、それがどのように実施され、どのような結果を生んでいるかを調査する。②各市町村の魅力調査が終わった段階で、今度はそれらのデータを、新たに環境、住居、子育て、就職、老後、防災の6つのカテゴリーに整理・統合し、フローチャート図を作成し、島根県内の市町村を選択する場合に役立つように整理する。③調査の途中段階で、2回に渡り、共同研究員に調査の妥当性や進捗状況についてアドバイスをもらい、実態に即すとともに、専門家の意見をできる限り反映したマニュアルにするように配慮した。</p>	
3. 結果	
<p>全部で200部の『県大生がつくる田舎暮らしマニュアル』を制作し、ふるさと島根定住財団に50部、浜田市に25部、本学地域連携センターに10部寄贈するとともに、調査協力者に20部無料配布した。それぞれ大きな反響があり、ふるさと島根定住財団からは「今後このマニュアルを参考にして、財団の資料を作成したい」というお言葉や、浜田市旭町からは追加で20部ほしいという要請もあったが、すでに在庫がなかったため、お断りするという事態になった。2015年2月17日に本学講堂で開催された第2回全域フォーラムでは、ポスターセッションながら多くの観客を集め、島根県中山間地域研究センターのスタッフから熱心な質問があり、1部提供するとともに、今後の連絡を取り合うことで合意した。総じて、予想した以上の反響があり、島根県下の各市町村定住対策課の取り組みに対して、未熟ながらも一定の刺激を与えることができたように思われる。</p>	
4. 研究成果の公表	
<p>『県大生がつくる田舎暮らしマニュアル』(全52ページ、フルカラー、上質紙、200部)を制作し、関係機関に無料配布した。</p>	

5. 地域貢献の成果

記述したように、ふるさと島根定住財団をはじめとする島根県下各市町村の定住対策に携わる関係者の強い関心を集め、定住対策に大学生の目線が意味を持つことを証明することができたように思われる。単なるプレゼンテーションにとどまらず、具体的に手にすることができる『マニュアル』を学生が制作し、地域に無料配布したことが、大きな反響を生んだ要因と考えられる。大学の地域貢献のあり方として、一つの具体例を示すことができたのではないだろうか。

(2)

【しまね地域共創基盤研究費】

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 教授 藤原真砂
研究テーマ	島根県石見地方の地域産品(主に食品)の生産者、生産量、販路等の研究

1. 研究目的
石見地方で生産されている農畜産品および加工品の情報収集と販路の開拓
2. 方法
島根県西部の石見地域で生産されている農畜産品および加工品の情報を石見地方の4市の役所、商工会議所および5町の役場、商工会を訪れ聴き取り調査するとともに、さらにそこで紹介された生産者にも聴き取り調査を行い、小規模生産者の情報を収集し、取り纏め、インターネットに情報を公開し、生産者と販売者もしくは消費者の縁結びを試みる。また、10月18、19日の石見の国特産品総覧会に参加し、取り纏めた情報を公開するとともに、県内外の販売者の情報も収集する。なお、インターネットのホームページは学生とウェブデザイナーの共同で作成する。
3. 結果
1. 石見地域の4市(大田市、江津市、浜田市、益田市)、5町(川本町、美郷町、邑南町、津和野町、吉賀町)の計518の食産品(加工品中心)の情報を収集し、企業名、商品名、供給可能期間、保存方法、賞味期限、消費期限、商品種別、販売価格、内容量、消費者ターゲット、販路、特徴、食べ方、写真からなる食産品データベースを作成した。
2. 2014年10月18日、19日、島根経済同友会石見の国再生委員会主催で開催された第1回石見の国特産品総覧会に教員、学生が35名参加し、会場運営を支援し、食産品生産者、販売業者、消費者(市民)、島根経済同友会石見支部、石西支部との交流を行った。
3. 食産品データベースを島根経済同友会のホームページ「なつかしの石見の国」に掲載し、県内外の生産者、消費者に公開した (http://www.iwaminokuni.com/modules/mokuteki/content0024.html)。
4. 上記の食産品データベースに4市5町の食産品データベースに4市5町の食産品への取り組み方針、さらには各地で注目される代表的食産品業者のインタビュー記事を掲載した県立大学版食産品ホームページ用の準備を整えた。
4. 研究成果の公表
1. 第1回石見の国特産品総覧会にて、販売業者、行政、商工会議所、商工会関係者にデータベースの印刷物を配布した。
2. 食産品に関する2つのホームページ(3の「結果」の「なつかしの石見の国」ホームページ、県立大学版食産品ホームページ用)を通し、県内外の人々に石見地方の食産品の広報、販売関連情報を公開した。

5. 地域貢献の成果

石見地域の生産者の大半は零細な規模に留まる。しかも、中高年が主体である。本プロジェクトにより取り纏められた食産品データベース、公開された食産品ホームページは、彼らが自ら販路を拡大できない状況を突破する契機となることが期待できる。すでに上記の第1回石見の国特産品総覧会では本データベースをもとに販売業者(バイヤー)、産品業者の間で商談が進んだケースがある。大学は地域の産品の生産状況に関する教員、学生の調査実施を通して、また纏められた情報インフラ(データベース)を通して、生産業者、販売業者、消費者の各主体の接着材の役割を担う方向でさらに進むことが必要である。本プロジェクト実施を通し、COC事業のモデルケースを提示出来たのではないかと考える。石見地域の産品の販売の亢進は地域に住まう高齢生産者の生き甲斐にもなるし、若者の里帰り、人口環流にも資することが期待される。

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 准教授 久保田典男
研究テーマ	温泉を起点とした観光振興の可能性

1. 研究目的

島根県西部における温泉地では、これまで点在する各温泉宿泊施設がそれぞれ個別に経営を行っており、温泉宿泊施設同士の連携や、行政及び支援団体との連携、他の観光資源と組合せた情報発信などが希薄であった。

こうした中、2013年には石見の自然や食文化を楽しむ体験交流プログラム「いわみん」が任意団体イワミノチカラによって島根県西部において開催された。これは、2001年に大分県別府温泉において開催された「別府八湯温泉博覧会(ハットウ・オンパク)」を起源としており、地域にある様々な資源を地域発案型の体験プログラムとして一定期間内に集中して提供する「オンパク手法」をモデルとした事業である。「オンパク手法」は、一般社団法人ジャパン・オンパクによって全国的な展開を見せており、参加地域は「いわみん」も含め全国19箇所にわたっている。しかしながら、「オンパク手法」は体験型のイベントを開催することに重点が置かれていることから、その取組を温泉地への入込客数増加や、温泉宿泊施設への宿泊客増加などといった地域経済の拡大へどのようにつなげていけばよいかという観点からの考察が求められる。

そこで本研究では、温泉地による様々なイベントの開催を、温泉地への入込客数増加や温泉宿泊施設への宿泊客増加などにどのようにつなげていけばよいかについて、「オンパク手法」などの先進事例のケーススタディなどから考察することを目的とする。

2. 方法

具体的な研究方法としては、温泉地及び温泉宿泊施設に関する文献、観光振興に関する文献のサーベイを行うとともに、島根県西部の中小企業者や行政担当者に対してヒアリングを実施することで、島根県における温泉地の振興に係る論点の整理を行った。

これらを踏まえ、全国19箇所の地域のうち、温泉地の近隣にて「オンパク手法」を実施する先進事例として、石川県能登エリア(能登旨美オンパクうまみん)、岐阜県岐阜市(長良川温泉泊覧会長良川おんぱく)、静岡県熱海市(熱海温泉玉手箱オンたま)の3地域を取り上げ、オンパクを実施する運営主体及び関連する支援機関にインタビュー調査を行った。

さらに、大学が温泉地におけるイベントの開催においてどのような役割を担うのかを考察するために、法政大学において開催される観光振興と産学連携に関する研究会に参加することで情報収集を行うとともに研究者等との人的ネットワークの構築に努めた。これらの研究会では、観光学を専門とする研究者、温泉宿泊施設等の中小企業への経営診断を専門とする研究者等、さまざまな専門分野の研究者等が参画し、産学連携による観光振興の具体的事例などについても意見交換が行われたことから、本研究における論点の整理を行

う中で有益な情報を得ることができた。

3. 結果

事例研究の結果、地域に応じてオンパク手法の活用の仕方は多様である一方で、各運営主体がオンパクの成果を新たなまちづくり事業へと展開しようとしている点が共通していることがわかった。具体的には、石川県能登エリアにおいては旅行業登録によるプログラムの運営・研修事業、岐阜県岐阜市においては商品開発・研修事業・創業支援、静岡県熱海市においてはマルシェ開催・遊休不動産活用による中心市街地活性化などの展開がみられている。

また、オンパク手法を短期的な温泉旅館の宿泊客増加につなげるのは困難な一方、オンパクの実施による①宣伝効果の活用、②顧客満足度の向上によるリピーター獲得、③若手経営者の挑戦意欲向上など、自社の経営革新に戦略的に活用する温泉旅館も存在する。

以上を踏まえると、温泉地による様々なイベントの開催を、温泉地への入込客数増加や温泉宿泊施設への宿泊客増加へとつなげるためには、旅館組合や観光協会が温泉旅館の経営基盤強化の視点から運営主体をサポートする取り組みが必要である。

4. 研究成果の公表

研究成果については、2015年2月17日に鳥根県立大学浜田キャンパスにおいて開催された「第2回全域フォーラム」において、ポスターセッションによる発表を行った。当該発表内容は、2015年度上半期に公立大学法人鳥根県立大学地域連携推進センターにおいて発行予定の『地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム』においても公表される予定である。

また、本研究の更なる発展に向け、2015年7月に明治大学において開催予定の日本地域政策学会第14回全国研究【神奈川】大会において学会発表を行うべく準備を進めているところである。

5. 地域貢献の成果

本研究を進めていく過程で、鳥根県西部において開催されている「いわみん」において、任意団体イワミノチカラと連携しつつ、学生のボランティアとしての「いわみん」への参加を斡旋するなど、教育活動にも展開することができた。

また本研究を契機として、鳥根県浜田市が主催する「旭温泉水有効活用事業起業家プランコンテスト」の審査委員を務め、実践的な立場から温泉を起点とした観光振興に関わることができた。

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 准教授 金野和弘
研究テーマ	シニア世代の労働力を活用した臨時的雇用受給マッチングシステムの構築

1. 研究目的	
<p>本研究の目的は、農水産業に関する臨時雇用需要を満たすために、シニア世代の労働力を活用することを提案し、そのために必要なマッチングシステムを構築することである。</p> <p>本システムは、メールより手軽で、誰でも思いついたときに仕事の募集と参加ができることを最も重視して構築した。</p>	
2. 方法	
<p>本システム「musubu+」(むすぶプラス)は、「シンプルに、直感的に、楽しく。今後も繋がりたいようになるように。」という想いを込め、全ての世代の人が見慣れているカレンダーを使いシンプルに直感的に楽しく操作できるように配慮した。</p> <p>システムの要件定義および全体設計に関しては研究代表者が行なったものの、プログラミング/デザイン技術が不足しているため、システムの構築にあたってはWebデザインを中核業務とするデザイン会社にご協力いただいた。</p> <p>システムの構築にあたっては、単純なWebページではなく動的な要素を採り入れた。また、PCやスマートフォン、タブレット端末など、多様な端末のブラウザでも動作するように配慮して構築した。</p> <p>【本システムの特徴】</p> <p>わかりやすいインターフェイス:シニア世代でも簡単に理解できる操作性を実現。</p> <p>応募者はログインせずに申し込みが可能:気軽に簡単に申込が可能。一方、アカウント保持者がログインした上で申し込む場合には連絡先の入力が不要。</p> <p>募集数と既応募者数がひと目でわかるようビジュアル化:応募者/潜在応募者は応募状況(既応募人数)しか見えないが、募集者はログインすることにより、氏名や連絡先、コメントなどを確認できる。</p>	
3. 結果	
<p>Webブラウザや端末に依存しないシステムの構築を目指した結果、確認可能な端末では可視性や操作性に問題がないことが確認できている。専門家にデザインを依頼したため、無味乾燥なデザインではない完成度の高いものになった。</p> <p>今後は、シニアネットはまだ(浜田市)と連携を取りながら、試験運用を重ねながらより信頼性の向上に務めるとともに、本格運用を通じてより完成度を高めたい。</p> <p>今回構築したシステムは汎用性の高いものであるため、その核となる部分は様々な用途に転用可能である。たとえば、ボランティアの募集やアルバイトの募集など、弱い紐帯(ちゅうたい)の構築に有効であると考え。それゆえ、今後はより広範な活用の検討を行ってゆきたい。</p>	

4. 研究成果の公表

平成26年度全域フォーラム(平成27年2月17日)にてポスター報告を行った。その際、システムのデモも行なった。

5. 地域貢献の成果

全国的にも高齢化率が高い島根県では、シニア世代の労働力は貴重な資源である。今回構築したシステムは、それを活用するために有効なものである。

また前述のように、このシステムは汎用性が高いものとなっているため、今後も引き続き改良を加えた上で、さまざまマッチングに活用したい。

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 准教授 田中恭子
研究テーマ	地方大学の地域連携機能の模索

1. 研究目的	
<p>本調査では、特に島根県西部における課題へより効果的に対応するためには、島根県立大学3キャンパス(5分野)の総合的な地域連携の在り方、地域貢献の可能性についてモデルとなる指針を見いだせていない状況にあることを前提に、大学での研究教育成果(知見)を地域社会でより有効に活用してもらうために、大学、地域主体のそれぞれがどのような具体的な取組(共生)を実施しているのかを明らかにする。</p>	
2. 方法	
<p>上記の地方大学での地域課題への効果的な還元がなされていない課題を受け、大学の知見を、自治体、企業、NPO等組織の地域へ、より効果的に地域課題の解決に資するように還元するために、大学と地域主体の連携の在り方を検討する必要がある。具体的には、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 地方大学での研究および教育面での地域連携(貢献)の類型整理 2) 大学の専門性と地域連携(貢献)の指針の関係整理 <p>以上を整理することで、大学での専門性と地域課題への対策へのより効果的な連携の在り方が模索可能となる。</p> <p>調査方法として、「全国大学の地域貢献度調査2013」(『日経グローバル』)ランキング上位大学および10位までの公立大学、20位までの山陰地域の大学へのヒアリングを実施した。</p> <p>地域連携の在り方を整理し、地方大学、特に本学3キャンパスの専門性を活用した地域連携の在り方を検討することにより、本学での地域連携、貢献の指針を模索する。</p> <p>今回のヒアリング実施大学は、上位大学(信州大学 宇都宮大学 岩手大学 茨城大学)、20位までの公立大学(北九州市立大学 大阪市立大学)、山陰地域(鳥取大学 山口大学)の8大学であり、各大学の地域連携機関へ概ね以下の内容を質問した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 地域連携について(・活動内容:研究・教育・社会貢献、・活動体制:主体、資金、継続、・地域ニーズの例、地域側の反応) 2) COC事業について(・COC事業の概要と取組状況、・COC事業での自治体の連携事例、・地域ニーズの受け入れ基準、体制、・教育における地域活動の取組状況:担当者、活動支援範囲) 3) 地域を対象として教育・研究について(・教育効果の捉え方:地域での学習内容・効果と評価、・地域貢献としての研究と学問としての研究の捉え方) 	
3. 結果	
<p>1) 地方大学での研究および教育面での地域連携(貢献)の類型について</p> <p>地域課題の解決に向けた大学の地域連携として以下の類型が考えられる。</p> <p>■技術・専門知識型(専門知識による問題解決)※研究</p>	

⇒専門分野を応用し、社会ニーズと擦り合わせ活用

■アイデア提供・資源コーディネート型(人による問題解決)※研究・教育

⇒アイデア(新視点)の提供、既存資源の組み合わせによる新たな取組

(必ずしも専門知識が必要とは限らない) →大学の地域拠点機能

■人材育成型(学部生、社会人)※教育を通じた問題解決

⇒プロジェクト事業型人材育成:地域へは地域課題の提示を求めるだけでなく、大学

との(学生を活用した)新規事業、当事者が問題解決者となる変革プロジェクトとし

て連携を依頼してもらう ※茨城大:事業参画型PBLの例/信州大:プロゼミの例

2) 大学の専門性と地域連携(貢献)の指針の関係整理

本学の総合的な地域連携のための課題と可能性について以下のように整理できる。

【課題】・本学の「地域連携」の指針(中核)を整理

・複数の専門(3C)から課題解決に当たることを前提とした地域貢献のメリットを明示化

・研究・教育・社会貢献活動を循環させる仕組みを検討

【可能性】○人材育成の対象を拡大:地域課題解決の即効力(社会人>学部生)

○地域ニーズへ対応することで専門分野(テーマ)の裾野を拡大

「コーディネートする大学」としての道を拡大

○社会貢献活動から教育へ、教育から研究へ循環(鳥取大)

取組成果を大学内で循環活用する

4. 研究成果の公表

第2回全域フォーラム (平成27年2月17日開催、鳥根県立大学浜田キャンパス講堂にて)

ポスターセッションにて報告

5. 地域貢献の成果

■協議会・プラットフォーム ⇒地域との会議は2重構造で実施すべき

・自由な意見交換の場、発想インキュベーション=非公式組織、自律的・自主的

・プロジェクト始動、実働の組織=産官学の公式組織

■大学シーズの大枠提示 ⇒マッチングの分科会

■長期志向の必要性 ⇒地域と大学の時間軸のズレを相互理解し、10~20年先のビジョンを共有する必要

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 准教授 寺田哲志
研究テーマ	「高津川と人々の暮らしの繋がりから探る地域の魅力 －地域域活性化のための基礎的調査1－(川の地名調査)」

1. 研究目的	
高津川には地域の魅力の源泉となる可能性があると考えられている。それを高津川と人との関わりの中から見つけ出し、高津川をどのように地域の発展に生かしていけるのかを提案することを最終目的とし、人々の暮らしとの繋がりの中からこれを探り出したい。今回の研究はその端緒として、淵・瀬・渡し場など、人が意識して利用している川の地名を調査し、利用の方法とともに図上・web上にまとめていく。	
2. 方法	
1) 調査準備: 高津川の、地形図・平面図・河川基本計画などの資料提供を用意した。 2) 高津川の地元自治体、河川活動をする環境NPO、高津川漁協などへのヒアリング。 3) 現地で聞き取り調査をしながら地名を整理。 4) 川の地名の位置特定をするためにGPS情報付の画像を撮影。 5) Google Earthを使って結果取りまとめ。	
3. 結果	
高津川本流70か所の地名を特定。Google Earthで視覚的に記録整理。川漁師の川田さん、元高津川漁協職員の田中さん、また現地で出会った住民の方々から特定した地名にまつわる話を聞いた。	
4. 研究成果の公表	
平成27年2月17日「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)第2回全域フォーラム」において登壇発表。平成27年2月18日、山陰中央新報の記事で紹介された。	
5. 地域貢献の成果	
川の地名を調査し特定するとともに、位置情報付きの画像として保存していく。これによって将来、資料や図面が紛失しても場所と地名を特定できる。 住民への聞き取りから、高津川と人との関わり的一端を知ることができた。 調査を通して、流域には高津川を愛する人が大勢いて、魅力を訴えようとしており、このとき特徴的なのは、話の中に地域に根付いた冗談が交じることであった。今後、高津川の魅力の訴えていくのなら、よそ行きの都会風のアイデアではなく、石見の人の面白みを伝えるような形がいいのではないかと思われ、今後の取り組みに生かしたい。	

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 講師 西藤真一
研究テーマ	石見空港の役割と活用策に関する調査

1. 研究目的

石見空港をめぐることは、これまでも積極的な利用促進策を講じ、団体旅客の誘致などで利用者をつなぎとめてきた。こうした利用促進は短期的には有効であり、現に最近での年間利用者数は持ち直している。

しかし、厳しい財政状況の下ではこうした利用促進には限界があるということも確かである。多くの識者が指摘するように、空港を地元がいかに活用するか、地域の戦略として活用策を模索することが極めて重要である。

もちろん、議会を通した予算承認手続きなど、一定の地元理解を得ていると判断できるが、利用低迷が続く実情からは地元の住民の理解や協力にはまだ余地は残されているのではないかと思われ、その説明における基礎資料の構築を行う。

2. 方法

上記の問題意識のもとで、空港の活用策をめぐる戦略策定に向けた議論を今後行ううえで、地元地域が石見空港の整備によってどのような役割を期待していたのかをまとめることは議論の出発点として重要である。

そこで、本プロジェクトでは、石見空港の建設構想から運用開始に至るまでの事実関係とともに、現在の課題について事実関係を整理した。いわば、今後の議論を始める際の題材を整理することが目的である。具体的には、以下の4点に関する調査を行った。

- ①国土政策として、国は地方空港の整備をどのように位置づけてきたのか
- ②県土整備政策として、島根県は県内空港の整備をどのように考えてきたのか
- ③石見空港の利用実態と利用促進策の整理
- ④他の地方空港における論点整理と空港の活用策に関する調査

3. 結果

本研究では、全国の空港利用の状況を把握しつつ石見空港を利用に窮する典型的な地方空港の例として取り上げた。そして、今後の利活用の方針と今後の地元で議論すべき論点について整理した。石見空港の計画段階のわが国は、航空需要がさらに拡大しつつある時期であり、また、地元の経済開発の期待を背景に県はその基盤となる空港を旧第三種空港として設置したのであった。換言すれば、高速交通の空白地帯をなくすという公平性の観点を重視して整備されたのである。

もともとビジネス需要が少ない地域で観光需要に頼りながら維持され、最近では地方経済の停滞を背景に利用者は伸び悩みを見せている。多くの地方空港がそうであるように、石見空港についても県の公表する基本施設の収支でも1.7億円程度の赤字で推移している。

非航空系の事業は黒字とはいうものの、たとえ基本施設と一体的な運用を行ったとしてもトータルとしては到底採算を取れる状況にないことは明らかである。

「空港は地域にとってなくてはならない財産」としばしば指摘されるなど、必ずしも採算性の観点だけで議論することは適切ではないかもしれない。現段階において、県はいまだ高速交通インフラが整備されていない地域として、航空路線を充実させることによる交流人口の拡大や産業育成を図りたい方針である。

上記のような現実面についてコンパクトにとりまとめた。

4. 研究成果の公表

研究成果は、COCフォーラムにおいてパワーポイントにまとめたものを掲示して公表した。また、同様の内容は益田商工会議所等においてプレゼンテーションを行い、研究成果を広く公開するよう努めた。

5. 地域貢献の成果

石見空港をめぐるっては劇的に路線や便数の拡大などがなされない限り、空港経営上の赤字の解消がなされないことはほぼ確定的である。つまり、国が目指す民間の能力を生かした一体的な空港運営の実現は厳しい状況にあるのであって、引き続き島根県が空港管理者に留まるものと考えられる。

上述のように空港は多様な機能が期待されるが、経営上の赤字を地元で引き受ける以上、観光利用や運賃補助という価格に訴求する政策だけでは持続性を期待できない。地元の人々がどのような交通手段を用いて移動ニーズを満たしているのかなど、現実を踏まえたうえで地元としてどのような空港活用策があるのか検討し、負担についての理解を求めると必要があると考えられる。

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 講師 豊田知世
研究テーマ	島根県の森林価値の再評価:林業による活性化の道を探る

1. 研究目的	
<p>森林資源のエネルギー供給機能、CO2吸収機能、木材供給機能の3つの機能に着目し、島根県において自立して持続可能な産業としての林業の在り方を模索すること。森林の3つの機能に着目し、1)森林のCO2吸収能力の効率性評価、2)森林のエネルギー利用における長期モデルの開発、3)島根の木材輸出の可能性:中国への木材輸出の可能性調査、を主軸において研究を進めていく。</p>	
2. 方法	
<p>関係機関から収集したデータをもとに、森林エネルギー利用の長期モデルを島根県の森林を対象に作成した。また、浜田港と取引のある大連地域の関連機関および木材輸出企業へヒアリングを行い、中国への島根県の木材輸出の可能性の調査を行った。</p> <p>①森林資源のCO2吸収効率性</p> <p>昨年度分析した森林のCO2吸収効率性の国際比較のためのデータを収集し、DEA(データ包絡分析法:Data Envelopment Analysis)を用いて分析を試みた。</p> <p>②エネルギー利用としての可能性</p> <p>島根県の流域ごとの森林蓄積の長期モデルを作成し、バイオマスエネルギーとして利用可能量の長期間シミュレーションを行った。</p> <p>③中国大連の動向調査</p> <p>日本は、中国と韓国を対象に木材輸出戦略を策定していることから、浜田港を利用した島根県の森林輸出の可能性について探るため、中国大連の森林の現状および木材生産の課題について、大連の木材加工工場を中心にヒアリングを行った。</p>	
3. 結果	
<p>①森林資源のCO2吸収効率性</p> <p>世界各国の森林のCO2吸収に関する効率性を分析するためのデータ収集を行った。投入変数のひとつである農業機械のデータが世界的に整備されていないため収集が難航している。</p> <p>②エネルギー利用としての可能性</p> <p>昨年に引き続き、森林資源を積極的にエネルギー資源として活用した場合のシミュレーションモデルを改良し、森林から得られるエネルギー量と売電量を推計した。現地調査と結果より、山場から発電施設への輸送コストと環境負荷が大きいことが課題であることが明らかとなった。効率的なモデルの開発が今後の課題である。</p> <p>③大連の動向調査</p>	

日本向けの木材輸出工場、日系の家具製造工場(大塚家具)などを訪問し、中国木材の現状についてヒアリングを行った。為替変動による貿易の変動が大きく、不況の状況。中国国内からのみならず、ロシアやインドネシアなどから木材を輸入し、加工している状態で、供給が不足している状況。ただし、日本の木材は高価であるため、輸入先として考えていない企業がほとんどだった。


4. 研究成果の公表

豊田知世、林田吉恵・鄭世桓・李憲「森林資源を活用するローカルエネルギー供給に関する一考察：島根県を事例にして」、環境経済政策学会2014年大会、法政大学、東京にて、ベストポスター賞受賞した。

5. 地域貢献の成果

本研究は3年計画で計画しており、3年目に地域の関係者を交えてディスカッションを行う予定である。ただし、市や森林組合など関係機関の会議に出席しながら、情報交換を行っている。

申請者	鳥根県立大学 看護学部 看護学科(出雲キャンパス) 准教授 長島玲子
研究テーマ	妊娠期から乳児期におけるプレパパ・ママを支える子育てハンドブックの検討

1. 研究目的	
妻と夫が協力して子育てをし、二人で子育ての楽しさを共有するために、過去4年間のプレパパ・ママ講座に参加された先輩パパ・ママの経験やメッセージをもとに、妊娠中から活用できる子育てハンドブックを作成する。	
2. 方法	
1.プレパパ・ママ講座の開催 2回実施 ①平成26年7月6日 ②平成26年11月16日	
2.編集会議 ①編集協力者から掲載するメッセージについて意見集約 ・本学教職員の現役パパ・ママ ・くすのきプラザに集うママ ②編集方針決定・編集作業 ・地元の妊娠・出産・子育てで経験者の「身近でリアルな経験「知」」を、豊富なイラストで読みやすい工夫をし、冊子として完成させる。 ③編集会議 ・平成26年12月10日 全体像の確認	
3. 結果	
1.プレパパ・ママ講座を開催した。 ①平成26年 7月 6日:参加者 プレパパ・ママ10組(20名) 両親10組(20名)と乳児、母親(4名)と乳児 ②平成26年11月16日:参加者 プレパパ・ママ5組(10名) 両親5組(10名)と乳児、母親(3名)と乳児	
2.プレパパ・ママの妊娠・出産・子育てに関する不安を解消するために、「HAPPY♥BOOK」を作成した。作成部数は800部(A5サイズ、60頁)である。	
	

4. 研究成果の公表

- 1)長島玲子、井上千晶、多々納憂子、岡本康子、森脇都多江:「参加体験型学習を取り入れた子育て支援講座の実践報告」、看護と教育、5(2)、34-39、2014.
- 2)長島玲子、井上千晶、多々納憂子、岡本康子、森脇都多江:妊娠期から乳児期におけるプレパパ・ママを支える子育てハンドブックの検討、平成26年度特別研究費研究成果報告会、しまね地域教育・競争研究助成金研究報告会、2015、3、出雲キャンパス.

5. 地域貢献の成果

1. プレパパ・ママ講座の開催

本講座は、プレパパ・ママが赤ちゃんや先輩パパ・ママと交流することで、妊娠・出産・子育てへのイメージ化や不安の解消に役立っている。一方、先輩パパ・ママも赤ちゃんと共に参加し、これから親になる人たちへの役立ち感を自覚することで、子育てへの自信を強める機会にもなっている。これらのことから、本講座は男女が共同して子育てを行い、健やかな子どもの育ちを支援するために有効と考えられる。

2. 子育てハンドブック:「HAPPY♥BOOK」

「HAPPY♥BOOK」は、出雲市在住の先輩パパ・ママの妊娠・出産・子育てに関する体験やプレパパ・ママへのメッセージを掲載している。プレパパ・ママだけでなく現役パパ・ママにとっても、身近でリアルな役立ち情報として有効活用されると考える。

申請者	鳥根県立大学 看護学部 看護学科(出雲キャンパス) 准教授 松本玄智江
研究テーマ	駅前空き店舗を利用した健康教室&まちなか活性プロジェクト ～シャッター通りの活性化を目指して～

1. 研究目的				
シャッター商店街にて大学、地域住民、自治体が一体となりパートナーシップを取りながら、健康づくり、地域づくりを共通課題として取り組む。また、学生がこの取組に参加することで、学生の社会参加推進と、地域課題に取り組む機会とする。				
2. 方法				
・商店街のアーケード市にあわせて「扇町健康大学」の開催 出雲商工会議所、扇町商店街の協力を得て、空き店舗を活用した、公開講座を行う。 公開講座開催にあたっては学生ボランティアを募集し、健康チェック(血圧測定、問診)、体組成測定などを行ってもらう。				
3. 結果				
1) 扇町健康大学の開催				
	月 日	テーマ	講 師	参加者
1	5月24日	開校式 知って安心、血圧のお話し	山下 一也	8名
2	6月28日	食事で予防「認知症」	山下 一也	8名
3	7月12日	ロコモ予防でいきいき生活	林 健司	8名
4	7月26日	お出かけ楽しみ ～尿失禁予防～	井上 千晶	7名
5	8月 9日	癒しのある生活(アロマについて)	松本玄智江	台風中止
6	8月23日	修了式		7名
			延べ人数	38名
2) 受講者の感想				
<ul style="list-style-type: none"> ・気軽に出かけられる場所での講座で参加しやすかった。 ・お話のあとの先生を囲んでのお話しがとても楽しかった。 ・健康についてのいろいろなお話しが聴けてよかった。 ・アロマの話しが中止になって残念だった。 				
4. 研究成果の公表				
1) 平成27年3月17日 学内の研究成果発表でポスター発表				
5. 地域貢献の成果				
1) 公開講座として受講生を事前募集して行ったが、「アーケード市」に来た方がより自由に参加できるスペースとしていくことでより商店街の活性化につながるのではないかとと思われる。				
2) シャッター商店街の空き店舗を活用し、大学のサテライトとしての機能を持たせることで「アーケード市」の時だけでなく、日常的な活性化に結びつくのではないかと考える。また、今回の実施を通して、商店街で大学のサテライト機能を持たせることの可能性の示唆が得られた事は意義があると思われる。				

申請者	鳥根県立大学 看護学部 看護学科(出雲キャンパス) 准教授 松本玄智江
研究テーマ	農医連携による限界集落の活性化に関する試み ～鳥根県出雲市吉野集落の実践を通して～

1. 研究目的			
休耕地を活用し、吉野地区住民との農作業体験・交流会を通して、限界集落である吉野地区の活性化を図ることを目的とする。また、地域住民の教育力を活用し、社会人基礎力の涵養並びに地域を志向する看護職の育成を目指す。			
2. 方法			
1) 農作業体験: 休耕地に農作物の栽培を行う。地域住民の指導の下、現地での農作業を1回/2週間程度実施する。作物の植え付けから、管理、収穫までを体験する。			
2) 交流会: 農作業体験日の前夜、地域住民との交流会(夜話の会)を開催し、地域住民と学生の双方向からの情報発信(話題提供)を行い、共に学びあう。			
3) 吉野地区行事への学生参加			
4) 冬季(11月～4月)のTV健康教室の開催			
3. 結果			
1) 農作業体験			
月日	作業内容	地元住民	学生(教員)
3月30日	畝作り マルチ掛け	3	0(1)
4月26日	野菜苗の定植 記念樹植樹	7	10(1)
5月10日	草刈り 電牧柵設置 種まき	4	0(3)
5月17日	草刈り 野菜苗の定植	4	2(1)
5月31日	草刈り サツマイモ苗等植え	4	4(1)
6月21日	草刈り	9	1(1)
7月4日	野菜の収穫 野菜苗の定植 など	5	3(1)
7月19日	野菜の収穫 苗植え 鳥獣ネット設置	4	3(1)
8月2日	野菜の収穫	1	0(2)
8月23日	野菜の収穫 草刈り	2	0(2)
9月13日	草刈り	2	2(1)
9月27日	野菜の収穫	2	1(1)
10月4日	野菜の収穫	2	1(1)
11月1日	野菜の収穫	1	0(1)
参加延べ人数		50名	27(18)名

2) 交流会「夜話の会」

月日	内容	地元住民	学生(教員)
5月16日	農作業打合せ	8	2(1)
5月30日	地区の概要	9	4(1)
6月20日	夏祭りの打合せ	9	1(1)
7月4日	夏祭りの打合せ	4	3(1)
7月18日	吉野歴史ヒストリア	10	3(1)
9月12日	吉野歴史ヒストリア	6	2(1)
10月3日	感謝祭打合せ	5	0(1)
参加延べ人数		51名	15(7)名

3) TV健康教室

日付	テーマ	担当者
H26 11月12日	歯の健康について	松本
11月26日	インフルエンザ予防	井上
12月10日	クイズで考えるウンチのこと	松本
12月17日	笑いヨガ	和田・石橋
H27 1月14日	今年の抱負と脳活	松本
1月28日	骨粗鬆症の話し	林
2月 4日	季節を楽しむ 24節季の話し	松本
2月18日	見逃さないで！脳卒中のサイン	加藤
3月11日	美味しく食べて認知症予防	松本
3月25日	リフレッシュ 顔と手のマッサージ	井上
4月 8日	備えあれば憂い無し(災害への備え)	松本
4月22日	疲れ目解消法	林

4) 地区行事への参画

- 7月13日 夏祭り
- 10月19日 感謝祭
- 1月13日 とんど祭

4. 研究成果の公表

- 1)平成27年2月17日 大学COC事業「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」第2回全域フォーラムにて報告
- 2)平成27年3月17日 学内の研究成果発表でポスター発表

5. 地域貢献の成果

- 1)農業体験、交流会、地域行事への参画、TV健康教室と年間を通して、大学と吉野地区との交流が図られる事により地区の活性化につながったのではないかとと思われる。
- 2)この活動を通して吉野地区以外の方々にも協力をしていただくことができ、この活動を中心に人的ネットワークの広がり、つながりができた。
- 3)この活動を通して学生自身の出身地域への思いを新たにできる機会となり、また、学年、学科を越えた学生同士の交流が学内では感じる事のできない一体感を感じる機会となっている。

申請者	鳥根県立大学 看護学部 看護学科(出雲キャンパス) 准教授 松本玄智江
研究テーマ	中山間地域における健康課題に対応する多職種医療人協働教育の実践 ～多職種医療人協働教育マルシェの開催と地域の健康課題の把握を通して～

1. 研究目的
鳥根県邑智郡川本町加藤病院で実施している医学部学生、薬学部学生など医療系学生を対象にした多職種医療人協働教育と連携し、看護学生を含めた協働教育を実施し多職種医療人協働教育プログラムの検討を行う。
2. 方法
多職種医療人協働教育に参加する医療系学生と共にフィールドワーク計画を立て、計画に沿ってフィールドワークを実施し報告会を行う。
3. 結果
<p>実施日:平成26年9月1日～9月5日</p> <p>参加者:医学生 2名(鳥根大学) 看護学生 3名(鳥根県立大学看護学部3年次生)</p> <p>内容:医学生と看護学生がチームを組んで研修を行う。</p> <p>研修内容:訪問看護同行、訪問診療同行、老健施設行事参加、サービス付高齢者住宅見学、各種カンファレンスへの参加</p> <p>報告会:フィールドワークを通して学んだことの発表とディスカッション</p> <p>訪問診療での気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・居住環境をよく把握している ・普段の様子との違いを大切にしている ・患者と接する時間を多く持っている ・より深い信頼関係を築いている <p>見えてきた学習課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者背景の理解 ・豊富な経験 ・積極的な多職種間連携 <p>連携において大切なこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの専門性の理解 ・自らの専門性における限界を知る事 <p>多職種連携の必要性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人々が地域で、住みたい場所で生涯過ごせるようになるため

4. 研究成果の公表
1)平成27年3月17日 学内の研究成果発表でポスター発表
5. 地域貢献の成果
<p>1)多職種学生と一緒に研修を行うことにより、単独職種の研修では実感できない、お互いの専門性についてより理解を深める事ができていた。</p> <p>2)病院を中心に老健施設、介護保健施設、訪問看護ステーション、グループホームなどの施設を併せ持つ研修環境が、地域住民の健康を支える仕組みについて総合的に考える機会となっていると思われる。</p> <p>3)地域課題を意識した研修をすることにより学生の地域志向意識を育てていると思われる。</p>

申請者	島根県立大学 看護学部 看護学科(出雲キャンパス) 助手 小村智子
研究テーマ	ヘルスツーリズムによる地域活性化の可能性 ～島根県邑智郡川本町における事例～

1. 研究目的	
<p>川本町には、観光資源としてはほとんどないものの、実際には、温泉や森林など多くの自然資源があり、さらに特産品として、エゴマ油があり、この地区でのエゴマ油を使用した地中海料理は週刊誌(週刊文春 昨年11月、12月)などで数多く取り上げられている。そこで今回、ウォーキング、湯量豊富な温泉(湯谷温泉)、エゴマ油・地場野菜を使った地中海料理、健康講話など、ヘルスツーリズムの開発を目的としたモニターツアーを企画し、商品化の可能性を検討した。</p>	
2. 方法	
<p>川本町の自然資源を活用したモニターツアーを企画し、一般公募でモニターを募集した。平成26年10月26日(日)に下記プログラムによるツアーを実施し、評価として健康チェック、アンケート調査を行った。</p> <p>【1日のプログラム】</p> <p>8:30 出発 マイクロバスに乗車・出発</p> <p>10:00 川本町音戯館に到着 モニターツアーの説明 健康パンフレット送付 健康チェック(血圧・脈拍測定)</p> <p>10:30 ウォーキング 講習・体験</p> <p>12:00 食事:エゴマ油を使った地中海料理</p> <p>13:00 健康講話 ”アンチエイジングな生活とは”</p> <p>14:30 道の駅川本でエゴマ製品の買い物</p> <p>15:00 温泉入浴 健康チェック(血圧・脈拍測定)</p> <p>16:30 出発 アンケート調査</p> <p>18:00 出雲市到着</p>	
3. 結果	
<p>モニター募集は出雲市北浜地区で公募し希望した者16名で、20歳代～60歳代であり男性9名女性7名であった。ヘルスツーリズム催行地として当地域は非常によい、やや良いがほとんどであった。川本町は観光地ではないのでこのようなヘルスツーリズムの開発は地域活性化に意義深いといえる。健康に対する関心は非常に関心が沸いたと11名が答えている。今後の健康管理に対してはほとんどの人が非常に役立ったと答えている。</p> <p>今回のツアーは非常に楽しめたが13名であり楽しいツアーであったといえる。ストレスを解消できた良い休日となったという30代男性の感想もあり幅広い年齢層に楽しんでもらえ</p>	

たツアーであった。健康の要素と楽しみの要素で高い評価が得られヘルスツーリズムとしてバランスがとれているといえる。当地域で本格的なヘルスツアーが始まったら全員が参加したいと答えている。チャンスがあれば夫婦で参加したいと50代男性の感想があった。ツアーの価格については、4000円から5000円が目標価格といえる。健康チェックの結果、血圧はツアー開始と比較すると温泉の後ではかなり下がっていた。血圧の低下と脈拍の増加は温泉による全身の血管拡張と血流改善を促した効果といえる。個々の活動の満足度については食事の満足度が高い。次ぎに健康講話も高かった。ヘルスツーリズムにおける楽しみの部分であり魅力的なメニューが必要といえる。

4. 研究成果の公表

平成27年2月17日(火)開催 平成26年度島根県立大学「地(知)の拠点整備事業」成果報告会第2回全域フォーラムにて発表

5. 地域貢献の成果

樋原氏らは2008年に同様の試みを行い、健康メニューと音戯館の活用と川本町の関連づけについてはうまくいかなかったという結果を述べている。それらの欠点を補うべくエゴマを中心にこのツアーは組まれた。本ツアーは観光資源の乏しい県西部の中山間地域において、ヘルスツーリズムとして健康教育と自然資源を合わせたスタイルを確立することは新たな観光領域として開発できる可能性がある。今回の試みから、体験型のエゴマヘルスツーリズムの提案をした。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 健康栄養学科(松江キャンパス) 教授 赤浦和之
研究テーマ	西条ガキ熟柿ピューレの省力化生産技術の開発

1. 研究目的	
<p>現在県内で熟柿ピューレを使った食品の開発が行われており、今後ピューレの需要が見込まれる。しかしながら、西条柿は多くの種子を含み、熟柿ピューレにおいては重要な部分である内果皮から種子を取り除く作業に多くの人手を必要とし、これがピューレ生産のコストを上げる大きな要因となっている。より低コストでのピューレ生産を可能にするには、この作業の省力化すなわち機械化が必要と考え、最適な機器を選択し、処理最適条件を明らかにすることを目的として研究を行った。</p>	
2. 方法	
<p>松江市の生産者より購入する西条ガキを材料として、エチレングス処理により熟柿生産を行う。得られる熟柿果実を潰さないように鋭利なナイフを用いてカットし、ふるいおよび卓上型ミキサーを用いて果実から内果皮を分離した。まず、内果皮から正常の大きさの種子を分離する作業を卓上型ミキサー用いて行い、アタッチメントの種類および処理時間の影響について調査し、内果皮から種子の分離効率を検討した。続いて、この卓上型ミキサー用いた機械化の最適条件での作業と従来の手作業(ピンセットを使用して種子を一つ一つ内果皮から取り出す)の効率について比較検討を行った。さらに、機械化処理では取り除くことができなかった微小な種子を、3種類のふるいを用いて効率よく除去できるかについても検討した。機械化により種子を分離した内果皮組織は、フードプロセッサーおよびハイスピードプロセッサーによりピューレとし、冷凍真空保存した。</p>	
3. 結果	
<p>卓上型ミキサーに付属するアタッチメントの種類および処理時間の影響について調査し、内果皮300gからの種子の分離効率を検討したところ、ホイッパーアタッチメントでは、最大速度で5分間処理しても種子の分離率は約90%と、100%には届かなかった。これに対して、ビーターアタッチメントでは、最大速度で3分間処理で100%の分離が得られた。ビーターアタッチメントを用い、最大速度での3分間処理が最適条件と思われた。この条件での機械化種子分離処理と手作業処理を比較したところ、手作業処理では300gの内果皮では、正常の大きさの種子の完全分離には平均9分12秒必要であった。機械化によりこの作業の所要時間は約3分の1にできることが明らかになり、この機器および処理条件の有効性が認められた。微小な種子の除去には、ふるい目9.5mmと2.0mmの2種類のふるいを用いることが有効であると思われた。これまで省力化が難しいと考えられていた内果皮からの種子の分離作業が、入手が容易な市販の調理機器である卓上型ミキサーを用いることにより省力化できることが明らかになった。また、得られた内果皮ピューレは、既存の方法で調製した</p>	

ものと品質には違いは認められなかった。

4. 研究成果の公表

平成27年3月6日に松江キャンパスで開催された報告会で口頭発表を行った。

5. 地域貢献の成果

この研究で得られた成果の一部について、松江市内の熟柿ピューレ生産者により実用面から検討が行われ、実用的で効率的な方法であると評価されている。今後この技術が採用される見通しである。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 健康栄養学科(松江キャンパス) 教授 酒元誠治
研究テーマ	国体候補高校生に対する食事調査・栄養診断・栄養指導事業

1. 研究目的	スポーツ栄養分野は発展途上にあり、多くの種目において、どの程度のエネルギー及び栄養素の摂取量があるのかを知ることは重要であることから、国体候補レベルの高校生のバスケットボール部員を対象に食事調査および体組成調査を実施し、競技力の向上に寄与する。
2. 方法	男子高校生14名(1~2年生)、女子高校生14名(1~2年生)について、デジタルカメラを用いた4日間の食事調査、2種類の体組成計を用いた体組成調査及び非侵襲的な血色素検査を実施し、食事と体組成の関連について基礎的なデータの収集を行った。
3. 結果	女子のバスケットボール部員については、低血色素データが得られたことから、食事調査結果と突合せつつ、低血色素の改善を図るといった、個別の指導を続けて行くこととした。男子については、目的とする部分への筋肉の増加及びスタミナを付けるための栄養指導を実施したい。ただ、スポーツ栄養分野は発展途上でもあるため、継続的に取り組む必要があるが、特段経費を必要としない研究ため、次年度以降についてもボランティア的に取り組みたい。
4. 研究成果の公表	しまね共生センター紀要に投稿すると共に、第62回日本栄養改善学会学術総会に発表したい。
5. 地域貢献の成果	人的制約のある、発展途上の分野でもあることから、この分野に係りっきりとなることは困難であるが、科学的な根拠を積み上げることで、地域貢献に寄与したい。

申請者	島根県立大学短期大学部 健康栄養学科(松江キャンパス) 准教授 籠橋有紀子
研究テーマ	しまね和牛肉の食肉加工方法の検討について ～加工材料の検討～

1. 研究目的	
<p>牛肉は部位により硬い、あるいは柔らかいなどの食感、味・香りが異なり、世代による嗜好性が異なる。特に口腔内環境の違いにより調理や加工により、本来持つ生肉の特性を変える工夫が期待される。これまで、熟成前後や調理方法の違いによる食肉の変化を官能評価および理化学分析の両手法を用いて検討を行ってきた。本研究では、地元産のイチジクへの食肉への作用を利用および制御する方法について検討し、食感への影響の違いを分析し、他の農産物を作用させた場合との比較を行った。</p>	
2. 方法	
<p>材料:生姜は出西生姜組合にて栽培された出西生姜およびイチジク(松江市内の農家に提供を受けた蓬萊柿)を用いた。食肉加工に使用した肉は島根県産和牛肉である、しまね和牛のもも部分を使用した。</p> <p>実験方法:生姜の葉およびイチジクを粉碎し酵素抽出液とした。しまね和牛もも肉を(3×3×3)cm³に切りだした。</p> <p>生姜葉、イチジク、対照の3つの群を設定し、恒温槽を用いて牛肉に酵素抽出液を一定量加えて60℃および90℃で40分および120分加熱した。</p> <p>加熱後、牛肉を厚さ1.5cmに切り、破断応力を計測した。</p> <p>▽破断応力:TENSIPRESSER(タケトモ電機社製)を用いて、Tenderness(硬さ)、Pliability(噛み切りにくさ)、Toughness(噛みごたえ)、Brittleness(脆さ)を測定した。サンプルを厚さ約1.5cmに調整し、中空型プランジャー(外径5.5mm、内径5.0mm、面積0.041cm²)を用いて圧縮し、算出した。</p>	
3. 結果	
<p>(生姜葉と対照の比較):対照と比較して生姜葉は、60℃加熱により、硬さ、噛みごたえ、脆さにおいて有意差が認められた。90℃加熱においては硬さに有意差が認められた。</p> <p>(イチジクと対照の比較):90℃加熱により、硬さ、噛みごたえ、脆さにおいて対照とイチジクに有意差が認められ、時間により違いが認められた。</p> <p>以上より、対照と比較して、出西生姜葉を添加した牛肉の物性が有意にやわらかくなった。このことから、生姜葉に生姜プロテアーゼが含まれ、生姜根茎に含まれる生姜プロテアーゼの活性温度である60℃で硬さ、噛みごたえ、脆さにおいて、90℃においても牛肉の硬さに影響を与える可能性が示唆された。加熱温度によりその作用は変化し、従来の報告と活性の温度帯が異なる可能性が示唆された。また、本研究に用いたイチジク(蓬萊柿)は活性最適温度は90℃程度であり、本実験では対照と比較して加熱により物性に有意に変化が認められた。</p>	

今後は、以上の結果をふまえ、サンプル数を増やし、温度条件、時間設定、酵素抽出液の添加量、衛生面の配慮等について、検討する必要があると考える。

4. 研究成果の公表

平成26年度しまね地域共生センター研究連携協議会(研究報告会)にて一部公表した。また、本成果の一部を利用して、産学官連携企画「しまね三昧リエット(仮称)」の試食会(平成27年3月24日)を行った。

5. 地域貢献の成果

私は、地域の農産物における未利用素材、あるいは、表面の傷等の理由から用途が限られる果実等の素材を使用し、機能性を有効活用する方法について継続して研究を行っている。未利用素材である生姜の葉と表面の傷等の理由から用途が限られ、やむなく捨てることも多いイチジクに含まれる酵素の軟化作用に着目して、未利用素材の食肉加工への応用について検討を行った。その結果、本研究では、生姜の葉やイチジク自体を主原料としてではなく、地域食材のもつ魅力を引き出す要素としての加工食品への利用方法として有効である可能性が示唆された。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 保育学科(松江キャンパス) 准教授 福井一尊
研究テーマ	山陰の特徴的景色を題材とした写真作品による地域文化資源意識の定着に向けて ～鳥根県・鳥取県全38市町村の今日的姿を絵画的に撮影した作品集の印刷・製本 および啓発活動から～

1. 研究目的	
<p>山陰地域に暮らす若年層が個人レベルで世界中の情報を容易に選び取り得る時代となったことによって、首都圏の情報や、ある特定の趣向に偏った情報の中でのみ生活し、便利になる一方で知るべき情報を放擲しているように感じられる。そのような時代であるからこそ、山陰地域に暮らす人々に隣町や近隣市町村、あるいは隣の県の美しきもの、尊きものや魅力的な部分に触れる機会を提供し、地域文化を慈しむ心を育むことを促したい。</p>	
2. 方法	
<p>平成24年度中に、4会場(益田市会場、松江市会場、倉吉市会場、鳥取市会場)にて作品展を実施した。本展は山陰両県を舞台に、全38市町村(鳥根県内19市町村、鳥取県内19市町村)を各一枚ずつ絵画的に切り取った、38枚の写真による作品展とした。</p> <p>その展覧会のために選考した38枚の作品のみによる写真集「さんいんびより」を発刊し、山陰地域住民に潜在的な文化力の啓発をはかる。また、鳥根県内の公立図書館をはじめ、中国地方の主要図書館に配布し、広く公表する。</p>	
3. 結果	
<p>計画の通り、鳥取県19市町村、鳥根県19市町村の計38市町村の作品が収まった、写真作品集を作成、発刊、公開することができた。</p> <p>それぞれの作品には、多様な絵画的特性を与え、多様な美しさを感じられる写真集とした。それぞれの美は、今(現在)であれば見る人に伝わらない、隣町の今の美しさに今気づくことができるところが、他の記念碑的な作品集とは一線を画する本書の大きな価値とすることができた。また一つ一つの作品に含む要素を味わいながらも、本書のページを捲りながら、次々と写真との出会いを繰り返す体験から、「今の山陰」を体感することができるという特性を持たせた。</p> <p>その特性こそが、これまでの写真作品集を現代アートの文脈で見た場合には不足していた部分であり、作品集として出版する意義を強く感じた部分であった。そしてそのような図書鑑賞独自のスタイルも、展覧会のように作品に囲まれた空間によって味わうという一般的な現代美術表現の感じ取り方とは異なり、また映像や音楽、読み語りなどのように一方向的な伝達ではなく、自分のペースで作品世界と向き合い、本書全体を通して「今の山陰」を感じられる「装置」としての現代アートとして訴求力を持たせられないかという試みを行うことができた。</p> <p>以上のことにより、研究目的であった地域文化資源意識の定着に向けて、山陰の魅力をこれまでに無い形で広く啓発できたものとする。</p>	

4. 研究成果の公表

- ・ 島根県内および中国地方全域40箇所の図書館において収蔵、公開
- ・ 平成26年度しまね地域共生センター研究連携協議会(平成27年3月6日 松江キャンパス)にて発表

5. 地域貢献の成果

学術的価値を書籍化し、また県内公立図書館等に配布することで、様々な地域や立場で暮らす、より多くの方々に絵画的写真表現を鑑賞する機会と、地域資源との出会いの機会を提供できたものと考えられる。

また写真分野には芸術的意義が認められているにもかかわらず、携帯電話などの普及によってその存在が身近になりすぎたため、その可能性についてイメージしにくい状況にある。今回、絵画的な要素によって身の周りの物事を切り取り、再提示することで、その今日的芸術における可能性を示すことに成功した。また、「きれい」には収まらない、生活の中にある「美しさ」に目を見張る心のありよう、姿勢についても示していくことで、昨今著しく低下しているように感じられる、我々の美的感覚の向上に寄与できたものと考えられる。そして、時代の閉塞感や人や社会の間にある見えない壁を軽快に飛び越えて物事を捉えることを可能にすることが現在の芸術に託された役割だとすれば、地域を舞台にした写真による写真集によって、その意義を担うことができたものと考えている。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 総合文化学科(松江キャンパス) 教授 岩田英作
研究テーマ	大学附属の児童図書専門図書館の調査 -おはなしレストランライブラリーの有効活用に向けて-

1. 研究目的	
<p>松江キャンパス附属の児童図書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」は、平成23年に地域開放して丸3年の節目を迎えた。本ライブラリーは、学生の読み聞かせ教育の拠点として利用する一方、地域の一般利用者に図書の貸出しを行うなど、地域と共に歩む図書館として活動している。地域の子育てや読書支援に貢献できる大学附属の図書館としてより一層の充実を図ることを目的として、本ライブラリーに類似した全国の大学附属児童図書専門図書館の視察、調査を行うこととする。</p>	
2. 方法	
<p>全国の大学附属児童図書専門図書館のうち、以下の5図書館について、運営形態、施設、蔵書、司書業務、利用者とのかかわり方、その他の各項目について調査する。その結果に基づいて、おはなしレストランライブラリー専任司書、「読み聞かせの実践」の非常勤講師を含めて検討し、おはなしレストランライブラリーの今後の取組に活かしていく。</p> <p>① 北海道武蔵女子短期大学児童図書室1976～ ② 山梨大学附属図書館子ども図書室2002～ ③ 京都造形芸術大学子ども図書館「ピッコリー」1978～ ④ 関西大学児童図書館(高槻市と共同経営)2010～ ⑤ 鳴門教育大学附属図書館児童図書室1987～</p>	
3. 結果	
<p>① 北海道武蔵女子短期大学児童図書室 特色:学生ボランティアによる多彩な活動、英語教育との連携、図書館グッズを活用した読書促進 課題:蔵書の増加、図書室におさまらない</p> <p>② 山梨大学附属図書館子ども図書室 特色:学生ボランティアだけによる図書室運営、公立図書館との連携 課題:学生ボランティアの広がり確保、子ども図書室の認知度を高めるための広報活動</p> <p>③ 京都造形芸術大学子ども図書館「ピッコリー」 特色:芸大での子ども教育、多彩な催しを支えるボランティアの活躍 課題:古本の扱い、廃棄に関するマニュアル作成</p> <p>④ 関西西大学児童図書館(高槻市と共同経営) 特色:高槻市と関西大学の共同経営(まちごと子ども図書館の取組)、充実したおはなしの時間 課題:書架・司書スペースの不足、全面ガラス貼り(夏場の暑さ)</p>	

⑤ 鳴門教育大学附属図書館児童図書室

特色:学生ボランティアと地域ボランティアによる多彩な活動、学生の絵本紹介記事を地元紙に連載

課題:普段の図書室運営に参加する学生ボランティアが特定化する傾向

おはなしレストランの今後に向けて

視察したいずれの児童図書室も、子どもと読書の関係をおおらかに緩やかに捉えており、①子どもたちにとっては絵本のある遊びの空間、②子育て中の保護者にとっては絵本のある子育て支援の場、③大学にとっては、地域の方たちと日常的に交流できる場、の3つの機能を併せ持つ場所となっていることが明らかとなった。これは、まさに現在のおはなしレストランライブラリーにもそっくりそのままあてはまることである。

このような機能を持つおはなしレストランライブラリーを今後さらに有効に活用していく可能性は、松江キャンパスの健康栄養、保育、総合文化の3学科が持つ豊かなコンテンツにあると考える。現在行われている読み聞かせ教育やその実践以外にも、食育関係、科学、音楽、美術などをはじめ、地域の子どもたちに向けて絵本と絡めながら提供できる可能性はいろいろ考えられる。このようにおはなしレストランライブラリーでの活動内容を幅広く展開させてことができれば、おはなしレストランライブラリーは人と人との交流を通して人の温みを感じられる空間であると同時に、子どもにとっても大人にとっても知的で文化的な空間へとさらに発展していくと思われる。

4. 研究成果の公表

平成27年3月6日、松江キャンパスで開催されたCOC研究協議会において、本研究の成果をマユ教授が大学関係者並びに一般参加者に向けて発表した。

5. 地域貢献の成果

平成26年度は、おはなしレストランライブラリーの月ごとの来館者が約1300名、貸出冊数は4000冊を超え、前年度に比べ大幅に増加した。また、平成26年8月には、おはなしレストランライブラリーは大阪府立大学より第1回マイクロ・ライブラリーアワードの表彰を受けた。小規模ながらも本の貸し出しを通じて地域貢献している図書館に贈られ、今回、栄えある第1回目の受賞に全国500館の中からおはなしレストランライブラリーを含め27館が選ばれた。名実ともに地域に根付いたライブラリーとして一定の役割を果たしていると思うが、今回の調査を踏まえ、ボランティアの協力や運営の工夫など、地域のニーズに合った児童図書館づくりに一層努めていく所存である。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 総合文化学科(松江キャンパス) 教授 松浦雄二
研究テーマ	『出雲国風土記』の英訳研究

1. 研究目的	
平成23年度より平成25年度までの3年度間にわたって行われた、出雲神話翻訳研究会での『古事記』の地域貢献研究活動を継続し、『出雲国風土記』を加えて、『古事記』とともに相補的に構成される「出雲神話」の英訳と注釈の充実を目指しながら、出雲神話翻訳研究会の成果であるホームページに随時公開していく。	
2. 方法	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1「研究目的」で述べた趣旨を踏まえ、さらに広い成果公開のための「出雲神話翻訳研究会」ウェブサイトを増強させていく。インターネットによって継続的に出雲を中心とする山陰の文化を広め地域振興の一助とするという目標に向かうべく、荒神谷博物館館長・NPO法人出雲学研究所理事長藤岡大拙氏と継続して連携して翻訳研究を重ねていき、藤岡氏の本学における公開講座「出雲神話翻訳研究会」(平成23～25年度)、「風土記の語る神話」(平成26年度)を踏まえ、『古事記』と『風土記』の出雲神話にまつわる箇所を英訳する。 ・ 英訳にあたっては、藤岡氏の、地域に住む者だから伝えられる、物語の背景の風景心情が打ち出された解釈を訳に反映させることを目標とするが、解釈を本文の文言に直接的に訳出できない場合は、注釈として出す。 ・ 英語は、高校1～2年生ぐらいの水準の英語を目指し、多くの若い人に利用してもらえるものにする。 ・ 『古事記』『出雲国風土記』ならびにそれらの英訳に関連する最新の研究も盛り込むために、随時担当者研究会を開く。 ・ 研究協力者の藤岡氏を学内に招き、担当者の学内勉強会を行う。 	
3. 結果	
<p>今年度は、平成26年度松江キャンパス公開講座「椿の道アカデミー」の「風土記の語る神話」(担当:NPO法人出雲学研究所理事長 藤岡大拙氏、計5回)の開講と、非公開による研究会により遂行した。英語訳に関する研究会は松江キャンパス総合文化学科の松浦雄二教授が進行役をつとめ、藤岡氏の講演内容について、山村桃子講師からは日本古代文学の専門家の立場からの語学的内容的な補足的説明を得、英語訳について、ラング クリス講師がネイティブの立場から随時助言を行い、英訳の精度を高めた。英語訳は、作業の進行に合わせて、翻訳成果を順次デジタル化し、平成24年度末に立ち上げたウェブサイト「出雲神話翻訳研究会～出雲人が語る出雲神話～」を随時更新していき、次年度以降も適宜更新していく予定である。</p> <p>2014年4月～ 適宜 Webサイト「出雲神話翻訳研究会～出雲人が語る出雲神話～」修正加</p>	

筆・調整（立ち上げ2013年3月29日）

2014年6月～9月 NPO法人出雲学研究所理事長 藤岡大拙氏による公開講座「風土記の語る神話」計5回

（2014年7月～8月 パンフレット「Izumo Myths in the Kojiki」作成）

2014年7月～10月 公開講座「風土記の語る神話」テープ起こし

2014年11月～ 学内担当者各自で起こされたテープの内容を確認・研究・訳出作業、年度末の研究会に向けて課題・問題を検討。

2015年1月（～3月） WEBサイトの次年度メンテナンス・更新について業者と連絡調整

2015年2月～3月 学内担当者による合同研究会

2015年3月 藤岡大拙氏を招き学内勉強会

2015年3月 翻訳研究、英訳文推敲Webサイト更新

上記合同研究会においては、次のことが話題・課題として話合われ、あるいは発案された。

- ・『出雲国風土記』の構成は全体的には神々の関係も明確で、構成が整っている。その中で、例えば国引き神話など、出雲神話の部分は口承言語も使用され、作品の中で異彩を放っている。藤岡氏の解釈も併せ、そのような部分をどう扱うか、あるいは打ち出すか、課題である。
- ・地名起源譚において、名前のつけ方には、地域に住む者が大事にしているものを神話を通じて表そうとしている要素がある(例えば「加賀」の名付けにおける佐多神社信仰の反映)。
- ・外国の読者にアピールするために、特に天地創造の物語など、ギリシャ・ローマ神話との類似・相違点を強調していったらどうか。
- ・文体(例えば口承的な、あるいは例えば詩的な、など)の訳出、名辞の訳語の統一などは、継続的課題としてある。

4. 研究成果の公表

研究成果の公開は、WEBサイト「出雲神話翻訳研究会～出雲人が語る出雲神話～」(<http://izumo-kojiki.com/>)で行い、随時更新していく。

5. 地域貢献の成果

島根県の地域振興に観光が欠かせないことは言うまでもないが、その観光について、本プロジェクトの地域協力者藤岡大拙氏は、「観光マインドとは、地元の観光資源を自信と誇りをもって、来訪者にすすめる積極的な心である」と述べ、ややもすると「控え目」に自己を過小評価する「出雲人氣質」をよく把握することが、観光を推し進めるうえでも肝要であると説く(藤岡大拙『出雲人』)。一方で、風土記の国引き神話は、出雲人の自負と誇りが背景になっていることを力説する(公開講座より)。出雲神話をインターネットで公開することは、観光地としての出雲・山陰を広く世に知らせると同時に、上のような神話の背景となる精神に触れることによって、現代の出雲地方あるいは山陰に生きる人々をも励ますという、大きな意義がある。

申請者	鳥根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 教授 川中淳子
研究テーマ	地域のリソースを活かしたこころの支援

1. 研究目的	
<p>鳥根県西部では、心理学的支援に関する専門家が少ないために、困難を抱える人々のウェルビーイング(well-being)の実現が困難になる場合があるのではないだろうか。</p> <p>そこで本研究では、人々が抱える様々な心理学的問題について整理し、鳥根県西部にある心理学的支援に関するリソースを把握する。そして、それぞれの支援の在り方について調査する。</p>	
2. 方法	
<p>心理学的問題については、文献展望により、その問題の社会的背景や支援の実際について検討をする。</p> <p>鳥根県西部にある心理学的支援に関するリソースについては、桑の木園、神楽ショップくわの木、金城ライディングパーク、瑞穂ハイランドスキー場を訪問し、施設職員からの講義、施設職員へのインタビュー、施設見学を行う。金城ライディングパークと瑞穂ハイランドスキー場では実地体験を通して、その施設および体験の意義を考察する。</p>	
3. 結果	
<p>心理学的諸問題</p> <p>摂食障害: 豊富に食べ物が手に入る時代であることや、やせている人が美しいとする文化などが、その発症に大きな影響を与えている。専門医が少ないこと、診断が困難であること、受診が遅れて症状が悪化するなどといった問題がある。</p> <p>NEET: 学校に籍がなく、仕事をせず、進学や就業に向けての活動をしていない15-34歳の未婚で家業の手伝いもしていないものを指す。今後支援の発展が望まれる。海外の支援の在り方が参考になると考えられる。</p> <p>不登校: すでに国内では不登校に対して様々な支援が行われているが、「ホームエデュケーション」については、あまり知られていない。しかし、大変有効な方法である。これは各家庭で親が子供に教育をするものである。</p> <p>鳥根県西部の心理学的支援に関するリソース</p> <p>訪問したすべての施設が人々の心の支えとなるものであったが、特に金城ライディングパークは施設も取組みも国内でトップクラスの素晴らしいものである。障がいを持つものを対象にホースセラピーを実践している。ホースセラピーは人間によるふれあいとは異なった形で、人々の心の成長を促すものである。</p>	
4. 研究成果の公表	
口頭発表	

学生研究発表会 「心理学的諸問題」 平成26年7月8日 於:島根県立大学

総合演習Ⅱ 「アニマルセラピーについて」 於:島根県立大学

(浜田高校・江津高校の生徒12名がゼミ体験に参加。ここで研究の中間発表を行った。)

ポスター発表

大学COC事業「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」第2回全域
フォーラム 「地域のリソースを活かしたところの支援」 平成27年2月17日 於:島根県立
大学

5. 地域貢献の成果

心理学的問題のうち、特に若者に関しては問題そのものは良く知られているが、その支援は手薄である。支援が必要な人のところに支援の手が届いていない。さらに、「島根県西部には支援機関が少ない」とか、「相談機関がどこにあるのかわからない」という声を聞くこともある。

地域課題は、支援機関や相談機関がないということではなく、その存在があまり知られていないということだろう。これからは、心理学的問題について、多くの人々の理解を深めるための啓発活動を継続させ、支援機関や相談機関の広報活動を積極的に行う必要がある。このことは、地域の発展だけではなく、人々の心身の健康にとっても必要なことである。

申請者	鳥根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 教授 林秀司
研究テーマ	鳥根県における日本型直接支払制度の有効性の探求

1. 研究目的	
<p>平成26年度からは日本型直接支払制度が創設されたが、その有効性を検証し、それを国民、県民に説明していくことが求められている。</p> <p>この活動は、鳥根県における日本型直接支払制度の有効性を明らかにすることを目的とする。また、学生をはじめとする都市住民の農地や農道、用排水路等の管理保全活動への参画の可能性を探求することを試みる。</p>	
2. 方法	
<p>この活動では、鳥根県農林水産部農村整備課、および、農業経営課の協力を得て、日本型直接支払制度に関する「しまね出前講座」を実施し、制度についての啓発を試みる。</p> <p>また、鳥根県農林水産部農村整備課、および、浜田市産業経済部農林振興課より紹介をいただき、浜田市内の多面的機能支払の活動組織への聞き取り調査を行うとともに、活動への参画を試みる。</p> <p>活動組織への聞き取り調査を通して、日本型直接支払制度、とくに、多面的機能支払交付金の有効性と課題について明らかにするとともに、共同活動への学生参加の試みを通して、農地等の管理保全活動に都市住民が参画することの意義や効果を明らかにする。</p>	
3. 結果	
<p>平成26年7月23日(水)13時20分～14時50分に、鳥根県立大学浜田キャンパス講義研究棟1階中講義室4にて、日本型直接支払制度に関する「しまね出前講座」を開催した。</p> <p>平成26年8月3日(日)に、宇野農村環境保全組合(浜田市宇野町)の共同活動に参画するとともに、地域住民との意見交換を行った。また、平成26年11月8日(土)に、美川みどり会(浜田市美川地区)の共同活動に参画した。平成27年1月31日(土)には、同会に対する聞き取り調査を行った。なお、これらの活動組織は多面的機能支払交付金を受けている組織であった。</p> <p>これらの活動を通して、多面的機能支払交付金により、従前はできなかったことも可能になるなど、農地維持のみならず、資源向上のために制度が有効であることが確認できた。それでも、大がかりな活動には、交付金金額からくる制約があること、事務手続きが煩雑なために高齢者にとっては負担が大きいことも確認できた。</p> <p>共同活動への学生参画の試みは、彼らのような若い担い手があればありがたいという地元地域の感想は得つつも、後述のように、けっして生産的な活動ではないので、その効果は制度の周知、啓発に限定されるのではないかと思われる。その意味では、両組織が行っている、地元の子供会や幼稚園と連携したサケ稚魚の放流やひまわりの植栽などの活動と同様の意義をもつものと理解できる。</p>	

4. 研究成果の公表

平成27年2月17日(火)開催の第2回全域フォーラム(於 島根県立大学浜田キャンパス講堂)にてポスター発表を行った。

5. 地域貢献の成果

学生はとくにそうかと思われるが、非農業者にとって、日本型直接支払制度の認知とその意義の理解は不十分であり、周知が必要であることが、本活動を通して、あたたためて明らかになった。その意味では、学生をはじめとする、都市住民の共同活動への参画は意義があると思われる。

一方で、農地法面の草刈りなどの農地維持活動は、生産的な活動ではないため、都市住民の参画を得るには魅力に乏しく、本格的に実施するには難しい側面もあることが明らかになった。都市住民の活動への参画は、制度の周知、啓発を目的として考えることが適当と思われる。

申請者	鳥根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 教授 光延忠彦
研究テーマ	鳥根県内における日常生活情報の発信に関する効果的方法の模索 —中山間地域における都市部地域と非都市部地域との比較を通じて—

1. 研究目的	
<p>① 鳥根県内の自治体住民は、どのような方法を通じて日常の生活情報を獲得しているのか。</p> <p>② 鳥根県内自治体住民の日常の生活情報の確保に対する、諸機関の効果的方法にはどのようなものが考えられるか(提案)。</p> <p>①と②を研究すること。</p>	
2. 方法	
<p>① 鳥根県東部および西部の自治体住民への意識調査</p> <p>② ①の統計情報の比較を通じた分析</p> <p>③ ②の結果から得られる自治体行政への提言</p> <p>④ この研究に詳しい大学研究者助言、文献調査、住民への意識調査の点から研究</p> <p>⑤ ただし、研究申請書中の購入予定図書費、約12,000円分、これに関連する文献費住民への意識調査費、約10,000円分、合計概算22,000円分については、総額予算の関係上、別の経費で手当てした。</p>	
3. 結果	
<p>① 鳥根県東部地域(松江市)と西部地域(浜田市)とでは、住民が得ている生活情報のソースに顕著な差異が見られた。</p> <p>② 東部では活字メディアの重視、西部では放送メディアの重視という特徴がある。</p> <p>③ 生活情報を得ている時間帯では東部と西部の顕著な差異は見られなかった。</p> <p>④ このため、生活情報をどのようなメディアを通じて発信するのが妥当か、特に、行政機関では、こうした結果を活かせるという実証的な、研究結果が得られた点は当該研究の大きな意義である。</p>	
4. 研究成果の公表	
<p>① 平成27年2月17日、鳥根県立大学浜田キャンパス講堂で、当該研究の結果を報告した。</p> <p>② 山陰中央新報本社編集局(松江市)、同社西部本社報道部(浜田市)による2回の取材依頼に回答した(本社編集局:平成27年3月23、24日、西部本社報道部:平成27年4月3、4日)。</p>	
5. 地域貢献の成果	
<p>① 鳥根県の行政機関から発信される公的情報については、東部、西部などの地域性を考慮したメディア選択が重要であること。</p> <p>② 民間組織における情報発信については、当該組織の効率性が重要であろうが、公的機関では、情報発信の時間帯や、活字、放送などの発信メディアの差異についても考慮する必要があること。</p>	

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 准教授 林裕明
研究テーマ	島根県における地域課題と国際化の現状について

1. 研究目的	
<p>本研究では、「島根県における地域課題と国際化の現状について」という共通テーマのもと、申請者が担当する総合演習の参加者(12名)が4人ずつ3つのグループに分かれて、自由にテーマを設定し、調査・研究を実施する。島根県における国際化の現状を明らかにするとともに、国際化が地域課題の解決にどのような影響を与えているのかを探ることが目的である。</p>	
2. 方法	
<p>春学期において、各グループはそれぞれの関心にもとづきテーマを設定し、まず文献資料およびインターネット等を用いて情報収集し、4月末の演習時に中間報告をおこなった。文献等では不足する情報がある場合は現地調査(6月4日に島根県庁の島根ブランド推進課および李白酒造にて実施)や電話等での聞き取り調査(マツダなど)をおこない、関係者から直接話を聞いた。調査結果を分析し、7月8日の学生研究発表会にてプレゼンテーションをおこない、研究成果を公表した。加えて、秋学期には、グループワークでのテーマを発展させる形で、卒業研究の準備となる個人研究を実施した。演習の場で、テーマ設定、先行研究の整理、分析手法の検討、準備報告(2回)を経て、京都大学および岡山大学と合同で実施した12月26日-27日の合同研究会(於 岡山大学)および1月28日の学生研究発表会にてゼミ生全員が研究成果を個別に公表した。</p>	
3. 結果	
<p>春学期におけるグループワークでは、①「島根県の特産品の国外輸出状況」、②「国際化の中の地産地消」、③「マツダ車の販売を通して見る地域(島根)における国際化の矛盾」という3つの研究テーマが生まれた。①日本酒をはじめ、島根県の特産品の中に国外への輸出において近年顕著な成果を生んでいる商品があること、県の産業振興政策以上に、日本酒文化の輸出という地域企業の熱い思いが成果を生んでいることを明らかにした。②地産地消の重要性を認識しつつも、食の国際化の中で地産地消がうまく進んでいない現状を明らかにした。とくに、地産地消の進展度を測定する基準がないこと、地元産の食品販売場所が限定されていること、生産者・消費者・行政の間に地産地消を推進するためのモチベーションの不一致があることを指摘した。③島根県に隣接している広島県に本社のあるマツダの車のシェア率が島根県で低い理由を探った。島根県では普通乗用車より軽乗用車の方が需要があるのに対し、マツダが主力としている車は普通乗用車であるという不一致により、島根県にはマツダのディーラーが少ないことが原因と考えられた。このことから、グローバル化の進展にもかかわらず、その流れに取り残される地域が生まれうること、グローバル化は企業に競争力の向上を求め、各企業はその得意分野(車種、販売エリアなど)に特化し、買い手を</p>	

限定することにつながりうることを指摘した。秋学期には、他大学とは異なる独自の研究テーマにもとづいて卒業論文作成のための準備報告をおこなうことができた。学生同士の質疑応答も有益であったと考える。


4. 研究成果の公表

2回にわたる学生研究発表会での報告(7月8日および1月28日)に加え、12月26日-27日の岡山大学での合同研究会での発表をおこない、研究成果を公表した。また、2月17日の全域フォーラムにおいてもポスターセッションにて研究成果を公表した。

5. 地域貢献の成果

第一に、国際化の視点から地域課題に接近することにより、海外輸出を他に先駆けて実施して大きな成果を上げている日本酒メーカーなど、地域の潜在力に触れることができた。第二に、学生の日常生活における素朴な疑問(地産地消の課題、マツダ車が浜田に少ないこと)から、研究に値するテーマを見出し得たことは新たな発見であった。第三に、地域の魅力は一律の基準で測ることができない点を再確認できた。このことは、これまで欠点と考えられてきた点を長所とみなすような視点の転換が必要とされていることも含意している。

申請者	鳥根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 准教授 松田善臣
研究テーマ	学生の公共交通利用促進を目的とした情報誌の制作

1. 研究目的	
<p>本活動の目的は、路線バスの情報、ならびに浜田市内の地域情報(おでかけ情報)を掲載した情報誌を制作し、平成27年度鳥根県立大学の新生に提供することにより、学生(特に新生)のバス利用を促進することである。また、情報誌の制作を通して、浜田市内における公共交通のおかれている厳しい現状やその重要な役割、公共交通の利用促進策などについて、情報誌の制作に携わった学生が学び、深く理解することである。</p>	
2. 方法	
<p>申請者のゼミでは、平成25年度も本助成金を活用し、上記目的と同様の趣旨で情報誌を制作した。25年度は当時の2年生が中心となって制作を行ったが、26年度は新たにゼミに加わった新2年生が中心となって活動を行った。</p> <p>本活動を行うにあたり、まずは前年度に制作した情報誌を見直し、その改善点について2、3年生全員で話し合いを行った。また、新生全員を対象にアンケート調査を行い、その結果も踏まえ、どのような内容、構成のページにするかを決定した。改善点の主な内容としては、①写真はできるだけ大きく載せる、②文字だけになりすぎないようにする、③持ち運びがしやすいサイズに変更する、④QRコードを利用し、ネット上の地図にリンクを貼ることで、携帯やスマホから詳細地図が見られるようにする、といったものであった。また、前年度に引き続き、本誌がバスの利用促進を目的とはしているものの、その内容は決して説教くさいものにならないよう工夫することや、学生が興味を持ちそうなお店やスポットを、学生に興味をもってもらえるような簡潔な文章で紹介することで、自然とバスに乗って出かけたいようになるようにすることなどを、本年度のページ制作の基本的な方針とすることとした。これらの基本的な方針に則り、掲載する内容について検討を行い、取材を行うなどして情報を収集し、ページのレイアウトや内容について何度も話し合い、最終的な原稿を作り上げた。これらの作業と並行して、浜田市の公共交通の現状や、公共交通の利用促進などについての学習も行った。</p>	
3. 結果	
<p>本活動により制作した情報誌のタイトルは「まるっと浜田」とした。このタイトルには、この情報誌を活用し、バスを積極的に利用して浜田をまるごと(まるっと)楽しんで欲しい、という想いが込められている。右の図は「まるっと浜田」のページの一例(見開き1ページ)である。</p> <p>ジャケットの内ポケットにも入れることができるA6版</p>	 <p>作成したページの一例</p>

のサイズとし、全16ページである。

各ページは、写真をできるだけ大きく、たくさん載せるようにした。また、背景や文字なども明るくカラフルなものを選択し、学生にとって親しみやすく、見ていて楽しくなるように工夫した。

4. 研究成果の公表

本活動の途中経過を、平成27年2月17日に本学で開催された「第2回全域フォーラム」のポスターセッションにおいて発表した。

作成した情報誌については、平成27年4月2日に新入生を対象に行われた「学生生活オリエンテーション」の場で、新入生全員(232名)に配布するとともに、その内容についてプレゼンを行った。また、本学本部棟1階のスペースや地域連携推進室など学生が多く出入りする場所にも配置し、新入生以外の学生にも自由に持ち帰れるようにしている。さらに、情報誌に掲載した店舗や市役所などにも置いてもらい、広く多くの市民にも手に取って読んでもらえるようにしている。

5. 地域貢献の成果

クルマを利用する生活になれてしまった人を、公共交通の利用へとシフトさせることは容易なことではない。これらの人々への利用促進ももちろん重要ではあるが、それ以上に、運転免許を取得する前の若い人たちに利用促進を行い、公共交通を利用する生活になれてもらうことが、利用者増につながる。そのための適切な情報提供のあり方や教育方法について、今後も引き続き考えていきたい。そのことが公共交通を維持・確保するための一助になると考えている。

申請者	鳥根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 講師 西藤真一
研究テーマ	バス大学線における移動ニーズに関する調査

1. 研究目的	
<p>浜田市のバスサービスのほとんどは石見交通がサービス提供にあたっているが、ほとんどの路線が不採算である。唯一、大学線が年によって黒字化する程度である。こうした状況下で、住民にとって使い勝手の良いバスサービスとするためには、どのようにすればよいか、試行錯誤が続いている。</p> <p>本プロジェクトでは、学生が主体となって、まだ利用には至っていない潜在的な利用者とのコミュニケーションを通じた利用促進の取り組みに際して有用となる基本情報の収集を行った。</p>	
2. 方法	
<p>本プロジェクトによる取り組みは、利用者との相互コミュニケーションの前提となる移動ニーズの調査に焦点を絞る。</p> <p>具体的には、潜在的な利用者に対するアンケートを実施し、本当に今後のバス利用の余地が残されていないのか検証する。調査対象路線はもっとも利用の見込まれる大学線とし、調査対象者は路線沿線の住民や学生とする。</p>	
3. 結果	
<p>今回、学生を対象としたモビリティ・マネジメントによる大学線をはじめとする路線バスの利用促進を目指して調査を進めてきた。調査を通して浜田市を走る路線バスの現状や路線バスのかしこい使い方といった情報を提供してきた。その結果、潜在的に利用に関して働きかけていくことの重要性は確認できた。</p> <p>ただ、我々が当初意図したような、利用状況も一気に拡大するという結果は見られなかった。原因は協力者数が少なかったことや学生がバスを必要としている場合とバスを必要としない場合が明確に把握できていなかったことなどであると考えられる。</p> <p>今後の課題としては、より多くの参加者数を確保しアンケートの回収率を上げることや学生がバスを利用する目的を明らかにしたうえでより利用促進が期待できる場合(毎日バスを利用する通学など)に焦点を当てて効率的なモビリティ・マネジメントを行っていくことが挙げられる。</p>	
4. 研究成果の公表	
<p>成果は、COCフォーラムにおいてパネル展示するとともに、来場者に対して、逐一説明を行った。</p>	
5. 地域貢献の成果	
<p>本調査では浜田市を走る路線バスの現状や路線バスのかしこい使い方を提</p>	

供した。その結果、潜在的に利用に関して働きかけていくことの重要性を確認できた。このことは今後の地域交通について、地域住民が理解を深めることの必要性を示唆している。

申請者	島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科(浜田キャンパス) 講師 ヘネベリー・スティーブン
研究テーマ	石見アクティブライフの提言 —若者の地域満足度向上を目指して—

1. 研究目的	
<p>年間を通じて、多くの旅行者が県外から石見地域へ足を運んでいる。にも関わらず、県立大学の多くの学生から「浜田はすることがない」「遊びに行けるような場所がない」との声が聞かれる。それはなぜかというところに着眼し、本研究では、石見地域でできる様々なアクティビティを実際に学生自身が体験し発信することで、より多くの学生が石見で暮らす魅力を再発見をするために大学での学びが果たしうる役割は何かを分析する。また、活動を通して、彼らが地域の様々な活動に携わる人々との繋がりを築いていくことで、彼らの“なにもない浜田”への認識がいかに変容していくかも観察してゆく。</p>	
2. 方法	
<p>本研究では、若い世代の間での情報共有をより促進させることを目的として、学生による学生のための情報発信というかたちをとる。具体的な方法としてはまず、調査員として活動する学生を3人一組のグループに分け、グループごとに調査対象を選定し、事前調査(計画作成、下調べ、日程調整、報告記事のアウトライン作成など)をした後、現地へ赴く。調査当日は、体験したアクティビティの詳細なメモや写真、動画の撮影も行い、後日(本研究のために開設した)ウェブサイトにてその内容を体験記事として掲載する。記事を読んだ読者が気軽にそのアクティビティに参加できるよう、記事のなかにはとりあげた施設などの所在地、連絡先や地図といった情報も併記する。調査を3人一組とすることで、より多角的にそのアクティビティを観察することが可能となり、より多くの読者に訴える記事を作成できるという効果が期待できる。また副次効果として、記事を英語で書くことで、書き手・読み手双方の学生の英語運用能力の向上も期待できる。また研究を通し、学生と地域の人々が交流する機会を創出することも大きな狙いのひとつであるが、精力的に活動する人々に出会うことで学生らの石見に対する見方がどのように変化してゆくのか、彼らの書く記事を分析することで調査してゆく。</p>	
3. 結果	
<p>現在、29本の記事をウェブサイトにて公開中で(H26年度春学期:16本、秋学期:15本。うち中国自然歩道モデルコース5本)、訪問した調査地は計25ヶ所以上(浜田、江津、大田、益田、金城、弥栄、津和野など)である。とりあげたアクティビティは中国自然歩道モデルコース散策、ノルディックウォーキング、スノーボード、スケート、ボクシング、ゴルフ、バッティング、乗馬、史跡散策、工芸体験など多岐に渡る。</p>	
4. 研究成果の公表	

現在、活動の内容はウェブサイトにて公表している

(<https://activeiwami.wordpress.com/>)。今後この内容を、チラシやパンフレットなどのかたちで(日本語・英語両版を作成)、学内配布する予定である。また、プロジェクトの総括を研究ノートとして総合政策論叢へ寄稿することも検討中である。

5. 地域貢献の成果

実地調査、あるいはそれにとまなう事前調査の過程で、学生がそれまで出会う機会の得られなかった地域の人々との交流ができたことは、大きな収穫のひとつであった。人と出会い、アクティビティを楽しみ、それに関する記事への反応を得ることで、学生達が浜田に対し抱く印象や、浜田で暮らすことへの姿勢が肯定的なものへと変化していったことも見て取れた。しかし、この調査の過程で、それぞれのアクティビティに関する詳しい情報や連絡先を得ることが難しいケースが散見された。そこで私は、本研究でとりあげたような浜田やその近郊で楽しめるアクティビティとその情報を集約したウェブサイトや冊子などの「浜田(石見)レクリエーション・サービス」をつくることを提案したい。せっかくこうした魅力的な施設や活動が数多く存在するにも関わらず、地域に暮らす学生でさえその情報にアクセスすることが難しいのが実状である。これは浜田の地域活性、あるいは生活満足度の向上に関して非常に「もったいない」状況ではないだろうか。いま既にある魅力を再発見し、広め、促進してゆくという意味でも、こうした情報網の整備が果たし得る役割は決して小さくないだろう。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 健康栄養学科(松江キャンパス) 教授 名和田清子
研究テーマ	有機農業推進のための技術開発プロジェクト 将来の鳥根農業を支える商品づくりプロジェクト

1. 研究目的

鳥根県では、有機農業を県農業の柱の一つとして推進する取り組みが、平成24年度から本格的にスタートしている。有機農業の推進は、農業の自然循環機能の増進、環境負荷の低減、生物多様性の保全等、鳥根県にとって重要な課題であるが、有機農業に対する消費者の理解と関心は未だ低いのが現状である。また、本県の特産作物は、メロンとブドウが主力品種であるが、近年、栽培面積、販売共に最盛期の約半分に落ち込んでおり、鳥根農業を推進していくためには、鳥根のオリジナル品種(品目)の作出が喫緊の課題となっている。鳥根県及び鳥根県農業技術センターでは、これまで、有機農業技術の開発、定着を目的に取り組みを行ってきたが、今後さらに、有機農業の推進、オリジナル品種(品目)の開発を推進していくためには、消費者の理解と関心を高めていくことが重要となる。そこで、健康栄養学科では、鳥根県、鳥根県農業技術センターと共同し、有機農業産物、オリジナル品種(品目)の食味等に関する分析を行い、有機農業、商品のPR、食味向上に取り組むこととした。

2. 方法

食味官能評価

健康栄養学科学生を試験者(パネル)とし、各項目について、基準を0とする評点法(-2点から2点の5段階)で行った。

・ 品種

トマト:パルト

基準 有機栽培(リビングマルチ区)

A 有機栽培トマト(黒マルチ区)、B 慣行栽培(トロ栽培)

ミニトマト:ネネ

基準 有機栽培(リビングマルチ区)

A 有機栽培トマト(黒マルチ区)、B 慣行栽培(トロ栽培)

メロン:基準 島交1号、 B 島交4845-8

・ 評価

外観、香り、味(甘味)、総合評価の共通項目と、トマト・ミニトマトでは、さらに、味(酸味)、コク、水分、硬さ(皮)、硬さ(身)について、メロンでは、味(苦味)、繊維、発酵、硬さについて行った。

・ アンケート調査

官能検査時に、トマトとメロンについて、好き嫌いや食材に対するイメージなど4項目について、自記式で実施した。

・糖度測定

官能検査実施時に、屈折糖度計「ブリックス糖用屈折計」を用いて測定した。

・メロン

メロンの官能検査後に、残った皮の厚さを測定 4. 研究成果の公表

3. 結果

トマトについて

有機栽培(黒マルチ区)は、有機栽培(リビングマルチ区)に比較して、甘さ及び硬さ(身)が優れている可能性が示唆された。

しかしながら、今回、結果には示さなかったが、一部の評価項目において、好き嫌いの影響を受けていたことから、今後、パネルの選定方法なども考慮し、さらに検討が必要である。

メロンについて

鳥交4845-8は、鳥交1号に比較して、高評価である可能性が示唆された。7月と11月では、評価得点に差が認められたことから、今後、調査時期や糖度も考慮し、さらに検討が必要である。

4. 研究成果の公表

平成26年度卒業研究発表会で報告した。

今後、鳥根県・農業技術センターとまとめを行い、紀要などで公表予定である。

5. 地域貢献の成果

今回の検討により、トマトにおいては、慣行栽培に比較して、有機農産物の物のおいしさが優れている可能性が示唆された。しかしながら、消費量の増加を図るためには、消費者の有機農業への関心を高めること、適正な価格設定の検討などが必要となる。今後は、今回の結果を基に、関係機関と連携して、消費者への広報活動などに取り組む必要がある。

今回、この研究を行ったことにより、学生に、有機農業や、鳥根県農業について考える機会を与えることができた。このことは、若い世代の農業への関心を高める第1歩として有意義であったと考える。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 健康栄養学科(松江キャンパス) 教授 名和田清子
研究テーマ	鳥根県産「つや姫」の生産・販売拡大に向けた取り組み

1. 研究目的	
<p>鳥根県では温暖化により、平坦地域の「コシヒカリ」の品質低下が問題となっている。これに対して、平成24年から、品質が安定し、良食味米である「つや姫」の普及拡大に取り組んでいるが、今後一層の生産拡大を目指すためには、県産「つや姫」の食味等に関する商品特性を把握した上で、商品のPRや一層の食味向上に取り組んでいく必要がある。そこで、健康栄養学科では、平成25年度より、鳥根県、鳥根県農業技術センターと共同し、県産つや姫の食味等に関する分析に取り組んでいる。</p> <p>鳥根県、鳥根県農業技術センターと共同し、県産「つや姫」の食味等に関する分析を行うことを事とする。</p>	
2. 方法	
<p>平成26年度産「つや姫」の食味官能検査、炊飯米の骨格構造の検討、物性解析を行い、平成25年度産「つや姫」の結果と比較検討した。</p> <p>(1)官能評価</p> <p>健康栄養学科学生全員を試験者とし、各項目について、基準を0とする評点法で行った。</p> <p>評価項目 外観、香り、味、粘り、硬さ、総合評価</p> <p>評価点数 -3~-1点(不良)、0点(並)、0~3点(良)の7段階</p> <p>サンプル 26年度産米 基準:こしひかり A: きぬむすめ B: つや姫、30~35g/1サンプル/人</p> <p>(2)炊飯米の骨格構造の検討</p> <p>炊飯米を液体窒素で凍結、凍結乾燥後、走査型電子顕微鏡(HITACHITM-1000)を用いて、各群15粒について観察した。</p> <p>(3)物性解析</p> <p>圧縮試験機(テンシプレッサー)を用いて、各群30粒について、硬さ・粘り・付着性・弾力性・凝集性を測定した。</p> <p>*この研究・活動は、健康栄養学科2年生の卒業研究として実施した。</p>	
3. 結果	
<p>(1)官能評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H25年度産のつや姫は、外観、香、味、粘り、総合評価において、こしひかりと比較して、有意に高得点であった。 ・H26年度産のつや姫は、外観及び総合評価において、こしひかりと比較して、有意に高得点であった。 	

・H26年度産つや姫は、H25年度産に比較して、外観、香、総合評価で有意に低得点であった。

以上から、つや姫の評価得点は年度差を認めたが、外観及び総合評価においては、こしひかりに比較して高評価である可能性が示唆された。

(2)炊飯米の骨格構造の検討

- ・糊化層の厚さは、つや姫では、こしひかり、きぬむすめに比較して薄かった。
- ・つや姫のでんぷん粒の大きさはこしひかり、きぬむすめに比較して不均等であった。
- ・内部空洞については、品種間の差は認められなかった。

(3)物性解析

つや姫は、こしひかりと比較して、粘りが非常に強く、凝集性は低かった。また、浸漬時間、保温時間により物性特性に差が生じることが示唆された。

4. 研究成果の公表

平成26年度卒業研究発表会及び平成26年度しまね地域共生センター研究連携協議会で報告した。

また今後、島根県及び島根県農業技術センターとで結果を取りまとめ、本学紀要及び関係学会などで公表する予定である。

5. 地域貢献の成果

今年度は、JA全農しまねによる「つや姫」の認知度向上および販売拡大のための統一精米袋の作成に際し、本学教職員一同で、一次審査に協力し、つや姫の「統一精米袋」も完成した。広報活動は順調に進められている。今年度は、「つや姫」マイスター第4回集合研修にも参加し、「おいしさの見える化」というテーマで、今までの研究成果を報告し、生産者との連携を図る第1歩を進めることができた。今年度、島根県産つや姫は、一般財団法人日本穀物検定協会主催の平成26年度産米の食味ランキングにおいて、初出品で最高ランクである「特A」を取得した。今後は、この「特A」を維持することを目標に、検討を続けることが求められる。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 保育学科(松江キャンパス) 准教授 福井一尊
研究テーマ	地域の子どもを取り巻く児童文化財の現状をふまえた保育者養成プログラムの展開

1. 研究目的	
<p>本学保育学科では地域の子ども1,500名を招いて総合表現の発表「ほいくまつり」を行っている。学生の主体的な活動を基本とする本活動において、学生が多様化する保育現場の状況を学生自身が正確に把握することが求められるが、学内での活動や情報収集だけでは困難である。そこで、保育現場における児童文化財の扱われ方を学生自身が調査し、学内での活動に反映させ、発表活動に生かしていくことを目的とする。</p>	
2. 方法	
<p>平成26年度の「ほいくまつり」活動において、広報を担当する学生8名が松江市内25の保育所、20の幼稚園に発表活動への案内を行う。その際に、普段の園児が触れる児童文化材の種類や内容、頻度、経験の順序などについて聞き取り調査を行う。得られた情報は、学内での活動において、保育学科1・2年全学生(107名)で共有し、協議検討を重ねたうえで、発表内容に反映させていく。そのことをふまえた上で、別の4名の学生が発表までの自分たちの活動内容、発表当日の来場者の様子、インタビュー・アンケート内容を記録し、まとめた資料を作成する。その内容は学内において、発表後に全学生で共有するとともに自己省察の大きな要素として保育者養成のための学習に活用する。</p>	
3. 結果	
<p>下記の項目によって、保育現場における児童文化に関するアンケート調査を行った。それぞれの項目について得られた内容を学生がデータをまとめ、保育学科に所属する全学生(107名)の前で口頭発表した。その内容をふまえ、「ほいくまつり」の発表内容を改善し、平成27年7月5日(土)には鳥根県民会館大ホールにおいて、1,700名の乳幼児、保護者、保育・教育関係者を招いた第41回ほいくまつりを開催し、より地域の期待に応えられた内容を公開することができた。</p> <p>調査項目</p> <ul style="list-style-type: none"> ①最近読み聞かせてよかったと思える絵本 ②子どもが親しんでいる手遊び ③どのような時間に手遊びをするか ④受け継がせたい児童文化財とは ⑤子どもに聞かせてよかったと思える楽曲 ⑥子どもが好んで歌っている楽曲 ⑦児童文化財の変化について 	

⑧児童文化財の種類について

⑨子どもが親しんでいる室内遊び

4. 研究成果の公表

・平成26年度縁結びプラットフォーム事業「第2回全域フォーラム」(平成27年2月17日 浜田キャンパス)にて口頭発表

5. 地域貢献の成果

保育現場における児童文化財の扱われ方を取り入れた学習内容は、本地域において保育者を養成する機関として継続的に果たすべき課題であるといえる。今回は学生自身が調査し、学内での活動に反映させ、発表活動に生かしていくことによって、高い教育的効果も認められた。また本取組のような学習活動を保育者を目指す学習者にとってより意義のあるものにするを考えると、集団としての成果の振り返りや自らを省察することは欠かすことができない。そのため、継続的に、本取組発表に来場した子どもの反応や、学生とのやり取りの様子、また保護者へのインタビューを画像で記録したり、アンケートを実施・集計を行ったりすることが、地域においてより望ましい発表行事を展開する上で重要であるといえる。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 総合文化学科(松江キャンパス) 准教授 工藤泰子
研究テーマ	学生の視点を活かした観光振興の可能性を探る —雲南市吉田町を事例に—

1. 研究目的	
1. 目的	
<p>本研究の目的は、学生(若者)の視点から、地域の魅力を探し、地域資源の活用方法を探ることである。</p> <p>かつて、たたら製鉄で繁栄した雲南市吉田町(旧吉田村)は、昭和50年代には早くも人口減少が深刻な問題として取り上げられるようになった。吉田町(村)では、昭和61年に「鉄の歴史村」を宣言し、「鉄の歴史」を活かした町づくりが行われてきたが、観光客数は伸び悩み、人口減少、空き家の増加といった深刻な問題を抱えている。平成16年(2004)の町村合併以後、吉田町の過疎化は一層進行し、平成26年(2014)現在では、人口ピーク時と比較して半数近くにまで落ち込んでいる。</p> <p>また、平成25年の観光統計を見ると、雲南市の観光入込客数は増加している。しかし、町の多くの方が、高速道路が開通したことで「むしろ人の流れが少なくなった」という感想を漏らしていた。</p> <p>過疎化が急速に進行する吉田町では、まずは観光を通して交流人口の拡大への取組みが必要であろう。これまで、吉田町では、地域の人々の手による観光振興が行われてきたが、それに加えて、地域のことを知らない観光者の感覚を取り入れることも重要だと思われる。</p>	
2. これまでの吉田町との関わり—前年度までの取組み	
(1) 短大2年間を通した学習	
<p>本学は2年制教育であり、ゼミの活動期間は1年と短い。そのため、指導教員の担当する別の科目「観光資源学」(1年次後期科目)において地域への関心を高め、「卒業プロジェクト」(2年次通年科目)に発展させるという、2年間通した学習で教育活動の充実を図った。</p>	
(2) 平成25年度の取組み:「観光資源学」(1年次後期選択科目:履修生67名)	
<p>本授業のなかで、地域への理解・関心を深めるため、吉田町に関する講義を2回(うち1回は外部講師)実施し、基礎的学習を行った。また、正規授業時間外に希望者を対象とした学外見学会を実施した。</p>	
① 鉄の文化、吉田町に関する講義	
② 吉田町への見学会実施(正規授業時間外:希望者のみ参加)	
2. 方法	
1. 平成26年度「卒業プロジェクト」における取組み	
(1) 主な活動内容	
1年次の基礎学習を2年次に発展 履修生10名(「観光資源学」全員履修済)	

「観光資源学」での学習を通して、吉田町や鉄の文化に興味をもった学生が観光文化ゼミに集まり、それぞれが関心のあるテーマを研究した。

【全員共通の活動】

4月 吉田町、菅谷鉦についての学習。『菅谷鉦』を読む。

5月 (1) 子安観音祭見学会(5月3日)

吉田町の方との交流／和菓子づくり 聞き取り①

9月 (2) 吉田町(掛合町)ゼミ合宿 聞き取り②

11月 (3) 1年生に吉田町の魅力を伝える

2月 卒業発表会(2月7日)

【個人のテーマに基づく研究】

4月 吉田町・鉄の文化に関して、個人研究のテーマ設定。文献調査開始。

5月 聞き取り調査①(ゼミ全体)

9月 聞き取り調査②(ゼミ全体)以後、各自がアポイントメントをとり、ヒアリング調査。

(2) 吉田町(掛合町)ゼミ合宿(9月11-12日)

1年次「観光資源学」にて行った学外見学会と、2年次前期の学びをふまえて、ゼミ合宿を実施した。その際、11月に実施する1年生向け学生見学会(平成26年度「観光資源学」)を見据え、鉄の歴史・文化にこだわらず、学生の視点から自由に訪問先を選出した。

【合宿の内容】

1日目(株)吉田ふるさと村 視察・講義、午後:吉田町の方への聞き取り。

宿泊:グリーン・シャワーの森

2日目 午前:「鉄山師の町歴史館」見学、ボランティア活動、兎比神社、龍頭の滝、掛合酒造記念館。

(3) 1年生に吉田町の魅力を伝える

平成26年度の「観光資源学」において、観光文化ゼミ生が学生の視点で吉田町の魅力を伝え、学生企画の見学会を実施した。

平成26年度「観光資源学」(1年後期選択科目:履修生48名)

11月12日「山陰の観光資源—鉄の歴史村」(担当教員)

11月19日「鉄の歴史村地域文化研究所の取組み」(高木朋美氏)

11月26日「学生から見た吉田町の魅力」(観光文化ゼミ生による説明)

11月29日(土) 吉田町見学会 希望者のみ(観光文化ゼミ生企画)

(4) 吉田町見学会 11月29日(観光文化ゼミ生企画)

【訪問先】 鉄山師の町歴史館、鉄の歴史博物館、菅谷鑪山内・高殿、山内生活伝承館、本町通り散策、道の駅「たたらば壺番地」、掛合酒造記念館。

参加学生 1年生2名、2年生8名。

3. 結果

従来、吉田町では鉄の歴史・文化を前面に出した観光事業を行ってきたが、今回の事業では町のことをよく知らない観光者の立場を考え、「学生(若者)・よそ者の視点」を重視し、学生たちに企画してもらった。

11月に実施した学生企画のツアー(学外見学会)において、1年生の参加者数が予想を下回ったことは心残りだが、ゼミ学生にとっては、観光資源の活かし方、資源のアピール方法、さらには、「観光欲求」を喚起させること自体の難しさなど、本取組みを通して多くのことを学習する機会となった。

また、本取組みは、吉田町を観光教育の実践の場として始めた活動だが、松江からのルート上にある掛合町の資源と組み合わせた、広域的な「鉄プラスα」の観光を考える必要性も見えてきた。

4. 研究成果の公表

○平成27年3月6日(金)「しまね地域共生センター研究連携協議会 大学COC事業成果報告」にて発表。

○報告書を作成し、関係者へ配布。

5. 地域貢献の成果

県内の学生は旅行経験が少なく、大学や学校での研修旅行以外には、ほとんど旅行したことがないという学生もいる。本事業によるゼミや授業で訪れたすべての場所について、1年次の見学会以前に訪れたことがある学生は皆無であった。ゼミ学生に好評だった龍頭の滝(「日本の滝百選」の一つ:掛合町)も、本事業を行わなければ、島根県内に住んでいても一度も訪れることがなかったかもしれない。吉田町自体へも、「観光資源学」履修以前に訪れた経験のある学生は一人もいなかった。しかしながら、短大2年間の教育のなかで何度も同じ場所を訪れることにより、町に顔見知りの人が増え、名前呼び合える関係にまで発展した。今では、学生たちがゼミ以外の友人や家族を連れて吉田町を訪れることもある。同じ場所に複数回引率することによって、その地域についての関心が高まり、調査しようとする意欲が生まれる、という教育的な効果も改めて感じた。

また、聞き取り調査の際にお世話になった地元の方から、後日、「学生さんと話せて楽しかった」「孫を県短(本学)に入学させたい」といった声までいただき、本事業によって大学と地域とのつながりが深まったことを実感できた。

申請者	鳥根県立大学短期大学部 総合文化学科(松江キャンパス) 講師 ラング クリス
研究テーマ	鳥根の伝統工芸の体験と英語による情報発信

1. 研究目的	
<p>鳥根の伝統工芸が体験できる施設「出雲かんべの里」は開館後、多くの訪問者でにぎわい、今では鳥根県東部で広く認知されているが、訪問者は中高年層が多く若年層や県外者の間では認知度はまだ低い。この課題を解決するために、若者らが実際に伝統工芸の製作過程を見学し体験学習することで、鳥根の伝統工芸を知り、ものづくりの楽しさを感じる事が不可欠であると考えた。</p> <p>フィールドワークを含めた活動を通して、鳥根の伝統工芸に関する知識を深め、得た知識・経験を日本語と英語で情報発信することで、様々な年代や海外出身者にも知ってもらうことを目的とした。さらにはこの活動を通して、地域の方とのふれあいの場を持つことも期待できる。</p> <p>また、英語でブログや冊子を作成することにより、学生が日本文化を英語で紹介する経験をもつことになり、ライティング能力の向上だけでなく、国際交流の促進にもつなげることを目的とした。</p>	
2. 方法	
<p>本プロジェクトは、松江キャンパス総合文化学科の必修科目「卒業プロジェクト」の一部として、英語教育ゼミの学生8名が、担当教員ラング・クリスの指導の下で行った。</p> <p>まず、書籍やインターネットから伝統工芸に関する歴史や基礎知識を得た上で、「和紙てまり」「安来織」「籐工芸」を担当する2~3人ずつの3グループに分かれ、「出雲かんべの里」の工房にて講師による制作過程を見学した。その後、講師の指導を受けながら、1時間から3時間ほど制作体験をした。日を改めて講師へインタビューを行い、職人としての履歴や問題点をヒアリングした。</p>	
3. 結果	
<p>本プロジェクトを通して、学生は伝統工芸についての知識を得るだけでなく、それを英語で紹介する経験を持つことができた。また、職人へのインタビューから、中国や東南アジア製品の台頭により、国内生産需要は激減し、厳しい経済状況にあること、また後継者育成が大きな問題であることがわかった。</p> <p>インタビューや見学・作製体験中は、ビデオ撮影と写真撮影を行い情報収集につとめ、報告冊子とブログ作成に生かした。それらは日本語と英語を使って作成し、国内外へ向けて情報発信を行った。これにより、伝統工芸を通して海外にも鳥根を発信でき、鳥根の観光資源の再認識や国際交流の拡大が期待される。</p>	
4. 研究成果の公表	

2015年3月6日(金)に行われた、しまね地域共生センター研究連携協議会「地域と大学の共生」にてポスター発表をした。

作製した冊子は「出雲かんべの里」「松江駅観光案内所」「松江市役所」「タウンプラザしまね」「STICビル」に設置した。ブログは、インターネット上に公開し、国内外から広くアクセスできるように設置した。

5. 地域貢献の成果

冊子を松江市内の主要地点に設置したことで、観光客の手に取ってもらいやすくし、広い年代に島根の伝統工芸をアピールできた。特にブログは海外からもアクセス可能なため、日本文化に興味を持つ海外出身者に対しても島根を発信できた。これらにより、島根の観光資源の拡大や国際交流の点で貢献できると期待される。

6) 浜田市と島根県立大学の共同研究成果報告会（平成27年2月17日開催）

本学では「浜田市との連携協力に関する協定書」に基づき、地域振興など浜田市の施策に有用なテーマについて浜田市と共同で研究をしています。

本年度においては、2月17日(火)に浜田キャンパス講堂を会場にして開催された、文部科学省平成26年度「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」成果報告会 第2回全域フォーラムの中のプログラムとして、平成26年度の研究成果報告会がおこなわれました。本年度の研究テーマは以下の4件です。成果報告の最後には、浜田市の久保田章市市長からの講評もありました。

当日の会場には、市民の皆様や行政関係者など、多数のご参加がありました。また、松江キャンパス大講義室においても、この報告会は同時中継されました。

《本年度の研究テーマ(発表順)》

○商店街活性化に関する調査 - 4つの分析軸から見る中心市街地活性化 -
島根県立大学 久保田典男 准教授(浜田キャンパス)

○地元の食を再考する「まち弁」企画 - 浜田市のイカを活用して -
島根県立大学 田中恭子 准教授(浜田キャンパス)

○浜田市の商店街活性化を目指して
- 大学と地域の融合の場としての中心市街地再生計画 -
島根県立大学 藤原真砂 教授(浜田キャンパス)

○高齢者の介護予防のための検討会
島根県立大学短期大学部 酒元誠治 教授(松江キャンパス)



共同研究成果報告会の様子



久保田章市浜田市市長からの講評

7) 益田市と島根県立大学の共同研究成果報告会（平成27年2月17日開催）

本学では「益田市との連携協力に関する協定書」に基づき、地域振興など益田市の施策に有用なテーマについて、平成25年度に続いて、益田市と共同で研究をおこなっております。

本年度においては、2月17日(火)に浜田キャンパス講堂を会場にして開催された、文部科学省 平成26年度「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」成果報告会 第2回全域フォーラムの中のプログラムとして、平成26年度の研究成果報告会がおこなわれました。本年度の研究テーマは以下の2件です。成果報告の最後には、益田市の山本浩章市長からの講評もありました。

当日の会場には、市民の皆様や行政関係者など、多数のご参加がありました。また、出雲キャンパス大講義室と、松江キャンパス大講義室においても、この報告会は同時中継されました。

《本年度の研究テーマ(発表順)》

- 災害時に利用可能な情報通信技術の調査とデモンストレーション

島根県立大学 金野和弘 准教授(浜田キャンパス)

- 石見空港におけるビジネス客獲得にむけたモビリティ・マネジメントの提案

島根県立大学 西藤真一 講師(浜田キャンパス)



発表は共同研究に携わったゼミ生によってもおこなわれました。



山本浩章益田市長からの講評

8) 3キャンパス研究交流会

■開催日時・場所

平成27年2月17日(火)12:20～12:50 於:島根県立大学浜田キャンパス本部棟会議室

■目的

地域共通問題へ対応するため、本交流会において各キャンパスでの既存の研究活動を相互理解し、3キャンパスが連携することで可能となる専門横断的な研究活動を促進することを目的とする。全学的総合力を活用して地域志向研究の活性化を促す。

■交流内容

これまで各キャンパスの専門性の違いから、研究交流の機会を持つことがなかったが、本交流会において、教員案内やホームページよりも具体的な研究活動歴、研究関心につき各教員より紹介がなされた。本学の研究範囲の広さや各専門分野での研究課題等につき相互に理解が深まった。また既に取り組中の研究調査への参加呼びかけも行われ、キャンパス横断での研究活動が開始され、第1回目となった本交流会を引き続き開催し、3キャンパスが連携した総合力の発揮に繋がるよう継続していきたい。

No	所属	出席者	備考
1	島根県立大学浜田C	林 秀司 教授	・地域連携推進センター長
2	島根県立大学浜田C	藤原 真砂 教授	
3	島根県立大学浜田C	田中 恭子 准教授	・地域連携推進センター副センター長
4	島根県立大学浜田C	金野 和弘 准教授	・地域連携推進センター委員
5	島根県立大学浜田C	久保田 典男 准教授	
6	島根県立大学浜田C	西藤 真一 講師	・地域連携推進センター委員
7	島根県立大学浜田C	豊田 知世 講師	・地域連携推進センター委員
8	島根県立大学出雲C	山下 一也 教授	・副学長
9	島根県立大学出雲C	松本 亥智江 准教授	
10	島根県立大学出雲C	小村 智子 助手	・地域連携推進センター委員
11	島根県立大学短期大学部松江C	小泉 凡 教授	・地域連携推進センター副センター長 ・しまね地域共生センター長
12	島根県立大学短期大学部松江C	瀧元 誠治 教授	
13	島根県立大学短期大学部松江C	福井 一尊 准教授	・地域連携推進センター委員



2.3キャンパス合同学生ボランティア

1) 3キャンパス合同学生ボランティア企画

平成26年6月28日(土)に、出雲市の鳶巣コミュニティーセンターを会場として、3キャンパス合同ボランティア企画「みんなでおかしをつくろう！」が開催されました。

この企画は発達障害をもつ子どもたちと大学生の交流イベントで、お菓子づくりを一緒にやろうというものです。子どもたちとご家族で6家族17名さま、学生19名の参加となりました。

【はじまりの会】

最初は体育館に集まり、初顔合わせとなる『はじまりの会』をしました。自己紹介ののち「貨物列車」等のゲームを行い、和やかな雰囲気となりました。子どもお一人にペア学生を決めて、一緒にお菓子づくりをすることとなりました。

【お菓子づくり】

メニューは『ぜんざいパフェ』と『抹茶ラテ』です。概ね45分間の調理時間で、団子をこねたり色々な行程があります。子どもたちも一生懸命で、楽しそうな声が聞こえてきました。

【お茶会・おうたのじかん・おわりの会】

できたお菓子をみんなで実食です。子どもたち、ペア学生、ご家族の皆さまで輪になって食べました。わいわいとした雰囲気で、『おいしい』との声が聞こえました。『おうたのじかん』では“となりのトトロ”の“さんぽ”を合唱しました。おわりにあたって、子どもたちからは『たのしかった』『いっぱい食べた』等の感想を、ご家族からは大学生がよく見てくれていたとのお言葉をいただき、閉会となりました。

13～16時までのイベントでしたが、バタバタとあっという間に時間が過ぎていったように感じました。長時間にわたりご協力をいただきましたご家族の皆様には、厚くお礼を申し上げます。また、当日は浜田キャンパス田中恭子先生、出雲キャンパス高橋恵美子先生、石橋鮎美先生に見守っていただきました。学生は平成26年11月より企画考案をはじめ月1回程度でTV会議を行うなど準備を進めてきました。キャンパス間連携の大切さを学生に学んだような気がします。皆さまお疲れ様でした。(文責：楨野康一)



2) 3キャンパス合同学生ボランティア報告会・研修会

島根県立大学では、学生の主体的かつ積極的なボランティア活動を支援する各種の取り組みを行っています。その一環として3キャンパス合同の学生のボランティア研修会を5月28(水)に開催しました。当日は、開催校である出雲キャンパスと浜田・松江キャンパスをモニター中継でつなぎ、学生、教職員、地域の方など約160名の参加者がありました。

研修会は、昨年度の学生ボランティア・マイレージ実績上位者の表彰、学生が取り組んでいるボランティア活動の報告、NPO法人学生人材バンクの田中玄洋先生による講演、地域の身近なボランティア活動の紹介などとても充実した内容でした。

実施後のアンケートでは、参加者の84.3%が、田中先生の講演は興味を引くものだったと回答し、学生のボランティア活動報告を聞いて87.1%がボランティアに魅力を感じたと回答していました。また、地域のボランティア活動紹介を聞いて、81.4%がボランティアをしたいと思ったと回答しており、新たにボランティア活動を始めるきっかけにもなる研修会でした。



ボランティア・
マイレージ上位
3名表彰



災害ボランティ
ア活動紹介

モニターで3キャンパスがつながりました



田中玄洋先生の
ご講演



地域のボランテ
ィア募集

3) 3キャンパス合同学生ボランティア交流会

ボランティア活動に取り組んでいる島根県立大学の3キャンパスの学生が一同に会して交流することで、異なった活動視点を認識し刺激を受け合い、今後の学生ボランティア活動の質の向上を図るという目的のもと、平成22年度より「3キャンパス合同ボランティア交流会」を開始しています。

今年度は、平成27年1月31日(土)に出雲キャンパスを会場として、3キャンパスから学生18名、教職員6名の合計24名が参加しました。「3キャンパス合同地連カフェ」の名称をつけ、学生主体の企画となっております。

【アイスブレイク】

会場となった出雲キャンパスの松下侑加さん(2年)の司会のもと交流会が幕を開けました。初めて会う学生が多く、まずは自己紹介も兼ねて「オロリンはいいました」や「私は誰でしょう」などのゲームを交えて親交を深めました。



【出雲キャンパス施設見学】

実際の実習授業を行う『実習室』を見学させていただきました。整然と実習用ベッドが並んでいます。出雲キャンパス学生より医療用器具や授業の様子など説明がありました。松江・浜田キャンパスの学生も他分野の学問内容に触れ刺激を受けたようです。



血圧測定の実習も行いました。

【活動報告】

浜田キャンパスの黒木大輔さん(3年)より、昨年度の交流会や3C合同ボランティア企画(平成26年6月実施)の活動報告がありました。3キャンパスの代表としての学生の交流を深め、それぞれのキャンパスの特色を活かしながら、地域貢献を行っていききたいとの話があり、ワークショップに進んでいきました。



【キャンパス自慢】

まずは自分のキャンパスの様子を分かってもらえるよう、それぞれのキャンパスに分かれ「キャンパス自慢」を考えました。

浜田キャンパスからは、多彩な学習プログラムがある、学生が積極的、サークル活動が盛んだ、海がきれい等の話がありました。

出雲キャンパスからは、教職員が協力的、みんな優しい、向上心が高い、謙虚、SP(模擬患者さん)等との地域との繋がりが、資格取得ができる等のお話がありました。

松江キャンパスからは、学科が多くいろいろな人がいる、課外授業が多い、キラキラドリムプロジェクトなど学生活動を応援する仕組みがある、おはなしレストラン(通称:おはレス)の活動を継続的にしている、健康栄養学科の学生考案メニューが学食で食べられる等のお話がありました。

【ワークショップ①・3Cがつながるには】

4班に分かれてのワークショップでした。3キャンパスではやはり距離的に遠いので普段からの交流は難しい、テレビ会議などを利用したり、できる範囲で会って話をする機会をつくる事が大切だとの意見があがりました。また、他のキャンパスの様子が分からないので、情報共有が第一だとの話がありました。



【ワークショップ②・3Cの特色をいかす】

浜田キャンパスではゼミで教員の専門科目を深く勉強する授業があり、これには「地域活性化」をテーマにしたものが多いので、このノウハウを他地域へ転用できないか。出雲キャンパスの人・地域との繋がりを活かした活動ができないか。松江キャンパスの各学科の専門を活かして特産品を使った“体にいいレシピ開発”を行い、浜田キャンパスのノウハウを使って販売・普及ができないか等、さまざまなアイデアが発表されました。

難しいテーマですが、短い時間でよく議論がなされたと思います。

【ワークショップ③・地域貢献をする】

この交流会は平成27年度より春学期(4～7月)に地域貢献を図る企画を検討する会を開催し、秋学期(10～12月)にその実施を図ることとしております。

平成27年度に実施する企画について、どのように地域貢献を図る内容にできるか、ワークショップで話し合いました。今回は、『海岸清掃』『落ち葉拾い』『地域の食材を使ったレシピコンテスト』など様々な企画(案)が発表されました。



また、活動を継続して取り組む為に、新たな参加学生を募ることも大切なので、誰が主催でどんな活動なのか分かりやすく説明して、1年生への声掛けも進めるべきとの意見もありました。

全体として、みな活発に議論をされており、来年度に続くよい交流会となったかと感じました。最後に松江キャンパスの工藤泰子先生と出雲キャンパスの石橋鮎美先生にご挨拶をいただき、閉会しました。皆さまお疲れ様でした。(文責:横野康一)

3. 学生災害ボランティア

1) 東日本大震災に伴う災害ボランティア活動2014記録

○「岩手を知って…」

総合政策学部 1年生 門脇 大倫

私は今回災害復興ボランティアとして、いわてGINGA-NET「夏GINGA 2014」というボランティアの第二期に参加してきました。今回このボランティアは約2週間という期間で活動をしました。私はこの二週間で「菜の花プロジェクト」と「漁師さんの活動のボランティア」を行いました。「菜の花プロジェクト」では、実際に自分たちで菜の花を植えたり、脱穀・唐箕掛けをしました。最初は『こんな菜の花を植えるだけでどうやって復興するのか』と疑問に思っていましたが、菜の花を植えることにより塩害で使えなくなった土地の再生、休耕地となった土地の有効活用にもつながります。また菜の花は食べたり、菜種油にしたりすることができ、さらに地元のお母さんたちに菜種油の商品のラベル貼りをしていただき、収入源にしたり、菜種油の廃油をバイオディーゼルのガソリンにするなど、持続可能な復興ができると教えていただきました。漁師さんの方では、昆布やワカメの袋詰めを手伝いました。どちらの活動も今まで体験したことのないものだったので、とても新鮮でした。

また、このボランティアは地域の方との交流がとても多く、活動日以外では実際に被災された方にバスガイドをお願いし、被災した地域を視察したり、岩手県立陸中海岸少年の家へ行き、館長さんから被災当時のお話も聞かせていただきました。たくさんのお話を聞いていく中で、「本当の意味での復興」ということを考えさせられたと同時に、自分の考えが浅はかだ、ということを感じさせられました。

このボランティアでは、被災地の方々を元気づけたり、復興の支援をすることが目的でしたが、逆に私が被災地の方から元気をいただいているようでした。私はこのボランティアをとおして多くの事を学び、多くのかけがえのない友人ができました。菜の花ボランティアでお世話になった方、両石の漁師さんの家族、岩手GINGA-NETの方々やボランティアに参加していた全国の学生との繋がりを大切にしていきたいと強く思いました。

最後に、このボランティアでは普通のボランティアでは得られない全国の幅広い繋がりと、被災後の岩手の現状を知ることができました。この全国の学生や岩手の現地の方々との繋がりを今後の活動に活かしていきたいと思います。また、この災害復興ボランティアは一度だけ参加して終わりでは意味がないと感じたので、今後も継続してこのボランティアはもちろん、他のボランティアに参加していきたいと思っておりますし、何回も参加して「変わっていくもの」と「変わらないもの」をしっかりと見て、被災地の復興の力になりたいと思いました。

2) 広島市における土砂災害ボランティア活動2014記録

○「広島市の土砂災害ボランティア」

総合政策学部 4年生 白川 由理

8月20日に発生した、広島県広島市で豪雨による土砂災害から約1ヶ月が経った9月17～19日の3日間、ボランティアに参加してきた。

広島に到着し、作業現場に向かう前、まずボランティアの統括を行うセンターに行った。そこにはボランティアにきた人々が列になり、広島、島根、山口、京都など県内外から駆けつけた団体のバスが多く集まっていた。全国の大勢が同じ想いで集まっていた。数年前、私は東日本大震災の災害ボランティアにも参加したのだが、今回の経験も合わせ、「困ったときはお互い様!」という人の助け合いの精神を実感し、感動した。

1日目、畑に溜まった土砂の運び出し。その日は私の参加したボランティア団体と山口からのボランティアの方々30～40人で作業をした。畑の土砂をひたすら掘り、袋に詰め、運ぶ。乾いた泥は固く、湿った泥は重く、1つの畑の作業をするだけで多くの人と時間がかかり、復興への道のりの長さや険しさを1日目にして痛感した。結局、朝から休憩挟み活動できる約5時間の中で完全に畑を綺麗にすることはできなかった。

2日目は、土納の運び出し、道の掃除。土砂の入った袋をトラックに積み込む作業であったが、私には重すぎて持ち上げられないこともあり、周囲に助けてもらうことが多く、力のない自分がとても悔しかった。そして、丁度この日、最後の行方不明者が発見された。

3日目は土砂被害がかなりひどかった山に近いお宅の駐車場の掃除。ブラシやスコップで泥を集め、水で流す。他の団体も加わりその日も30人程度で作業を行なった。最初は砂で駐車場の線が1本も見えない状況だったが、最後に黒いアスファルトと白線が綺麗に見えたときには、一人の小さな力が集まり大きな力になったことを実感し感動した。

ボランティアの参加者の多くが男性であり、力仕事が求められていると痛感。重い土砂を持ち上げることもできない自分に憤りを感じ、「私がここにいるに本当に意味があるのか」ということが最後まで頭から離れなかった。また、最終日、家が土砂でほとんど壊れてしまったお宅のおばあちゃんに「島根からきたんかね??大変だったね～」と声をかけていただいた。大変なのはおばあちゃん達のほうなのに、という想いが今でもなくなる。道行く人は「こんにちは」「お疲れ様」「ありがとう」という言葉をかけてくれる。たしかに暑い中での大変な作業だったけれど、その言葉一つで元気がでて嬉しくなるのを実感していた。しかしやはり、私たちが現地の人を励ますべきであろうに逆に励まされ、なんとも言えない気持ちになった。被害の大きさに対し、自分にできることは限られている。その中で、自分のできることを探し精一杯協力しようと決めた。

災害から1ヶ月が経ち、道路や線路などの復興が進むなか、機械の入らない側溝などの狭いところは未だ大量の土砂が流れ込み水の流れを遮り、水を濁している。人の手が必要とされている。この3日間で私のできたことは、ほんのわずかだったかもしれないが、被災したその日からずっと復興のために動いている人がいることを忘れず、一日も早く被災地の方が元の生活にもどれることを願いたい。

Ⅱ. 各キャンパスの活動

《浜田キャンパス》

平成26年度 公立大学法人島根県立大学
地域連携推進センター 浜田キャンパス運営会議 名簿

(任期:平成26.4.1～平成27.3.31)

職 名	氏 名	備 考
教授	林 秀司	・地域連携推進センター長
准教授	田中 恭子	・地域連携推進センター副センター長 ・事業推進検討会
准教授	金野 和弘	・委員(研究企画検討会、情報発信・公開講座検討会)
講師	西藤 真一	・委員(教育支援検討会、情報発信・公開講座検討会)
講師	豊田 知世	・委員(情報発信・公開講座検討会、教育支援検討会)
講師	マニング・クレイグ	・委員(事業推進検討会)
地域連携課 課長	草刈 健司	・委員
地域連携課 主任	河部 安男	
地域連携課 主任	槇野 康一	
域連携課 主事	竹口 雄一	
地域連携 コーディネーター	吉田 隆博	
嘱託員	竹根 美雪	
嘱託員	前原 直美	

浜田キャンパス：地域連携活動概要

地域連携推進センター副センター長 田中 恭子

平成25年度9月に文部科学省補助金事業「地(知)の拠点整備事業」の採択を受け、今年度終了時に本事業は2年半を経過することとなる。本年度は、島根県全域の自治体、企業、NPO等と協働する「縁結びプラットフォーム」において、地域課題を探り、それに対応できる実施計画を策定し、自治体等関係団体と教育、研究、社会貢献の各面で具体的に連携を実践していくことを目的として活動が行われた。

浜田キャンパスの取組としては、まず教育分野での3キャンパス必修科目である「しまね地域共生学入門」の新設準備が完了した。さらに「しまね地域マイスター」認定制度の検討を通じて、本学の人材育成で一つの特徴となっている「地域学習」の教育効果を、より段階的・体系的に制度化する基礎を構築できた。

研究においても、平成27年度「しまね地域共育・共創研究助成金」に向けた地域ニーズと大学シーズのマッチングを促進する場である「9月連携会議」を設置・開催したことで、自治体等関係団体のニーズ把握と、大学の研究活動(シーズ)の発信ができた。また地域ニーズを起点とした本格的なマッチングを実現するため、「大学シーズの見える化」の各種取組も行われ、地域ニーズと大学シーズのマッチングがさらに促進できたことが、平成26年度の研究活動における大きな成果であった。

社会貢献においても、引き続き地域連携推進センター全学運営活動事項である「3キャンパス合同学生ボランティア交流会」が本格的に活動開始され、各キャンパスでの専門分野を活かしたボランティアを企画し実践している。また浜田キャンパスでは、ボランティア依頼団体とボランティア参加希望者が意見交換できる場である「ボランティア・プラットフォーム」も開催され、参加学生のボランティア活動の促進と、依頼団体と参加学生の信頼関係の構築につながっている。生涯学習では、遠隔中継システムを活用し、各キャンパスで開催された公開講座、講演会等にて遠隔地放映が行われ、遠隔地受講の機会を拡大できたことも今年度の新たな成果となっている。

以上の教育・研究・社会貢献の各領域において、各キャンパスでの実績を基礎としながら、3キャンパスで連携し総合力を発揮すべく全学的な連携・協働を強化しつつある。

1) 学生の地域貢献活動

(1) 学生ボランティア活動(震災ボランティア以外)

浜田キャンパスでは、毎年多くの学生が地域から依頼のあったボランティア活動に参加している。以下今年度益田市匹見町で行われた学生ボランティア活動の様子の写真と参加者と参加学生の感想を紹介し、さらに今年度のボランティア活動の一覧を付す。

○匹見下ふるさと祭りのボランティア(平成26年11月16日開催)

【参加学生の感想】

- ・地元のみなさんと一緒に、ペール缶を使って作ったエコストーブで豚汁をつくり販売をさせて頂きました。地域の様子や文化について地元のみなさんやお客さんとの会話の中で学ぶこともできました。匹見と浜田はとても離れていますが、みなさんととても温かく県大生を受け入れて下さいます。また、コーディネーターの石橋さんもいらっしゃるの、楽しく安心してボランティア活動に取り組むことができます。匹見でのボランティア活動を引き続き行っていきたいと思います。(1年生・廣井修平)
- ・私は、野菜売り場のお手伝いをしました。スタッフの方々やお客さんとの会話が楽しかったです。匹見町の方々は、老若男女皆元気でこちらでも元気をもらう事が出来ました。温泉にも入らせて頂きました。とても気持ち良かったです。匹見町は自然豊かで川のせせらぎと森のざわめきが疲れを癒してくれます。ボランティアとしても観光としてもぜひ訪れてほしいです。匹見町の皆さん、ありがとうございました。(3年生・篠崎美樹)



【依頼者の感想】

- ・今回は2回目のボランティア参加だが、匹見峡春祭りでの経験や日頃の活動実績により、状況判断がき能動的に対応していただき、事務局としても助かった。(廣井修平さんへの感想より抜粋)
- ・当日は、農産物販売のフォローや経理担当を任された。地元住民の行き届かない点にも心を配り、丁寧かつ適切な処理をされ、地元から感謝されている姿が印象的だった。最後まで責任を持って作業にあたっていた。(篠崎さんへの感想より抜粋)
- ・廣井君、篠崎さんいずれも地元から大変感謝され、喜ばれていた。事務局も地域から喜ばれ、嬉しい思いだった。今後も機会があればボランティアに参加してほしい。(ひきみ田舎体験推進協議会)

ボランティア活動の一覧

依頼団体	活動場所	活動期間	内 容	人数
黒沢公民館	浜田市三隅町	H26.4.5-6	大平桜まつり	25名(2日間)
ひきみ田舎体験推進協議会	益田市匹見町	H26.4.13	稲の粃まき作業	6名
ナマケモノ珈琲	広島市	H26.4.20	アースデーひろしま2014	1名
島根県赤十字血液センター	学内	H26.4.23	献血呼び込み	6名
長沢一町内自治協議会	浜市長沢町	H26.4.27	神輿担ぎ	10名
浜田商工会議所	浜田市内	H26.4.29	大名行列	6名
ひきみ田舎体験推進協議会	益田市匹見町	H26.5.3-4	匹見峡春祭り	3名
島根県立少年自然の家	少年自然の家	H26.5.3-5	キャンプ	3名
JICA 中国	学内	H26.5.7	JICA 説明会	2名
国府公民館	浜田市内	H26.5.10	浜ろう交流フェスティバル	2名
三隅小児童クラブ	浜田市三隅町	H26.5.31	児童クラブ祭り	1名
浜田市社会福祉協議会	浜田医療センター	H26.6.8	託児	1名
日本二分脊椎症協会 島根支部	いわみーる	H26.6.14	託児	1名
浜田地区実行委員会		H26.6.22	託児(島根県母親大会)	2名
島根県赤十字血液センター	学内	H26.6.25	献血呼び込み	3名
子育て支援センター	子育て支援センター	H26.6.28	すくすく♡子どもまつり	2名
益田市野球連盟	益田市民球場	H26.6.28-29	野球大会放送係	6名
ひきみ田舎体験推進協議会	益田市匹見町	H26.7.6	萩原集落(匹見町)草刈り	4名
浜田市社会福祉協議会	いわみーる	H26.7.13	託児	3名
いわみ福祉会	浜田市金城町	H26.7.20	神楽大会スタッフ	4名
大田市教育委員会	大田市三瓶町	H26.7.25-8.6	山村留学リーダー	3名
浜田市社会福祉協議会	学内	H26.7.26	幸福なまちづくり考 in 浜田	1名
国府公民館	三瓶自然館 サヒメル	H26.7.26	ろう学校文化交流フェスティバル	2名

依頼団体	活動場所	活動期間	内 容	人数
浜田公民館	石見海浜公園	H26.7.29-30	浜っ子★キャンプ 2014	2名
浜っ子夏まつり実行 委員会事務局	浜田漁港	H26.8.2	2014 石州浜っ子夏祭り	1名
温泉津温泉夏祭り 実行委員会	大田市温泉津町	H26.8.3	温泉津温泉祭り	5名
浜田地区広域行政組合	浜田市・江津市	H26.8.6-8	広域圏 子ども交流事業	8名
今宮神社	浜田市内	H26.10.5	今宮神社御神輿	3名
浜田市立美川幼稚園	美川幼稚園	H26.10.5	幼稚園バザー	4名
浜田市社会福祉協議会	いわみーる	H26.10.18	託児	2名
浜田医療センター	浜田医療 センター	H26.10.19	浜田駅北医療フェスタ	3名
ひきみ田舎体験 推進協議会	益田市立匹見 中学校	H26.10.25-26	野球練習と学習支援	4名
浜田市立原井幼稚園	原井幼稚園	H26.10.26	幼稚園 PTA 研修会時の託児	1名
特別養護老人ホーム たんぼぼの里	たんぼぼの里	H26.11.8	特別養護老人ホーム ひだまり祭り	1名
浜田市三隅支所	浜田市三隅町	H26.11.7-9	みすみフェスティバル	5名
美川山里を活かす会	浜田市鍋石町	H26.11.16	芋煮会	3名
ひきみ田舎体験推進協議会	益田市匹見町	H26.11.16	匹見下ふるさと祭り	2名
島根県赤十字血液 センター	学内	H26.12.10	献血呼び込み	1名
益田市美都総合支所	益田市美都町	H26.12.8	田舎体験宿「民泊」の 広報パンフレット作成	4名
大田市教育委員会	大田市三瓶町	H26.12.26-30	山村留学リーダー	1名
浜田市教育委員会	石央文化ホール	H27.1.11	成人式	2名
浜田市社会福祉 協議会	いわみーる	H27.2.26	託児	3名
山陰万葉を歩く会	地場産業センター	H27.3.1	万葉まつり	2名
ボーイスカウト 石見地区協議会	浜田勤労 青少年ホーム	H27.3.1	ボーイスカウト	1名
社会福祉法人 水澄み会	浜田市長沢町	H27.3.15	ホーム見学会	2名

(2) ボランティア・ポイント抽選会 (平成27年 1月28日開催)

島根県立大学浜田キャンパスでは、平成22年度からキャンパス・マイレージ事業に取り組んでいます。この事業は、学生のボランティア活動を奨励するとともに、学生による地域交流や地域貢献活動を促進させることを目的として、ボランティア活動の参加者にボランティア・ポイントを付与するものです。

今年度は、年明けの1月28日(水)15:00～16:30に、学生会館食堂(カフェテリア)2階にてボランティア・ポイント抽選会を開催しました。

今年度の抽選会も例年と同様、ボランティア活動に参加してボランティア・ポイントを獲得した学生ばかりでなく、未だボランティア活動に参加したことがない学生の参加もあり、参加者が50名ほどの賑やかな抽選会となりました。

今年度は、地連カフェも同時開催しました。抽選会の前に開催された地連カフェでは、3組の学生団体の活動紹介がされました。

続く抽選会では、抽選に先立って今年度のボランティア・ポイントの獲得上位者が発表され、表彰されました。

抽選会では、遠方への学外活動に役立つ「旅行券」、浜田市内各所で利用できる「浜田市共通商品券」、石見の美味しいものをいただける「石見の選べるうまいもんセット」、浜田市での活動範囲を広げてくれる「石見交通バスカード」、本好きにはうれしい「図書カード」、さまざまな浜田の魅力を体験できる「風の国和紙ランプシェード体験コース」「かなぎウエスタンライディングパーク乗馬体験」「石州和紙会館紙すき体験コース」「弥栄ふるさと体験村体験コース」などの商品が、当選した学生に授与されました。

(文責:金野和弘)



(3) 地連café OPEN!

○第9回 地連café OPEN! (平成26年4月25日開催)

浜田キャンパスカフェテリア2階にて、第9回目の地連カフェが開催されました。今回は、今年度初めて開催される地連カフェだったため、ボランティア・プラットフォームとして主に1年生を対象に実施されました。学生がこれまでやってきたボランティア活動体験談についての報告会、地域連携推進センターでのボランティア活動紹介PVの放映、国立三瓶青少年交流の家での学生のボランティア活動についての紹介の後、最後にフリータイムの時間が設けられ、積極的な意見交換が行われました。参加人数は約40名程度で、企画側・参加者ともに充実した時間を共有できました。

【学生によるボランティア活動の紹介】

まず、1年生の廣井修平さんから、大学に入るまでに経験してきたボランティア活動について紹介がありました。これまでNPOやNGO活動をはじめ、積極的にボランティア活動に参加してきたようです。次に、4年生の十川ちひろさんが、地連紹介PVの放送とあわせて地連とボランティアマイレージの説明を行いました。最後に、3年生の森山大地さんが参加した、三瓶青少年交流の家でのボランティア活動について紹介しました。具体的なボランティア活動の体験談を聞くことで、ボランティアの経験が少ない1年生にも具体的なイメージが伝わったようでした。



【三瓶青少年交流の家でのボランティア紹介】

三瓶青少年交流の家で行われた1年間のボランティア活動について、映像と音楽を交えて紹介いただきました。学生ボランティア企画など、学生がゼロから立ち上げたボランティア活動もあり、みんな関心深く耳を傾けていました。

【意見交換会】

最後は意見交換を目的としたフリートークが行われました。先輩の服には、自分の話せるテーマ(「福祉」、「子供」、「外国」、「地域」、「被災地」、「三瓶」)が書かれたシールが貼られており、1年生は興味のある先輩のテーブルに移動しながら、質問や意見交換をしていました。テーブルにはサンドイッチなどの軽食やドリンクが用意され、和やかな雰囲気で行われました。各テーブルではボランティア活動についての経験談や活動のお誘い、活動のきっかけ、動機などが語られました。

(文責: 豊田知世)



○第10回 地連café (ワールド地連café) OPEN! (平成26年5月23日開催)

浜田キャンパスカフェテリア2階にて、第1回ワールド地連カフェが開催されました。地域でできる国際関係のボランティアの情報交換や、これまで留学生が地域で実施してきたボランティア事例の紹介が行われました。また後半は、フリートークの時間が取られ、自己紹介や活発な意見交換が行われていました。

まず、県大地域連携課より、過去に留学生が参加したボランティアの紹介がありました。次に、しまね国際センターから、地域で出来る国際関係のボランティアについての紹介がありました。この中で、中山智絵さん(4年生)他留学生は、実際に体験したボランティアについて紹介してくれました。ボランティア企画から参加した留学生のみなさんは、当時の様子を振り返り、大変だったことや工夫したこと、ボランティアを通じて学んだことなどを話してくれました。また、ボランティアで実施した「ジェンズ」という中国の遊びの実演をしてくれたりしました。



続いて、県大国際交流課より、学生が参加可能な国際関係プログラムの紹介や、大学で実施される国際交流イベントについての紹介がありました。その後、国際協力機構(JICA)しまねデスク伊藤さんより、青年海外協力隊についての紹介がありました。



最後はフリートークの時間が取られ、各テーブルで自己紹介や自身が経験してきたボランティアの経験談や、自分たちが関心のある国際関係のボランティアについて、積極的に意見交換が行われていました。



地連カフェのワールド版は初めてでしたが、参加者50名(日本人学生31名、留学生19名)と、多くの方に参加いただきました。また、終了予定時間を1時間以上過ぎても、熱心な議論が続けられていました。今後もこのような機会を増やしていければと思います。報告者のみなさま、参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

(文責 豊田知世)

○第11回 地連café OPEN！（平成26年10月22日開催）

浜田キャンパスカフェテリア2階にて、第11回目の地連カフェが開催されました。今回は、学生ボランティアの依頼者となる地域の方と、ボランティアに参加したい・興味がある学生との話し合いの場、ボランティア・プラットフォームとして実施されました。4年生の嘉手苺美春さんの司会のもと、まずは地域の方からの活動紹介と学生へのニーズについての発表があり、続いてボランティア活動を行っている学生から活動内容について報告がありました。参加人数は約50名程度で、発表後のフリータイムでは、地域の方、ボランティアの先輩学生、ボランティアに興味のある学生が入り混じり、盛会でした。

【地域の方の活動内容と大学生への期待】

地域の方からは3団体が参加されました。

- ・浜田公民館の大地本さんは、地元の人だと気づきにくい自分の地域の魅力について、地域以外の方が地域の人と一緒に町を歩きながら、地域ならではの良さを探して写真をとったり、図にまとめたりする地域学について紹介し、学生の方に手伝ってもらいたいと希望を話されました。
- ・やさか里山めぐりん小坂部会の久谷さんは、^{いもり}稲守米などの取組みについて紹介されたのち、東京のTVが企画したH27秋に弥栄で開催のオーケストラコンサートの運営スタッフに、企画段階から、大学生に関わってもらいたいとのことでした。
- ・国分公民館の村武まゆみさんは、これまで大学生が関わってきた活動について紹介された後、今後も大学生のフレッシュな考えを期待していると話されました。

【学生によるボランティア活動の紹介】

大学生からは、以下の3名がこれまでの活動について報告がありました。

- ・森山大地さん（3年生）
弥栄の小熊集落で活動について
- ・黒木大輔さん（3年生）
ボランティア活動を通じて得られたこと
- ・青岸万友さん（2年生）
イエローカイトという合唱サークルでの活動について
（文責：豊田知世）



○第12回 地連café OPEN！(平成27年1月28日開催)

浜田キャンパスカフェテリア2階にて、第12回目の地連カフェが開催されました。今回は、年に1回開催されるボランティア抽選会と同時開催となっていることから、通常より少し短い時間での開催となりました。

司会は4年生の嘉手苺美春さんで、自身のボランティア経験を明るく楽しい口調で交えながらの進行でした。地連カフェのあとに、ボランティア抽選会が行われることからか、参加した約50名で埋まった会場は、終始和やかな中にも、緊張した空気に包まれていました。今回は3名の学生から、ボランティア活動の発表がありました。今年度最後の地連カフェということもあり、今年度のそれぞれの活動を振り返ると同時に、来年度に向けてさらなる飛躍を期す発表内容ともなりました。

【学生によるボランティア活動の紹介】

大学生からは、以下の3名がこれまでの活動について報告がありました。

- ・BBSサークル 岡崎梨乃さん(2年生)
- ・ゆるりの会 中山智絵さん(4年生)
大西寿弥さん(1年生)
- ・学生企画ネットワーク
飯尾和記さん(2年生)

※学生企画ネットワークは、大学生が中心となって様々な社会問題に取り組む学外組織。



2) 地域に関する教育・研究活動

(1) 地域振興に関する提言を含む優秀卒業研究・論文の発表会（平成27年2月19日開催）

島根県立大学浜田キャンパスにおいて、「第12回 地域振興に関する提言を含む優秀卒業研究・論文の発表会」が開催されました。今年度は14名の学生が奨励賞を受賞し、学長から表彰されました。このうち、戸川翔太さんの『国内市場縮小に直面する中小規模清酒製造企業の市場戦略と地域活性化への貢献－広島県東広島市の西条酒を事例に－』が最優秀賞に選ばれました。奨励賞を受賞した中から、以下5名の学生から研究内容について報告されました。

- ・佐藤優衣『神門通り地域の「自ら動く」まちづくり－商店街と住民の取り組みに注目して－』
- ・曾田光亮『島根県の人口の現状とその対策』
- ・戸川翔太『国内市場縮小に直面する中・小規模清酒製造企業の市場戦略と地域活性化への貢献－広島県東広島市の西条酒を事例に－』
- ・中田貫太さん『環日本海経済圏構想の今日的意義と課題－シベリアランドブリッジ構想と日本の港湾政策に着目して－』
- ・三村佳穂さん『イタリアの小さなまちを支える地域の底力－アグリツーリズムによる魅力の世界発信に注目して－』

このうち、中田貫太さんの『環日本海経済圏構想の今日的意義と課題－シベリアランドブリッジ構想と日本の港湾政策に着目して－』が浜田市長賞に選ばれ、久保田章市市長から表彰されました。

奨励賞受賞者の研究内容は、ポスターにまとめられ、廊下に貼りだされていました。

学生、教職員を含めた大学関係者、市民の方々合わせて約60名の参加があり、地域の方々や市長など参加者から多くの活発な質疑が行われました。

（文責：豊田知世）



(2) 山陰地域フィールド体験学習——里山と食の繋がり

2014年9月11日～14日、浜田市弥栄町にて、「山陰地域フィールド体験学習——里山と食の繋がり」を実施した。受講生は、島根県立大学浜田キャンパスより12名、同出雲キャンパスより1名、同松江キャンパスより2名、島根大学より3名であった。

初日は、13時45分頃に現地に到着した後、さっそく、石中央森林組合と浜田市の林業担当のみなさんのご協力のもと、笠松市民の森で、間伐体験と夕食時に行う「ミニキャンプファイア」用の薪の玉伐りなどをさせていただいた。

2日目からは、受講生は2チームに分かれての活動となる。ひとつのチームは、小坂農業生産組合に受け入れていただき、午前中に「焼き米」づくり、午後にはコンバインに乗せていただいたりして、米の収穫・乾燥・調整作業を体験した。もうひとつのチームは、有機野菜の生産者や農事組合法人西の郷などを訪問させていただいた。昼食には、2チームとも、「陽気な狩人」にお世話になった。また、イノシシの解体作業の見学と体験もさせていただいた。

3日めは、ひとつのチームは、栃木自治会を訪ね、地元のみなさんが地域資源のひとつとして活用しようとしている「立岩」「夫婦岩」まで、遊歩道を整備しつつ登った。もうひとつのチームは、小熊集落を訪ね、手刈りでの稲刈りをさせていただいた。午後は、2チームが合流し、それまでに訪問させていただいた地域のみなさんらから食材を提供いただき、浜田市食生活改善推進協議会弥栄支部やその他のみなさんにご指導いただきながら、角寿司や猪汁などの郷土料理をつくり、これまでお世話になった地元のみなさんも招いての会食を行った。

最終日は、学習成果の発表会を開催した。それまで毎晩、宿泊場所であり、発表会の会場でもある「ふるさと体験村」で、2つのチームをさらに2つの班に分けた4つの班ごとに、学習のふり返りと発表の準備をしてきた。発表会には、浜田市弥栄支所産業課などの地元のみなさんにもご来場いただいた。発表では、実効性はさておき、学生らしい提案もなされ、来場者からはおおむね好意的なコメントをちょうだいした。11時30分頃終了となった。



(文責:林 秀司)

(3) フレッシュマン・フィールド・セミナー

フレッシュマン・フィールド・セミナーは、社会のさまざまな現場(フィールド)に出かけ、そこでフィールドにおられる人々への調査を通じて課題を発見し、課題の解決策を提案するセミナーである。入学初年次から地域のさまざまな人と接し、自らの学修目的を明確化することで、自らが望んだ職業に就く能力を学生に身につけさせることを目的としている。

このセミナーは、1)事前学習、2)フィールド調査、3)調査結果分析、4)課題解決策の提案、5)成果発表、の5つのプロセスで構成されている。各セミナーの実施回数にもよるが、概ね10～13回を教室で行い、島根県内・浜田市・近隣地域に出向いてのフィールド調査を2～5回ほど実施する。春学期に実施されるフレッシュマン・スキル・セミナーで学んだアカデミック・スキルを活用しながら、課題発見と課題解決能力を身につけ、2年次から始まる専門教育への橋渡しをするセミナーでもある。また、グループ学習を実施するセミナーの場合、受講生は少人数のグループを組み、協同作業による自発的で能動的な学びを実践する。

平成27年1月22日(木)には、このセミナーの最終プロセスである「フレッシュマン・フィールド・セミナー合同成果発表会」が、浜田キャンパス講堂において開催された。はじめにステージ上で、ゼミ単位で順番に1分間ずつの概要説明をおこなったのち、全17ゼミが各ブースに分かれて成果をポスターセッション形式で報告した。

来場者には「いいね！」シールを配付し、各ゼミのポスター等の掲出物、プレゼンテーション、研究の内容等に対して、「いいね！」と感じたゼミを3つ選び、投票ボードに「いいね！」シールを貼っていただき、同時に3つのゼミに対するコメントも用紙に記入していただいた。その結果、獲得票数上位3ゼミを「いいね！大賞」として表彰もした。

この発表会には学生・教職員はもとより、取材・調査先関係、一般市民、報道関係の皆さんなどの来場もあった。



フィールドワークの様子



合同成果発表会の様子

平成26年度「フレッシュマン・フィールド・セミナー」一覧

(※五十音順)

ゼミ名	概 要	フィールド
赤坂ゼミ	「馬との触れ合い—そこから見えてくるものは…」 いわみ福祉会が経営する、かなぎウエスタンライディングパークをフィールドに、馬との触れ合いを通じて、そこから何が見えてくるのか、ゼミ生のみなさんとともに考えていきたい。本施設をさまざまな角度(例えば、障がい者の就労支援、動物とのふれあい、動物愛護の啓蒙、乗馬セラピー、地域社会への様々な波及効果等)から取り上げることが可能だと思いますが、まずは、10月初旬に同パークで開催される第22回全国障がい者馬術大会を見学させていただき、その後、施設見学を通じて、厩舎の掃除や馬のお世話、馬引きなどを体験させていただいたり、インストラクターの寺本六花さんのお話をお伺いすることで、そこから得られたインスピレーションを具体的な形にしていきたい。	・かなぎウエスタンライディングパーク
瓜生ゼミ	シリーズ「浜田の元気印を探せ！」 「お茶栽培で元気!—浜田市田橋町扇原茶園さんを訪ねて—」 浜田市田橋町にある(株)扇原茶園を取材対象とし、この地域の農業に関する現況を撮影取材する。長年、お茶の栽培をされている同社は「(株)伊藤園」に生産した茶葉を納品することで、安定した経営であるが、なぜ、この地で茶葉栽培を始めたのか?今後の展開をどう考えているかなど、この地域の農業政策を考える上で示唆に富む内容が期待できよう。	・株式会社扇原茶園 ・浜田市農林振興課
大橋ゼミ	グラントワ・石見神楽から石見の文化を考える グラントワ(島根県芸術文化センター)及び石見神楽の現状を調査し、現在いろいろととられている施策を考え、課題を発見し、さらに出来ればこれらにより活性化させるための策を提案する。	・グラントワ (島根県芸術文化センター) ・浜田商工会議所 ・石見神楽産業化モデル事業 実行委員会 ・周布小学校
大前ゼミ	日本でも有数の水産都市である浜田市の現状と課題を探る。	・浜田市水産振興課 ・漁業協同組合 J F しまね 浜田支所 ・株式会社シーライフ ・道の駅ゆうひパーク浜田
川中ゼミ	島根県立少年自然の家での体験活動をとおして、より良い社会教育について検討することを目的とする。ゼミでの活動体験のプログラムは、少年自然の家の職員の指導の下で、受講生が立案をする。そのプログラムに沿って活動体験を行う。さらに、そこの学びを活かして、職場研修プログラムを作成する。	・島根県立少年自然の家
久保田ゼミ	「地域小売業の事業展開」 島根県を代表する地域小売業1社をケーススタディの題材として取り上げ、同社の取組みを調査することを通じて、地域企業を調査するうえでの手法を学ぶとともに、地域企業の抱える課題やその解決策、地域企業の事業展開の取組みについて学ぶ。	・株式会社キヌヤ (本社、中吉田店、プリル店)
西藤ゼミ	「広島空港と石見空港の現状と利用の拡大に向けて」 わが国の空港の多くにおいては、旅客数が今後減少する見込みである。この現実に対して、地方空港、そしてそれらを維持管理する国や自治体はどのように立ち向かうとしているのか把握する。さしあたり、後背地の特徴で大きく異なる石見空港と広島空港を対象に調べる。	・石見空港 ・広島空港
田中ゼミ	「島根県の地産地消と島根型6次産業ステップアップモデル事業(しまろく事業)」 地産地消を進めるにあたり、地元の製造・加工・販売を通じた6次産業化、農商工連携等の取組が必須であるため、島根県(ブランド推進課)では「島根型6次産業ステップアップモデル事業(しまろく事業)」を開始した。本演習では、しまろく事業者11事業者へのアンケート調査を実施し、島根型6次産業化事業に取り組む事業者の現状と課題について考察を行うことを目的とする。	・島根県しまねブランド推進課 ・江津市 ・ドクターリセラ株式会社 ・いずも八山椒有限会社 ・企業組合出西寮 ・浅利観光株式会社
豊田ゼミ	このゼミでは、人口減少の要因を学んだうえで、人口維持に向けたUターンへの取り組み事例について調べます。島根県のUターンの最前線の取り組みや、Uターン者へのインタビューのほか、空き家の活用事例や地方の魅力を発見するために必要な視点について考察することを目的としています。島根県で起こっている出来事は、将来日本の各地で起こることが予測されるため、島根県を事例に、地方に人を集める取り組みについて学んでいきましょう。	・公益財団法人 ふるさと島根定住財団 ・ガリレオスコープ株式会社 ・浜田土建株式会社 ・島根県産業振興課 ・浜田市政策企画課 ・結まーるプラス

ゼミ名	概 要	フィールド
中川ゼミ	福祉現場における高齢者とのコミュニケーションに関する調査・分析を通して、高齢者の方とのより良いコミュニケーションのあり方について明らかにすることを旨とする。特定の高齢者福祉施設に赴き、高齢者の方と、スタッフ・学生との間のコミュニケーション(特に会話)についてビデオ撮影取材を行い、得られたデータについて、「会話分析」というアプローチから分析する。	・島根県内の特別養護老人ホーム
八田ゼミ	テーマ:「はんだ牛蒡 ^{ごぼう} 」を知っていますか? ー石見の「風土」と「情熱」が育む特産品の魅力ー 江津市桜江町では、町内を流れる江の川水系に育まれた土地柄を活かし、古くからゴボウの生産が盛んでした。今、「おいしさ」とともに「食の安全性」や生産現場の環境に対する関心が高まる時代の中で、この地において、熱い思いで生産されたゴボウが注目されています。このゼミでは、地元で自然栽培農業に取り組み、全国的な人気ブランド「はんだ牛蒡」を生産している「有限会社はんだ」と、流通・販売の現場である江津市後地町の「ドライブステーション舞乃市」を訪ね、関係者の方々の「思い」や取り組みの現状等について学びます。伝統を引き継ぎつつ新しい時代の流れの中で輝きを増している、地域の個性を活かした特産品の魅力について理解を深めていきましょう。	・有限会社はんだ ・ドライブステーション舞乃市
林秀司ゼミ	島根県の人口減少と密接にかかわる雇用の問題にアプローチすることを試みる。とくに石見地方をとり上げ、企業の人材確保の状況や従業員の働き方などについて調べる。また、大学生はどのような働き方をしたいと思っているのか、アンケート調査を行う。	・A L S O K あさひ播磨株式会社 ・石見食品株式会社 ・株式会社オープンハート ・株式会社ケイ・エフ・ジー ・島根あさひ社会復帰促進センター／S S J株式会社 ・シマネ益田電子株式会社 ・大和ラヂエーター工業株式会社 ・株式会社デルタ・シー・アンド・エス ・社会福祉法人梅寿会
林田ゼミ	「お酒について知ろう!」 お酒には税金が課せられています。しかしお酒の種類によって税金が違います。どうして違うのでしょうか。この授業では酒税について勉強し、地域の酒蔵を訪問してヒアリングします	・広島国税局 ・島根県産業技術センター浜田技術センター ・日本海酒造株式会社
藤原ゼミ	「ダイヤモンドによるコミュニティビジネスー学生による美郷町産品リストづくりは貢献出来るか-」	・美郷町産業振興課 ・合同会社ダイヤモンド ・美郷町商工会
別枝ゼミ	「いわみ福祉会」を解剖する 1973年に発足し、翌年知的障害者更生施設「桑の木園」を開園した「いわみ福祉会」は、今日障害者施設3、同事業所5、中規模老人施設5、小規模老人施設21、その他小・中規模複合施設多数からなる一大組織に成長した。また、知的障害者を雇用するレストランも複数経営している。今年度のFFSではこのいわみ福祉会の全容に迫ることを目的とする。	・社会福祉法人いわみ福祉会(桑の木園、トルティーノ、桑の実工房、波佐神楽工房、神楽ショップ、こくぶ学園、森のレストラン、かなぎウエスタンライディングパーク)
光延ゼミ	「島根県民の生活情報に関する学生調査ー松江市、浜田市住民のケーススタディー」 島根県のような県域が細長く、しかも人口が70万人を下回って、さらに遡滅している自治体では、県都(松江)からの距離によって放送や新聞メディアから受ける情報にも較差が生じている可能性がある。都市部ならまだしも、農村部の自治体では、人口分布が拡散しているため、場所によってはメディアの情報が遅れたり、そもそも届きにくかったりすることも想定される。そこで、このクラスでは、「人々はどのようなメディアを通じて生活情報を得ているのか」、この点を、住民への意識調査やメディアの情報発信状況(放送や新聞メディアと住民との関係)などから説明することを試みる。	・島根県市町村課 ・松江市内(調査) ・出雲市内(調査) ・浜田市内(調査)
渡部ゼミ	津和野町の歴史的文化的文化財を活用した観光業の現状を調査し、課題を発見し、町の観光業を活性化するための振興策を提案する。	・津和野町

3) 地域から／地域への応援・情報発信

(1) 公開講座

島根県立大学では、地域に開かれた大学として地域の方々の知的好奇心に応えるため、毎年度公開講座を開催している。

表:平成26年度公開講座 受験者数一覧

No	テーマ カテゴリ	講師	所属	講座名	開催日	受講者数	平均 受講者数
1	石見に生きる～石見の元気が活す	林 千夏	グラントワ弦楽合奏団元代表・アンサンブルFlauceチェロ担当	チェロは紡ぐ～地域と文化のハーモニー～	5月17日	44	282
2		石橋 留美子	益田市匹見町まちづくりコーディネーター	匹見の魅力をおそそけ	7月2日	23	
3		白川 和子	協同組合グループ石見ブランド事務局長	石見のモノづくり・ヒトづくり	7月9日	35	
4		花田 香	NPO法人浜田おやこ劇場理事長	おとなと子どものよりよいパートナーシップが生まれるもの	11月26日	10	
5		木暮 貴之	匹見ワサビ生産グループ実業	匹見わさび！地域ブランド復活を目指して！	12月10日	29	
6	地域からの国際協力～島根から世界へ、そしてグローバルへ！	中村 純二	島根県立津和野高等学校 魅力化コーディネーター	マダガスカルから石見へ～教育の最前線から最先端へ～	6月18日	27	267
7		生越 大地	わなな農園	農をとおして	6月25日	34	
8		豊田 武雄	NPO法人アンダンテ21 理事長	経済成長思考について考えてみよう	7月16日	19	
9	世界を旅する	ドナルド・マルヤマ	浜田市国際交流員	アメリカを旅する	6月25日	31	213
10		タチアナ・クラヴィーナ	島根県国際交流員	ロシアを旅する	7月16日	15	
11		王 恒	浜田市国際交流員	中国を旅する	7月23日	15	
12		金 恩志	浜田市国際交流員	韓国を旅する	7月30日	24	
13	学校へ行こう	福原 裕二	浜田キャンパス	「たけしま (銀鯉島) に暮らした日本人たち	5月7日	23	245
14		松田 善臣	浜田キャンパス	知って考えよう！ 浜田市の公共交通	5月14日	51	
15		西藤 真一	浜田キャンパス	知ればナットク！浜田市の鉄道史		51	
16		村井 洋	浜田キャンパス	美を紡ぐ心・育む心：『いき』の構造』を読む	5月21日	23	
17		江口 真理子	浜田キャンパス	異文化間ビデオ会議の教育的効果	5月28日	21	
18		八田 典子	浜田キャンパス	「景観の大切さ」について考えてみよう	6月4日	17	
19		瓜生 忠久	浜田キャンパス	最近のテレビ・ドラマ制作の傾向～「あまちゃん (13NHK)」「半沢直樹 (13TBS)」とその後～	6月11日	21	
20		ケイン・エレナ・アン	浜田キャンパス	シャーロック・ホームズを英語で読みましょう	7月23日	21	
21		久保田 典男	浜田キャンパス	中小企業の経営診断～フレッシュマン・フィールド・セミナーの取組から～	10月8日	19	
22		シローコフ・ワジム	浜田キャンパス	日本とロシアにおけるハンセン病意識の比較	11月19日	11	
23	村井 洋	浜田キャンパス	海の心の歩み：シュミット『陸と海と』を中心に	12月3日	12		

受講者数 計576名 (1講座あたり25名)

平成26年度は23回の講座が開講され、延べ576名の参加者を得た。前年の参加者は25回、488人だったため、講座数が減少したにも関わらず、参加者が増加している。もっとも出席者が多かった講座は、同日開催した松田善臣准教授「知って考えよう！浜田市の公共交通」、西藤真一講師「知ればナットク！浜田市の鉄道歴史」で、それぞれ40名、39名の参加が得られた。次いで、林千夏氏(グラントワ弦楽合奏団元代表)による「チェロは紡ぐ～地域と文化のハーモニー～」であり、参加者は35名だった。

平成26年度では、学生によるゼミ研究報告を市民向けに公開する学生研究発表会を2回行った。春学期に林裕明ゼミと川中淳子ゼミが、秋学期に林裕明ゼミと豊田知世ゼミが報告した。

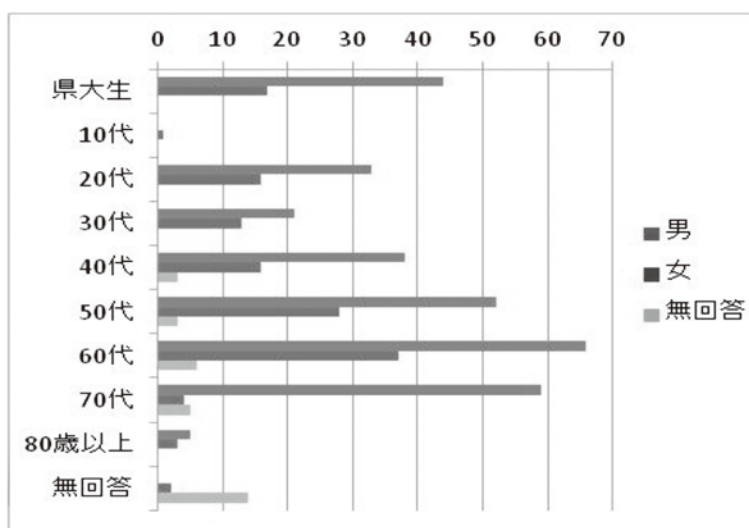
受講者には、できる限りアンケートに回答していただくことにしている。その結果について、以下で簡単にまとめる。

表：アンケートに回答した段階での参加回数

1回目	197名
2回目	70名
3回目	32名
4回目	21名
5回以上	63名
不明	103名
合計	486名

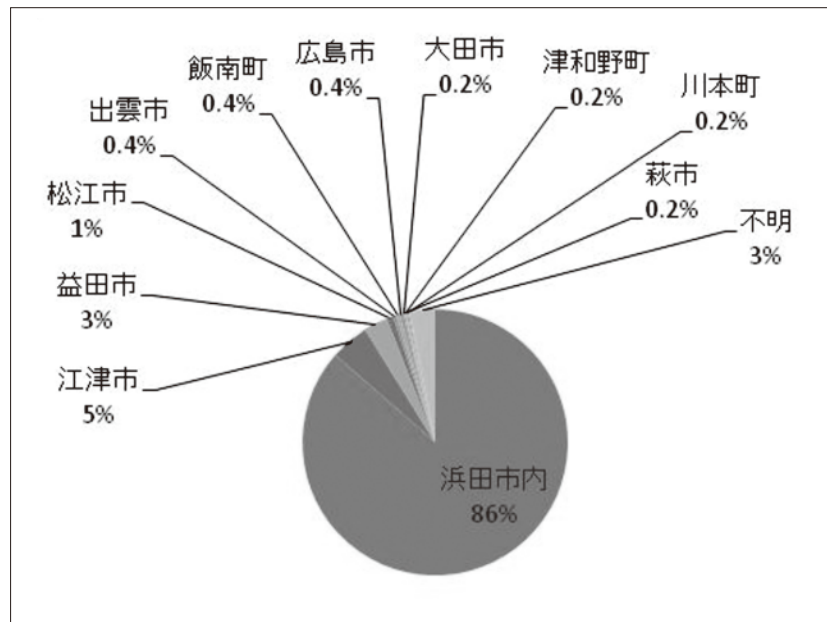
公開講座のリピーター獲得は重要である。この点について、上の表で示される参加者数を確認すると、複数回参加している受講者も比較的多い。

図：回答者の年齢と性別(単位：人)



回答者(出席者)の年齢層は比較的高齢の男性に偏っている。受講者の掘り起しが必要である。

図:回答者の居住地(N=486)



回答者(受講者)のほとんどは浜田市内に在住する方々である。昨年度よりも江津市や益田市など、隣接する市の在住者の参加者が増えたが、それでも8割以上が浜田市の在住者である事から、市内からの参加者を探る必要がある。

表:公開講座会員登録の有無

有	219 名
無	217 名
不明	50 名

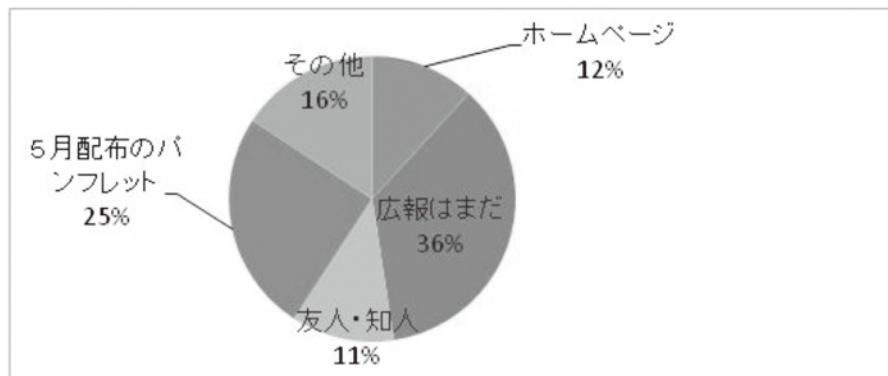
昨年度までのキャンパス・サポーターの制度は廃止され、今年度から公開講座会員制度が設置された。キャンパス・サポーターの登録人数は16人だったが、公開講座会員は136人になった。公開講座参加者の内、公開講座会員は38%である。

表:公開講座に出席する理由

① 知識を深めたいから	274 名
② このテーマについて勉強をしているから	52 名
③ 知識を獲得し、仕事や地域活動に活かしたい	89 名
④ 生涯学習として関心があったから	102 名
⑤ 講師(またはゼミ活動)に関心があったから	103 名
⑥ 大学主催の行事だから	29 名
⑦ 交友関係を広げたいから	5 名
⑧ 公開講座に出席することが楽しいから	47 名
⑨ その他	28 名

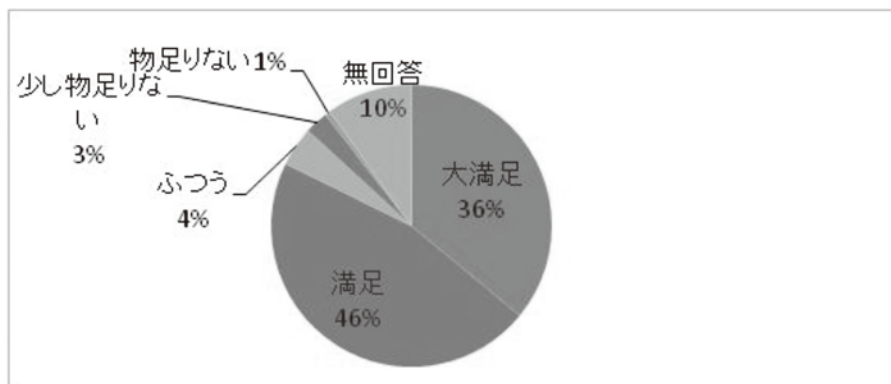
公開講座への参加理由は、「知識として深めたいから」という項目が最も高く、続いて「講師(ゼミ活動)に関心があったから」、という項目が続く。昨年度と比べると、「講師(ゼミ活動)に関心があったから」、「このテーマについて勉強をしているから」、そして「知識を獲得し、仕事や地域活動に生かしたい」という理由による参加者が増加している。受講生の関心の強いテーマで、勉強したことを仕事や地域活動に生かしたいと考える意欲ある受講生が増加しているようである。

図：公開講座を知った経緯 (N=458)



公開講座を知った経緯は、「まだ広報」と回答するひとが36%に上り、ホームページなど電子媒体を通じて情報を得る人は少ない(12%)。これは受講者が比較的高齢者に偏っていることも一つの要因であると考えられる。

図：公開講座の満足度 (N=486)



公開講座に出席する人の満足度は、「満足」「大満足」と答えた人が82%にのぼった。おおむね、公開講座の内容は市民に好評を得たと判断できる。

(2) 特別公開講座(平成26年11月16日開催)

島根県立大学浜田キャンパスにおいて、東京農業大学名誉教授である小泉武夫氏を招いて、平成26年度島根県立大学浜田キャンパス特別公開講座『発酵食品 魔法の力』が開催されました。市民の方々の関心が高い分野で、かつ地域活性化への貢献が見込まれる内容の講演をしていただける先生をお呼びし、知的関心を深めると同時に、参加者に通常に実施している公開講座の周知を行う事を目的に、開催されました。



会場ロビーでは、有限会社やさか共同農場、合資会社丸新醤油醸造元、日本海酒造株式会社、一般社団法人浜田市観光協会、シックス・プロデュース有限会社に協力いただき、醤油や味噌、日本酒、魚の干物、チーズなど、地元食材を活用した発酵食品の展示販売もおこなわれました。特別公開講座への参加者は240名でした。通常の公開講座は男性の割合が多いですが、今回は女性の割合が多く、また参加者の4割は浜田市以外からの参加者でした。

講演では、日本の地域的・伝統的な発酵食品から世界の発酵食品までさまざまな種類の発酵食品を紹介され、発酵食品を取り入れることによる健康効果がある事や、日本や地域の食材を利用した発酵食品が発展する可能性があることなどをお話いただきました。参加者の感想は、分かりやすく、面白く、ためになったとの感想が多く、大変好評でした。一方で、講師の先生の知名度や話の内容から、もう少し集客が見込めるだろうとの意見もあり、集客方法については、次回の課題にしたいと思います。

今回の特別講座に参加された方で、新たに浜田キャンパスの公開講座会員になっていた方は37人でした。魅力的な公開講座を開催できるよう、今後も努力していきたいと思っています。

(文責:豊田知世)



小泉武夫氏による特別公開講座



島根の発酵食品展示販売も同時開催

(3) 学生研究発表会

○第2回学生研究発表会(平成26年7月8日開催)

島根県立大学浜田キャンパスにおいて、「学生研究発表会」が開催されました。本研究会は、本学「大学COC事業」における、浜田キャンパス「キャンパス・プラットフォーム」の研究発表の場のひとつとして位置づけられています。平成25年度に試験的に開催し、今年度から広く参加ゼミを募って実施する予定です。

本研究会を通じて、学内での学生の研究成果を地域の方々へ報告する機会を設け、より広く地域市民の皆さまに知っていただくことと同時に、地域の皆さまからの質問やアドバイスを受けつけることによる学生の教育への効果も期待しています。今回は、林裕明准教授の3年ゼミから3組、川中淳子教授の2年ゼミから3組の報告がありました。学生、教職員を含めた大学関係者、市民の方々合わせて約50名の参加があり、活発な質疑が行われました。

【林裕明ゼミ】

3年生ゼミ3組から報告がありました。

『島根県内の特産品の国外輸出状況』では、島根県の貿易への取り組みと、輸出されている特産品の現状を紹介した上で、松江市の李白酒造の日本酒海外輸出について調査報告がありました。教訓として、特産品の輸出拡大は、県からの販路拡大を目的とする補助金だけでは難しく、輸出する企業が文化を伝えるという熱い思いを持ち、輸出戦略を行うことが重要だと報告されました。

『国際化の中の地産地消』では、国際化が進むなか、島根県の地産地消はどのような意識のもと行われているのか調査したうえで、行政、消費者、そして生産者の視点から島根県の地産地消の課題について報告がありました。より良いものを消費者に提供したい「生産者」と、販路拡大が最大の目的であるため、県産品を県外で販売しても

国外に輸出してもいいとする「行政」、そして安さを重視すると国外産のものを、安全を重視すると国内産のもの(島根県産でなくても可)を購入したいと考えている「生産者」、3者の農作物や食に対する意識が異なるため、地産地消は進まないと報告がありました。

『マツダ車の販売を通してみる地域(島根)における国際化の矛盾』では、隣の広島県に本



▲発表を行う林裕明ゼミの学生



▲発表を行う林裕明ゼミの学生

社を置いているマツダ車が浜田(島根県)であまり乗られていない理由を、グローバル化と地域との関係について調査した結果が報告されました。浜田においてマツダ車のシェアが低い理由として、1)マツダの主力製品は普通乗用車であるが、島根県では軽乗用車のほうが需要は高く、島根県にマツダ車のディーラーが少ないこと、2)そのために、輸送コストが安い需要が小さい浜田ではなく、需要が大きい海外市場に輸出する戦略が立てられていることなどが、報告されました。

【川中淳子ゼミ】

2年生ゼミから3組報告がありました。

『不登校に対する支援:ホームエデュケーションを中心に』では、不登校支援として欧米で先進的な取り組みが行われている、各家庭で親が子供に教育をするホームエデュケーションについて報告がありました。日本ではまだ認められていないことが課題として挙げられていました。

『ニート(NEET)への支援:日本及びデンマークにおける支援の比較より』では、OECD諸国でもっとも若年ニート率が低いデンマークのニート支援と日本のニート支援を比較し、日本のニート支援の課題について報告がありました。デンマークでは、失業者のための特別な教育プログラムが用意されており、半強制的な参加が求められていること、失業手当も比較的少ないため就職への意欲を高めており、日本よりニート率が低いとのことでした。

『摂食障害と社会的背景』では、摂食障害の種類と原因、背景についてまとめ、摂食障害支援における問題点について報告がされました。一般的に摂食障害に対する情報が浸透していないため、症状が悪化する可能性が高いこと、摂食障害専門の医療機関が少ないことなどが、問題点として挙げられました。

(文責:豊田知世)



▲発表を行う川中ゼミの学生



▲発表を行う川中ゼミの学生

○第3回 学生研究発表会(平成27年 1月28日開催)

島根県立大学浜田キャンパスにおいて、今年度2度目の学生研究発表会が開催されました。本研究会は、本学「大学COC事業」における、浜田キャンパス「キャンパス・プラットフォーム」の研究発表の場のひとつとして位置づけられています。

本研究会を通じて、学内での学生の研究成果を地域の方々へ報告する機会を設け、より広く地域市民の皆さまに知っていただくことと同時に、地域の皆さまからの質問やアドバイスを受けつけることによる学生の教育への効果も期待しています。今回は、林裕明准教授の3年ゼミから5名、豊田知世講師の3年ゼミから4組の報告がありました。学生、教職員を含めた大学関係者、市民の方々合わせて約20名の参加がありました。

【林裕明ゼミ】

- ・大湯さつき「日本人の宗教観について」
- ・佐々木大地「国内の運輸部門と環境問題」
- ・橋采香「世界のビーチリゾートの差別化と島根県での活用可能性について」
- ・中井喜一「よさこい祭りと地域活性化」
- ・松若麻衣「飲み物の文化史」



【豊田知世ゼミ】

- ・中川聖也、藤本洸史朗「気候変動と地域の適応策」
- ・猪瀬和希、高見裕太郎、苗村良磨「新交通システムによる都市開発」
- ・岡崎慶光、小笠原京介、齋藤大介、佐藤亮大、藤原宏晃「ローカルエネルギー導入による経済的効果」
- ・長岡雅之、松林知佳、森部遥香「空き屋の利活用」

(文責:豊田知世)



(4) はまだ灯2014(平成26年10月26日開催)

総合政策学部 2年生 青岸 万友



10月26日、「灯りが繋げる市民の絆」をスローガンに、島根県立大学浜田キャンパスにて、「はまだ灯2014」が開催された。「はまだ灯」は当時、当キャンパス1回生であった、平岡都さんの痛ましい事件を受け、このような痛ましい事件を繰り返さないため、忘れないために、学生や市民の有志が集まり、はじめたイベントであり、今回で3回目を迎える。「はまだ灯」は平岡さんへの追悼の意を捧げるとともに、事件の風化防止、防犯意識の啓発を目的としている。

今回は2部構成とし、多くの参加者の皆様にお越しいただいた。また、企画、運営には多くの学生、市民が携わり、地域や学生、市民との繋がりを再確認することができた。

【1部】

1部では、浜田市長、警察署長の挨拶、あいさつ川柳優秀作品の発表と表彰、SCOTの活動紹介、島根県警察音楽隊による演奏等を、講堂で行った。あいさつ川柳は、挨拶をテーマにした川柳で、はまだを明るく照らし隊が2010年より、市内の全小学校を対象に募集している。今年度は、地域の方にも挨拶について考えてもらおうと、一般の部を設け、公民館を通して大人にもあいさつ川柳を募集した。1部の後半では、島根県警察音楽隊の皆様にお越しいただき、ふるさとなどの演奏を披露していただいた。島根県立大学吹奏楽部ともコラボレーションし会場を盛り上げていただいた。



1部の後半では、島根県警察音楽隊の皆様にお越しいただき、ふるさとなどの演奏を披露していただいた。島根県立大学吹奏楽部ともコラボレーションし会場を盛り上げていただいた。



【2部】

2部では、学長挨拶、学生代表挨拶、島根県立大学吹奏楽部による演奏、フルート三重奏Flauceの演奏、キャンドルナイト等をコミュニティプラザ、カフェテリアで行った。学生代表による挨拶では、事件から時間が経ち、防犯意識が低下してきているのではないだろうかと問題提起がなされ、はまだ

灯を通して防犯意識を今一度見直し、安心、安全について考えを深めたいと述べた。

(5) 島根中央高等学校学習支援

平成24年度からおこなわれている、大学生による島根中央高校1年生を対象とした学習サポートも、今年度で3年目となった。高校生の進路や学習方法の相談、あるいは学習指導をおこなうことにより、生徒の皆さんの進路意識の向上や学力向上につなげることを目的としている。学生への事前説明会を実施した上で、平成26年度は以下のように英語と数学の学習サポートを、定期試験に向けて3回実施した。

平成 26 年度	実 施 日	参加学生の人数
第 1 回目	6 月 15 日 (日)	10 名
第 2 回目	9 月 23 日 (火)	10 名
第 3 回目	11 月 22 日 (土)	9 名

～参加学生の感想～

- ・ 高校生との関わりの中で、過去の自分の取り組みを振り返ることが出来た。
- ・ 大学受験に向けて、難しい課題に取り組む高校生に刺激を受けた。
- ・ 今回で3回目の参加だったが、とても新鮮な気持ちで臨むことができた。前回参加した際に担当した生徒から「あの後のテストで、クラス1番になりました。」「成績がいつもより上がりました。」などの声を聞くことができ、とてもやりがいを感じた。
- ・ 勉強に関してだけでなく、普段大学ではどのような事を学び、どのような事をして遊んでいるかなどについて聞かれたので説明をすると「大学に行くためにもっと勉強をする。」と言ってくれたので、刺激になれて良かったと思う。
- ・ 私自身、この度の学習支援に参加して、どうすれば分かりやすく教えることができるか、英語の文法構造など多くのことを学ぶことができた。得たもの、痛感したもの、たくさんあったがこの活動に参加できてよかった。
- ・ 今回は数学と英語だけだったが、社会や国語などの教科も対象にして欲しい。私自身、歴史が得意なのでより得意な教科の方が教えやすいかと思う。



(6) 匹見中学校学習等支援

ソフトボール部 1年生 森 裕康

10月24日、25日に益田市匹見町の匹見中学校でボランティアをしました。

今回の学習支援の趣旨は野球部員の間テストのテスト直しと野球の指導ということでした。匹見中学校の生徒はとて少なく男子生徒のほとんどが野球部に所属していて、その人数は10人です。

1日目の24日はテストの復習、テスト直しの手伝いをしました。普段、人に勉強を教えることがないので、どのように教えればよいのか、どうやったらわかりやすく伝えることができるのか試行錯誤しながら3時間のテスト直しをしました。しかし、中学生からも質問してくてくれるのでやりやすかったです。

1日目の終わりには温泉に行きました。そこに中学生たちもついて来たり、晩御飯も一緒に食べるなど、とても私たち大学生に馴染んでくれました。

2日目の25日は野球の指導をしました。匹見中学校の野球部は人数が少ないですがとても声が出ていて、元気がよかったです。指導といっても普段の練習メニューと一緒にこなすという感じで、練習メニューも人数が少ないなりに工夫されていました。大学生も中学生も野球を楽しむことができました。野球を通して、別れが惜しくなるほど仲を深めることもできました。この学習支援ボランティアに参加してよかったと思いました。



(7) 県大農園「すこっぷ」

○弥栄の大地をくわだてよう「すこっぷ」

今年度、鳥根県西部県民センターの学生地域活動補助事業に採択され、「すこっぷ」を発足しました。「すこっぷ」は、8月より浜田市弥栄町小熊集落をフィールドに地域の方々のご指導のもと、畑を耕し、野菜作りをしています。野菜作りの他にも、自分たちが作った野菜を加工し、弥栄町内で開催されるイベントに出店、集落の草刈りや雪かきなどの手伝い、集落の方の指導のもと、干し柿、しそジュース作りなど、その時期に合った食べ物作りを実施してきました。活動開始から7ヵ月、継続して活動していくうちに田舎暮らしの魅力や厳しさ、田舎の見方が変わりました。

□継続的に地域と関わる

私は、1年生時に受講したフレッシュマン・フィールド・セミナーで弥栄町を調査したこともあり、そこで見えた問題点や課題を基に解決策を提案、実行していこうと考えておりました。しかし、関係機関の方に事業書を見せた時、「そのようなニーズはない」との意見を頂きました。自分の中では地域のことを理解した上で提案したのだが、情報が古い、理解が乏しかった。そこで、地域と継続して関わり、地域を知ることから始める地域活動をすることにしました。ポイント3つ。地域の魅力、人、想いを理解すること。集落の一員として積極的に行事(草刈り等)参加すること。集落の方から声をかけてもらえる関係作りの3つを大切に活動を実施しました。

□産業まつりに出店

11月3日、弥栄町内で開催された「産業まつり」に出店致しました。私たちが育てた春菊を使った春菊コロケとさつまいもコロケを販売しました。地域の方々からは「春菊コロケってどんな味がするの?」と興味をお持ちになって買ってくださいる方、「美味しかったから、家に持って帰る!」とおっしゃって買ってくださいる方もおられました。おかげさまで、大変多くの反響をいただくとともに完売することができました。また、小熊以外の集落の方ともお話をすることができ、いろんな集落にも遊びに行きたいと感じました。野菜の栽培だけでなく、加工、販売まで実施できたと同時に、弥栄町内の方々と交流でき、「すこっぷ」の活動を周知することができました。

□活動を振り返って

小熊集落は鳥根県立大学から片道約40分、辺りは山々に囲まれており、人口4世帯11人という小さな集落です。集落のコミュニティは強く結ばれており、温かいムードの中で私たちは様々な経験をさせて頂いております。毎週末に小熊を訪れるたびに、新たな出会い・発見・体験ばかりで私たちも充実した日々となっております。夏には青く澄んだ空が、秋には赤く染まった紅葉が、冬には美しい雪景色が季節によって変化する景色と同じように、私も集落

のみなさんと関わる中で、変化してきました。しかし、里山の維持管理では草刈りや雪かきなどしなければならないことなど、田舎での厳しさを感じております。「他人事を自分事に」私たちにできることからコツコツ、地域のためにできることをやっっていこうと思います。

ここまで活動出来ているのも、熱心な指導をしてくださった小熊集落の皆様をはじめ、地域の中に入りやすい環境を作ってくくださった浜田市弥栄支所産業課、島根県西部県民センター、島根県立大学地域連携課の皆様には誠に感謝申し上げます。今後とも「すこっぷ」をよろしくをお願いします。

さあ、弥栄の大地をくわだてよう！

島根県立大学総合政策学部3年 すこっぷ代表 森山 大地

(8) みすみフェスティバル出展

総合政策学部 2年生 安永 大介

私は二日間開催された三隅フェスティバルの二日間とも参加させていただきました。一日目は書道部として、二日目は絵本読み聞かせサークル、ゆるりの会として参加しました。

《書道部》

まず書道部では、大学の海遊祭という学園祭で行われた浜田高校の書道パフォーマンスが素晴らしかったということで、私たちにもお話をいただきました。目的としては書道パフォーマンスをすることで、ユネスコ無形文化遺産に登録された石州和紙のPRしたい、とのことでした。パフォーマンス未経験者が多いことや、この部活動では初めての試みなので必要な道具が不足しているという問題があったのですが、なんと練習用の石州和紙を用意してくださったおかげで練習ができ、道具の支援をしてくれたおかげで本番に臨むことができました。本番は全員緊張していて、先に浜田高校がすばらしいパフォーマンスをしてさらに緊張していました。しかし、練習以上の作品ができたと思います。



《ゆるりの会》

ゆるりの会では、三隅町平原地区特産の西条柿にちなんだキャラクター「さいじょうかきえもん」を絵本に登場させていました。それを着ぐるみにして、この日お披露目をしようと私たちが紹介しました。たくさんの子供たちが握手しに来てくれたり、写真を一緒に撮ってくれたので、とても楽しむことができました。着ぐるみの中は思っていた以上に暑く、重さもあり、交代しながら地域の方々と交流をしました。

この二日間で地域の方に関わる機会がたくさんありました。やりがいがあり、地域の方と関わる楽しさを実感しました。書道部部長としては、主催者側とうまく連絡を取れなかったり、連流日程をうまくたてられなかったりした部分があり、部長としての自覚が足りなかったと反省しています。これからも地域の方々と付き合っていくので、力になれるように活動していきたいです。

(9) きっかけバス47「震災ボランティア」報告会

総合政策学部 2年生 村上さやか

匹見中学校において、「震災ボランティア」報告会を行いました。

きっかけバス47とは、東北3県にバスで行くプロジェクトです。このプロジェクトは、東日本大震災の「風化」と「風評」が進む今、その流れを何とか止めたい、もう一度、日本中に復興の「旋風」を巻き起こしたい。そう考えた大学生たちが、47都道府県から1台ずつ、合計47台のボランティアバスで2000名が東北へ行くことを目指しています。

島根県代表として当キャンパスからも6名参加させていただき、今回そのうちの4名で報告会を行わせていただきました。実際に見て感じたことや聞いたお話を、パワーポイントを使って自分たちが撮った写真を見せながら発表し、ニュースなどのテレビの情報だけでは分からない現場の声を匹見中学校の学生や地域の方々に伝えさせていただきました。発表後にはたくさんの質問もいただき、中学生の方々に震災のことを身近に、具体的に考えていただくきっかけになったのではないかと思います。

また、報告会の後に一緒に給食を食べ、その後中学生と交流会もさせていただきました。交流会は、中学生と大学生を2つのグループに分けワークショップ形式で行いました。ここでは中学生からの質問を通して、大学生生活のことや高校受験のこと、大学生の出身地の話など自分たちがこれまで経験してきたことを話し、中学生が将来のことを考えるうえで少しでも参考になればと思いました。また中学生からは将来の夢や今の生活のなど匹見で過ごしてきたこれまでの話を聞き、お互いの情報を交換することで交流を深めました。大学生自身も中学生と交流を持つ機会なかなかないので、貴重な体験で楽しい思い出となりました。

最後大学生がバスで帰るときには、ベランダや体育館の入り口から中学生みんなでお見送りしていただき温かい気持ちで帰ることが出来ました。これからも様々な形で匹見中学校との交流を続けられればいいなと思いましたし、また、匹見中学校以外の場でも報告できる機会があればしていきたいなと思いました。

(10) MAKE DREAM 2014

平成26年12月12日(金)に、本学交流センターコンベンションホールにて本学の学生が浜田の地域資源を活用したビジネスプランを提案する島根県立大学浜田を元気にするアイデアコンテスト「MAKE DREAM 2014」最終プレゼンテーションが開催された。

「MAKE DREAM」は、地域の企業や行政などに学生の発案する若者ならではの自由な発想を聞いてもらい、新産業や新事業創出の参考にしてもらう「アイデア提供型」の企画であり、今回で4年連続4回目の開催となる。

同コンテストの運営は主催であるはまだ産業振興機構をはじめ、行政、支援機関の幅広い協力を得て行われている。審査にあたっては、久保田章市浜田市長を審査委員長とし、浜田商工会議所、石央商工会、日本政策金融公庫浜田支店、島根県商工会連合会石見支所といった各協力機関からトップクラスの方々が審査員として参画した。

コンテストには合計12組からの応募があり、書類選考を通過した上位6組が最終プレゼンを実施した(表)。

その結果、3年の齋藤百合亜さんが発表した、浜田の魚をキーワードにして市内外の釣り客としまねお魚センター、飲食店の3者をつなぐプランである「Fisherman's Town Hamada」が最優秀賞を受賞した。また、3年の加藤恵子さんが発表した「はまだどんちっちウォーク」が優秀賞を、3年の小暮里奈さんが発表した「石州和紙でラッピングビジネス」が共感大賞(来場者が最も共感したプランへ投票し、その得票数が最も多いものに対して贈られる)を受賞した。

また今年度は、昨年度のコンテストでの受賞を経て地域活性化の取組みを実現している3年の倉田敏宏さんの発表も行われた。

表 「MAKE DREAM 2014」最終プレゼンテーション発表者とテーマ(発表順)

氏名	学年	発表テーマ
川本拳也・沖本拓	3年	BB級スイーツを全国へ
齋藤百合亜 (最優秀賞)	3年	Fisherman's Town Hamada～釣りで浜田を活性化～
村上さやか	2年	石州和紙をあなたの手元に～石州和紙×文房具の世界～
加藤恵子 (優秀賞)	3年	はまだどんちっちウォーク～スポーツツーリズムによる地域活性化
小林純平	2年	浜田仮面マラソン～スポーツを通じた新たな伝統文化の継承～
小暮里奈 (共感大賞)	3年	石州和紙でラッピングビジネス

(准教授 久保田典男)

(11) 高大連携の取り組み

島根県立大学と島根県立浜田高校及び島根県立江津高校とはそれぞれ平成16年、平成19年に高大連携包括協力協定を締結し、相互の特色を活かした連携活動を行っている。

【島根県立浜田高校】

平成16年11月18日 高大連携包括協力協定を締結、連携事業(出張講義、ゼミ開放、教育実習生の受け入れ、学生交流など)を継続的に実施

平成26年度の活動状況

6月17日 大学見学会(1年生182名参加)

10月6日 高大連携推進会議

10月8日 みすみフェスティバル2014(島根県立大学書道部と浜田高校書道部による合同パフォーマンス)

10月12日 海遊祭(浜田高校書道部によるパフォーマンス)

11月4日～11月7日 高校授業見学(教職課程担当教員及び教職課程履修者が見学)

11月12日 ゼミ(総合演習Ⅱ)体験(2年生30名参加)

【島根県立江津高校】

平成19年6月1日 高大連携包括協力協定を締結、連携事業(出張講義、ゼミ開放、英語授業開放、学生交流など)を継続的に実施

平成26年度の活動状況

7月4日 高大連携推進会議

7月7日 大学授業体験(2年生66名参加)

7月9日 ゼミ(総合演習Ⅰ)体験(英語科3年生11名参加)

11月12日 ゼミ(総合演習Ⅱ)体験(普通科2年生66名参加)

12月16日 出張講義(普通科1年生82名参加)



大学授業体験の様子



ゼミ体験の様子

(12) 大学生による小中学校学習支援事業の取り組み

大学生による小中学校学習支援事業は、浜田市内の小学校と中学校に学生(学習支援員)を派遣し、週1～2回(1回1～2時間)程度、放課後の時間に学習指導を実施する事業。この事業は島根県立大学と浜田市との連携協力協定(平成19年5月18日締結)に基づき、学力向上を目的として平成19年度から中学生を対象として開始し、平成24年度からは小学生も対象に含め、実施している。平成26年度は2校の小学校、5校の中学校が参加し、延べ293名の学生が従事した。

【平成26年度派遣先】

- ・浜田市立第一中学校
- ・浜田市立第二中学校
- ・浜田市立第三中学校
- ・浜田市立浜田東中学校
- ・浜田市立金城中学校
- ・浜田市立松原小学校
- ・浜田市立三隅小学校

～ 参加学生感想 ～

Q. 参加してよかったことはなんですか？

- ・教えることの難しさを学べたこと。
(1年・男子)
- ・教える前に、理解が必要であることを学び、教師を目指す上で大いに役に立った。(2年・女子)
- ・勉強はもちろん、生活や大学のことについても話せてよかった。(3年・男子)

【平成26年度派遣人数】

24名、延293名

～ 参加学生感想 ～

Q. 参加した学生の様子について

- ・とても熱心に指導していただきました。
- ・子どもと進んで関わり、子どもの要望に応じて支援していただきました。
- ・理解の遅い生徒にも、丁寧に教えてもらいました。
- ・生徒に対し親身に関わり、教えていただいたのでとてもよかったです。
- ・県大生の方から声をかけてくれたり、勉強を分かりやすく教えてくれたりしました。



学習支援の様子 (浜田市立第二中学校)



(浜田市立三隅小学校)

(13) NEARセンター市民研究員制度

日本海をはさんで北東アジア地域に接する鳥根県とその周辺には、様々な視点からこの地域に強い興味を抱き、知識を蓄えている市民がいる。鳥根県立大学北東アジア地域研究センター(NEARセンター)では、日本を含む北東アジア地域の研究に強い興味を持っている市民の方々にNEARセンターの市民研究員として共に研究していただく「NEARセンター市民研究員制度」を平成18年度に創設した。



研究会の様子

市民研究員はNEARセンターに所属し、研究会等への参画を通じて自らの興味関心に基づく研究活動に取り組むほか、研究テーマで意気投合した本学の大学院生と研究計画書を練り上げ、学内審査のうえ研究助成を受けて共同研究を行うなど、大学院生の研究に刺激を与えていただいている。平成23年度に立ち上げたグループ・リサーチ・サロンは、平成25年度に「北東アジア地域の歴史と文化」・「北東アジア地域の現代的課題」の2つに再編成され、関連する領域の共同研究や情報交換を行う場となっている。

NEARセンター研究員(本学教員・NEARセンター嘱託助手で構成)は、「NEARアカデミックサロン」に登壇し、専門研究分野の最前線を市民研究員向けにわかりやすく解説するなどして市民研究員制度を通じた地域への「知」の還元を心がけている。

平成26年度における成果として、市民研究員自らの企画により以下の研究会を開催した。

1. 日時/場所:平成26年7月5日(土)14:00~16:30 / 講義・研究棟1階 中講義室4

内容:第1部:NEARアカデミックサロン

佐藤壮研究員「日本人の好きなカナダ、カナダの中の日本」

第2部:市民研究員の発表報告

・「丸木舟による対馬海峡西水道(巨済島知世浦~対馬棹埼)横断 日・韓共同プロジェクトについて 報告と御礼」・・・豊島秀明(市民研究員)

・「明治期における廻船問屋の船検帳について」・・・楫ヶ瀬孝(市民研究員)

2. 日時/場所:平成26年11月29日(土)13:00~16:00 / 講義・研究棟1階 中講義室4

内容:第1部:NEARアカデミックサロン

福原裕二研究員「新著案内『現代アジアの女性たちーグローバル化社会を生きる』(新水社、2014年10月)及び北朝鮮女性の『理想』と『現実』」

第2部:政策提言勉強会「浜田市瀬戸ヶ島地区埋立地活性化に関する浜田市基本方針」

第3部:市民研究員の発表報告

(1)大学院生との共同研究に採択された市民研究員の間報告

(2)市民研究員による研究報告

また、年度内に3回開催する市民研究員全体会の一環として毎年度行っている「市民研究員研究発表会」及び「市民研究員と大学院生の共同研究成果報告会」を以下のとおり開催した。

○平成26年度 市民研究員研究発表会

日時:平成27年1月24日(土)13:30~16:30

場所:交流センター1階 研修室

内容:

1. 市民研究員による研究報告・勉強会成果発表

1)「北東アジアレベルの国際交流と日本国家創造期の解明を目指して

～国内の枠組み造りから国際的な枠組み造りへ～」…田中文也(市民研究員)

2)「能海寛と仏蹟復興運動のセイロン人 A.ダルマパーラ～インド仏蹟復興運動、出会い、ダルマパーラの日記、南方仏教と関わった人たち～」…岡崎秀紀(市民研究員)

3)「佐々田懋は和紙の分野に何を残したか」…中政信(市民研究員)

2. 市民研究員による政策提言について意見交換

テーマ:浜田市瀬戸ヶ島埋立地活用事業、浜田城周辺整備事業 など

○平成26年度 市民研究員と大学院生の共同研究成果報告会

日時:平成27年3月7日(土)14:00~17:00

場所:講義・研究棟1階 中講義室3

内容:

1)「日本における中国文化の受容—日本における孔子学院の影響からみる—」

[報告者] 王曉慧(北東アジア開発研究科 博士前期課程2年)

岡崎秀紀・小菅良豪(市民研究員)

2)「中国政府の自動車産業発展政策と日本自動車メーカーと関連の部品メーカーの中国市場対応—マツダと関連部品企業を事例にして—」

[報告者] 王賀(北東アジア開発研究科 博士前期課程1年)

滑純雄(市民研究員)

3)「若者の力による地域振興の諸政策の日中比較—中国の大学生村官制度を中心として—」

[報告者] 孫萌(北東アジア開発研究科 博士後期課程1年)

澁谷善明(市民研究員)

(14) 講演会講師等・審査会委員等

◇講演会講師等

教員名	依頼元	名称	期間
村井 洋	日本保健医療大学	社会学講師	H27.2.16~H27.2.20
岡本 寛	島根県憲法会議	島根県憲法会議第13回総会記念講演	H26.7.5
岡本 寛	島根県母親大会実行委員会	第52回島根県母親大会分科会助言者	H26.6.22
岡本 寛	島根県労働組合総連合	浜田地域労連新春の集い講演	H27.1.23
飯田 泰三	浜田郷土資料館友の会	文化講演会講師	H27.3.7
井上 治	島根県社会福祉協議会	シマネスクくにびき学園 講師 講義「与謝野晶子 モンゴル旅行について」	H26.11.25
西藤 真一	益田商工会議所	萩・石見空港利用促進に関するグループディスカッション講師	H26.7.22
岡本 寛	島根県憲法会議	島根県憲法会議第31回市民憲法フォーラム講演	H26.11.22
西藤 真一	益田商工会議所青年部	12月例会講師「新規開発ルートについてのディスカッションならびに候補地の抽出」	H26.12.22
ケイン エレナ アン	浜田市立第三中学校	島根県中学校英語研究会西部研修会における講師	H27.2.12
光延 忠彦	島根県選挙管理委員会	島根県明るい選挙推進大会講師	H27.3.19

◇審査会委員等

氏名	発令元	名称	任期
赤坂一念	島根県教育委員会教育指導課	スーパーグローバルハイスクール運営指導委員	H26.8.1~H28.3.31
飯田泰三	島根大学	島根大学就業力育成支援事業外部評価委員会委員	H22.12.1~H27.3.31
飯田泰三	国立大学法人島根大学	中国四国地域人材育成事業島根大学外部評価委員会	H24.11.1~H27.3.31
生田泰亮	島根県中山間地域研究センター	島根県中山間地域研究センター運営協議会委員	H23.9.30~H25.3.31 H26.1.23~27.3.31
生田泰亮	島根県中山間地域研究センター	島根県中山間地域研究センター運営協議会 研究課題評価専門委員	H23.9.30~H25.3.31 H26.1.23~27.3.31
生田泰亮	江津市政策企画課	江津市指定管理候補者選定委員会委員	H24.11.1~H27.10.31
生田泰亮	江津市	江津市都市計画審議会委員	H25.12.2~27.11.30
井上 治	独立行政法人日本学術振興会	科学研究費委員会専門委員	H24.12.1-H25.11.30 H25.12.1-H26.11.30
岩本浩史	国土交通省中国地方整備局	江の川河川整備懇談会委員	H25.4.30~H26.3.31 H26.6.20~H27.3.31
岩本浩史	浜田市	浜田市情報公開審査会並びに浜田市個人情報保護法審査会及び浜田市個人情報保護審議会委員	H25.10.1~27.9.30
岩本浩史	美郷町	美郷町情報公開審査会委員(ほか)	H26.10.1~H28.9.30
岩本浩史	大田市	大田市情報公開審査会(ほか)	H26.10.30~H29.10.29
江口真理子	島根県教育委員会	島根県総合教育審議会委員	H25.8.26~27.8.25
江口真理子	島根県中学校英語研究会	全日本中学校英語弁論大会島根県予選 審査員	H26.10.3
大橋敏博	(財)浜田市教育文化振興事業団	(財)浜田市教育文化振興事業団評議員	H22.6~H26.6
大橋敏博	浜田市総合調整室	浜田市行政改革推進委員会委員	H18.1~H24.1 H24.6.7~H26.6.6 H26.8.27~H28.8.2 H18.4.1~H24.3.31
大橋敏博	浜田市文化振興課	浜田市美術品等収集委員会委員	H24.4.1~H26.3.31 H26.4.1~H28.3.31
大橋敏博	浜田市教育委員会	浜田市文化財審議会委員	H24.4.1~H26.3.31
大橋敏博	益田市市長	益田市公平委員会委員	H25.1.1~H28.12.31
大橋敏博	文化庁	劇場・音楽堂等活性化事業協力者会議委員	H25.5.15~H25.9.30 H25.10.1~H26.3.31
大橋敏博	独立行政法人日本芸術文化振興会	芸術文化振興基金運営委員会地域文化専門委員会委員	H25.8.1~H26.6.30 H26.7.22~H27.3.30

氏名	発令元	名称	任期
大橋敏博	文化庁文化部芸術文化課	『劇場・音楽堂等活性化事業』及び『地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ』委託業務企画案選定委員会委員	H26.4.1～H27.3.31
大前 太	浜田市教育委員会	浜田市立図書館協議会委員	H26.4.1～H28.3.31
岡本 寛	益田市総務部総務管理課	益田市行政情報公開不服審査会委員	H24.4.1～H26.3.31 H26.5.14～H28.5.13
岡本 寛	浜田市	浜田市情報公開審査会並びに浜田市個人情報保護法審査会及び浜田市個人情報保護審議会委員	H25.2.14～H25.9.30 H25.10.1～H27.9.30
沖村理史	浜田市くらしと環境課 浜田市市民生活部環境課（H26～）	浜田市地球温暖化対策地域協議会幹事	H21.2.2～H24.3.31 H24.4.1～H26.3.31 H26.4.1～H28.3.31
沖村理史	島根県環境生活部環境政策課	島根県環境審議会委員	H24.7.1～H26.6.30 H26.7.1～H28.6.30
川中淳子	浜田市市民福祉部調整室 浜田市地域福祉課地域福祉係（H24.4～）	浜田市保健医療福祉協議会委員	H18.1.27～H20.3.31 H24.4.20～H26.3.31 H26.5.1～H28.3.31
久保田典男	しまね地域産業活性化協議会	しまね地域産業活性化協議会委員	H23.8.21～H25.3.31 H25.4.1～H28.3.31
久保田典男	公益財団法人 ちゅうごく産業創造センター	「産学金官連携」推進のための方策検討調査委員会副委員長	H25.5.1～H26.3.31 H26.5.1～H27.3.31
久保田典男	NHK広島放送局	日本放送協会中国地方放送番組審議会委員	H25.6.1～H27.5.31
久保田典男	NPO法人石見銀山協働会議	石見銀山基金事業選定委員	H25.6.1～H28.3.31
久保田典男	島根県商工労働部雇用政策課	島根県雇用表彰委員会委員	H26.4.1～H28.3.31
ケイン エレナ アン	島根県中学校英語教育研究会	全日本中学校英語弁論大会島根県予選 審査員	H24.10.10 H26.10.3
ケイン エレナ アン	江津市小中高連携英語研究会	江津市小中高連携英語研究会プロジェクト会議	H25.6.27 H26.6.27
ケイン エレナ アン	島根県教育委員会	英語教育強化地域拠点事業運営指導委員	H26.7.1～H27.3.31
小池律雄	一般財団法人島根県教職員互助会	一般財団法人島根県教職員互助会評議員	H25.4.1～H29定時評議員会
小池律雄	江津市	江津市試験委員	H25.8.1～H26.3.31 H26.6.1～H27.3.31
小林明子	浜田市人権同和教育啓発センター	浜田市男女共同参画推進委員会委員	H22.10～H24.3.31 H26.4.1～H28.3.31
小林明子	公益財団法人しまね国際センター	しまね国際センター評議員	H25.5.31～H28年6月頃
小林明子	島根県教育庁高校教育課	島根県高校生等留学支援事業運営指導委員（選考委員）	H25.7.24～H26.3.31 H26.8.1～H27.3.31
小林明子	日本語試験センター	日本語能力試験作業部会委員	H26.9.1～H27.8.31
金野和弘	島根県環境生活部	島根県県民いきいき活動促進委員会委員	H25.4.1～H27.3.31
西藤真一	浜田市地域公共交通活性化協議会	浜田市地域公共交通活性化協議会委員	H25.4.1～H27.3.31
西藤真一	島根県浜田県土整備事務所	地域整備方針検討会議オブザーバー	H25.6.13～9.30 H26.11.14～H27.3.31
西藤真一	福島空港と地域開発をすすめる会	福島空港有識者懇談会委員	H26.4.1～H27.3.31
西藤真一	浜田市観光交流課	広浜鉄道今福線シンポジウム（仮称）実行委員	H26.9.30～H28.3.31
田中恭子	島根県総務部財政課	改革推進会議委員	H23.4.1～H24.3.31 H24.4.1～H25.3.31 H25.4.1～H26.3.31 H27.4.1～H28.3.31
田中恭子	島根県土木部用地対策課	島根県事業認定審議会委員	H23.9.20～H26.9.19 H26.9.20～H29.9.19
田中恭子	公益財団法人しまね産業振興財団	（公財）しまね産業振興財団評議員	H24.6.18～ 平成28年定時評議員会終結の時まで
田中恭子	島根県総務部長	島根県固定資産評価審議会委員	H24.12.15～H26.12.14
田中恭子	島根県しまねブランド推進課	島根県地産地消促進計画策定検討委員会委員	H26.4.1～H26.10.31
田中恭子	雲南市産業振興部商工観光課	雲南市地域経済振興会議委員	H26.5.29～H28.5.28
田中恭子	島根県教育委員会社会教育課	島根県社会教育委員	H26.8.27～H28.6.23
田中恭子	島根県地域振興部地域政策課	島根県立しまね海洋館指定管理者候補審査委員会委員	H26.10.22

氏名	発令元	名称	任期
中川 敦	浜田市社会福祉協議会	浜田市地域福祉活動計画策定委員会委員	H24.6~H26.6
八田典子	国土交通省中国地方整備局道路部 道路計画課	社会資本整備審議会専門委員	H24.11.26~H26.11.25
八田典子	浜田市建設部建設企画課	浜田市景観計画策定委員会委員	H26.1.6~H27.3.31
八田典子	国土交通省中国地方整備局	社会資本整備審議会専門委員（道路分科会 中国地方小委員会委員）の兼任	H26.11.26~2年
林 秀司	国土交通省中国地方整備局	江の川河川整備懇談会委員	H23.4.15~H24.3.31 H26.6.20~H27.3.31
林 秀司	島根県地域政策課	島根県立しまね海洋館指定管理業務評価委員	H23.2.1~H28.1.31
林 秀司	島根県都市計画課	島根県景観審議会委員	H20.2.1~H26.1.31 H26.2.1~H28.1.31
林 秀司	島根県土木部河川課	島根県河川整備計画検討委員会委員	H24.4.1~H26.3.31 H26.4.1~H28.3.31
林 秀司	(公財)ふるさと島根定住財団	公益財団法人ふるさと島根定住財団評議員	H24.6.27~ 平成28年定時評議員会最終時まで
林 秀司	島根県農林水産部農業経営課	島根県中山間地域等振興対策検討委員会委員	H24.8.27~H26.6.9 H27.1.30~H28.12.18
林 秀司	島根県農林水産部農村整備課	島根県農地・水保全管理支払交付金検討委員会委員	委嘱の日~H29.3.31
林 秀司	益田市	益田市景観審議会委員	H25.5.31~H27.3.31
林田吉恵	島根県（環境生活部環境生活総務課）	島根県消費生活審議会委員	H24.7.27~H26.7.26 H26.7.27~H28.7.26
林田吉恵	島根県商工労働部商工政策課	島根県商工労働部指定管理者候補選定委員会委員	H26.8.27~H27.3.31
林田吉恵	浜田市上下水道部	浜田市下水道審議会委員	H27.1後半~2年
林田吉恵	島根県税務課企画・市町村税グループ	島根県固定資産評価審議会委員	H26.12.15~H28.12.14
光延忠彦	浜田市総合調整室	浜田市行政改革推進委員会委員	~H24.1 H24.6.7~H26.6.6 H26.8.27~H28.8.2
光延忠彦	益田市政策企画課	益田市行政改革審議会委員	H24.2~H26.1 H26.3.1~H28.2.28
福原裕二	島根県総務部総務課	第3期竹島問題研究委員	H24.10.28~H26.12.31 H24.10.28~H27.6.30
福原裕二	日本学術振興会	特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員	H25.8.1~H26.7.31
藤原眞砂	島根県都市計画課	島根県都市公園指定管理業務評価委員	H22.11.1~H27.10.31
藤原眞砂	浜田圏域健康長寿しまね推進会議 (浜田保健所)	浜田圏域健康長寿しまね推進会議	H25、H26
藤原眞砂	浜田市地域プロジェクト推進室	「瀬戸ヶ島埋立地活用研究会」委員	H26.5.9~H27.3.31
藤原眞砂	国土交通省中国地方整備局	中国地方整備局事業評価監視委員会委員	H26.6.27~H28.3.31
藤原眞砂	島根県土木部都市計画課	第4期島根県立都市公園指定管理者候補選定委員会委員	H26.7.22~H27.3.31
本田雄一	独立行政法人国立病院機構 浜田医療センター	浜田医療センター倫理審査委員会委員	H25.4.1~H27.3.31
本田雄一	大田市	難波利三・ふるさと文芸賞審査員	H25.8.9~11.24 H26.7.18~
本田雄一	公益財団法人大学基準協会	大学評価委員会大学評価分科会第31群主査	H26.4.1~H27.3.31
松田善臣	浜田市地域公共交通活性化協議会	浜田市地域公共交通活性化協議会委員	H25.4.1~H27.3.31
三浦邦彦	江津市小中高大連携英語研究会	江津市小中高大連携英語研究会プロジェクト会議	H25.6.27 H26.6.27
光延忠彦	全国健康保険協会島根支部	全国健康保険協会島根支部評議会評議員	H25.4.1~H26.10.31 H26.11.1~H28.10.31

《出雲キャンパス》

平成26年度 公立大学法人島根県立大学
地域連携推進センター出雲キャンパス運営会議 名簿

(任期：平成 26.4.1～平成 27.3.31)

職 名	氏 名	備 考
教 授	齋藤 茂子	・しまね看護交流センター長 ・地域連携推進センター副センター長 ・地域連携推進委員会委員長
准教授	三島 三代子	・地域連携推進委員会委員 (担当：公開講座、出前講座、ぎんざんテレビ出前講座等に関すること)
准教授	高橋 恵美子	・地域連携推進委員会委員 (担当：学生ボランティアに関すること)
准教授	伊藤 智子	・地域連携推進委員会委員 (担当：タウンミーティング、キャンパスモニター等に関すること)
助 教	川瀬 淑子	・地域連携推進委員会委員 (担当：キャンパスモニター、タウンミーティング等に関すること)
助 手	小村 智子	・地域連携推進委員会委員 (担当：産公学連携、受託研究・事業等に関すること)
助 手	石橋 鮎美	・地域連携推進委員会委員 (担当：学生ボランティアに関すること)
助 手	嘉藤 恵	・地域連携推進委員会委員 (担当：公開講座、出前講座、ぎんざんテレビ出前講座等に関すること)
管理課 企画員	大地本 一到	・地域連携推進委員会委員
地域 コーディネーター	安食 里美	・地域連携推進委員会委員

出雲キャンパスの地域連携活動概要

しまね看護交流センター長
(地域連携推進センター副センター長) 齋藤 茂子

しまね看護交流センターは、平成25年10月の開設から半年間の助走期間を経て、実質的に年間計画に基づく運営を行う初年度となった。新たに配置された地域コーディネーターを中心に、地域からの要望や問い合わせに対応できる窓口の一元化に力点をおき、そのための対外的なセンター窓口の周知に工夫を重ねながら、センター事業の着実な実施を目指した。

詳細については、以下のとおり所掌事項に沿って報告する。

1. 出雲キャンパスプラットフォーム会議

第2回出雲キャンパス・プラットフォーム会議開催概要

- 1) 日 時:平成26年10月29日(水) 10:00～11:30
- 2) 場 所:島根県立大学出雲キャンパス 北会議室
- 3) 出席者:キャンパス・プラットフォーム会議構成員:20名
しまね看護交流センター運営会議構成員:12名
しまね看護交流センタープロジェクトリーダー:8名
その他担当事務職員他:2名
- 4) 議 事:(1)しまね看護交流センター事業の進捗状況について
(2)センターの対応状況について
(3)意見交換
(4)その他
- 5) 概 要:センターに置かれている「キャリア支援部」「看護研究支援部」「地域連携推進部」の3つの部からの平成26年度事業概要・進捗状況や、センターの窓口対応状況等の報告に対し、出雲キャンパス・プラットフォーム構成員から質問や要望等、活発な発言があり、大学スタッフと有意義な意見交換ができた。なお、次年度から当初計画通り年間2回(報告・計画)の実施とする予定である。

2. 研究に関する取り組み

平成26年度「しまね看護交流センター研究成果報告会及びCOC事業しまね地域共育・共創研究報告会」開催概要

- 1) 日 時:平成27年3月17日(火) 10:00～15:00
- 2) 場 所:島根県立大学出雲キャンパス 2号館2階 215実習室
- 3) 対 象:平成26年度特別研究費を取得した研究 31題
(自主テーマ研究 22題、特定テーマ研究 9題)
卒業生・修了生の看護研究支援による研究 6題
- 4) 方 法:COC事業とFD委員会との合同で開催した。報告書は冊子として作成し配布し

た。また、プログラムを作成し、4群にわけてフリートークする時間を設けた。

5)参加者:出雲キャンパス 教員36名、職員2名

浜田キャンパス 2名

松江キャンパス 2名

学外参加者 11名

合計53名 (その他:マスコミ 1社)

3. 地域連携活動報告

プロジェクト名:生涯教育

I. 公開講座

1. 目的

本学がもっている専門的、総合的な教育・研究機能を広く社会に公開することにより、健康に関する知識・技術及び一般的教養を身につけるための学習の機会を社会人等に広く提供することを目的とした。

2. 事業内容

* 担当教員:助教以上の教員 * 講座内容:健康に関するもの、一般教養など

* 受講対象:一般 * 開催時期:原則平成26年5月～12月

* 開催場所:本学、その他県内の施設

* 開催時間:本学の場合は9:00～21:00とする。ただし、学外の場合は当該施設と相談。

* 開催方法:

- ① 原則として担当教員が運営するが、求めに応じて地域連携推進委員会(地域連携推進部)が支援する。
- ② 公開講座の参加申込みの受付は事務局が行う。応募を受け付けられない事態については担当教員が申込み者に通知する。
- ③ 客員教授に公開講座に参加していただくこともある。
- ④ 修了証書は講座の担当教員が発行の有無を決定し、準備する。
- ⑤ 手話通訳・託児の希望者の受け入れは担当教員の判断により決定し、手配は担当教員が行う。託児を行う場合、大学で傷害保険に加入する。
- ⑥ 担当教員は、「受講者入館証」を事前に管理課から受け取っておき、当日受付で受講者に配布する。

3. 事業実施状況

今年度から公開講座はしまね看護交流センター事業に位置づき、対象は看護専門職を除く一般のみに限定して全8講座・計21回の講座を開講した(表1)。広報として地元新聞(山陰中央新報、旧出雲地区)折り込みの他、ポスター・リーフレットを県内148施設に送付した。近隣(鳶巣・川跡・高浜)のコミュニティーセンターには客員教授の公開講座の開講前に別途チラシを配布した。実施後は速やかに講座の様子をホームページに掲載した。

4. 成果

今年度は専門職対象の講座を除いたため、昨年度の13講座から8講座に減少したが、延べ611名の受講者総数であった。受講者からは概ね高評価が得られており、ホームページにもその様子を速やかに更新したため新しい情報を常に提供することができた。

5. 課題

受講者は前年度比61.1%に減少した。これは今年度から対象が一般に限られ講座数が減少したためと考えられる。各講座の受講者数は伸び悩んでおり、今後は教員の協力を得て興味を持てる講座数を増やすとともに、効果的に広報できる他機関との連携も図っていく必要がある。

表1 平成26年度公開講座実施状況

講座番号	場所	開催日	講師	講座名	受講者数
第1講座	島根県男女共同参画センター「あすてらす」	H26.5.24(土) 10:00～11:30	和田由佳助教 石橋鮎美助教	笑いヨガ体験会①	11
	出雲キャンパス 215実習室	H26.9.5(金) 19:00～20:30		笑いヨガ体験会②	10
第2講座	扇町健康大学				
	扇町商店街	H26.5.24(土) 9:00～10:00	山下一也副学長	第1回開校式、「知って安心、血圧のお話し」	8
		H26.6.28(土) 9:00～10:00	山下一也副学長	第2回「食事で予防『認知症』」	8
		H26.7.12(土) 9:00～10:00	林健司助教	第3回「ロコモ予防でいきいき生活」	8
		H26.7.26(土) 9:00～10:00	井上千晶講師	第4回「お出かけ楽しみ～尿失禁予防～」	7
		H26.8.9(土)	松本亥智江准教授	第5回「癒やしのある生活」(中止)	0
H26.8.23(土) 9:00～10:00		山下一也副学長 松本亥智江准教授	第6回修了式	7	
第3講座	いずも子育て支援センター	H26.7.6(日) 10:00～12:00	長島玲子准教授 井上千晶講師 多々納憂子助手	プレパパ・ママ講座－赤ちゃん先生から学ぼう！妊娠・出産・子育て－① ※1	66
	川跡コミュニティーセンター	H26.11.16(日) 10:00～12:00		プレパパ・ママ講座－赤ちゃん先生から学ぼう！妊娠・出産・子育て－② ※2	31
第4講座	出雲キャンパス 103実習室	H26.8.23(土) 10:00～12:00	濱村美和子講師 狩野鈴子准教授 藤田小矢香講師 嘉藤恵助手	子そだて・孫そだて今むかし①	5
		H27.1.24(土) 10:00～12:00		子そだて・孫そだて今むかし②	4
第5講座	出雲キャンパス 215実習室	H26.9.13(土) 10:00～12:00	松本亥智江准教授 嘉藤恵助手	アロマで心と身体のリフレッシュ Part.9 ①	15
		H26.9.27(土) 10:00～12:00		アロマで心と身体のリフレッシュ Part.9 ②	13
		H26.10.11(土) 10:00～12:00		アロマで心と身体のリフレッシュ Part.9 ③	9
第6講座	出雲キャンパス 209講義室	H26.10.18(土) 10:30～12:00	橋本由里准教授	意思決定の心理学	15
第7講座	出雲キャンパス 大講義室	H26.7.2(水) 13:10～14:40	白石吉彦(隠岐広域 連立立隠岐島前病 院院長, 客員教授)	隠岐島前病院の取り組み～地域医療 はおもしろい！～	191
第8講座	出雲市健康づくり推進員研修会				
	出雲市役所に びぎ大ホール	H26.4.21(月) 14:00～16:00	齋藤茂子教授	第1回「地域の健康づくり、健康づくり 推進員に期待すること」	79
	湖陵コミュニ ティーセンター	H26.6.18(水) 14:00～16:00	平野文子教授	第2回「がんの基本的な知識とがん予 防について」	42
	ひらた健康福祉 センター	H26.7.12(土) 14:00～16:00	山下一也副学長	第3回「メタボリックシンドローム・生活 習慣病予防について」	55
	まめなが一番館	H26.9.7(日) 14:00～16:00	石橋照子教授	第4回「上手にお酒と付き合うために」	27
合計					611

※1 2～9か月児14名を含む

※2 内訳: 赤ちゃん先生21名(赤ちゃん8名、夫婦5組10名、母のみ3名)、プレパパ
ママ10名(夫婦5組)

Ⅱ. 地域, 団体主催による出前講座

1. 目的

本学の専門的、総合的な教育・研究機能を幅広く社会に公開するため、地域や各種団体からの依頼に対応し、看護に関する知識・技術及び一般教養を身につける学習の機会を提供する。

2. 事業内容

しまね看護交流センター窓口への講師派遣依頼に対応し、希望テーマや教員、条件などを詳細に聞き取りした後で出雲キャンパス教員の中から適任者を選び、承諾を得た後、依頼者に紹介する。出前講座の実施状況について、講座担当教員に実施報告書の提出を求め、ホームページに出前講座の様子を掲載する。次年度に開講可能な一般向けテーマ登録の募集を行い、一覧をホームページに掲載する。

3. 事業実施状況

出雲キャンパスの教員が平成26年度に開催可能なテーマの事前登録を募り、提出されたテーマを一覧表にしてホームページに掲載した。また、テーマ一覧のチラシを作成し、随時配布し、出雲産業フェア2014でも配布した。

講師派遣依頼は平成26年4月から平成27年3月まで継続的にあり、地域連携推進部生涯教育分野で37件の依頼があった。そのうち4件は教員の調整が困難で断るに至ったが、計33件の講演等を実施した(表2)。

4. 成果

平成25年度には一般向け出前講座は15件であったが、今年度は33件の依頼を受けており、依頼が倍増した。依頼元は多岐にわたり、今回初めての依頼も多く、しまね看護交流センター立ち上げの際の広報やホームページでの案内に効果があったのではないかと考えられる。

5. 課題

依頼が増えたが希望のテーマは偏りがあり、一部の教員に負担がかかる傾向にあった。また、今年度から出前講座にかかる謝金・交通費を依頼者側に負担していただくことを徹底した結果、経費負担への対応が難しい依頼者や希望開講日までに時間の余裕がない依頼もあった。経費負担や依頼手続きに時間的余裕が必要なことをホームページに掲載して周知する必要がある。また、希望テーマの偏りについては講座担当教員の負担を考慮し、依頼元のニーズを聞きとりながら、必要に応じて他の教員を紹介するなどの調整を図っていく必要がある。

表2 平成26年度 地域連携推進部生涯教育 出前講座実施一覧

番号	依頼元	実施日	実施教員	テーマ・内容
1	ひかわスポーツ夢クラブ	5月5日	和田由佳助教	こどもの日スペシャルイベント 「親子でわっはっは 笑いヨガ」
2	出雲地域介護支援専門員協会	5月17日	和田由佳助教	笑いヨガ
3	出雲市役所大社支所 市民サービス課 健康福祉係	6月9日	祝原あゆみ助教	介護予防教室「白うさぎ」～回想法～
4	ハートフルサロン松江	6月17日	平野文子教授	がんのピアサポートってなあに？
5	島根えごま振興会	7月8日	山下一也副学長	えごまに関する講義
6	湖陵コミュニティセンター	7月13日	松本玄智江准教授	音楽回想法
7	NPO法人いずも在宅支援ネットワー ク	7月15日	石橋鮎美助教	笑いヨガ
8	鳶巣コミュニティセンター	7月17日	伊藤智子准教授	いきいき健康教室「老いを知らずに生きる方法」
9	川跡長生会	7月20日	和田由佳助教	笑いヨガ
10	高岡地区社会福祉協議会	7月25日	伊藤智子准教授	「老いをしらずに楽しく生活する方法」
11	公立学校共済組合島根支部業務部門	8月2日	①落合のり子准教授 ②松本玄智江准教授	①肩こりを防ごう！パソコン等でお疲れのあなたに ②脳の活性化
12	同上	8月3日	同上	同上
13	公立学校共済組合島根支部業務部門	8月23日	①落合のり子准教授 ②松本玄智江准教授	①肩こりを防ごう！パソコン等でお疲れのあなたに ②脳の活性化
14	出雲市役所大社支所 市民サービス課 健康福祉係	8月11日	平塚知子助手	杵築地区介護予防教室「白うさぎの会」回想法
15	笑顔の会	8月21日	長島玲子准教授	尿漏れを予防し、快適ライフ
16	介護老人保健施設 まんだ	8月25日	石橋照子教授	「メンタルヘルス」について
17	島根大学医学部附属病院 ほっとサロン	8月25日	平野文子教授	がんピアサポートって何？ピアサポーターって誰？
18	鳶巣コミュニティセンター	8月28日	三島三代子准教授	いきいき健康教室 「生活習慣病とその予防ー動脈硬化についてー」
19	鳶巣コミュニティセンター	10月2日	別所史恵講師	いきいき健康教室「慢性腎臓病を早期発見・予防しよう」
20	湖陵コミュニティセンター	10月5日	落合のり子准教授	簡単！「ながらストレッチ」のすすめ
21	出雲市 (平田ふれんどリーハウス)	10月7日	長島玲子准教授	平田ふれんどリーハウス講座 「骨盤底ケアが生む快適ライフ」
22	川跡長生会	10月24日	松本玄智江准教授	くすりに関するお話
23	出雲市役所大社支所 市民サービス課 健康福祉係	10月27日	阿川啓子助教	回想法「食の思い出」
24	出雲市立荘原幼稚園	11月6日	和田由佳助教	P T A 研修会 「笑いヨガでにこにこ子育て」
25	大社コミュニティセンター	11月20日	長島玲子准教授	女性の悩み？を解消（骨盤底筋を鍛えよう）
26	出雲市男女共同参画センター	12月20日	小田美紀子講師	働く女性のための健康講座における講義 「第3回 コーチングに学ぶ、より良い関係づくり」
27	島根総合福祉専門学校 同窓会	12月21日	和田由佳助教	同窓会「やまぼうしの会研究大会」 笑いヨガ
28	出雲市役所大社支所 市民サービス課 健康福祉係	平成27年 1月12日	齋藤茂子教授	心と体のバランス
29	鳶巣コミュニティセンター	1月15日	加藤真紀講師	いきいき健康教室「認知症予防に関すること」
30	島根県人材福祉センター 「児童心理療育センター みらい」	2月9日	落合のり子准教授	職場研修サポート事業にもとづく依頼 「職場のストレス解消法」
31	上遙堪健康クラブ	2月17日	小田美紀子講師	「元気で長生きするための日常生活について」 (春先にかけての健康管理)
32	川跡長生会	2月24日	平野文子教授	生活習慣病とセルフケア（暮らしとがん）
33	出雲医療生協 組織課	3月13日	石橋鮎美助教	出雲医療生協組合員を対象とした研修 「笑いヨガ」

Ⅲ. ぎんざんテレビ出前講座

1.目的

島根県立大学の教員が、石見銀山テレビが放映する出前講座を通して、地域住民に健やかな生活をおくるために役立つ幅広い知識を普及することにより、地域に貢献する。

2.事業内容

出雲キャンパスの教員が担当し、テレビ収録を行う。収録した番組は石見銀山テレビが1年間で随時放映する。出前講座をまとめた記録誌「石見の風にのせて」を発刊する。

3.事業実施状況

平成26年度ぎんざんテレビ出前講座は16名の教員と4名の協力者により、12講座の番組収録を行った(表3)。

平成27年3月に「石見の風にのせて-ぎんざんテレビ出前講座の軌跡7-」の発刊と、DVDの作成を行い、実習施設等の関係機関に配布した。

表3 平成26年度ぎんざんテレビ出前講座リスト

	出演者	テーマ
1	山下一也副学長	寝苦しい夜に－睡眠学講座－
2	落合のり子准教授	「ながらストレッチ」のすすめ
3	和田由佳助教	リラックス呼吸法
4	林健司助手・伊藤奈美助教	あなたはロコモを知っていますか？－大田圏域におけるロコモ認知度調査より－
5	石橋鮎美助手・坂根可奈子助手	あなたは「運動」していますか？－大田圏域における運動習慣調査より－
6	平塚知子助手・多々納暎子助手	いつまでも元気に歩ける体づくり
7	祝原あゆみ助教・学生2名	熱中症の予防－日常生活の工夫－
8	吉松恵子助手・阿川啓子助教 三代和枝ケアマネージャー	介護支援専門員（ケアマネージャー）の仕事について
9	吾郷ゆかり准教授	知っていますか？地域包括ケアシステムのこと －介護が必要になっても長く家で暮らすために知っておくと便利な話－
10	藤田小矢香講師	ハーブのある暮らし 香りを楽しむ
11	狩野鈴子准教授 川上いずみ助産師（大田市立病院）	助産師 その魅力的なしごと
12	若崎淳子教授	がんの治療と日常生活 パート1 抗がん剤治療中の脱毛ケア－あなたらしく生き生きと－

4.成果

今年度収録分は平成26年11月より放送している。また平成25年度の収録内容を納めたDVDと記録誌を出雲産業フェア2014等で配布した。島根県西部への地域貢献の一つとして役立つと共に出雲キャンパスのPRにも活用できた。

5.課題

ぎんざんテレビ出前講座も開始から5年が経過し、さらに地域住民に役立つ情報となるよう視聴者のニーズの見直しを図っていく必要がある。

I-1. 学生ボランティア活動の促進:学生ボランティア研修会

1. 目的

「ボランティアとは何か」、「学生がボランティア活動をする意義」について学び、県立大学におけるボランティア・マイレージ制度の概要を知る。また、地域の身近な団体の活動を知り、学生が「自分たちにできることは何か」、「大学生活を通して何をしたいのか」について考え、自分のやりたいボランティア活動を見つけ、参加への意識を高める。

2. 事業内容

出雲キャンパスの学生を対象に以下の内容で研修会を計画した。同時に、遠隔テレビ会議システムを使い浜田・松江キャンパスともつないで3キャンパス合同で開催した。

- 1) 学生ボランティア・マイレージ制度について
- 2) 平成25年度ボランティア・マイレージ実績報告・実績上位者の表彰
- 3) ボランティア活動報告(災害ボランティア、てんしんはん・いなたひめ、いずもサマースクール、在宅ボランティアサークル)
- 4) 講演会「ボランティア活動の楽しみ方」

講師 NPO法人学生人材バンク代表 田中 玄洋 氏

- 5) 地域の身近な活動紹介と学生ボランティアの募集(国立三瓶青少年交流の家、島根県立青少年の家、出雲市総合ボランティアセンター、ひらた100km徒歩の旅、ふるさとあったかスクラム事業、スペシャルオリピックス日本・島根)

3. 事業実施状況

- 1) 日時:平成26年5月28日(水)

13:10～15:10

- 2) 場所:島根県立大学出雲キャンパス

大講義室

- 3) 参加者:看護学部看護学科1年次生69名、2年次生53名、専攻科生41名、教職員15名
合計182名、浜田・松江キャンパスの参加者14名



4. 成果

研修内容について、参加した学生の8～9割が「ボランティアに魅力を感じた」、「興味をもった」、「ボランティアをしたいと思った」とアンケートに回答しており、研修会の目的を達成できたと思われる。また、本学のボランティア・マイレージ制度についても周知する機会となった。

5. 課題

研修会では、多くの学生がボランティアへの参加意識が高まったと回答したが、実際にボランティアにつながっているのかを今後調べることも必要である。また、3キャンパスをつないで研修会を実施したが、事前の日程調整が難しく、他2キャンパスの参加者は少なかった。今後は日程調整等、開催の方法に検討が必要である。

I-2. 学生ボランティア活動の促進:学生ボランティア・マイレージ制度・ボランティア保険の実施

1. 目的

学生ボランティア・マイレージ制度とボランティア保険は、学生が地域でのボランティア活動等に積極的に参加するための、学生ボランティア活動促進の制度である。マイレージ制度およびボランティア保険への学生登録を促し、適切な運用を実施する。

2. 事業内容

- 1) 学生ボランティア・マイレージ制度とボランティア保険の説明と加入
- 2) 学生のボランティア活動実績に対しての、適切なポイントの付与
- 3) ボランティア活動中の事故に対する保険の手続き

3. 事業実施状況

- 1) 平成26年4月3日の新入生オリエンテーション時に新入学生へ、また、5月28日開催の学生ボランティア研修会の参加者に対し、学生ボランティア・マイレージ制度とボランティア保険について説明し、登録を促した。
- 2) 学生ボランティア・マイレージ制度実績(平成27年3月31日現在)

(1) 学生ボランティア・マイレージ登録者数

看護学科1年:84名、2年:57名、3年61名、専攻科:48名 合計250名

(2) ボランティア保険加入者数

看護学科1年:84名、2年:22名、3年30名、
専攻科:48名 合計184名

(3) ボランティア活動報告件数

1年次生:75件、2年次生:75件、3年次生:
61件、公衆衛生看護学専攻科学生:19件、
助産学専攻科学生:0件 合計230件

(4) ボランティア保険利用の実績

1件、傷害保険金の請求があり、申請手続を行った。

- 3) 学生ボランティア・マイレージ制度の見直しを行い、明文化した。

4. 成果

2回にわたりこれらの制度を説明したことにより、多くの学生が登録と加入をした。また、地域におけるボランティア活動に学生が積極的に参加している現状が把握できた。マイレージ制度のポイント付与の詳細について検討し明文化できた。

5. 課題

今後は、今年度に明文化したポイント付与の詳細について、この方法で良いかを検討していく。また、引き続き学生への周知を徹底し、登録と加入を促すよう取り組んでいく。

表4 活動内容の内訳

活動内容内訳	参加した活動件数
障がい児支援・福祉施設イベント	34
大学・病院・行政各行事支援	32
健康イベント(啓発活動)	12
小中学生自然体験・合宿	11
コミュニティセンター等のイベント	2
地域交流・まちづくり	44
ボランティア活動研修	57
その他	38

I-3. 学生へのボランティア活動の促進:学生へのボランティア情報提供

1. 目的

地域からのボランティア募集の情報を学生に周知しコーディネートすることで、学生ボランティア活動の推進をはかることを目的とする。

2. 事業内容

地域からの学生ボランティア募集に対し、情報を学内掲示およびメール等で学生周知し、ボランティア参加学生を募る。その結果を、地域の依頼団体へ連絡する。

3. 事業実施状況

地域からの学生募集の実績(平成27年3月31日現在):センター窓口を通じての依頼は、65件であった。

4. 成果

学生にとっては、地域からのボランティア情報を受け取ることができ、ボランティア参加へのきっかけにつながっている。地域からは、学生のボランティア募集の窓口として依頼しやすい。学生と地域をつなげる役割を果たしている。

5. 課題

地域からのボランティア依頼が多く、内容も多岐にわたる。また、活動時間が夜遅い時間帯までの場合もあり、現在は、申込を受けた段階で検討しながら学生に周知している。ボランティアの募集依頼に対し、受け付ける内容、時間等を少し検討する必要がある。

また学生の休暇期間中の募集、試験期間の募集、クリスマス時期などイベントが重なる時期の募集などは、募集依頼に十分応えられない状況がある。この点については、大学であることを十分に相手に伝えご理解頂いているが、今後も同様に対応する。

I-4. 学生へのボランティア活動の促進:3キャンパス合同学生ボランティア交流会

1. 目的

鳥根県立大学の松江、出雲、浜田の3つのキャンパスは、学部、学科が違うことからそれぞれのキャンパスに特色がある。継続的なキャンパス間の学生交流の一環として、3キャンパス合同でそれぞれのキャンパスの特色を活かしたボランティアを企画、実行することを目的とする。

2. 事業内容

3キャンパスの学生有志で構成されるメンバーが、平成25年度に浜田キャンパスで開催した同交流会の時に企画した事業を、出雲キャンパスで開催した。また、次年度からの交流に向けて、新メンバーも交えて、出雲キャンパスで3キャンパスの学生交流会を行った。

3. 事業実施状況

【みんなでおかしをつくろう!】

1)日時:平成26年6月28日(土) 13:00~16:00

2)場所: 鳶巣コミュニティーセンター(出雲市)

3)参加者: 市内の通所施設に通う発達障がいのある子どもと家族6組

【学生】出雲キャンパス: 8名、浜田キャンパス: 9名、松江キャンパス: 2名 合計19名

【教職員】3キャンパス合計6名

4)内容: お菓子作りとお茶会

各班に分かれて、大学生と子どもと家族で調理をし、一緒にお茶会をして交流をする

5)準備: 遠隔テレビ会議システムを使って3キャンパスをつなぎ数回にわたり検討会をした。また、出雲キャンパス教員が主催する『発達障がいの研修会』に参加し、対象となる児童の理解を進めた。

【3キャンパス合同学生ボランティア交流会in出雲「地連カフェ」】

1)日時: 平成27年1月31日(土) 11:00~16:00

2)場所: 出雲キャンパス 217講義室

3)参加者:

【学生】出雲キャンパス: 8名、浜田キャンパス: 7名、松江キャンパス: 3名 合計18名

【教職員】3キャンパス合計6名

4)内容: 出雲キャンパス施設見学、ワークショップ

4. 成果

「みんなでおかしをつくろう!」の企画においては、学生自らが参加家族の募集のために関連施設に相談や依頼に行くなど、自主的に活動していた。また事前の研修会などにも参加し、企画の実施に向けて準備を進めることができた。

「3キャンパス合同学生ボランティア交流会in出雲『地連カフェ』」においても、学生主導で企画をし、3キャンパスの特色を理解する機会となった他、ワークショップを通じて学生有志での活動をいかに継続していくかについてや、次年度のボランティア企画について、活発な意見が交わされた。

5. 課題

今回の企画は、出雲キャンパス看護学部での実施という特徴から、発達障がいがある児童と家族を対象とした。そのため、障がいの特徴を知ってもらう必要があり、企画にあたりかなり教員が助言をした。交流会の活動は学生主体であることが重要であるが、企画内容によっては教員が助言や支援をする必要があると考える。

Ⅱ. 受託事業および地域活動への学生参加促進

1. 目的

出雲保健所などの受託事業および地域活動への学生ボランティアの参加を促進する。

2. 事業内容

出雲保健所の実施する学生コミュニケーション・ボランティアの補助事業協賛により在宅ボランティア・サークルの学生との連絡調整、学生の参加を促す。

また、地域からの依頼により、「てんしんはん・いなたひめ」などの乳がん・子宮頸がんの検診受診率向上のための啓発活動など学生が主体的に実施する活動を支援する。

3. 事業実施状況

1) 在宅療養者(6名)の自宅に13回訪問し、患者さんやご家族の希望する「楽しみ」、「趣味」、「リラクゼーション」の支援を行った。その他、在宅療養者の理解を深めるための勉強会の実施(5回)、日本ALS協会島根県支部総会の運営に協力した。

3月には、出雲保健所にて島根大学学生に対して活動報告をした。また、本学の学生ボランティア活動の影響で島根大学にも同様なサークルが結成され、来年度は共同でボランティア活動をする予定である。

2)「てんしんはん・いなたひめ」による乳がん・子宮頸がんの検診受診率向上のための啓発活動を行った。

主な活動としては、本学大学祭、松江キャンパス大学祭、斐川健康祭り、女子サッカーイベント(出雲ドーム)、雲南市成人式、出雲市民ボランティアウィーク「まちサポいずも」等イベントでの啓発活動のほか、ゆめタウンでの出雲市役所主催街頭啓発活動等である。

また、啓発に必要な正しい知識を得るための乳がんや子宮頸がんに関する学習会の開催、大学内に検診車を呼び、学生・教職員の検診の機会を設ける活動も行った。

4. 成果

「てんしんはん・いなたひめ」の活動ではこれまで啓発活動を中心に行ってきたが、今年度、がん検診の受診呼びかけだけでなく、子宮頸がん検診車を大学に呼び検診の機会を作れたことが成果である。

5. 課題

地域で活動するには、その前の準備や学習が重要になるために、学生、教員ともに負担がある。今年度は、地域からの要請があるたびに活動するのではなく、学生自身の負担等も考えて、年度の初めに活動の予定を立てて取り組んだ。これにより活動を計画的に展開できた。今後も、学生および教員の負担を配慮した上で計画的に展開していく。

プロジェクト名:教育機関との連携

I. オープンキャンパス・看護セミナー

1. 目的

看護志望の高校生や看護学生への看護情報の提供、看護体験、入試説明、学生との交流をとおり、本学への関心を高めると共に、看護系大学への進学への動機づけを行う。また、参加者の受験他各種の相談に応じる。

2. 事業内容

高校からの依頼に応じた調整、アドミッション委員会を中心とした企画・実施

3. 事業実施状況

1)看護学志望者セミナー

開催日時:平成26年6月14日(土) 9:00~15:00

参加者:松江市内県立高等学校3校の2年生73名、教員6名

内容:看護学の講義、看護技術体験、在学生との昼食による交流

2) オープンキャンパス 1 回目

開催日時:平成26年 8 月19日(火) 13:00~16:30

参加者:看護学部志望者137名、別科助産学志望者30名、保護者68名

内容:看護学部および別科(助産学)説明会、看護技術体験(助産学含む)、キャンパスツアー

3) オープンキャンパス2回目

開催日時:平成26年 9 月20日(土) 13:00~16:30

参加者:看護学部志望者73名、別科助産学志望者7名、保護者37名

内容:看護学部および別科(助産学)説明会、看護技術体験、キャンパスツアー



4. 成果

看護学志望者セミナー・オープンキャンパスの参加者の満足度は、各企画において約9割が「とても良かった」、「やや良かった」と回答したことから高かったと考える。

5. 課題

実施に必要な協力学生の確保の難しさなどの準備段階で課題があったことから、継続的で有意義な実施のためにも、この課題に向けた対策が必須である。

Ⅱ. 高大連携講座

1. 目的

高校教育と大学教育の円滑な接続を目指し、本学が持っている専門的、総合的な教育・研究機能を高校に出向いて講義を行う。このことにより、本学の魅力を高校生に伝えると共に高校生や高校側の受験ニーズを把握する。

2. 事業内容

高校からの依頼の調整、講座担当者による企画・実施

3. 事業実施状況

1) 日程:平成26年7月18日(金)

対象:松江市立女子高等学校 生徒27名

内容:井上千晶講師「新生児への看護とは～赤ちゃん学研究からみえてきたもの～」

2) 日程:平成26年7月22日(火)

対象:島根県立松江東高等学校 生徒44名、
教員1名

内容:長島玲子准教授「ベビーサイエンスと
新生児の看護」

3) 日程:平成26年9月22日(月)

対象:島根県立大社高等学校 生徒27名



内容:別所史恵講師「おしっこに注目～慢性腎臓病のおはなし～」

4. 成果

高大連携講座の内でアンケートを実施した教員による報告では、7割以上の生徒が講座の内容について理解できたと回答し、自由記述では、看護への意欲が高まったとの回答を得ている。

5. 課題

高校生がより関心をもって学習できるテーマについて、情報の収集をしていくことも必要と考える。

Ⅲ. 高校訪問

1. 目的

主として県内の高等学校を訪問して進路担当者との意見交換を行うことで、高校生や高校側の受験ニーズ等を把握する。

2. 事業内容

主として県内の高等学校を訪問、高校生や高校側の受験ニーズ等の把握

3. 事業実施状況

看護学部進学志望者の状況把握ならびに高校側の本学に対する要望等を収集する目的で高校訪問を実施した。8月～9月にかけて島根県内高校(公立(分校含む)・私立)47校ならびに鳥取県西部3校を訪問した。

4. 成果

看護学部説明会で実施した入試分析を中心に高等学校教員との意見交換を行った。入試制度や教育内容について高い評価をいただいた。特に推薦入試で県内生を40名受け入れていることへの評価は、中山間地域の高等学校を中心に評価が高い。また、教育内容でも「島根の地域医療」など、県内を学習フィールドにした講義に評価が高い。入試・教育内容についての評価は、県内高等学校に十分に浸透してきたと思われる。今後は、1期生の国家試験合格率と県内就職の状況(県内就職者の割合、東部偏重でないかなど)に大きな関心を示されている。出口の就職状況が県内に手厚い状況となれば、本学の県内重視の考え方を高等学校へ強く印象づけることができるとと思われる。

5. 課題

高等学校との日程調整が大きなカギとなる。アドミッション委員会の委員で8月下旬から9月中旬までのうちで訪問日程を調整するが、本学教員も秋学期への準備等でなかなか調整が上手くいかない状況があった。今年度も日程調整のできた数名の教員を中心に訪問を実施した。教員の訪問できない日程においては、事務局の活躍が事業に欠かせないため、連携を取り実施していくことが求められる。

Ⅳ. 小中高校等出前講義

1. 目的

小中高校生のための保健医療福祉に関する講義の依頼に応じる。

2. 事業内容

センターあるいは教員に依頼のあった小中高校、及び「出雲市思春期健康づくり推進事業(性・生)の学習」の講師依頼があった場合、講師を調整し講義を実施する。

3. 事業実施状況

表5 平成26年度に実施した小中高校等出前講義

7月4日	島根県教育庁保健体育課	「子どもの健康づくりサポート事業」	高橋恵美子准教授	1～3年生70名、教職員13名	出雲市立国富小学校
7月8日	松江市立湖南中学校	中学校3年生を対象に夏休み前の性に対する指導	嘉藤恵助手	学生176名、教員12名	松江市立湖南中学校
7月24日	島根県教育庁保健体育課	「子どもの健康づくりサポート事業」	高橋恵美子准教授	保護者30名	邑智町中野公民館
8月1日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「いのちの楽習出前講座」	嘉藤恵助手	39名(園児28、保護者他11)	出雲聖園マリア園
9月5日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「いのちの楽習出前講座」	嘉藤恵助手	55名	ねむの木保育園
10月7日	島根県立三刀屋高等学校	「心と性の関する講演会」 「性について一緒に考えてみましょう」	狩野鈴子准教授	2年生167名、教職員16名	島根県立三刀屋高等学校
10月29日	島根県教育庁保健体育課	「子どもの健康づくりサポート事業」	高橋恵美子准教授	5～6年生7名、保護者8名、教員5名	大田市立大森小学校
11月11日	安来市立島田小学校	「メディアと私たちの健康について ～脳科学の面より～」	高橋恵美子准教授	4～6年：100名、保護者：30名、 職員：10名	安来市立島田小学校
11月11日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「いのちの楽習出前講座」	嘉藤恵助手	1年生147名、教員10名	出雲市立平田中学校
11月12日	雲南市立海潮小学校	「子どもの生活リズムと健康」について メディアと上手に付き合おう	高橋恵美子准教授	3～6年：45名、教員・保護者 20名	雲南市立海潮小学校口
11月13日	安来市立社日小学校	メディアに関する授業(ゲストティーチャー)	高橋恵美子准教授	4～6年生:123人 教員:10人	安来市立社日小学校
11月18日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「いのちの楽習出前講座」	嘉藤恵助手	1年生34名、教員5名	出雲市立南中学校
12月10日	雲南市立海潮中学校	「子どもの生活リズムと健康」について	高橋恵美子准教授	1～3年：59名、教員・保護者10名	雲南市立海潮中学校
12月12日	出雲市立四絡小学校	小学生の学力向上につながる生活習慣にまつわるもの	小田美紀子講師	教職員35名	出雲市立四絡小学校
12月5日	出雲市立平田中学校	「メディアが体に与える影響」	高橋恵美子准教授	全校生徒及び保護者：520名	出雲市立平田中学校
12月6日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「いのちの楽習出前講座」	嘉藤恵助手	57名(5歳児クラス(就学前)25名、保護者26 名、教員3名、見学3名)	ハマナス保育園
1月22日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「いのちの楽習出前講座」	嘉藤恵助手	95名(2年生52名、保護者40名、教員3名)	出雲市立塩治小学校
1月30日	出雲市立神原小学校	バースディプロジェクト「生の楽習講座」	嘉藤恵助手	2年生16名、保護者等6名、教員3名	出雲市立神原小学校
1月31日	松江市立八雲中学校	「思春期のこころと体」	狩野鈴子准教授	3年生：54名、教員4名	松江市立八雲中学校
2月1日	大田市立第一中学校PTA	「メディアと健康」	高橋恵美子准教授	2年生160名、保護者・教員15名	大田市立第一中学校
2月5日	松江市教育長	「脳と朝ごはんの関係～みそ汁・魚から」	山下一也副学長	松江市立玉湯小学校・大谷小学校：児童5年 生と保護者	松江市立玉湯小学校
2月17日	出雲市立斐川東中学校	「総合的な学習・プロに聞く」	高橋恵美子准教授	1年生20名程度	出雲市立斐川東中学校
2月20日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「いのちの楽習出前講座」	嘉藤恵助手	小学2年生28名、保護者等20名、教員3名	出雲市立達進小学校
3月3日	島根県助産師会	バースディプロジェクト「誕生日ってなあに？」	嘉藤恵助手	2年生134名、教員6名、学生2名	島根県立出雲工業高等学校
3月5日	出雲市立河南中学校	性教育講演会	狩野鈴子准教授	1年生113名	出雲市立河南中学校

4. 成果

今年度は、25件の講義を実施した。実施した講義においては、主な受講生である児童や生徒からは、講義をきっかけに思ったこと、考えたことがあったとの回答を得ている。

5. 課題

本年度は、時事的な課題であるメディアと健康問題に関するテーマのニーズが多く見られた。このことに伴い担当講師の偏りも生じた。長期的に事業を展開する上で一部教員に負担が集中しないよう調整を図ることが課題である。

V. 小中学校体験学習

1. 目的

小中学生のための保健医療福祉に関連する体験学習等の依頼に応じる。

2. 事業内容

センターあるいは教員にあった小中学校からの依頼を受けて、学内教員で体験学習の内容を調整・計画・準備を行い実施する。

3. 事業実施状況

1) 日程:平成26年11月12日(水)

対象:出雲市立高松小学校 5年生115名

内容:保健福祉体験学習

①高齢者の眼の見え方と指先の動き ②車椅子体験 ③妊婦・新生児の理解

2) 日程:平成27年1月14日(水)

対象:出雲市立神西小学校 3年生35名

内容:体験学習

①ブラインドウオークとてびき ②高齢者の眼の見え方と指先の動き

③車椅子体験

3) 日程:平成27年1月29日(木)

対象:出雲市立西野小学校 3年生98名

内容:体験学習

①ブラインドウオークとてびき ②高齢者の眼の見え方と指先の動き

③車椅子体験



4. 成果

体験では引率教員から「児童は自分の身近にいる存在をあらためて意識することができた」等の評価を得ている。

5. 課題

体験学習では、学習目標と体験内容の決定や準備等のために受付期限の検討も必要と考える。

プロジェクト名:産公学連携

I. 包括協定締結自治体との連携

1. 目的

自治体、関係団体、企業等との連携を図ることにより、地域社会のニーズや課題に対応する事業を協働で企画・実施する。

2. 事業内容

包括連携協定を締結している松江市・出雲市・浜田市及び益田市との連携協定に基づく具体的事業について、個別に協議しながら取り組みを展開する。自治体との協力につい

て、具現化のために学内調査を行い、合意に至った事業から順次実施する。

3. 事業実施状況

1) 出雲市と協働で日御碕地区介護予防教室事業(うみねこの会)

2) 出雲市と協働で児童虐待防止推進研修事業

上記2つの事業を行った。

4. 成果

上記2件の事業については、以下のⅡ-1、Ⅱ-2を参照。

5. 課題

出雲市以外の市との連携を強化していく必要がある。出雲市と協働で行っている2つの事業は数年継続され成果が現れている。浜田市・益田市から共同研究の申し出はあるが、現在のところ、研究テーマのマッチングの課題があり、実現に至っていない。いずれも締結している市からの事業の申し出を待っているだけでなく大学からの働きかけも必要である。

Ⅱ-1. 受託事業:出雲市 日御碕地区介護予防教室事業(うみねこの会)

1. 目的

出雲市と鳥根県立大学出雲キャンパスとの協働により、日御碕地区の高齢者を対象に地域のネットワークを活用した介護予防教室を試行し評価を行う。認知症予防プログラムを軸に介護予防教室を実施しながら地域のネットワークづくり、参加高齢者のニーズの把握、スタッフの育成に重点をおいた活動を行う。

2. 事業内容

1) 期間 : 平成26年4月29日～平成27年3月31日

2) 事業受託費 : 540,000円

3) 関係機関 : 出雲市高齢者福祉課・大社支所市民サービス課、日御碕コミュニティセンター、健康づくり推進委員

4) 出雲キャンパス事業担当者11名

齋藤茂子、山下一也、永江尚美、松本亥智江、伊藤智子、小田美紀子
加藤真紀、祝原あゆみ、小川智子、平塚智子、藤原晃治

3. 事業実施状況 (◆詳細については、平成26年度「うみねこの会報告書」参照)



地元説明会



介護予防教室(回想法)

- 1) 地元説明会 出席者数 16名
- 2) 介護予防教室(ミニ講話・回想法・調査)16回 出席者数:延べ248名
- 3) 研修会 2回 出席者数:延べ72名
- 4) 地元報告会;出席者数 17名

4. 成果

地区のパワフルな女性の皆様の参加により、教室は、毎回笑いとおしゃべりで盛り上がり、介護予防には最適な場づくりができた。参加者は毎回20名弱であったが、ミニ講話は熱心に聞いてくださり、回想法のリードも後半は参加者により上手くできた。事後調査は、3月末日に実施した。今後もコミュニティアセンター事業として継続できるとみられる。

5. 課題

日御碕地区は高齢化率が高まる過疎の地域であることから、参加者の広がりには工夫を加え、地域の高齢者支援ネットワークの充実が図られることを期待する。

II-2. 受託事業:出雲市 児童虐待防止推進研修事業

1. 目的

年々深刻化する児童虐待の現状を市民一人一人が理解し、適切に対応できる力量を高めること、また、児童虐待が複雑、多様化する中で当事者を支援する地域の支援ネットワークづくりの強化が必要とされている。今年度は、日常の親子関係のあり方や虐待を予防する日常の子育て支援について理解を深め、また、保健医療福祉のネットワークづくりの強化に向け、関係者の行動につながる研修会とする。

2. 事業内容

本事業は4年目を迎え、出雲市要保護児童対策地域協議会(事務局;出雲市子育て支援課)と出雲キャンパス(スタッフ11名)の共同により3回の児童虐待対応講座を実施した。会場は、島根県立大学出雲キャンパスの大講義室を利用した。

事業受託費:400,000円

◆詳細については、「平成26年度児童虐待防止推進研修事業報告書第4巻」参照

3. 事業実施状況

1) プログラム概要と参加者数

第1回 日時:平成26年8月17日(日) 13:20~16:30

テーマ:「育てにくい子どもの理解と児童虐待予防」 ○参加者数:125名

第2回 日時:平成26年10月28日(土) 13:20~16:30

テーマ:「愛着形成に必要な親子の関係」 ○参加者数:137名

第3回 日時:平成26年11月22日(土) 13:20~16:30

テーマ:「ともに進める児童虐待防止のネットワークづくり」 ○参加者数:47名



4. 成果

- 1) 児童虐待の現状についての情報提供に努めることで、広く市民の皆様の実態を認識していただく場になっている。
- 2) 年々参加者が微増している。特に、保育所、幼稚園、行政関係者の関心は高くなっている。
- 3) 児童虐待という健康課題の特性から参加者層が厚く、研修の場は、関係機関、関係者のネットワークづくりにつながっている。

5. 課題

次年度は、企画に関係していただく方々を増やし、成果と課題を共有しつつ研修を継続すること、また、市民の皆様のご意見に耳を傾け、児童虐待防止に対する関心と理解を深めていただくための工夫をこらすことに努める。

Ⅲ-1. NPO法人・関係団体・企業との連携：北浜地域包括ケア支援検討会の活動

1. 目的

北浜地域における地域包括ケアシステムづくりの現状と課題を明らかにし、システムづくりの推進を図る。

2. 事業内容

実施主体：北浜地域包括ケア支援検討会

出雲キャンパス担当者：齋藤茂子、山下一也、永江尚美、伊藤智子、加藤真紀、祝原あゆみ
小川智子、安食里美 以上8名

3. 事業実施状況

- 1) 相談窓口：ひかりカフェ；みなとの丘を拠点とし、お互いが認知症や介護への理解を深め、ほっと一息つける場所として活用されている。

2) 研修会の開催

- (1) 第1回研修会 (参加者数 51名)

日時：平成26年4月25日(金) 10:00～11:30

場所：北浜コミュニティセンター

内容：① 講演 テーマ「認知症予防と食事の関連」

講師：島根県立大学出雲キャンパス

副学長 山下一也

② 保健師による健康体操

- (2) 第2回研修会 (参加者数 84名)

日時：平成26年11月7日(金) 14:00～14:30

場所：出雲市立総合医療センター

内容：講演 テーマ

「地域の力を基盤にした地域包括ケアの推進」

講師：島根県益田保健所長 村下 伯氏

- 3) 高齢者を対象とするニーズ調査：検討中



第1回研修会



第2回研修会

4. 成果

北浜地域における高齢者支援の課題が検討会メンバー相互に理解されつつある。地元役員の問題認識と解決に向けた熱い思いがあり、認知症対策を中心に地域のネットワークによるきめ細かい生活面、福祉面に関わる活動が継続されている。

5. 課題

専門職の参加を得ながら、医療や介護ニーズを具体的に把握し、今後の取り組みに反映する。

Ⅲ-2. NPO法人・関係団体・企業との連携：出雲産業フェア2014への出展

1. 目的

NPO法人・関係団体・企業との連携を図る。

2. 事業内容

NPO法人21世紀出雲産業支援センター主催の「出雲産業フェア2014」に出展した。

3. 事業実施状況

- 1) 日時：平成26年11月1日(土)・2日(日) 10:00～16:00
- 2) 場所：出雲ドーム
- 3) 参加者：1日(土) 教職員 7名 学生 3年生2名 2年生1名
2日(日) 教職員 6名

4) 展示内容

2ブース使用 看板は、「島根県立大学 しまね看護交流センター」

■健康コーナー：血压測定・血管年齢測定・体組成測定 測定者にクッキー配布
ぎんざんテレビ出前講座の映像放映 冊子とCD配布

■研究コーナー：・山下一也：えごま化粧品紹介 試供品配布
・加納尚之：ポスター展示
・伊藤智子：ポスター展示

■塗り絵コーナー：オロリンの塗り絵とクレパス設置

■学生の学習活動紹介：学習成果物展示

【配布】

■研究事業一覧・出前講座テーマ一覧・申込書を広報誌オロリンにはさみ配布

■児童虐待防止推進研修の案内チラシ

4. 成果

1) ブースの場所は教育関係ブースの端で目立つ場所であった。健康測定コーナーは、特に血管年齢測定には常に行列ができ、関心の高さが伺えた。2日間で250名程度の測定を行った。また、準備したぎんざんテレビ出前講座の冊子とCDは全部配布できた。

2) 学生参加は、メールの呼びかけ、再度の呼びかけ、実習中の直接の声かけにより3名の参加があり血压測定を主に担当した。参加した学生からは



「たくさんの方の血圧を測定でき勉強になった。技術の向上にもつながった。」との感想があった。

3)塗り絵コーナーも子ども達が熱心に取り組んで家族が測定する間、楽しむことができ効果的であった。

5. 課題

健康コーナーは、今年から行った「血管年齢測定」の人气が高く行列ができた。測定器具の購入と待っている人への対応、測定後のフォロー等準備が必要である。

また、学生の参加を増やすことが課題である。

その他

- 1) NPO法人21世紀出雲産業支援センターの「ものづくりプロジェクト」と大学教員のニーズについて話し合う場を設けた。
- 2) 葉泉スピラエ研究所の山根氏より脱臭剤の紹介があり、サンプルを1ヶ月しまね看護交流センターに置き、教員が試用した結果をまとめ開発の参考にしていただいた。
- 3) 島根県商工労働部産業振興課より奥出雲町の伝統産業である「そろばん」が認知症予防に効果があることを検証するための方法、指標、取り組みについて相談したいと依頼があった。検討中。
- 4) 平成26年11月12日(水)開催の出雲商工会議所主催「第2回まちづくり推進委員会」意見交換会への学生参加の依頼に対し、看護学部3年次生の学生2名、教職員2名が参加した。
- 5) 平成27年2月17日(火)開催の中町商店会(出雲市今市町)による商店街の将来像を考えるビジョンづくりのセミナー(第2回)への学生の参加依頼に対し、看護学部1年次生5名と教員1名が参加した。
- 6) 平成27年3月11日(水)開催の中町商店会による商店街の将来像を考えるビジョンづくりのセミナー(第3回)に、看護学部1年次生4名と教員2名が参加した。

IV. 各種審議会・委員会等への参加

1. 目的・事業内容

教職員が各種審議会・委員等の委員活動を通して地域に貢献する。

2. 事業実施状

平成26年度は、表6のとおり59件の各種審議会、委員会へ所属し、活動を行った。

表6 平成26年度に教員が参加した審議会・委員会

依頼元	名称
出雲市社会福祉協議会	社会福祉法人出雲市社会福祉協議会理事
	出雲市地域福祉計画・地域福祉活動計画推進委員
(財)島根県建築住宅センター	一般財団法人島根県建築住宅センター評議員会委員
(財)島根県環境保健公社	健診データ活用委員会委員
島根県住宅供給公社	島根県住宅供給公社理事
全国健康保険協会島根支部	全国健康保険協会島根支部評議会評議員
島根県藤楓協会	島根県藤楓協会役員

島根県国民健康保険団体連合会	島根県国民健康保険団体連合会保健事業支援・評価委員会委員
(社)日本看護協会	統括保健師人材育成プログラム検討委員会委員
(社)島根県看護協会	島根県看護協会 緩和ケアアドバイザー養成研修プログラム検討委員
	島根県看護協会 緩和ケアアドバイザー養成研修運営委員
	島根県ナースセンター看護相談員
	島根県看護協会 在宅ケア・訪問看護推進委員
	助産師出向支援モデル事業協議会委員
	島根県看護協会 教育事業委員会委員
	島根県看護協会 教育事業委員
	島根県看護協会 学会委員会委員
	島根県看護協会 認定看護管理者教育運営委員会委員
	島根県看護協会 看護師職能委員会委員
(社)鳥取県看護協会	鳥取県看護協会 委員会委員
(社)島根県看護協会出雲支部	島根県看護協会出雲支部役員
ヘルスサイエンスセンター島根	ヘルスサイエンスセンター島根がん対策募金審査委員会委員
厚生労働省健康局長	保健師に係る研修のあり方等に関する検討会構成員
文部科学省初等中等教育局	教科用図書検定調査審議会専門委員
島根県企業局	島根県企業局経営計画評価委員会委員
島根県健康福祉部	島根県障がい者自立支援協議会発達障害者支援部会委員
	島根県自死総合対策連絡協議会委員
	島根県自立支援協議会 退院支援部会委員
	島根県福祉サービス第三者評価推進委員
	介護職員の行う医療的ケア関係業務に関する検討委員
	島根県介護保険審査会委員
	島根県社会福祉審議会委員
	島根県准看護師試験委員
	島根県がん対策推進協議会委員
	島根県緩和ケア総合推進委員会委員
平成26年度島根県看護教員継続研修検討会委員	
島根県商工労働部	島根県土地開発公社役員
島根県環境生活部	島根県人権施策推進協議会委員
島根県土木部	島根県立都市公園指定管理業務評価委員
	島根県河川整備計画検討委員会委員
	島根県建築審査会委員
	島根県都市計画審議会委員
	第4期島根県立都市公園指定管理者候補選定委員会委員
島根県出雲県土整備事務所	出雲地区新型インフルエンザ等対策推進会議構成員
島根県立青少年の家	島根県立青少年の家運営委員会委員
島根県立中央病院	地域医療支援病院運営委員会委員
	島根県立中央病院臨床研究・治験審査委員会委員
出雲市健康福祉部	出雲市子ども・子育て会議委員

	出雲市認知症高齢者支援強化検討会委員
	出雲市介護保険運営協議会委員
	出雲市地域福祉計画・地域福祉活動計画推進委員
	出雲市健康のまちづくり推進会議及び食育のまちづくり推進会議委員
出雲市文化環境部	出雲市男女共同参画推進委員
	出雲市生涯学習委員
	出雲市環境審議会委員
出雲市都市建設部	出雲市建築審査会委員
出雲市教育委員会	出雲市特別支援教育推進委員会委員
大田市市民生活部	大田市生涯現役・いぶし銀が支えるまちづくり推進協議会委員
島根県立松江南高等学校	松江南高等学校評議員

プロジェクト名: 広報・広聴活動

I-1. ホームページ等を活用した最新情報発信

1. 目的

センター事業の全体を把握し、情報発信の方針に基づきタイムリーに情報の精選と発信を行う。

2. 事業内容

地域連携推進部の事業内容について適宜ホームページにアップするよう、各事業担当者に働きかける。

3. 成果

地域連携推進部の事業の内容について、ホームページ上にタイムリーにアップし、取り組みについて広く紹介することができた。

4. 課題

活動内容がわかりにくい事業もあるため、ホームページ上の地域連携推進部の事業の項目を開くと、その事業についての紹介にすべてつながるようにするなど、工夫をしていく必要がある。

I-2. ホームページ等を活用した最新情報発信: I Z UキャンLife

1. 目的

島根県立大学出雲キャンパスの教員、学生達が、FMラジオを通じて、等身大の話題や「看護学部」としての活動、研究内容等の情報を広く届けることにより、地域住民の方々に出雲キャンパスをより理解していただく機会とする。さらに、学生が「社会に向けて発信する」ことの楽しさ、難しさを学ぶことにより、人材育成を図る。

2. 事業内容・実施状況

出雲キャンパスの教材編集室スタジオにおいて、番組を収録し、FMいずも(80.1MHz)で、毎週金曜日の20時30分～21時に「I Z UキャンLife」という番組名で放送している。毎

回、山下一也副学長と2、3名の学生が出演し、毎週様々な学生生活などのテーマを取り上げ、学生の視点でメッセージを発信している。

3. 成果

出雲キャンパスの取り組みや学生生活、学生が興味・関心を持っていること等を発信することにより、本学のアクティビティを広くご紹介するラジオ広報を行っている。

4. 今後の方針

今後、本学のいろいろな研究室、サークルなどを訪問し、普段、素朴に思う本学の「なに？なぜ？どうして？」を分かりやすく紹介していく予定である。

Ⅱ. 出雲キャンパスモニター会議

1. 目的

近隣地域および本キャンパス卒業生・修了生から成る出雲キャンパスモニターの方々へ、本キャンパスの運営や事業、安全確保について説明し、理解を深めていただくと同時に、出された意見を本学の今後の活動に反映させることを目的とする。

2. 事業内容

しまね看護交流センターの紹介、平成25年度の本キャンパス卒業生、修了生の就職、進学、国家試験状況、教育内容に関する説明、並びに年間行事の説明、本学に関する意見交換、モニターへの委嘱状交付。

3. 事業実施状況

1) 第1回出雲キャンパスモニター会議

(1) 日時：平成26年6月3日(火) 10:00～11:30

(2) 場所：島根県立大学出雲キャンパス 213講義室

(3) 参加者：出雲キャンパスモニター(近隣地域モニター8名、卒業生・修了生モニター1名)、しまね看護交流センター長、看護学部長、教務部長、学生生活部長、地域連携推進委員会委員、事務室長、管理課長、教務学生課長(合計23名)

2) 第2回出雲キャンパスモニター会議

(1) 日時：平成27年3月9日(月) 15:00～16:30

(2) 場所：島根県立大学出雲キャンパス 217講義室

(3) 参加者：出雲キャンパスモニター(近隣地域モニター6名、卒業生・修了生モニター1名)、しまね看護交流センター長、看護学部長、教務部長、地域連携推進委員会委員、事務室長、管理課長、教務学生課長(合計25名)

4. 成果

本キャンパスの教育や地域への活動を説明することにより、本キャンパスに対するモニターの方々のご理解が得られた。「学生と交流できる運動系サークルは何か」、「シミュレーション教育の内容を教えてほしい」、「大学祭をPRする工夫をしてはどうか」等、積極的な質問や意見をいただき、有意義な意見交換の場となった。



5. 課題

卒業生・修了生モニターの出席が少なかったが、勤務の都合や大学から遠いという地理的な要因のために参加が困難な状況もあるが、卒業生・修了生モニターの意見も把握し、大学運営に反映できるように工夫をしていく必要がある。又、モニターの方々に本キャンパスの教育、運営を更に理解していただくために、授業見学にとどまらず、一緒に参加していただく等、本キャンパスとの交流の機会を増やしていく必要がある。

次年度からは、近隣モニターの地域を5地域に拡大し、会議の充実を図る。

Ⅲ. 第4回島根県立大学出雲キャンパス タウンミーティングin川本町

1. 目的

川本町の保健医療福祉の取り組みや成果・課題を、町民・保健医療福祉の関係者・大学が共有し、これからの人材育成について意見交換を行う。

また、出雲キャンパスは、出された意見を今後の大学運営に反映する。

2. 事業内容

川本町町長 三宅実氏より、「健康でいきいきと暮らせるまちをめざして」～健康な暮らしのための力量形成を支援するために～、社会医療法人仁寿会加藤病院院長 加藤節司氏より「川本町のための医療活動」、出雲キャンパス2年次生 鉄森友梨より、「川本町フィールド学習に参加して」と題して話題提供を行った。後半は、「町民のニーズに応える生活習慣病予防(一次予防から三次予防)」をテーマに、安田育子氏(川本町健康福祉課課長補佐)、左山篤氏(社会医療法人仁寿会加藤病院保健師)、杉本悦子氏(川本町食生活改善推進協議会会長)の3名のパネリストの方々からの話の後、川本町民、医療従事者、大学関係者を交え、意見交換を行った。

3. 事業実施状況

1)日時:平成27年2月11日(水) 13:30～16:30

2)場所:邑智郡川本町 すこやかセンターかわもと

3)参加者:川本町民、保健・医療・福祉・教育関係従事者、行政関係者、高校生

山下副学長、吉川学部長、齋藤しまね看護交流センター長、梶谷AD副センター長、

松村事務室長、地域連携推進委員会(しまね看護交流センター地域連携推進部)委員92名

4. 成果

町民の方からは生活習慣病予防のために町民が取りかかりやすい運動環境の整備をして欲しい、川本町保健医療福祉専門職育成プログラムを作りたい、などの意見が出された。その他、商工会から生活習慣病予防のためのエゴマ商品の紹介や、今後の終末期医療について加藤病院の院長から説明があった。アンケートの結果では95%が内容に満足した、と回答していた。「自分の健康や地域の保健医療を考えることができた」



「学生が地域へ出て学び、将来を考えていくということは素晴らしいことだと改めて感じた」などの感想があった。

5. 課題

参加者の方々からいただいた意見を大学運営に反映していくとともに、出雲キャンパスの学生や高校生の参加も促進し、多様な世代間の意見交換が必要である。広報活動に苦慮した。町の関係者と議論しながら企画するプロセスがあると相互に収穫があると考えられる。今後、生活習慣病の継続した取り組みが課題である。

Ⅳ. シニア・ジュニアキャンパスツアー

1. 目的

ツアーをとおしてキャンパスの広報活動を行うとともにシニア・ジュニアの健康学習の場とする。

【シニアキャンパスツアー】

1. 事業内容

しまね看護交流センターの紹介、ミニ講話「がんのピアサポート」聴講、施設見学

2. 事業実施状況

- 1) 日時:平成26年5月14日(水) 10:15～11:15
- 2) 場所:島根県立大学出雲キャンパス内
- 3) 参加者:「おおなん元気サロン」関係者10名、地域連携推進委員担当者、平野教授(講師)
(合計12名)

3. 成果

しまね看護交流センターの紹介や、キャンパスツアーをとおして大学の事業への理解を深めてもらうと同時に、健康に関する講義の聴講によって、新しい知見を得てもらう機会となった。



【ジュニアキャンパスツアー】

1. 事業内容

本キャンパスの説明、質疑応答、施設見学(図書館、実習室、食堂)

2. 実施状況

- 1) 日時:平成26年6月24日(火) 9:00～11:00
- 2) 場所:島根県立大学出雲キャンパス内
- 3) 参加者:出雲市立北陽小学校2年生65名、引率教員、地域連携推進委員担当者

3. 成果

生活科「町たんけん」の授業の一環で訪問され、図書館や食堂、演習の様子を熱心に見学し、積極的な質問もみられた。大学での勉強や生活を知ること、小学生の早い段階から医療へ関心をもつ機会となったと考える。

4. 課題

ジュニア・シニアキャンパスツアーの応募はそれぞれ1件のみと少なく、今後多くの方に本キャンパスについて知っていただき、あるいは健康学習や社会学習として活用して

いただくためにも、ホームページやチラシ等で広くPRしていく必要がある。

V. 施設開放

1. 目的

地域や関係団体等の研修会や会議の開催に必要な施設や備品等について依頼に応じて開放する。

2. 事業内容

依頼に応じて、随時調整し対応する。

3. 成果

施設開放実績(平成26年4月～平成27年3月31日現在)

利用件数:44件、利用延べ人数:6,277名

4. 課題

今年度も多くの方に施設を利用していただくことができた。しかし、施設利用について、土、日の開放時や料金等について外部の方に情報がわかりにくい面があるため、ホームページでの紹介を行い、一層施設開放をPRしていく必要がある。

《松江キャンパス》

平成26年度 公立大学法人島根県立大学
地域連携推進センター松江キャンパス運営会議 名簿

(任期：平成 26.4.1～平成 27.3.31)

職 名	氏 名	備 考
教 授	小泉 凡	<ul style="list-style-type: none"> ・しまね地域共生センター長 ・地域連携推進センター副センター長 ・地域連携推進委員会委員長
准教授	籠橋 有紀子	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携推進委員会委員 ・地域連携コーディネーター (COC 研究紀要)
准教授	福井 一尊	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携推進委員会委員 ・地域連携コーディネーター (教育機関連携)
准教授	工藤 泰子	<ul style="list-style-type: none"> ・地域連携推進委員会委員 ・地域連携コーディネーター (公開講座連携・学生ボランティア推進)
管理課長	岩本 幸治	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局委員
嘱託員	藤原 香緒里	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局委員
ソーシャルラーニング・ コーディネーター	赤名 文	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局委員(学生ボランティア推進担当)
しまね地域 共生センター	片寄 成美	<ul style="list-style-type: none"> ・健康栄養学科専門コーディネーター
	山尾 淳子	<ul style="list-style-type: none"> ・保育学科専門コーディネーター
	小倉 佳代子	<ul style="list-style-type: none"> ・総合文化学科専門コーディネーター
	鳴尾 朋子	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局委員

平成26年度 松江キャンパスの地域連携活動概要

平成26年度の松江キャンパス地域連携推進センターでは、公開講座・教育機関連携・学生地域ボランティア活動の推進の3つを軸に活動した。正課授業・卒業プロジェクト・サークル活動を通して、あるいは学科、グループ・個人の単位でも活発な地域貢献活動が行われた。

また、平成25年度に文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の採択を受け、平成26年4月1日よりキャンパス・プラットフォーム「しまね地域共生センター」を2号館3階に設置し、地域連携活動の窓口の一本化をはかり、地域志向の研究と教育活動の推進につとめた。以下の目次に従って、松江キャンパスの地域貢献活動をまとめることにする。

- 1.地域連携推進委員会の活動
- 2.地域に関する教育・研究活動
- 3.公開講座・講演会等の開催
- 4.地域活性化支援
 - (1)企業・団体・NPO法人等との連携
 - (2)自治体等との連携
- 5.学生による地域貢献活動
- 6.教育機関等との連携－保・幼・小・中・高・大の教育連携
- 7.教育課程のための地域の施設・機関との連携
- 8.おはなしレストランライブラリーの地域連携活動

26年度の特筆すべき活動は、「しまね地域共生センター」を設置し活動を開始したことだ。5月14日にはオープニング記念講演会を開催。松江市出身の玄田有史氏(東京大学社会科学研究所教授)による記念講演「希望のしまね、しまねの希望」で、今後の活動の指針を確認することができた。6月28日には「ご縁の国しまね観光コンベンションin松江」をくにびきメッセ国際会議場で開催し、石森秀三氏(北海道開拓記念館館長)の基調講演やパネルディスカッションを通して、島根の豊かな地域資源を存分に活かした観光のあり方を考えた。平成27年2月12日には、従来の松江市に加え、その他の自治体・団体を含めたCOC教育連携協議会を実施、また、3月6日にはCOC研究連携協議会を開催し、しまね地域共育・共創研究助成金の採択者による地域志向研究の発表を行った。さらに研究成果の一部は『しまね地域共生センター紀要』0号、1号により公表した。

地域志向の研究や授業の進展に伴い、地域で学ぶ姿勢が学科を超えて浸透しつつある。25年度に開始したキラキラドリーム・プロジェクトでは、26年度は学生による地域企業への積極的な働きかけにより、産学連携商品や旅行会社と連携した着地型観光プランも実現をみた。恒例の公開講座「椿の道アカデミー」は、14講座(25年度は12講座)となり、延べ参加者数も25年度より約300名増加した。会員制度を導入当初減少した参加者数も徐々に回復しつつあり、喜ばしい兆しである。

今後も、「地域をキャンパスに」「キャンパスを地域に」の精神を念頭に置き、地域のニーズにこたえる地域貢献活動を継続していきたい。

しまね地域共生センター センター長 小泉 凡

1. 地域連携推進委員会の活動

松江キャンパスにおいては、地域連携推進委員会の活動内容を「公開講座および学生ボランティア活動の推進」「教育機関・その他高大連携および地域志向教育の推進」「地域志向研究の推進」の3部門に分け、それぞれ委員により窓口を分担した。

- ・委員長(地域連携推進センター副センター長) 小泉 凡(総合文化学科教授)
- ・公開講座・学生ボランティアの推進 工藤泰子(総合文化学科准教授)
- ・幼稚園のぎ・乃木小学校・湖南中学校・松江商業高等学校との三者連携を含む教育機関とその他高大連携および地域志向教育推進
福井一尊(保育学科准教授)
- ・『しまね地域共生センター紀要』発行を含む地域志向研究の推進
籠橋有紀子(健康栄養学科准教授)

2. 地域に関する教育・研究活動

【地域志向科目の位置づけ】

平成26年度授業計画書には以下の授業を「『地(知)の拠点整備事業』における地域に関する学修を行う授業科目一覧」と位置付け授業計画書に掲載し、地域志向教育の推進をはかった。

平成26年度「地(知)の拠点整備事業」における地域に関する学修を行う授業科目一覧
健康栄養学科

分野区分		科目名
専門科目	専門基礎	栄養士スキルⅠ
		栄養士スキルⅡ
	食品と衛生	食品機能論
	地域と食生活	地域の特性と食材利用
	卒業研究	卒業研究

保育学科

分野区分		科目名
専門科目	福祉	地域福祉論
		社会的養護

総合文化学科

分野区分		科目名
共通専門科目	世界を知る	アジア文化交流
	山陰を知る	小泉八雲入門
		へるん探求
		へるん作品鑑賞
		島根の祭りと芸能
		山陰の民話とわらべ歌
		出雲古代史

文化資源学系	地域を「知る」「考える」	地域文化研究
		地域探検学
	地域を「歩く」「書く」	しまねツーリズム論
		住生活学
英語文化系	英語とコミュニケーション	文化とガイド
	英語コミュニケーションの実践	観光フィールド・トリップ
日本語文化系	日本のことばと文学	日本古典文学入門
		日本古典文学を歩く
	日本の文化と歴史	松江の文化と歴史
		しまね歴史探訪

【履修証明プログラム開発】

拠点となるキャンパス・プラットフォーム「しまね地域共生センター」を開設した。

研究に関しては「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を目指すことを掲げた大学憲章に合わせ、「健康・保育・文化・観光」の専門分野を活かした共同研究の推進、さらにその成果を活かした履修証明プログラムの開発に着手した。

- ・関係各機関への連携協力依頼
- ・e-ラーニングの素材となる動画の撮影

【しまね地域共育・共創研究助成金】

平成26年度には松江キャンパスから地域活動経費に5件、しまね地域共創基盤研究費に6件の応募があり、11件すべてが採択された。(53頁～63頁、77頁～87頁参照)

この助成金で行う研究については成果報告を3月の「研究連携協議会」で発表した。

【しまね地域共生センターオープニングセレモニー】



5月14日(水)に、本学大講義室でオープニング・セレモニーを開催した。内容はしまね地域共生センター概要説明・記念講演・鼎談・センター見学会の4部構成。記念講演講師は「希望学」という新たな分野を切り拓いた、松江市出身で東京大学社会科学研究所教授の玄田有史氏で、「希望のしまね、しまねの希望」と題して講演いただいた。他キャンパスにも講義中継

システムで配信され、参加者約320名は「挫折や試練といった困難を希望につなげていくヒント」を示唆された。「希望活動人口」「希望トリトリプロジェクト」など興味深いキーワードも参加者を魅了し、今後の活動の指針を確認することができた。講演に引き続き、玄田有史氏・本田雄一学長・小泉凡センター長の3名による鼎談も行われた。

【ご縁の国しまね 観光コンベンションin松江】

6月に総合文化学科教員を中心にして「島根の宝-資源-を世界に発信！」をテーマに観光による地域の魅力発信を目的として開催した。北海道開拓記念館館長の石森秀三氏による基調講演とパネルディスカッションで構成された1部と、2部では有福神楽保持者会による石見神楽公演が実施された。県外からの参加者もあり、参加者数は200名となった。



▲基調講演 石森秀三氏



▲石見神楽の公演

【『しまね地域共生センター紀要』vol.1の発刊】

平成25年度の研究連携協議会での発表を掲載した創刊0号に続いて、今年度は、本学教員11名の研究の成果報告を1号にまとめた。地域一般の方も手に取りやすいデザインと構成を目的としつつも、既出のものに遜色ない「紀要」が完成した。

【『地域研究と教育』vol.3の作成】

平成26年度に行った事業である「ご縁の国しまね 観光コンベンションin松江」の開催報告を

はじめ、地域と共同した研究や地域とつながる授業の近年の取り組みを紹介している。写真を多く掲載し、目でも楽しみ、広報にも向いた冊子が完成した。



▲しまね地域共生センター紀要vol.1



▲地域研究と教育vol.3

【研究連携協議会】

平成27年3月にしまね地域共育・共創研究助成金採択研究の成果を報告し、「共育・共創」について57名の出席者が耳を傾けた。

学外の2名のコメンテーターからは、全ての研究報告についての貴重な意見と感想をコメントいただいた。

報告は以下のとおりである。

<研究報告>

- ・西条ガキ熟柿ピューレの省力化生産技術の開発／赤浦和之教授
- ・国体候補高校生に対する食事調査・栄養診断・栄養指導事業／酒元誠治教授
- ・しまね和牛肉の食肉加工方法の検討について～加工材料の検討～／籠橋有紀子准教授
- ・「出雲国風土記」の英訳研究／松浦雄二教授
- ・大学付属の児童図書専門図書館の調査～おはなしレストランライブラリーの有効活用に向けて～／マユアキ教授(研究代表者:岩田英作教授)
- ・学生の視点を活かした観光振興の可能性を探る～雲南市吉田町を事例に～／工藤泰子准教授

<ポスター紹介>

- ・島根県産つや姫の生産・販売拡大に向けた取り組み／名和田清子教授
- ・有機農業推進のための技術開発プロジェクト・将来のしまね農業を支える商品づくりプロジェクト／名和田清子教授
- ・島根の伝統工芸の体験と英語による情報発信／ラング クリス講師

<「さんいんびより」発刊の紹介>

- ・山陰の特徴景色を題材とした写真作品による地域文化資源意識の定着に向けて～島根県・鳥取県全38市町村の今日的姿を絵画的に撮影した作品集の印刷・製本および啓発活動から～／福井一尊准教授

<コメンテーターからのコメント>

- ・島根県立農林大学校 校長 吉田政昭 氏
- ・松江市観光協会 観光文化プロデューサー 高橋一清 氏

3. 公開講座等の開催

【平成26年度公開講座の概要】

生涯教育、地域教育の拠点として、松江キャンパスの魅力づくりを図るため導入した「椿の道アカデミー」会員制度は、平成26年度で4年目となった。

「椿の道アカデミー」における各講座は、それぞれの趣旨や内容により、通常複数回の講義や実習等を提供し、受講者数も独自に定めている。平成26年度は、合計14講座90回を開講し、申込者数は362名、会員登録者数は339名であった（「平成26年度公開講座会員登録者数」参照）。申込者の約94%が会員登録をした結果となった。なお、「山陰民俗学会連携講座：民俗の行方～山陰のフィールドから考える～Part2」、「民族音楽の楽しみ：ガムラン教室」、「椿の道読書会」そして「健康栄養講座：高齢者の食と健康」が、「まつえ市民大学」連携講座の一部であることから、この市民大学関連の受講生も上記中の該当講座を受講している。

平成25年度は、公開講座の参加者数が延べ1,968名であったが、平成26年度は2,270名と増加した。会員制度を導入した平成23年度には減少した参加者数も、徐々に回復してきている。平成26年度公開講座の開催状況については、一覧表を208頁に掲載している。

平成26年度 公開講座会員登録者数（H27,3月末）

講座名	定員	申込	登録	登録率
1. 総合文化講座	100	113	110	97%
2. 源氏物語を読む	100	100	100	100%

3. 風土記の語る神話	100	129	129	100%
4. 椿の道読書会	15	19	16	84%
5. 子どもがいる家庭のための英語教育実践講座	10	29	21	72%
6. 英語絵本の音読を楽しもう	10	14	14	100%
7. ～続～子育て・孫育て世代のための子ども理解講座	15	20	19	95%
8. 健康栄養講座:高齢者の食と健康	20	30	28	93%
9. 栄養士のためのステップアップ講座	40	26	25	96%
10. 山陰民俗学会連携講座	100	28	29	104%
11. 民族音楽の楽しみ	25	18	16	89%
12. 子どもの困った行動に対処する養護・保育のスキルアップ講座	20	8	8	100%
13. 案外知っているようで知らない「人」の話	20	55	35	64%
14. 文化資源探求講座:①松江ゴーストツアー	25	26	23	88%
14. 文化資源探求講座:②出雲の弥生遺跡を歩く	50	73	68	93%
合計	650	688	641	93%
申込者実数	*	362	339	94%

【現任者向けの養護・保育のスキルアップ講座】

子どもの困った行動に対処する養護・保育のスキルアップ講座:コモンセンス・ペアレンティング



▲子どもの困った行動に対処する養護・保育のスキルアップ講座の様子

学童保育、幼児教育、相談援助などを行っている専門職の方々に加えて、子育て真っ最中のお母さんも交えながら、アメリカ生まれの子育て支援プログラム(コモンセンス・ペアレンティング)を学んだ。参加者は学びの内容をロールプレイで練習するとともに、職場や家庭で宿題として実践した。このような具体的、実践的な学習方法を採用していることがCSPの特徴と言える。ロールプレイを行い、宿題を報告しあうことで、参加者同士の心の距離

も縮まり、楽しく学ぶことが可能となる。講座の参加者は8名と少数であったものの、和気あいあいとした雰囲気の中で全8回を終えることができた。

【栄養士のためのステップアップ講座】

管理栄養士国家試験の合格を目指す栄養士の卒後教育として、島根県内の栄養士を対象として開催した。ここ五年間の延べ参加者は100名を超えた。本学HPの在学生・卒業生総合

支援web『Camellia(カメリア)』に質問掲示板を立ち上げ、日程が合わない、遠方で来られないという方でも、随時質問ができるよう対応した。合格後も情報提供を希望する人が多く、卒業後や国家試験合格後も繋がりを絶やすことなく、地域に貢献できる講座を目指している。

【民族音楽の楽しみ:ガムラン教室】

17年目を迎える「民族音楽の楽しみ」は、10年目頃から「ガムラン(インドネシアの青銅製の打楽器オーケストラ)」に特化して開講している。民族音楽の鑑賞だけでなく、松江市八雲町の古民家「秋奥ガムラン音楽堂」を会場に、皆で楽器を演奏して曲を仕上げていくという初心者向けの体験型の講座を行った。講師は元本学教授で、全12回開催した。ガムランは、舞踊劇やワヤン(影絵芝居)にも使われており、講座ではガムラン演奏だけでなくワヤンにも挑戦した。来年度からは初心者講座と中・上級者講座の2講座を開設し、グローバルであると同時に、地域に根ざしたローカルな活動をめざす。

【文化資源探求講座】

学外に出て、山陰の文化資源を五感で観察、探求しようという趣旨の講座で、参加者のご要望にこたえて平成26年度は、2講座を開講した。

①松江ゴーストツアー:8月8日(金)16:00-21:20
小泉八雲が採集、再話した怪談の語りを堪能する夜の文化探訪バスツアーで、NPO法人松江ツーリズム研究会と連携して平成26年度に初めて開講した。小泉凡教授の講演と松江の郷土料理もあわせて楽しんだ。参加者数は18名。



▲西谷墳墓群(出雲市)

②出雲の弥生遺跡を歩く:11月3日(日)に実施。NPO法人出雲学研究所会員で元山陰中央新報社論説委員の岡部康幸氏と小泉凡教授が講師として同行した。山陰を代表する四隅突出型墳墓の西谷墳墓群、出雲弥生の森博物館、荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡など出雲の弥生時代の遺跡群を中心にバスツアーを行った。参加者数は39名。

【客員教授による講演会の公開】

平成26年度は各学科で客員教授による講演会を実施し、椿の道アカデミー会員や一般に公開した。各学科の客員教授講演会の概要は以下のとおりである。

①健康栄養学科

日時:平成26年11月9日(日)

講師:京都府立大学大学院教授 木戸康博氏

テーマ:「栄養士・管理栄養士のこれまでとこれから」



▲客員教授講演会 木戸康博氏

参加者：学生83名、教職員12名、学外専門職
50名 合計145名

②保育学科

日時：平成26年11月29日(土)

講師：山梨大学大学院教育研究科教授
中村和彦氏

テーマ：「今、子どもたちに何が必要か-幼児
期運動指針の意図すること-」

参加者：学生、教員、学外専門職、行政関係者
合計180名



▲客員教授講演会 中村和彦氏

③総合文化学科

日時：平成26年11月19日(水)

講師：東京大学大学院人文社会系研究科(文
化資源学)教授 木下直之氏

テーマ：「『裏返る町』-ショッピングモールから
考えるこれからの風景-」

参加者：学生155名、教職員22名、地域の方々
5名 合計182名



▲客員教授講演会 木下直之氏

4. 地域活性化支援

(1) 企業・団体・NPO法人等との連携

松江キャンパスにおいては、平成26年度もNPO法人等、学外団体との協力を継続的に推進した。今年度は、健康栄養学科による食育推進での連携活動、島根県特産品の振興を図る取組み、総合文化学科の「おはなしゼミ」による県内各地での読み聞かせ活動等、多彩な連携事業を実施した。

平成26年度松江キャンパス学外団体との共催事業及び学外団体との協力事業

事業名称	本学担当者	事業内容	期間	参加者	備考
しまね地域共育・共創研究助成金	健康栄養学科 教授 赤浦和之	西条ガキ熟柿ピューレの省力化生産技術の開発	平成26年度		健康栄養学科教員と企業との共同事業 健康栄養学科学生2名参加
島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金(地域貢献プロジェクト)	健康栄養学科 教授 赤浦和之	西条ガキ冷凍熟柿および冷凍ドライ熟柿生産技術の開発	平成26年度		健康栄養学科教員と企業との共同研究 健康栄養学科学生2名参加
島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金(地域貢献プロジェクト)	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	しまね和牛を利用した高齢者向けの食肉開発 ～理化学分析による検討～	平成26年 4月～平成 27年3月		健康栄養学科2年生1名参加島根県畜産技術センターとの共同研究
島根県畜産技術センター 受託研究	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	新たな評価基準「保水性」に着目したおいしい「しまね和牛肉」の生産に係る牛肉品質の評価	平成26年 7月～平成 27年3月		健康栄養学科2年生1名参加島根県畜産技術センターとの受託研究
しまね地域共育・共創研究助成金	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	しまね和牛肉の食肉加工方法の検討について ～加工材料の検討～	平成26年 4月～平成 27年3月		健康栄養学科2年生1名参加加工生産者との連携による
産学官連携による「しまね三昧リエット(仮称)」の考案・試作	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	「しまね三昧リエット(仮称)」の考案・試作	平成26年 5月～平成 27年3月		健康栄養学科2年生3名参加

事業名称	本学担当者	事業内容	期間	参加者	備考
産学官連携企画 「しまね三昧リエット(仮称)」の考案・試作の販売に向けた試食会実施(島根県、島根県畜産技術センター、JAしまね雲南地区本部、いずも八山椒との連携企画)	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子 事務局 管理課 長 岩本幸治 教務学生課主任 主事 雪吹重之	「しまね三昧リエット(仮称)」の考案・試作の販売に向けた試食会実施	平成27年 3月24日		健康栄養学科2年生3名参加 島根県、島根県畜産技術センター、JAしまね雲南地区本部、いずも八山椒との連携による
島根の「つや姫」マイスター第4回集合研修	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	おいしさの見える化 情報提供(研究発表)	平成26年 12月5日		しまね地域共生センター コーディネーター1名参加
島根米食味向上の取り組み(全国農業協同組合連合会)	健康栄養学科 准教授 籠橋有紀子	島根米食味向上の取り組みへの技術協力	平成26年 12月2日		全国農業協同組合連合会からの依頼
松江東高校男子バスケットボール部および松江商業高校女子バスケットボール部	健康栄養学科 教授 酒元誠治 准教授 籠橋有紀子 助教 水珠子	バスケットボール部員の食事調査と身体計測を組み合わせた、競技力向上への取り組み	平成27年 1月～3月		健康栄養学科卒論生6名参加
しまね地域共育・共創研究助成金	健康栄養学科 教員	島根県産「つや姫」の生産・販売拡大に向けた取り組み	平成26年度		健康栄養学科教員と島根県・島根県農業技術センターとの共同研究 健康栄養学科学生が参加
平成26年度牛乳・乳製品利用料理コンクール 島根県大会	健康栄養学科 教授 名和田清子	開催支援	平成26年 10月5日		健康栄養学科学生5名 ボランティア
しまね地域共育・共創研究助成金	健康栄養学科 教授 名和田清子 しまね地域共生センター 健康栄養学科 コーディネータ 片寄 成美	有機農業推進のための技術開発プロジェクト 将来の島根農業を支える商品づくりプロジェクト	平成26年度		島根県農業技術センターとの共同研究 健康栄養学科学生が参加
平成26年度「わが家の一流シェフin島根」料理コンクール	健康栄養学科 教授 名和田清子 しまね地域共生センター 健康栄養学科 コーディネータ 片寄 成美	開催支援	平成26年 11月30日		健康栄養学科学生12名 ボランティア

事業名称	本学担当者	事業内容	期間	参加者	備考
炎症性腸疾患患者会 陽だまりの会	健康栄養学科 教授 名和田清子	研修会の開催支援及 び講師	平成26年 10月4日	13名	健康栄養学 科学生2名 ボランティア
炎症性腸疾患患者会 はなみずきの会(浜田 保健所)	健康栄養学科 教授 名和田清子	研修会の開催支援及 び講師	平成26年 12月7日	10名	
炎症性腸疾患患者会 県央保健所	健康栄養学科 教授 名和田清子	研修会の開催支援及 び講師	平成26年 9月28日	9名	
炎症性腸疾患患者会 倶楽部UCD(出雲保健 所)	健康栄養学科 教授 名和田清子	研修会の開催支援及 び講師	平成26年 7月27日	24名	健康栄養学 科学生1名 ボランティア
第41回小児糖尿病大 山サマーキャンプ	健康栄養学科 教授 名和田清子	第41回小児糖尿病大 山サマーキャンプの開 催支援	平成26年 8月3日～ 8月10日		健康栄養学 科学生2名 ボランティア
岡山県立美術館	保育学科 准教授 福井一 尊	本学協賛事業として 「目の目、手の目、心の 目」展に出品及び関連 行事を実施した。	平成26年3 月14日から 平成27年4 月19日	一般 公開	
NPO法人松江ツーリ ズム研究会	総合文化学科 教授 小泉 凡	同NPO法人が管理・ 運営する小泉八雲記 念館の顧問として、企 画展「ヘルンと家族」 の展示・キャプション 作成の監修を行う。ま た、ミステリーツアー (年2回)、平成27年度 から開始の着地型観 光プラン「八雲の KWAIDAN散歩」の ガイド研修講師(3回) をつとめる。	平成26年4 月～平成27 年3月	ミステ リーツ アー参 加者 約80名	
焼津市教育委員会	総合文化学科 教授 小泉 凡	焼津小泉八雲記念館 の名誉館長として、焼 津ゴーストツアー(8月 2日)、講演会「怪談四 代記―八雲のいたずら 」(8月3日)、文芸作品 コンクールへのメッ セージ執筆、27年度企 画への助言等を行う。	平成26年4 月～平成27 年3月	参加者: 講演会 40名・ ゴース トツ アー 23名	
「子ども塾―スーパ ーヘルンさん講座―」 (松江市観光振興部観 光文化課主管・子ども 塾実行委員会主催)	総合文化学科 教授 小泉 凡	子どもの五感力を育 む教育実践第11回「子 ども塾」を実施・運営 し、塾長をつとめる。 テーマは子ども耳袋in 松江。島根大学附属 小学校の教員、作家 の木原浩勝氏らと連 携して実施。	平成26年4 月～平成27 年3月 7月25日、7 月28日、7月 31日	参加者 10名	

事業名称	本学担当者	事業内容	期間	参加者	備考
小泉八雲110年祭まつえ実行委員会(松江市観光振興部観光文化課主管)	総合文化学科 教授 小泉 凡	同事業の実行委員長として朗読座「日本の面影」公演(6月27日・28日)、小泉八雲朗読ライブ(9月14日)などの企画・運営に携わる。	平成26年4月～平成27年3月		
アイリッシュ・フェスティバル in 松江 2015 (松江市観光振興部国際観光課主管、アイリッシュ・フェスティバル実行委員会主催)	総合文化学科 教授 小泉 凡 准教授 工藤 泰子	3月8日開催の同事業の実行委員長・委員として企画・運営にあたる。	平成26年10月～平成27年3月	パレード参加 300名	総合文化学科学生10名参加
Cafe×Bar灯 Cafe×Bar灯 実行委員会	総合文化学科 講師 山村桃子	カラコロ工房での日本舞踊	平成26年6月7日		日本舞踊サークル部員5名参加
松江水燈路 松江市観光振興公社	総合文化学科 講師 山村桃子	堀川遊覧野点船におけるお茶席	平成26年10月18日、19日		茶道部員10名参加
松江水燈路 松江市観光振興公社	総合文化学科 講師 山村桃子	松江歴史館での日本舞踊	平成26年10月18日、19日		日本舞踊サークル部員5名参加
おとめ在月 山陰中央新報社	総合文化学科 講師 山村桃子	おとめ茶会におけるお茶席	平成26年11月8日、9日		茶道部員10名参加
とんど祭 国尾自治会(浜乃木七丁目)	総合文化学科 講師 山村桃子	運営補助ボランティア	平成27年1月11日		ボランティアサークルvolcano部員7名参加
松江神在月だんだんウォーク 株式会社メディアスコープ	総合文化学科 教授 岩田英作 講師 山村桃子	運営スタッフボランティア	平成26年11月8日、9日		総合文化学科1,2年生33名、健康栄養学科1年生6名、計39名参加
NPOプレーパークてんとう虫主催出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	出雲市斐川町の古民家「てんとう虫の家」で、一般の親子づれを対象に、読み聞かせの実践を行った。	平成26年5月24日	10名	総合文化学科2年生4名
出雲郷公民館出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	出雲郷地区の子供たちを対象に読み聞かせを行った。	平成26年7月26日	50名	総合文化学科2年生2名
古志原公民館出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	古志原地区の子供たちを対象に読み聞かせを行った。	平成26年9月6日	50名	総合文化学科2年生4名
松江スティックビルおもちゃのひろば出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	松江地区の子供たちを対象に読み聞かせを行った。	平成26年9月8日	10名	総合文化学科2年生3名

事業名称	本学担当者	事業内容	期間	参加者	備考
大田市立温泉津図書館出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	温泉津の子供たちを対象に読み聞かせを行った。	平成26年 9月20日	5名	総合文化学科2年生2名
鳶巣コミュニティセンター出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	鳶巣幼稚園の園児を対象に読み聞かせを行った。	平成26年 10月25日	30名	総合文化学科2年生2名
大田市立仁摩図書館出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	仁摩の子供たちを対象に読み聞かせを行った。	平成26年 11月1日	30名	総合文化学科2年生3名
仁多カルチャープラザ出前シェフ	総合文化学科 教授 岩田英作	仁多の子供たちを対象に読み聞かせを行った。	平成26年 12月6日	10名	総合文化学科2年生3名

【健康栄養学科の地域活性化支援】

健康栄養学科においては、青年期への食育推進活動として、島根県主催平成26年度「わが家の一流シェフin島根」料理コンクールの開催協力や食育ホームページの開設を行った。また、乃木小学校の5年生を対象として「からだのリズムと朝ごはん」について食育を行った。

さらに、平成26年度牛乳コンクール(島根県牛乳普及協会)(10月5日、於 島根県立大学短期大学部松江キャンパス)では、学生5名がボランティアを務めた。

島根県産品の振興を図る取り組みとしては、西条柿熟柿ピューレを利用した食品開発、西条柿冷凍熟柿および冷凍ドライ熟柿の開発および西条ガキ熟柿ピューレの省力化生産技術の開発、しまね和牛のおいしさの科学分析、およびその成果を活かした食品加工への提案、出西生姜や米味噌とのコラボレーションによる食品開発等を行った。また、島根県産米「つや姫」の分析、有機農業産物、オリジナル品種(品目)の食味に関する分析を行った。



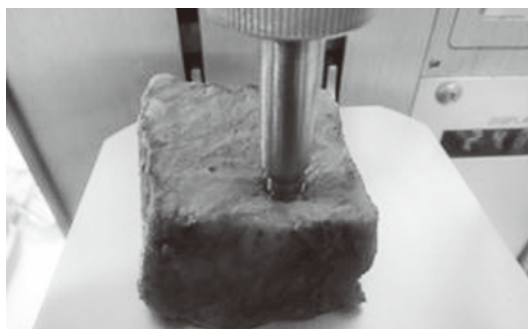
▲熟柿ピューレを用いた「酢(し)まね柿サイダー」と柿果汁入り飲料「酢まね柿っこ」

西条柿熟柿ピューレを利用した食品開発では、松江市東出雲町の柿農家と健康栄養学科教員(赤浦和之教授)および学生3名が協力し、松江市商工企画課の支援も受けて熟柿ピューレを用いたドレッシングおよび秋鹿ごぼうと熟柿ピューレ入りキーマカレーの商品化に取り組んだ。これらのうちキーマカレーの商品化は見通しがつき、平成26年1月22日にレトルトカレーとしての試食会が開催された。次年度ではあるが新商品発売が予定されている。

また、島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金を受け、東出雲町の柿農家と健康栄養学科教員(赤浦和之教授)が共同開発した西条ガキ冷凍熟柿の発表会が、平成26年6月24日松江市庁舎で行われた。さらに、学生2名と冷凍ドライ熟柿の開発も行い、得られた成果の一部を卒業研究発表会において発表した。しまね地域共育・共創研究助成金を受けた事業では、学生2名が協力して西条ガキ熟柿ピューレの省力化生産技術の開発を行い、その成果は生産現場で省力化技術として実用化されている。次年度も引き続き、地域の活性化の観点から、西条柿では、西条ガキ熟柿の生産技術の開発と熟柿ピューレを用いた加工食品の開発を行う。

「しまね和牛肉」の食味研究では、新たな評価基準「保水性」に着目したおいしい「しまね和牛肉」の生産に係る牛肉品質の評価について、健康栄養学科教員(籠橋有紀子准教授)および学生1名が島根県畜産技術センターとの受託研究において協力し、官能試験および理化学分析を用いて「しまね和牛肉」の食味を科学的に評価し、データの提供を行った。また、島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金(地域貢献プロジェクト)において、出西生姜の機能性を生かした食肉の加工方法に関する技術提案に健康栄養学科教員(籠橋有紀子准教授)および学生1名が参加した。また、しまね地域共育・共創研究助成金事業において、しまね和牛肉の食肉加工方法および加工材料の検討を出西生姜の機能性を生かした食肉の加工方法に関する技術提案に健康栄養学科教員(籠橋有紀子准教授)および学生3名が行った。松江市西長江エコ米グループおよび島根大学生物資源科学部と健康栄養学科教員(籠橋有紀子准教授)および学生1名との連携により、有機農産物の中でも今年度より有機米に着目し、食味について官能評価、理化学分析を行い、試食販売等にその成果を活用した。

また、しまね和牛肉、出西生姜、有機米について行った卒業研究の成果を活かし、健康栄養学科教員(籠橋有紀子准教授)および学生3名は、「しまね三昧リエット(仮称)」の考案・試作を行い、島根県、島根県畜産技術センター、JAしまね雲南地区本部、いずも八山椒との連携により、平成27年3月24日に「産学官連携企画「しまね三昧リエット(仮称)」の販売に向けた試食会」を開催した。試食会では、「しまね三昧リエット(仮称)」の紹介と研究内容発表、リエットを活用したメニューの試食を行った。次年度以降も引き続き、「しまね和牛肉生産技術の開発および品質評価手法の検討」を目的として、「しまね和牛肉」の食味について理化学分析および官能評価等の手法を用い、基礎データの集積・提供および加工に関する技術協力を行う。また、研究成果を活用方法の提案および加工食品の開発を行う。



▲「しまね和牛肉」の理化学分析(左)および官能試験(右)の様子



▲「産学官連携企画「しまね三昧リエット(仮称)」の販売に向けた試食会」の様子

島根県産米「つや姫」の科学分析では、温暖化により品質の低下している平坦地域の「コシヒカリ」に替わる米として、「つや姫」の普及拡大を目的に、島根県、島根県農業技術センターと共同で官能試験、理化学分析(電子顕微鏡で炊飯米断面の構造を観察、テンシプレッサーで炊飯米物性(粘りと硬さ)を機械的に測定)を行った。有機農産物の分析では、有機栽培のトマトとオリジナル品種のメロンの官能評価を行った。次年度も、「島根県産つや姫の美味しさに関する研究」を目的として、「つや姫」の食味に与える効果について、官能試験等の手法を用いて検討し、データの提供・技術協力を行う。

このほか、また、バスケットボール部員の食事調査と身体計測を組み合わせた、競技力向上への取り組みを健康栄養学科教員(酒元誠治教授)および学生6名が松江東高校男子バスケットボール部および松江商業高校女子バスケットボール部と連携して行った。

また、難病患者会の活動支援のため、健康栄養学科教員および学生がボランティアとして活動した。[炎症性腸疾患患者会研修会「陽だまりの会(松江市)」(10月4日、教員1名、学生2名)、「はなみずきの会(浜田市)」(12月7日、教員1名)、「大田市」(9月28日、教員1名)、「倶楽部UCD(出雲市)」(7月27日、教員1名、学生1名)、小児糖尿病患者会「第41回小児糖尿病大山サマーキャンプ(主催:日本糖尿病協会島根県支部「大山家族)」(8月3日～10日、教員1名、学生2名)]。

【保育学科の地域活性化支援】

保育学科においては、福井一尊准教授が、島根県保育所(園)・幼稚園造形教育研究会顧問として県内保育所・幼稚園に連携協力し、平成26年11月21日に本学で園児の絵画作品審査会を実施した。同審査により選ばれた園児の作品は、島根県立美術館で平成27年1月15日から19日まで「第10回島根県保育所(園)・幼稚園造形作品展」として展示・公開された。また、島根県西部からの入選作品は、1月22日から25日まで浜田市世界こども美術館でも展示・公開された。

また福井一尊准教授は、平成26年12月3日に社会福祉法人島根県社会福祉協議会主催の「平成26年度島根県障がい者アート作品展」において、審査委員長として絵画・書・写真・デザイン・工芸等作品の公開審査を行った。本展覧会は12月6日から8日まで島根県立美術館で開催された。

また、平成23年度に山下由紀恵教授・森山秀俊教授・福井一尊准教授が、NPO法人あしぶえ・松江市健康福祉部子育て課との共同研究を通じて開発した「松江発ー保育専門職のための『表現とコミュニケーション』ワークショップ・プログラム」の効果を土台として、昨年度に引き続いて本

年度も保育学科の正課「児童文化」にNPO法人あしぶえによるワークショップを組み込み、一部連携した授業を実施した。

【総合文化学科の地域活性化支援】

総合文化学科では、しまね多文化共生ネットワークとの共催による「医療英語勉強会」(ラング クリス講師)の開催、英語絵本の読み聞かせ(小玉容子教授)、卒業プロジェクトおはなしゼミによる読み聞かせボランティアの実施(岩田英作教授)、NPO松江ツーリズム研究会と連携した文化資源をツーリズムに生かす実践活動(小泉凡教授)、(社)鉄の歴史村地域文化研究所・(株)吉田ふるさと村と連携した観光教育の実践(工藤泰子准教授)など、昨年度に引き続き、活発な活動が行われた。

*「キッズイングリッシュ」の英語絵本読み聞かせ活動

平成26年度の「キッズイングリッシュ」(担当は小玉容子教授、キッド ダスティン講師、総合文化学科2年前期)受講生33名は、おはなしレストランライブラリーで「英語絵本の読み聞かせ」を行った。6月から10月にかけて、絵本や紙芝居の読み聞かせと歌や手遊びなどを組み合わせ、20分程度の時間で計20回実施した。



学生たちは、出版されている絵本だけでなく、授業で作成した教材なども用いて、児童英語教育実践活動を行うことができた。子供たちだけでなく保護者も一緒になっての活動となった。また、学生の実践力向上にとって貴重な体験となった。

*医療英語勉強会

「医療英語勉強会」は、島根に住む外国人を対象とした医療通訳育成・技能向上を目的として実施中の事業である。しまね多文化共生ネットワークと連携し、平成20年4月から平成27年3月にかけて、月に一度金曜日の午後2時間ほど勉強会を実施している。勉強会参加者は、10名程度である。(担当はラング クリス講師)

勉強会では、実際の医療場面を想定したテキスト文の日本語から英語への翻訳学習を行ない、診療科ごとの通訳会話役割練習を行なう他、医療に関する研究報告をビデオでみてから、ディスカッションすることで、医療英語を身につけることを目的とした。

*おはなしゼミによる読み聞かせボランティアの実施

総合文化学科の卒業プロジェクト「おはなしゼミ」(担当は岩田英作教授)の学生たちは、毎週金曜日、松江市立忌部小学校で読み聞かせの活動をしている。この取組みは、平成21年度から継続して行われており、1学年20名程度のクラスで、全学年で絵本を開いて子どもたちと向き合っている。

*ミステリー・ツアーの企画・実施

昨年度に引き続き、島根の文化資源をツーリズムに活用する実践としてミステリー・ツアー

を企画・実施した。実施日は9月13日(土)で、訪問先は参加者に事前に明かさない。小泉凡教授がNPO法人松江ツーリズム研究会旅行事業部と連携して企画・運営・当日の講師をつとめた。26年度は、金屋子神社、羽内谷鉄穴流し跡地、大原新田、櫻井家住宅など安来市山間部と奥出雲町のたたら製鉄ゆかりの地を訪問した。39名が参加した。

*吉田町における観光教育の実践

工藤泰子准教授は、昨年度に引き続き、地(知)の拠点整備事業平成26年度しまね地域共育・共創研究助成金を受け、「学生の視点を活かした観光振興の可能性を探る一雲南市吉田町を事例に」と称した活動を行った。吉田町の地域活性化に取り組む(一社)鉄の歴史村地域文化研究所、(株)吉田ふるさと村の人々と連携した観光教育を実践した。

*松江カラコロ工房の実態調査

「まちづくり学」(総合文化学科2年後期選択科目、担当は工藤泰子准教授)の履修生22名と有志学生9名(計31名)は、NPO松江ツーリズム研究会の依頼を受け、施設来訪者のヒアリング調査を実施した。10月3日(土)、4日(日)に来訪者273名を対象に調査した後、グループに分かれてデータの入力・分析を行い、12月18日に報告会を実施した。調査結果は報告書にまとめ、関係機関に配布した。



(2) 自治体等との連携

松江キャンパスは、平成19年度に松江市との連携協力協定を締結し、その後は協定を踏まえ、教育連携協議会の開催や、「公開講座」でまつえ市民大学と連携するほか、松江市主催行事に本学教員と学生が協力するなど連携を強化している。正課教育において、松江市職員を非常勤講師とする複数の専門科目講義・実習、松江市立施設・学校における実習も継続して実施している。

【松江市主催文化教育行事への協力】

・「第11回子ども塾―スーパーヘルンさん講座」への協力

松江市観光文化課および「子ども塾実行委員会」主催による、子どもの五感力育成の教育実践である標記事業に、総合文化学科の小泉凡教授が塾長として、小倉佳代子学科専門コーディネーターが企画・運営・実施に協力した。期間は、平成26年7月25・28・31日、会場はカラコロ工房周辺。

・小泉八雲110年祭まつえ実行委員会への協力

総合文化学科小泉凡教授は、松江市観光振興部観光文化課主管の同事業の実行委員長として朗読座「日本の面影」公演(6月27日・28日)、小泉八雲朗読ライブ(9月14日)、ヘルンさんに手紙を書こうプロジェクト(2月28日表彰式)などの企画・運営に携わる。

・「アイリッシュ・フェスティバル in 松江 2015」への協力

松江市・(財)松江市観光開発公社・松江商工会議所・山陰日本アイルランド協会・南殿町商店街が実行委員会を組織してアイルランドと松江の文化交流・松江の文化振興および中心市街地活性化の目的で実施する行事で、平成27年3月8日に開催。

総合文化学科小泉凡教授・工藤泰子准教授・小倉佳代子地域連携コーディネーターが実行委員として、松江キャンパスのティンホイッスル・サークル、総合文化学科1・2年生約10名の学生がボランティア・スタッフとして参加した。

・「共創・協働マーケット」

松江をよくする提案を共有し事業につなげる場として、松江市主催「共創・協働マーケット2015松江」(2015/02/19)が今年度初めて開かれた。学外からは、大学への求めを知る機会となり、大学からは、しまね地域共生センターおよび学生ボランティア活動、おはなしレストランライブラリーの紹介を中心に、大学にできることの可能性を広報した。

【自治体と連携した共同研究】

・平成26年度は、島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金を受け、健康栄養学科教員および学生が、松江市と共同で、食育の地域貢献プロジェクト「大学、行政、地域の連携による、青年層への食育プログラムの開発」を行った。

・『松江市史』の執筆協力

総合文化学科工藤泰子准教授は、『松江市史(近現代通史編)』(平成31年出版予定、担当部署:松江市資料編纂室)における、戦前・戦後の松江の観光に関する研究・執筆の協力を行っている。

・山下由紀恵教授は、総合文化学科の鹿野一厚教授、保育学科の矢島毅昌講師、同福井一尊准教授と共同で、平成25年度より引き続き、島根県立大学北東アジア地域学術交流研究助成金による共同研究「地域資源と協同的体験を保育教育課程に生かす『ふるさと教育』の研究 - 島根県益田市モデル -」を実施した。完成年度となる平成26年度も、益田市保育研究会、益田市教育委員会、益田市市民活動推進協議会、NPO法人アングンテ21、島根県教育委員会、島根県中山間地域研究センター等と連携して研究を行った。平成27年1月12日には、島根県芸術文化センターグラントワにて、NEAR共同プロジェクト最終成果報告会が開催された。報告会は、益田市保育研究会によるふるさと教育報告会「保小連携の取組みと可能性」と学外コアメンバーの無藤隆先生(白梅学園大学大学院教授)による講演会「最初の15年間の教育をどう組み立てるか」(参加者約100名)、ならびに併設ギャラリーでの展示会「子どもたちの活動Outcomeアート展」で構成され、自治体と連携した共同研究の成果が多様な内容・形式にて発表された。

【松江市成人式実行委員会への協力】

総合文化学科2年の福島瑞生氏は平成27年松江市成人式実行委員会の委員長として総合文化学科2年の平田春陽氏は委員として、同実行委員会の企画・運営に携わった。

【松江市立女子高等学校との連携】

・松江市立女子高等学校によるキャンパス見学と卒業生交流会

松江市立女子高等学校1年生のキャリア教育推進に協力して、1年生全員(106名)のキャンパス見学会を実施した。平成26年10月21日14:30から16:40まで、施設見学と模擬授業を実施した。模擬授業は、地域連携推進委員会から小泉凡教授により「妖怪学入門」というテーマで行われた(会場:大講義室)。講義後に同じ大講義室で、松江市立女子高等学校卒業の本学学生(5名)との交流会があり、質疑応答が行われた。

【正課授業における連携協力】

・保育学科専門科目における、学外の専門職現任者および経験者による講義——保育学科専門科目「障害児保育Ⅰ」(1年後期必修科目・1単位)の非常勤講師として、松江市立発達・教育相談支援センター所長の河井克典講師、同指導主事の金山由美子講師、松丘加奈講師、山根司津子講師により、支援の必要な子どもの実態や松江市の取り組み・関係機関との連携等についての講義が行われた。保育学科専門科目「児童館(児童クラブ)の機能と運営」(1年後期選択科目・2単位)の非常勤講師として、松江市立東津田児童館の石倉優子講師により、実際の児童館活動に関する講義が行われた。保育学科専門科目「乳児保育」(2年前期必修科目・2単位)の非常勤講師として、元松江市子育て支援センター所長の井上恵美子講師により、長年にわたる豊富な現場経験を基に講義が行われた。保育学科専門科目「地域福祉論」(2年後期選択科目・2単位)の非常勤講師として、元松江市社会福祉協議会常務理事の須田敬一講師により、松江市における地域福祉の実践例を通じた講義が行われた。

・総合文化学科専門科目においては、以下の通り、学外の専門職現任者および経験者による授業や協力が行われた。「しまねツーリズム論」(文化資源学系2年後期選択科目・1単位)の学外講師として、島根県商工労働部観光振興課誘客推進グループリーダーの石橋睦郎氏、松江市産業観光部国際観光課長の宮廻智美氏が授業(各1回)を担当した。また現地研修において、「地域探検学」(文化資源学系1年生前期選択科目・1単位)では奥出雲町地域振興課、「日本文化演習」(日本語文化系2年生前期選択科目)では島根県立美術館、「ミュージアム論」(文化資源学系1年生後期選択科目)では島根県立美術館と松江歴史館の全面的な協力を得て授業を実施した。

・松江市立施設・学校における実習協力——健康栄養学科・保育学科の専門科目実習について、松江市立病院、松江市立学校給食センター、松江市立保育所、松江市立幼保園のぎ、松江市立幼稚園が協力し、実習指導を行っている(実習欄に別掲)。

・松江キャンパス近辺の幼・小・中学校との密接な連携協力——学生ボランティアが、松江市立幼保園のぎ、松江市立乃木小学校、松江市立湖南中学校等と、教育上の密接な連携協力を行っている。

このような緊密な教育上の連携を踏まえて、平成27年2月12日に包括協定を結ぶ松江市と「松江市・島根県立大学短期大学部松江キャンパス・教育連携協議会」、併せて、その他の自治体・団体との「島根県立大学短期大学部松江キャンパス・教育連携協議会」を開催し、実習協力や講師

派遣について実務的に連携を協議した。実施要綱は、以下のとおりであった。

【平成26年度 松江市・島根県立大学短期大学部松江キャンパス教育連携協議会】

実施要綱

1. 目的

- ・平成19年度の「松江市島根県立大学包括協定」にもとづく相互協力の趣旨に基づき、松江市と松江キャンパスの具体的な教育連携事業を見直す。
- ・年度末に、次年度のスムーズな相互協力関係に向けて、教育連携事業における実務的な協議を実施する。

2. 主催 島根県立大学短期大学部松江キャンパス

3. 会場 島根県立大学短期大学部松江キャンパス大会議室

4. 日時 平成27年2月12日(木) 13時30分～14時30分

5. 議題

- ・実習(栄養士・保育士・幼稚園教諭)受け入れ協力についての情報交換
- ・講師の相互派遣についての計画
- ・共同研究・受託研究について
- ・施設使用の協力についての計画
- ・その他

6. 松江市側参加者

- ・政策部政策企画課副主任 大塚裕理(包括協定担当)
- ・松江市教育委員会 教育総務課長 須山敏之
- ・健康福祉部 子育て課長 岩田光弘
- ・産業観光部 観光文化課長 二村 眞
- ・松江市発達・教育相談支援センター(エスコ)所長 河井克典

7. 松江キャンパス側参加者

- ・副学長 山下由紀恵
- ・健康栄養学科長 名和田清子
- ・保育学科長 岸本 強
- ・総合文化学科長 鹿野一厚
- ・地域連携推進センター副センター長 小泉 凡
- ・地域連携推進センター(教育連携担当) 福井一尊
- ・事務室長 樋野輝男
- ・管理課長 岩本幸治

【平成26年度 島根県立大学短期大学部松江キャンパス・教育連携協議会】

実施要綱

1. 目的

- ・年度末に、次年度のスムーズな相互協力関係に向けて、教育連携事業における実務的な協議を実施する。

2. 主催 島根県立大学短期大学部松江キャンパス

3. 会場 島根県立大学短期大学部松江キャンパス大会議室

4. 日時 平成27年2月12日(木) 14時40分～15時40分

5. 議題

- ・フィールドワークの受け入れ協力についての情報交換
- ・本学授業への講師派遣と次年度授業の計画
- ・共同研究・受託研究について
- ・施設使用の協力についての計画
- ・その他

6. 教育連携関係団体および参加者 ※順不同

- ・特定非営利活動法人あしぶえ 有田 幸
- ・奥出雲町地域振興課 樋口正弘
- ・一般社団法人 鉄の歴史村地域文化研究所 高木朋美
- ・NPO法人 松江ツーリズム研究会 山下武之
- ・出雲市地域づくりアドバイザー 吾郷秀雄

7. 松江キャンパス側参加者

- ・副学長 山下由紀恵
- ・健康栄養学科長 名和田清子
- ・保育学科長 岸本 強
- ・総合文化学科長 鹿野一厚
- ・総合文化学科教授 工藤泰子
- ・地域連携推進センター副センター長 小泉 凡
- ・地域連携推進センター(教育連携担当) 福井一尊
- ・しまね地域共生センター学科専門コーディネーター 山尾淳子・小倉佳代子
- ・事務室長 樋野輝男
- ・管理課長 岩本幸治

5. 学生による地域貢献活動

【学生の自主的なボランティア活動】

平成22年度より、島根県立大学「学生地域ボランティア活動推進事業」の一環として、学生のボランティア保険加入を支援している。26年度の学生のボランティア保険加入は、498名。また学生の活動先は、以下のとおりであった。

●障がい者・高齢者支援ボランティア

「東部島根医療福祉センター」「松江医療センター」「かんどの里」ほか

●障がい児支援ボランティア

「ふるさとあったかスクラム事業」「児童発達支援センターわっこ」ほか

●島根県立青少年の家(サン・レイク)ボランティア

●松江市立幼保園のぎボランティア

「のぎっこまつり」「運動会・園児援助」

●保育所・幼稚園・学童保育ボランティア

県内外の幼稚園・保育所・小学校(個人)

「放課後のぎっこ広場」「安来市立十神小学校」「みのり黒田保育園」ほか

●災害ボランティア

東日本大震災「島根県災害ボランティア隊」(岩手県沿岸部)

●「アイリッシュ・フェスティバルin松江」運営補助

●「第11回子ども塾－スーパーヘルンさん講座」運営補助

●「第12回松江神在月だんだんウォーク」運営補助

●「松江シティフットボールクラブ」試合運営

●「第21回2014松江市環境フェスティバル」運営補助

●「米-1グランプリ2014」運営補助

●「第8回ひらた100km徒歩の旅」運営補助

●「平成27年松江市成人式」企画運営

●「古事記・神話ふるさとフェスティバル2015」運営補助

●一畑電車「クリスマス・トレイン」企画運営

この他、島根県内外の多くの地域イベントや保育園(所)・幼稚園、小学校、公民館などにおいて、個人でボランティア活動を行った。また障がい児とその家族を対象とした学生自主企画「おかしをつくろう」をハートピア出雲の協力のもと実施した。

【キラキラドリームプロジェクト】

今年度で2回目となるキラキラドリームプロジェクトは、学生が企画する独創的なプロジェクトに対して、大学が費用を補助し、夢の実現を応援している。学生の自主性・積極性・創造性を思う存分発揮できる機会を提供し、より



充実した学生生活を送ってもらうことを目的としている。平成26年度は5組の団体が公開審査会でプレゼンテーションをおこない、4組の事業が採択された。

● 平成26年度の採択プロジェクト

✓ ドリーム枠(30万円)

◇Let's 縁きりふれっしゅ ～松江ではじまる新しい自分旅～

松江市立女子高校時代に「観光甲子園」でグランプリを受賞した旅行企画を大学で実現化する。嫌な自分と縁を切り、新しい自分に生まれ変わってもらう、「自分を変える旅」をし、参加者に松江の魅力を再発見してもらう。

✓ キラキラ枠(10万円)

◇食育ボードゲーム製作プロジェクト

健康栄養学科の学びを活かして、小学生向け食育ボードゲームを製作し、食育について遊びながら楽しく学んでもらう。そのための普及活動もおこなう。

◇怪談スイーツプロジェクト

小泉八雲の怪談にまつわるお土産を開発し、松江の観光を盛り上げる。

✓ 審査員特別賞(20万円) ※一般社団法人松江観光協会からの寄附金

◇島短活性化大作戦

島根県立大学短期大学部の広報チームを結成し、大学の魅力や地域の魅力を女子学生目線で発信する。また、大学に近い玉造温泉街の学生向けフリーペーパーを作ったり、プロモーション映像を制作しインターネット配信をおこなう。

● 審査会の様子



▲プレゼンテーションに向けて、入念な準備をして挑みます。会場は熱気に包まれ、真剣そのものです。



▲自分たちの夢を語り、全てを出し切った後の安ど感で思わず笑みがこぼれます。

採択プロジェクトのうち、産学協同で怪談のお土産作りをおこなった「怪談スイーツプロジェクト」の活動内容を紹介します。当プロジェクトは、小泉八雲の怪談に関連したお土産を開発することで、より怪談のふるさと松江を楽しんでもらい、松江の観光を盛り上げるという企画。商品コンセプト、ネーミング、パッケージデザイン等を学生が考案し、中浦食品株式会社の協力で商品化が実現した。

ゴーストみやげ研究所「怪談スイーツプロジェクト」

● メンバー

総合文化学科1年 大峠百花・伊藤瑳紀・佐々木麻衣・佐々木七海・香川詩保里

● チーム名

ゴーストみやげ研究所

● 概要

怪談にまつわる観光地が松江ゴーストツアーなどで紹介されているにも関わらず、松江には怪談のお土産がない。そこで目をつけたのが松江といえば「和菓子処」ということ。そして松江の観光で注目されてきている「怪談」。この二つを合わせて怪談にまつわるお菓子を企画したい！と思いついた。そして怪談といえば、本学教授の、小泉八雲のひ孫、小泉凡先生。

先生のもとでお菓子と怪談をコラボさせることができるのは私たちだけ。そんな小泉先生のもとで怪談のお土産を企画し、販売することで松江を怪談のふるさととして盛り上げるお手伝いをしていこうと思いついた。



▲ゴーストみやげ研究所の
ロゴマーク

● 活動内容

お菓子のテーマ決めから製作へ

松江＝怪談や松江＝小泉八雲を知らない人にも興味をもっていただけるよう、認知度の高い怪談のお話を題材にしたいという思いがあった。そこで、テーマは「耳なし芳一」にすることに決めた。

次に、地元で多くのお土産を作っておられる実績のある中浦食品株式会社さんに相談したところ、快く引き受けてくださり、今回の企画が実現した。

耳なし芳一の話に登場する、芳一の耳を題材にすることが決まってからお菓子の種類を決めたが、まんじゅうとクッキーでとても悩んだ。まんじゅうだと耳の形がとてもリアルになってしまい、手にとりにくくなってしまわないか。多くの方に手にとっていただくためにはどのような工夫が必要なのかを中浦食品さんと相談した上で今回のお菓子が出来上がった。



いちじく味にした理由は、いちじくの産地島根町は小泉八雲が好んだ加賀の潜戸があり、小泉八雲と関わりがあったから。耳なし芳一のお話で芳一は琵琶法師なので枇杷(ビワ)味という案もあったが、試食をした上でいちじく味に決定した。

パッケージデザイン

ターゲットに据えた20代から30代の怪談好きな女性に喜んでもらう、ということに加え、怪談に興味のない方にも手にとってもらいやすいお土産を目指した。怪談っぽさを残しつつ、親しみやすさを表すために、メンバー間で“渋かわいさ”をコンセプトにイメージを検討した。デザインは、地元のデザイン会社、あしたの為のDesignに依頼をした。

購入していただいたお客様に、「この商品を手にしたからこそ得られた」と思える情報も届くように、パッケージや同梱するしおりを工夫した。怪談は怖いだけでなく、哀しく美しいもの。そのことをパッケージデザインとしおりで伝えようと努力した。



▲「ほういちの耳まんぢう」パッケージ

いよいよ発売開始の記者会見

小泉八雲の命日であり、「ほういちの耳まんぢう」発売開始日とした9月26日に、小泉八雲旧居前の、八雲の銅像の前で記者会見をおこなった。中浦食品株式会社の鷗鶴専務をはじめ、小泉凡先生にも出席いただいた。ゴーストみやげ研究所のメンバーは、一人ひとり商品開発で自分が力を入れた部分などを説明した。記者会見の前には、劇団幻影舞台の清原真様に「耳なし芳一」の朗読をしていただき、小泉八雲の怪談の世界観を感じた後で記者会見に臨むことができた。多くの報道関係者にお越し頂くことが出来た。



試食販売

発売開始記者会見の翌日、先行販売を始めた島根県物産観光館で店頭販売をおこなった。試食を薦めたり、どういうお菓子なのか説明をしたりと初めてのことで戸惑いながらの店頭販売だった。テレビやラジオ、新聞等の報道を見て、知っていてくださっている方が多かったのが印象的であった。



飛鳥祭

初めて自分たちだけで販売をしたので、手順も分からずバタバタしながらの販売だった。あまり売れないと思っていた箱入りのほうが思いのほか売れ、両日共に完売状態となってしまう、買えなかった方も多くおられたのが申し訳なかった。準備が不十分で、途中にお金を崩して両替に充てたり、買い出しに出掛けたりしてしまっただが、今後につながる課題を見つけることができた。



今後に向けて

年末に、今後の「ほういちの耳まんぢう」の展開について中浦食品株式会社の鷗鶴専務とお話をした。イベントや売り場でのお客様の反応を商品にフィードバック出来たらと思う。

ゴーストみやげ研究所としては、第2弾の商品開発や、ホームページ・SNSを使って情報発信をするなど活動を続けていきたい。



学生のコメント

【総合文化学科1年 大峠百花】

大学に入ったら、島根県のお土産を作りたい！と考えていたので、夢を叶えることができ本当に嬉しかったです。しかし、初めての商品開発と代表という立場は、決して簡単なものではありませんでした。商品開発で一番苦労したことはスケジュール管理です。約2か月という限られた時間の中で、自分たちの納得のいくものを作ることはとても大変なことでした。スケジュール管理を怠ったせいで、つきつめることができなかった点もあり、悔しい思いをしました。また、企業の方にも無理を言ってたくさん迷惑をかけてしまいました。このような経験から、スケジュール管理は起こりうる事態を想定しながらするという、想像力が必要なことだということに気づかされました。

また、代表という立場もとても大変でした。対立する意見をまとめること。たくさんアイデアから一つのものを生み出していくということ。そして、リーダーのあり方を考えることです。私は、このような大きなプロジェクトで代表を務めたことはなく、ゼロからのスタートでした。活動を進めていく中で、物事をうまくまとめることができず、自分の無能さを痛感する日々でした。また、自分よりも有能なメンバーに囲まれ、自分はリーダーとしての務めを果たしていないということに、苦しい思いもしました。しかし、あるリーダーの方から「リーダーは方向性を示せばいい。舵取りはメンバーがする」

と教えられたこと。そして、メンバーから「ゴーストみやげ研究所のリーダーはあなたじゃないといけなかった」と言われたことで、自分らしいリーダー像を確立することができました。

最初は自分の高まる気持ちに能力が追い付いていないと感じていましたが、今は感じません。苦しい状況に揉まれていたら、いつのまにか自分が成長していたのです。学生のうちにこのような経験ができて本当に一生ものの財産になりました。最後に、学校関係者の方々、協力してくださった企業の方々に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

【総合文化学科1年 伊藤瑳紀】

今回の学生での商品開発は、私にとって以前からあこがれだったので、実際にできたことは夢が叶ってとても嬉しいものでした。商品ができるまでの過程も実感を持って知ることができましたし、ひとつの商品もたくさんの人の協力によって出来ていることを知りました。話し合いやイベントでいろいろな場所に行ったことも、様々な社会人の方と話をする機会となり仕事や世の中に対する考えが広がったと感じています。また、ゴーストみやげ研究所の活動を通して、自分の出来ること、苦手なこと、得意なことについて今までより強く考えることが増えました。私は今まで、どちらかという気持ち重視でしたが、理想もあるけど実際に自分にできるか、予定の管理など現実的なことも考えることの必要を、ひしひしと感じさせられました。これじゃダメだと思うこともたくさんあり大変な活動でしたが、これから社会で生きていくための自分の中の土台を、根底からひっくり返して見直す機会となり、とても貴重な経験をさせていただいたと思います。親や友人、また様々な社会人の方にアドバイスをもらったこと、支えていただいたおかげでここまで有意義な活動にすることができました。

【総合文化学科1年 佐々木麻衣】

松江の観光をもっと盛り上げたい！松江の地域振興のためになにかしたい！と思っていたところ、大峠さん、伊藤さんと意気投合し、キラキラドリームプロジェクトを始めたのが全てのきっかけです。

怪談のふるさと松江を提唱しながら、怪談にまつわるお土産がない。そんな状況を打破しようと考えついたのが「ほういちの耳まんぢう」です。怪談をモチーフにするというのは、なかなか手にとってもらいにくいのではないかと不安に思っていたのですが、実際に売り上げ情報を伺ったところ、自分の想像以上の売り上げにとっても嬉しく思いました。

ゴーストみやげ研究所として「ほういちの耳まんぢう」を企画したことは、短い短大生活の中でも自分を成長させる多くのものを得るきっかけとなりました。私たちの活動は自分たちの力だけで成功したとは思っていません。中浦食品株式会社さまをはじめ、あしたの為のDesignさま、河内さま、大学からの支援があってこそです。心から感謝いたします。ありがとうございました。

【総合文化学科1年 佐々木七海】

発案からプレス発表まで実質、夏休みの2か月間ととても短いスパンで行ったので、

とにかく目が回るほど忙しく、そして充実した2か月間でした。その中で、スケジュール管理がうまく出来ず、どうしても時間が足りなくて悔しい思いをしたこともありました。そして、私がこのプロジェクトでたくさんのことを知りました。自分たちがきちんと締め切りを守らないと、一緒にプロジェクトを進めている企業さんやデザイン会社さんの負担を増やして迷惑をかけてしまうこと。チームワークの難しさ。自分たちの思いとその実現性とのバランスを考える大切さ。そして、たくさんの方に支えていただき、商品が完成した時の達成感や感動。プロジェクトはとても大変でしたが、実際に商品を食べたお客様から「美味しい」という言葉をいただいて、やってよかったと思いました。

【総合文化学科1年 香川詩保里】

お菓子をおまんじゅうにするかどうか、形はどうするか、パッケージデザインをどのようにするかなど、どう判断すれば納得のいくものができるか悩み、5人の意見がなかなかまとまらず大変でした。特にパッケージデザインのコンセプトを決めてデザインの方向性を決めるのに苦労しました。また、私はパッケージの中に入れるしおりのデザインや文章を担当したのですが、時間と戦いながら数日間で仕上げたことは良い思い出です。最終的に、しおりや箱の青柳や椿のモチーフ、その裏面の小泉八雲と松江の説明文など、私たちがお客さんに伝えたいことを盛り込んだ、納得のいくお土産を作ることができてとても満足しています。

商品の企画に携わってみて初めて、多くの人の想いや努力があってこそ、商品ができるのだと実感しました。思うようにいかないとき、仲間と励ましあうことだけでなく、教務学生課の方々や、企業の方からの助言に助けられました。いろんな方々の応援あってこそ、『ほういちの耳まんぢう』は無事完成しました。私たちを支えてくださった方々に感謝しつつ、次の新たな活動に向けて、これからも頑張ろうと思います。

【ボルケーノの活動】

ボランティアサークルvolcano(ボルケーノ)では、地域活動を中心に取り組んでいる。主なものに、10月「飛鳥祭」において、「防災プログラムを体験してみよう」と題して、日本赤十字社の協力を得て、防災についての講話、ビデオ上映、炊き出しの体験を実施し、本学学生や地元の方々が参加した。11月には、「松江神在月だんだんウォーク」運営スタッフへの参加、1月には短大キャンパスも位置する浜乃木七丁目の国尾自治会による「とんど祭」に部員7名が参加し、運営補助をおこなった。今後、これを契機として、短大生が毎日お世話になっている地元の自治会の方々との交流を活発化していく予定である。

また、本年も1年生1名が8月27日から9月8日の13日間、「いわてGINGA-NETプロジェクト夏銀河2014」に参加し、東日本大震災による復興支援をおこなった。さらに、広島県の土砂災害に対する義援金として募金活動をおこない、日本赤十字社に届けた。

学内におけるボランティア啓発のため、部員やボランティアに参加した学生が、各自のボラ

ンティア体験内容を語る「あったかれっじ」を3回にわたり開催し、また上記を含めさまざまな活動内容はfacebookで公開を始めた。



◆「防災プログラムを体験してみよう」



◆国尾自治会による「とんど祭」

【茶道部の活動】

茶道部では、茶道を通してお茶どころ松江における毎年地域貢献活動を実施している。今年度は、10月「松江水燈路」のイベント(松江市観光振興公社)において、堀川遊覧船夜間運行での野点船(お茶席船)を二日間にわたり実施した。夜の堀川遊覧船上において、ほのかな光と水の音という静かな雰囲気の中で、地元の方や観光客に御抹茶と和菓子を楽しんでもらっていた。

また、11月「おとめ在月」のイベント(山陰中央新報)においては、若い世代に向けた茶の湯文化の発信として、おとめ茶会の運営に協力した。地元クリエイターによるオリジナル茶碗から好みのものを選び、それを用いてお点前を披露する「現代茶席」、また、屋外での展示車両を茶席に見立て、周辺に席を設けて同じく選んだ茶碗でお茶を楽しんでもらう「女子流クルマの楽しみ方～茶の湯編～」において、部員がお点前を担当した。部員は揃いのワンピースを着用し、現代風の新しいお茶席のかたちを披露した。

【ティンホイッスル・サークルの活動】

平成26年6月8日(日)カラコロ広場にて京店商店街協力のもと開催された、島根大学・県立大学松江キャンパス学生主催の地域活性イベント「Cafe×Bar灯」でアイルランド音楽の演奏をした。平成27年3月7日(土)・8日(日)に開催されたアイリッシュ・フェスティバルin松江2015のセント・パトリックス・デイ・パレードで演奏を披露しながらパレードに参加するとともに、アイリッシュ・パブ「シャムロック」や屋台村の設営等、イベントのボランティア・スタッフとして協力した。

6. 教育機関等との連携—保・幼・小・中・高・大の教育連携

初等中等教育機関との教育連携については、平成18年度の協定締結以降、各学科における松江市立幼保園のぎ・松江市立乃木小学校・松江市立湖南中学校・松江商業高校との緊密な連携協力のもと、教員による特別授業のほか、学生による読み聞かせ実践・食育実践指導等の連携事業を実施し、教育的成果をあげている。

【大多和学園との連携協力】

26年度より新たに連携協力協定を結んだ学校法人大多和学園とは、同校への非常勤講師の派遣、連携協力会議の開催(8月26日)、大多和学園(開星中学校・高等学校)で開催された島根県私学教育研修会への参加を通して、教育連携の進展をはかった。

【連携校協議】

平成26年6月13日に、幼保園のぎ、乃木小学校と松江キャンパスの三者連携会議を松江キャンパスで行った。また、平成26年5月16日と平成27年2月24日に、湖南中学校、松江商業高校、松江キャンパスの三者連携会議が、松江商業高校で行われた。なお、26年度は松江商業高校が当番校として三者連携会議を推進した。

このような緊密な教育上の連携をふまえて、「連携校教育研究会」が8月18日に松江商業高校で開催された。講師は島根県教育庁教育指導課キャリア教育推進スタッフ・多々納雄二調整監、テーマは「しまねのキャリア教育—やる気・学習意欲につなげるキャリア教育—」。初等中等教育におけるキャリア教育の状況を知る上で、有意義な研究会となった。

平成26年度松江キャンパス教育機関との連携事業

機関名・事業名称	本学担当者	事業内容	期間	本学参加学生	備考
松江市立乃木小学校	健康栄養学科 教授 直良博之 嘱託助手 葉迫靖子	食育授業	平成26年度 12月13日	健康栄養 4名	5年生165名参加
浜田市保育連盟	保育学科 教授 岸本 強	浜田市保育連盟研究委員会 代表者会講師	平成26年 5月、6月、8月		
松江市立野波保育所	保育学科 教授 岸本 強	松江市立野波保育所研修会 講師	平成26年 5月、6月、8月、10月		
島根県保育協議会	保育学科 教授 岸本 強	第58回島根県保育研究大会 第1分科会 助言者 講話「今、幼児期に求められる運動と遊び」	平成26年 11月		
松江市保育協議会	保育学科 教授 岸本 強	第8回松江市保育研究大会 第3分科会 指導助言者 講話「今、幼児の運動と遊び—環境の有効性—」	平成26年 11月		

機関名・事業名称	本学担当者	事業内容	期間	本学参加学生	備考
岡山県柵原東小学校	保育学科 准教授 福井一尊	あっすれ!おかやま子ども未来塾「美術館 学校出前講座」	平成26年 10月7日	健康栄養 4名	小学6年生 20人
岡山県柵原西小学校	保育学科 准教授 福井一尊	あっすれ!おかやま子ども未来塾「美術館 学校出前講座」	平成26年 10月14日		小学6年生 39人
松江市立湖南中学校	総合文化学科 教授 小泉 凡	総合的学習の時間「地域探検の魅力」	平成26年 6月2日		湖南中 1年生 180名
松江市立 内中原小学校	総合文化学科 教授 小泉 凡	英語活動の時間「小泉八雲とアイルランド」	平成26年 12月9日		内中原小 4年生 129名
松江市立湖南中学校	総合文化学科 教授 高橋 純	総合的学習の時間「発表の行い方について」	平成26年 9月11日		湖南中 1年生 180名
松江市立幼保園のぎ	総合文化学科 教授 マユアキ 教授 岩田英作	3学科共通科目「読み聞かせの実践」	平成26年5月～平成27年1月	保育6名 総文45名	
松江市立乃木小学校	総合文化学科 教授 マユアキ 教授 岩田英作	3学科共通科目「読み聞かせの実践」	平成26年5月～平成27年1月	保育6名 総文45名	
松江市立忌部小学校	総合文化学科 教授 マユアキ 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年4月～平成27年2月	総文11名	
出雲市立久多美小学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 6月	総文4名	
島根県立三刀屋高等学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 7月	総文3名	
鹿島子育て支援センター	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 8月	総文2名	
掛合児童クラブ	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 8月	総文3名	
那覇市立開南小学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 8月	総文11名	
松江市立 しんじ幼保園	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 9月	総文2名	
江津市立江津中学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 9月	総文9名	
東出雲子育て支援センター	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 10月	総文2名	
松徳幼稚園	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 10月	総文3名	
松江市立城北小学校	総合文化学科 教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成26年 11月	総文3名	

機関名・事業名称	本学担当者	事業内容	期間	本学参加学生	備考
松江市立八東保育園	総合文化学科教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成 26 年 12 月	総文3名	
出雲市立上津幼稚園	総合文化学科教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成 27 年 3 月	総文3名	
隠岐西ノ島町立西ノ島小学校	総合文化学科教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成 27 年 3 月	総文3名	
隠岐西ノ島町立シオン保育園	総合文化学科教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成 27 年 3 月	総文2名	
隠岐西ノ島町立みた保育園	総合文化学科教授 岩田英作	総合文化学科卒業プロジェクト「おはなしゼミ」	平成 27 年 3 月	総文1名	

出張講座（高大連携）の状況

（大学への派遣依頼を受け、専門領域の講義を高校生向けに行った場合）

期日	曜日	時間	テーマ（会場）	回数	担当者	相手先	
9月22日	月	13:00～15:00	学問のすすめ～栄養学では何が分かっていて、何が分からないのか～	1	酒元誠治（健康栄養学科）	島根県立大社高等学校	43
5月23日	金	9:00～12:50	五感でとらえた明治の松江～小泉八雲の世界～講義および現地研修	1	小泉 凡（総合文化学科教授）	松江市立女子高等学校	30
7月1日	火	14:00～16:00	文部科学省委託事業「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」に係る学校図書館公開講座	1	岩田英作（総合文化学科教授）	島根県立三刀屋高等学校	50

【健康栄養学科の教育機関連携】

松江市立乃木小学校での食育授業は、松江市立湖南中学校、松江市立乃木小学校との三者連携推進事業をきっかけに平成19年度から始まり、今年度で8年目を迎えた。健康栄養学科教員（直良博之教授、葉迫靖子嘱託助手）と学生4名が取り組み、朝ごはんの良いところやバランスの良い朝ごはんを児童と一緒に考えながら実施した。



▲松江市立乃木小学校での食育授業

【保育学科の教育機関連携】

保育学科の正課「児童文化」では、1年生2年生が合同で複数のパートに分かれて「児童文化」のための制作過程を学び、「ほいくまつり」開催によって地域の子どもたちと交流しつつ、大学での学びを還元している。この「ほいくまつり」の案内にあたって、松江市内保育所・幼稚園がポスター掲示・パンフレット配布に協力している。この「児童文化」の教育課程は、平成17年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」の選定を受けて全国的にも評価された。平成26年度「第41回ほいくまつり」は、平成26年7月5日(土)に島根県民会館大ホールで開催され、多くの親子が学生の作りだした歌唱・司会・影絵・劇などの「児童文化」を楽しみ学生と交流した。



▲島根県民会館大ホール入口:来場者と学生の交流



▲平成26年7月5日 第41回ほいくまつり 保育学科一同



▲島根県民会館大ホール入口:来場者と学生の交流

「ほいくまつり」とは？

私たち島根県立大学短期大学部保育学科は、毎年6月島根県民会館大ホールに1,500人の子どもたちとその保護者を招待して『ほいくまつり』を開催しています。

この『ほいくまつり』というのは、私たち学生が日頃学内で学んでいることを総合表現として舞台上で発表することを通して県の児童文化向上に寄与するとともに、地域の子どもたちや保護者の皆様に楽しく夢のあるひとときを過ごしてもらおうという趣旨で開催しているものです。

取り組みの軸となるのは実行委員会です。実行委員長、総合責任者、会計の三役を中心に各パートのリーダーを合わせた14人がその構成メンバーです。このリーダー会は定期的に開催され、各パートの要望や意見が交流されるとともに、話し合いを通じて方針が出されかつ総合的な指示が出されていくのです。

『ほいくまつり』の取り組みは、『児童文化』という授業の一環として行われますが、週に2回の授業の時間だけでは時間は全く足りません。そこで、準備はほぼ毎日、放課後残って行うこととなります。5月に入るとパート別のリハーサル、6月になると全体リハーサルが始まります。その場では先生方や他のパートの仲間たちから多くの課題点が出され、よりよいものを創るために各パートは議論をし、修正していきます。もちろん、なかなか自分たちの思うようにはいかず、みんなで悩みながら進めていくこととなります。しかし、その過程の中で協力することの大切さを学び、感性を磨いていくとともに、保育というものが要求する厳しさを知るのです。

当日、子どもたちの笑顔にたくさん出会えることは最高の感動ではありますが、同時に『ほいくまつり』の取り組み過程そのものが私たち自身に大きな自信と勇気と夢を与えてくれるのです。



【総合文化学科の教育機関連携】

総合文化学科では、岩田英作教授・マユアキ教授とともに、「読み聞かせの実践」を履修する学生(全学科)、卒業プロジェクト「おはなしゼミ」の学生が、松江市乃木小学校、忌部小学校、幼保園のぎなどで、絵本の読み聞かせ活動を行った。(「8. おはなしレストランライブラリーの地域連携活動」参照)

また、総合文化学科の教員は、湖南中学校の「総合的な学習の時間」に協力した。詳細は以下の通りである。

* 湖南中学校1年生「総合的な学習の時間」への協力授業

総合文化学科の2名の教員は、湖南中学校における総合的な学習の時間に、専門分野や総合文化学科の担当授業の内容を生かして、昨年引き続き協力授業を行った。小泉凡教授の授業は平成26年6月2日「地域探検の魅力—松江再発見の旅—」、高橋純教授の授業は9月11日「発表の行い方について」であった。

7. 教育課程のための地域の施設・機関との連携

健康栄養学科、保育学科において実習先との連携の強化策を検討し、可能な部分から実施している。健康栄養学科では、栄養士養成のため各種給食施設等との緊密な連携を図っている。保育学科は、実習指導計画から実習評価に至るまで実習先と連携して実習成果の充実を図っている。

【健康栄養学科の実習施設・機関との連携】

栄養士免許を取得するためには、校外実習が必修である。平成26年度に実施した県内施設を下表に示した。実習終了後は、評価票の提出を求め、また、次年度の内容を検討する資料として、学生が作成した実習レポートを送付し連携を図った。また、実習先の管理栄養士を本学非常勤講師として招聘したり、学生を鳥根県栄養士会の研修会に参加させる等して連携強化を図っている。

平成26年度 校外給食実務実習依頼先一覧

地区	実習依頼先	実習人員	日程
鳥根	松江赤十字病院	4	9/1～9/5
			9/8～9/12
	松江市立病院	4	8/18～8/22
	医療法人 社団創健会 松江記念病院	2	8/25～8/29
	松江市立北学校給食センター	2	9/8～9/12
	松江市立南学校給食センター	3	9/8～9/12
	松江市立鳥根学校給食センター	1	11/5～11/11
	鳥根県立中央病院	3	8/25～8/29
	万田の郷	1	9/8～9/12
	出雲市立出雲学校給食センター	2	9/8～9/12
			10/20～10/24
	出雲市立平田学校給食センター	3	9/16～9/22
	出雲市立湖陵学校給食センター	1	9/8～9/12
	出雲市立斐川学校給食センター	1	9/12～9/19
	雲南市立病院	1	8/18～8/22
大田市立大田市学校給食センター	1	9/8～9/12	
益田赤十字病院	1	9/1～9/5	
鳥取	南部町立西伯給食センター	1	9/1～9/5
	智頭町立学校給食センター	1	9/8～9/12
広島	医療法人社団更生会 草津病院	1	9/1～9/5
	医療法人 紅萌会 福山記念病院	2	8/11～8/15
9/1～9/5			

地区	実習依頼先	実習人員	日程
山口	総合病院 山口赤十字病院	1	8/25,9/22～9/26
	独立行政法人地域医療機能推進機構 徳山中央病院	1	9/1～9/5
	田布施町立学校給食センター	1	9/1～9/5
岡山	一般財団法人津山慈風会 津山中央病院	1	9/8～9/12
兵庫	新温泉町立温泉学校給食センター	1	9/8～9/12
佐賀	佐賀市立本庄小学校	1	9/8～9/12

【保育学科の実習施設・機関との連携】

保育学科では、「保育実習Ⅰ（保育所・施設）」「保育実習Ⅱ」については、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（厚生労働省雇児発第1209001号）」にもとづき、保育学科が実習施設を選定して実習指導委員会を設けている。毎学年度の始めに、この委員会の協議によって保育実習計画を策定している。

平成26年度 保育学科実習実施施設・機関

区分	所在	施設・機関名	備考
保育所	島根県松江市	松江市立城東保育所、松江市立白湯保育所、しらとり保育所、しらゆり保育園、つわぶきこども園、つわぶき保育園、なかよし保育園、なの花保育園、みどり保育所、愛恵保育園、古志原保育所、松江ナザレン保育園、松江保育所、松尾保育所、嵩見保育所、袖師保育所、虹の子保育園、法吉保育所、あおぞら保育園、ふたば第三保育所、湯町保育所	1年前期・ 保育実習Ⅰ (保育所) 2年前期・ 保育実習Ⅱ
	島根県出雲市	ハマナス保育園、わたりはし保育園、神門保育園、神門第2保育園、荘原保育園、東部保育園、浜山あおい保育園、なかの保育園、おおつか保育園、あすなる第3保育園、ひかり保育園	
	島根県雲南市	雲南市立かもめ保育園、雲南市立三刀屋保育所、雲南市立大東保育園	
	島根県安来市	安来市立城谷保育所、安来市立安田保育所	
	島根県奥出雲町	阿井幼児園、八川幼児園	
	島根県大田市	大田市立大田保育園、サンチャイルド長久さわらび園、相愛保育園	
	島根県江津市	敬川保育所	
島根県美郷町 島根県浜田市	おおち保育園 れんげ保育園、あおい保育園		

区分	所在	施設・機関名	備考
保育所	鳥根県隠岐の島町 鳥取県米子市 鳥取県鳥取市 鳥取県伯耆町 鳥取県江府町 鳥取県八頭町 山口県下関市 広島県庄原市 広島県三次市 広島県東広島市 広島県熊野町 広島県三庄町 兵庫県篠山市 兵庫県宍粟市 香川県高松市 富山県高岡市 群馬県高崎市 鹿児島県肝付町	隠岐の島町立原田認定こども園 福生保育園、米子市立すみれ保育園、成実保育園、河崎保育園、福米保育園、米子市立小鳩保育園 わかば台保育園 伯耆町立ふたば保育所 江府町立子供の国保育園 八頭町立郡家保育所 専立寺保育園 庄原市立みどり園保育所、庄原市立山内保育所 三次市立河内保育所 東広島市立川上西部保育所 くまの・みらい保育園 尾道市立三庄認定こども園 篠山市立城東保育園 千種杉の子保育園 高松市立林保育所 認定こども園かたかご保育園 高崎市立群馬南保育園 高山保育園	1年前期・ 保育実習Ⅰ (保育所) 2年前期・ 保育実習Ⅱ
児童館・児童クラブ	鳥根県松江市 鳥根県益田市 鳥取県日吉津村 東京都八王子市	東津田児童館、八雲児童センター、乃木児童クラブ、乃木第2児童クラブ、乃木第3児童クラブ、やくも児童クラブ、大庭地区児童クラブ、古志原地区第1児童クラブ、古志原地区第2児童クラブ、津田第1児童クラブ、津田第2児童クラブ、津田第3児童クラブ、川津児童クラブ、城北児童クラブ、あおぞら児童クラブ 益田市立益田児童館 日吉津村立児童館 八王子市立北野児童館	1年後期・ 保育実習Ⅲ
児童福祉施設等	鳥根県松江市 鳥根県出雲市 鳥根県安来市 鳥根県浜田市 鳥根県隠岐の島町 鳥取県米子市	松江赤十字乳児院、鳥根東光学園、双樹学院、松江学園、松江整肢学園、国立病院機構松江医療センター、鳥根県立わかたけ学園、しののめ寮 さざなみ学園、児童心理療育センターみらい 安来学園 聖隍寮、こくぶ学園 仁万の里児童部 米子聖園天使園	2年前期・ 保育実習Ⅰ (施設)
幼稚園	鳥根県松江市 鳥根県安来市 鳥根県出雲市	松江市立幼保園のぎ、松江市立城西幼保園、松江市立中央幼稚園、松江市立古志原幼稚園、松江市立津田幼稚園、松江市立川津幼稚園、松江市立生馬幼稚園、松江市立忌部幼稚園、松江市八雲幼稚園、松江市立玉湯幼稚園 安来市立安来幼稚園、認定こども園荒島幼稚園 出雲市立出東幼稚園、出雲市立中央幼稚園、出雲市立今市幼稚園、出雲市立四絡幼稚園、出雲市立大社幼稚園、出雲市立湖陵幼稚園、光幼稚園	2年前期・後 期・教育実習

区分	所在	施設・機関名	備考
幼稚園	島根県雲南市	雲南市立大東幼稚園、雲南市立西幼稚園、雲南市立斐伊幼稚園、雲南市立三刀屋幼稚園、雲南市立鍋山幼稚園	2年前期・後期・教育実習
	島根県大田市	大田市立大田幼稚園、大田市立久手幼稚園	
	島根県江津市	江津市立江津幼稚園	
	島根県浜田市	浜田市立長浜幼稚園、浜田市立石見幼稚園	
	鳥取県米子市	米子みどり幼稚園、みずほ幼稚園、東みずほ幼稚園、米子幼稚園	
	鳥取県鳥取市	鳥取県立鳥取聾学校、矢谷学園鳥取第四幼稚園	
	香川県高松市	高松市立林幼稚園	
	広島県東広島市	東広島市立八本松中央幼稚園、	
	広島県三次市	十日市幼稚園、三次中央幼稚園	
	広島県尾道市	尾道市立土生幼稚園	
	広島県熊野町	淳教幼稚園	
	兵庫県篠山市	篠山市立たき幼稚園	
	兵庫県宍粟市	宍粟市立千種幼稚園	
	富山県高岡市	高岡第一学園附属第一幼稚園	
	群馬県高崎市	堤ヶ岡幼稚園	
	福岡県志免町	博多第一幼稚園	
	鹿児島県鹿屋市	西原幼稚園	

この実習施設・機関により構成された実習指導委員会で策定された実習計画により、実習全体の方針、実習の段階、内容、施設別の期間、時間数、学生の数、実習前後の学習に対する指導方法、実習の記録、評価の方法が明らかにされている。

「保育実習Ⅲ」については、実習施設を保育学科が選定して実習指導委員会を設けている。実習生、実習施設の指導者、本学実習担当教員が、それぞれ緊密に連絡をとりながら実習の効果を十分発揮するように努めている。

「教育実習」については、原則的に実習指導委員会を設けるが、学生が自主的に地元等の実習幼稚園を選定する場合は個別に対応している。実習生、実習幼稚園の指導教員、本学実習担当教員が、それぞれ緊密に連絡をとりながら、実習の効果を十分発揮するように努めている。平成26年度に保育学科が連携して実習を実施した実習施設・機関は上の表のとおりであった。

8. おはなしレストランライブラリーの地域連携活動

【読み聞かせの活動】

平成26年度 おはなしレストランの読み聞かせ活動

- ◆松江市立幼保園のぎでの実践（5月～7月、11月～1月の毎週月曜日）
参加した学生数 51名
- ◆松江市立乃木小学校での実践（5月～7月、11月～1月の毎週水曜日）
参加した学生数 51名
- ◆松江市立忌部小学校での実践（4月～7月、10月～3月の毎週金曜日）
参加した学生数 11名
- ◆おはなしレストランライブラリーでの実践（4月～月の毎週日曜日）
参加した学生数 11名
- ◆出前シェフ（不定期）23カ所での実践
参加した学生数 11名



▲大学祭おはなしのじかんスペシャル



▲保育園での出前シェフ

幼保園のぎ、乃木小学校での実践は、保育学科、総合文化学科の1年生のうち、「読み聞かせの実践」を履修した51名が参加した。忌部小学校での読み聞かせ並びに本学おはなしレストランライブラリーで行なう「おはなしのじかん」は、総合文化学科2年生のうち、卒業プロジェクト「おはなしゼミ」の11名が参加した。「おはなしのじかん」は、常時30名前後の親子連れの来館があった。とくに「おはなしのじかん」の特別企画として開催した7月の七夕会、10月の大学祭企画、12月のクリスマス会、そして3月の感謝祭では、100名を超える親子連れでにぎわった。

学外の保育所や図書館などからの要望を受けて読み聞かせに出かける「出前シェフ」は、平成26年度は合計23カ所で活動を行なった。松江市内の保育所や子育て支援センター、江

津中学校、三刀屋高校、石見部の図書館や隠岐西ノ島の小学校や保育所など、県内各地で学生たちは多くの子どもたちとの出会いを経験した。

【おはなしレストランライブラリー】

平成26年8月、おはなしレストランライブラリーは大阪府立大学より第1回マイクロ・ライブラリーアワードの表彰を受けた。小規模ながらも本の貸し出しを通じて地域貢献している図書館に贈られ、今回、栄えある第1回目の受賞に全国500館の中からおはなしレストランライブラリーを含め27館が選ばれた。



▲第1回マイクロ・ライブラリーアワード受賞

平成23年度に学内・学外に向けて開館して4年が経過し、学内の学生はもとより、学外からの一般来館者も徐々に増え、平成26年度は、月ごとの来館者が約1300名、貸出冊数は4000冊を超えた。

おはなしレストランライブラリー 月平均の来館者人数・貸出冊数 (平成26年4月～平成27年2月) 学内: 来館者352人、貸出516冊 学外: 来館者977人、貸出3608冊

【講演会・沖縄での読み聞かせ・ボランティア活動】

おはなしレストランでは、平成26年10月4日(土)・5日(日)の両日、絵本作家tupera tuperaの亀山達矢さんをお迎えし、初日は本学大講義室で絵本の作り方について講演会を開催し、2日目は県立美術館との共催で、宍道湖畔で「しんじこかいじゅう大作戦」を行い、親子連れと共に思い思いの怪獣を作って楽しんだ。

おはなしゼミでは夏に沖縄の小学校で読み聞かせを体験し、小泉八雲の「雪女」などのおはなしを届けた。島根と沖縄をつないだ活動となった。おはなしレストランライブラリーを利用した、カンボジアの子どもたちに文具や衣類を送る活動も、市民の皆様と協力して本年度も行った。



▲しんじこかいじゅう大作戦



▲沖縄市立開南小学校での読み聞かせ

平成26年度 公開講座「椿の道アカデミー」開催状況

実施日	時間	講座名	講師	会場	受講者	
6月25日	水 14:00～ 15:20	01. 総合文化講座：「文化をつむぐ」（全11回）	出雲大社と近代観光	工藤泰子	体育館研修室	69
7月23日			文化を紡ぐ・育む心―丸亀周造『「いき」の構造』を中心に	村井洋（浜田キャンパス）		47
7月30日			大人も楽しめる絵本	岩田英作		48
8月6日			最近のテレビ・ドラマ制作の傾向～「あまちゃん（13NHK）」「半沢直樹（13TBS）」とその後～	瓜生忠久（浜田キャンパス）		52
8月27日			フィクションの効用	高橋純	大講義室	50
9月10日			インテリアファブリックスの魅力	藤居由香	体育館研修室	52
9月18日			英語ミステリー作品の翻訳から学ぶ「ことばと文化」	田中芳文（出雲キャンパス）	体育館研修室	48
10月8日			インドネシアの家と人々の暮らし	塩谷もも		46
10月15日			伊勢物語を読む―或る男の一代記?―	村上桃子		51
10月29日			現代ギリシャとラフカディオ・ハーン―没後110年記念事業を終えて―	小泉凡	57	
11月12日			日本とロシアにおけるハンセン病意識の比較	シローコフ ワジム（浜田キャンパス）	大講義室	34
6月4日～7月16日	水 13:30～ 15:00	02. 源氏物語を読む―恋に殉じた青年の話し編―（全6回）	三保サト子（本学名誉教授）	体育館研修室	456	
6月27日	金 15:00～ 17:00	03. 風土記の語る神話―出雲国風土記を中心に―（全5回）	国引き神話・穴道郷神話など（出雲国風土記）	藤岡大拙（本学元学長）	97	
7月25日			三沢郷神話・恋山神話など（出雲国風土記）		87	
8月29日			大穴持命の妻問い神話（出雲国風土記）		80	
9月19日			播磨国における出雲の神々（播磨国風土記）		78	
9月26日			蘇民将来・浦嶋子・湯泉神話など（風土記逸文）		83	
5月19日～2月16日	月 14:00～ 16:00	04. 椿の道読書会（全8回）	北井由香	図書館グループ閲覧室	106	
6月6日～6月20日	金 10:00～ 11:30	05. 子どもがいる家庭のための英語教育実践講座（全3回）	ラング クリス	第2視聴覚室	58	
7月28日～8月1日	月～金 10:40～ 12:10	06. 英語絵本の音読を楽しもう（全5回）	小玉容子、ダスティン キッド	図書館グループ閲覧室	44	
10月15日	火 14:00～ 15:30	07. ～続～子育て・孫育て世代のための子ども理解講座（全3回）	「家族」からの子ども理解	矢島毅昌	12	
10月21日			「教育」からの子ども理解		8	
10月28日			「社会現象」からの子ども理解		11	
8月19日	火 19:00～ 20:30	08. 健康栄養講座：鳥根の食と健康（全5回）	高齢者の健康について―現状と課題―	名和田清子	臨床栄養実習室	23
8月26日			高齢者の身体と特徴 生活習慣病と上手に付き合うために	直良博之 安藤彰朗	22	
9月2日			鳥根県の食材を使った調理実習―食形態の展開―	坂根千津恵、水珠子、川谷真由美	調理実習室	25
9月9日			高齢化に対応した地産地消の取り組み1―しまね和牛―	籠橋有紀子	臨床栄養実習室	20
9月16日			高齢化に対応した地産地消の取り組み2―西条柿―	赤浦和之	14	
7月9日～12月24日	水 19:00～ 21:00	09. 栄養士のためのステップアップ講座（全12回）	健康栄養学科教員	臨床栄養実習室	120	
8月2日～9月7日	土日 10:00～ 16:30	09. 栄養士のためのステップアップ講座（集中講義）（全4回）	健康栄養学科教員	臨床栄養実習室	51	
7月19日	土 13:00～ 15:00	10. 山陰民俗学会連携講座：民俗の行方～山陰のフィールドから考える～Part2（全4回）	現代に残る江戸時代初期のわらべ歌	酒井薫美（山陰民俗学会会長）	第2視聴覚室	10
7月26日			年中行事・祭りの変化と継承―その②―	品川知彦（鳥根県立古代出雲歴史博物館学芸情報課長）	体育館研修室	14
8月9日			民俗芸能伝承と学校教育②―石東地域における石見神楽の伝承活動を中心に―	多田房明（美郷町立大和小学校長）	9	
8月30日			鳥取県からみた民俗芸能の変化と継承	原島知子（鳥取県教育委員会事務局文化財課）	視聴覚室	13
5月31日～11月15日	土 14:00～ 16:00	11. 民族音楽の楽しみ：ガムラン教室（全12回）	瀬古康雄（本学元教授）	秋鹿ガムラン音楽室（5/17・8/30）	113	
8月2日	土 14:00～ 16:00	12. 子どもの困った行動に対処する養護・保育のスキルアップ講座：コモンセンス・ペアレンティング（全7回）	わかりやすいコミュニケーション	藤原映久	3	
8月9日			良い結果・悪い結果		4	
8月23日			効果的な誉め方		3	
8月30日			予防的教育法		4	
9月6日			問題行動を正す教育法		5	
9月13日			自分自身をコントロールする教育法		3	
9月20日			フォローアップ		3	
5月17日	土 13:30～ 15:00	13. 案外知っているようで知らない「人」の話（全3回）	「しんりがく」の世界って？―どんなことやってるの―	飯塚由美	28	
5月24日			まずは自分を知ろう		25	
5月31日			人との関わりはどうなってるの？身近なことから心理学		27	
8月8日	金 16:00～ 21:20	14. 文化資源探求講座	松江ゴーストツアー	小泉凡	松江市内	18
11月3日	月 9:30～ 17:30		出雲の弥生遺跡を歩く	岡部康幸（NPO法人出雲学研究so会員）、小泉凡	出雲市周辺	39
					2270	

平成26年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

1 講演会講師等

NO.	教員氏名	依頼者	内容（テーマ等）	日付
1	名和田清子（健康栄養学科教授）	中国地区児童養護施設協議会	第51回児童養護施設協議会 第3分科会 助言者	平成26年6月18日～19日
2	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県栄養士会 大田市	平成26年度 市民公開講座（島根県栄養士会・大田地区栄養士会における生涯教育実務研修及び 大田市食育ボランティア フォローアップ研修会）講師	平成26年8月8日
3	名和田清子（健康栄養学科教授）	出雲保健所	平成26年度炎症性腸炎患者・家族学習会（於 出雲保健所）講師	平成26年7月27日
4	名和田清子（健康栄養学科教授）	大田邑智糖尿病研究会	第30回大田邑智糖尿病研究会研修会講師	平成26年7月3日
5	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会生涯教育講師	平成26年12月14日
6	名和田清子（健康栄養学科教授）	浜田保健所 はなみずきの会	はなみずきの会（浜田地区、炎症性腸炎の患者家族の会）食事学習会講師	平成26年12月7日
7	名和田清子（健康栄養学科教授）	いずも糖尿病合同カンファレンス	第2回いずも糖尿病合同カンファレンス 講演	平成26年11月4日
8	名和田清子（健康栄養学科教授）	陽だまりの会	クローン病 食事講習会（陽だまりの会 松江地区）	平成26年10月4日
9	名和田清子（健康栄養学科教授）	県央保健所	平成26年度炎症性腸炎患者・家族学習会	平成26年9月28日
10	名和田清子（健康栄養学科教授）	奥出雲町	平成26年度第1回奥出雲町食育推進委員会研修講師	平成26年6月24日
11	酒元誠治（健康栄養学科教授）	公益社団法人宮崎県栄養士会	講師：MDA-DAT研修会「県民健康・栄養調査とMNA調査の成果～非常時における栄養スクリーニング法～」	平成26年8月17日
12	酒元誠治（健康栄養学科教授）	日本栄養改善学会	講師：ランチョンセミナー「在宅高齢者のサルコペニア予防のための食介入」	平成26年8月21日
13	酒元誠治（健康栄養学科教授）	宮崎県日南保健所	講師：平成26年度管内行政栄養士研修会 「行政栄養士の在るべき姿～事業を評価する意味とは～」	平成26年11月25日
14	酒元誠治（健康栄養学科教授）	浜田市地域医療対策課	講師：平成26年度介護予防企画研修会 「元気で長生き『食』の秘訣」	平成27年3月9日
15	籠橋有紀子（健康栄養学科准教授）	中国地域産学官連携コンソシアム	脂質栄養に着目した糖尿病発症予防および病態改善のための技術開発の試み	平成26年9月26日
16	山下由紀恵（保育学科教授）	益田市保育研究会	平成26年度益田市保育研究会総会講師「益田市ふるさと基盤教育について」	平成26年4月26日
17	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市幼稚園教育研究会	松江市幼稚園教育研究会講師「保幼小接続カリキュラムについて」	平成26年7月23日
18	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県健康福祉部	平成26年度市町村職員等専門研修（児童福祉司任用資格認定講習会）講師「母子関係理論と発達心理学」	平成26年8月21日 平成26年8月22日
19	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市教育委員会 松江市健康福祉部	第2回松江市保幼小接続カリキュラム（生活する力）研修会第2回幼稚園保育所職員スキルアップ講座講師「『生活する力』の発達と教育」	平成26年10月21日
20	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県社会福祉協議会	保育士（再）就職支援セミナー「HUG！くむセミナー」講師「新しい保育保育課題への対応」「子どもの発達と保育」	平成26年10月28日 平成26年11月10日
21	山下由紀恵（保育学科教授）	川本町教育委員会	川本町特別支援連携協議会総会研修会講師「川本町インクルーシブ相談支援ファイルについて」	平成27年3月9日
22	山下由紀恵（保育学科教授）	川本町保育研究会	川本福祉会職員研修会講師「子どもの発達を援助する遊びについて」	平成27年3月14日
23	福井一尊（保育学科准教授）	雲南市保育研究会	「子どもの絵画指導研修」	平成26年8月5日
24	福井一尊（保育学科准教授）	松江市幼稚園教育研究会	「子どもらしい素直な楽しむための保育のあり方を探る」	平成26年9月3日
25	福井一尊（保育学科准教授）	島根県保育所（園）・幼稚園造形教育研究会	「描画表現指導研修会」	平成26年11月21日
26	福井一尊（保育学科准教授）	島根県保育所（園）・幼稚園造形教育研究会	島根県保育所（園）・幼稚園造形教育研究会 作品展審査委員	平成26年11月21日
27	福井一尊（保育学科准教授）	島根県社会福祉協議会	島根県障がい者アート作品展 作品審査委員長	平成26年12月3日
28	福井一尊（保育学科准教授）	松江市保育研究会	「造形活動の援助と、立体作品の展示」	平成26年12月4日
29	小山優子（保育学科准教授）	松江福祉会	松江福祉会職員研修会「指導計画と保育の記録」	平成26年9月19日

NO.	教員氏名	依頼者	内容(テーマ等)	日付
30	小山優子(保育学科准教授)	育英保育園	第8回松江市保育研究会. 指導助言者	平成26年11月22日
31	小山優子(保育学科准教授)	松江市保育研究会	松江市保育研究会研修部研修会「実践例をもとにした指導計画の書き方」	平成27年1月24日
32	藤原映久(保育学科講師)	島根県児童養護施設協議会	第51回 中国地区児童養護施設研究協議会 演題: 性問題行動への対応～全体的視点から～	平成26年6月19日
33	藤原映久(保育学科講師)	島根大学教育学部付属中学校	「総合的な学習の時間」講演会 演題: 福祉について	平成26年6月20日
34	藤原映久(保育学科講師)	島根県健康福祉部	平成26年度 島根県市町村職員等専門研修会(児童福祉司任用資格認定講習会) 演題: 児童福祉論、社会福祉援助技術論(浜田・松江)	平成26年8月21日、8月22日
35	藤原映久(保育学科講師)	鳥取県児童館連絡協議会	2014年度 鳥取県児童館連絡協議会職員研修会 演題: 児童の発達理論(発達段階と発達課題～児童福祉現場の視点から～)	平成26年9月25日
36	藤原映久(保育学科講師)	鳥取県児童館連絡協議会	2014年度 鳥取県児童館連絡協議会職員研修会 演題: 個別援助活動	平成26年11月10日
37	藤原映久(保育学科講師)	島根県児童館連絡協議会	平成26年度 島根県児童厚生員等第2回研修会 演題: 個別援助活動	平成26年12月7日
38	藤原映久(保育学科講師)	雲南市幼稚園子育て支援プロジェクト	しまね子育て支援プラス事業「職員研修会」 演題: 児童虐待について～子どもと保護者の心理、支援について～	平成27年1月23日
39	藤原映久(保育学科講師)	佐賀県総合福祉センター	平成26年度 児童福祉施設性(生)教育研修会 演題: 施設内での暴力防止を目指して	平成27年3月6日
40	藤原映久(保育学科講師)	佐賀県総合福祉センター	平成26年度 児童福祉施設職員研修会 演題: 島根県版性(生)教育プログラム～プログラムの意図、内容、構造及びよき実践への提案	平成27年3月6日
41	岩田英作(総合文化学科教授)	NPO プレパークてんとう虫	出雲市斐川町の古民家「てんとう虫の家」で、一般の親子づれを対象に、読み聞かせの実践を交えながら読み聞かせの仕方や意義について講演した。	平成26年5月24日
42	岩田英作(総合文化学科教授)	島根県教育委員会	文部科学省委託事業「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」に係る学校図書館公開講座(三刀屋高校)三刀屋高校の生徒及び保護者、県内の学校司書を対象に、高校生におすすめの絵本を紹介し、読み聞かせや読書の意義について講演した。	平成26年7月1日
43	岩田英作(総合文化学科教授)	鹿島子育て支援センター	松江市鹿島町の子育て支援センターで、乳幼児の保護者を対象に、読み聞かせの方法と意義、父親の読み聞かせ参加の意義について講演した。	平成26年8月20日
44	岩田英作(総合文化学科教授)	松苑会	島根県立大学松江キャンパスホームカミングデー同窓会松苑会講演会において、本学同窓会員を対象に、おはなしレストランの取組とライブラリーの紹介、絵本の読み聞かせの実践と大人も楽しめる絵本について講演した。	平成26年8月24日
45	岩田英作(総合文化学科教授)	雲南市幼稚園教育研究会	雲南市幼稚園教育研究会全体研修会で、雲南市の幼稚園教諭を対象に、絵本の読み聞かしの重要性、教師として配慮すべきこと、年齢にふさわしい絵本について講演した。	平成26年9月5日
46	岩田英作(総合文化学科教授)	円建創	円建創子育てワークショップ「読みメン講座」で、乳幼児の保護者を対象に、読み聞かせの方法と意義、父親の読み聞かせ参加の意義について講演した。	平成26年9月13日
47	岩田英作(総合文化学科教授)	大田市立温泉津図書館	大田市温泉津地区の子供、保護者、読み聞かせボランティアの方々を対象に、読み聞かせの実演を交えながら読み聞かせの意義について講演した。	平成26年9月20日
48	岩田英作(総合文化学科教授)	松江市	松江市内の幼稚園・保育所職員を対象に、絵本を鑑賞し、職員と子ども、親と子で読み聞かせを楽しむコツ、父親の読み聞かせ参加の意義について講演した。	平成26年10月30日
49	岩田英作(総合文化学科教授)	大田市立仁摩図書館	大田市立仁摩図書館で親子連れを対象に、読み聞かせを交えながら読み聞かせの仕方や意義、おすすめ絵本について講演した。	平成26年11月1日
50	岩田英作(総合文化学科教授)	浜田市立金城図書館	金城町さざんかまつりのブースで親子連れを対象に、読み聞かせしながら絵本の魅力、読み聞かせの方法・意義について講演した。	平成26年11月2日
51	岩田英作(総合文化学科教授)	島根県教育委員会 隠岐の島町図書館	しまね子ども読書フェスティバルin隠岐の島町「えーさくおじさんの絵本をめぐる冒険」として、隠岐の島町図書館で親子連れ、読み聞かせボランティアを対象に、家族ぐるみでの読書推進を目的に読み聞かせについて講演した。	平成26年11月8日
52	岩田英作(総合文化学科教授)	大阪府教育委員会	大阪府教育委員会就学前読書活動フォーラム「絵本でつながる家庭と地域～えーさくおじさんの読みメン道場～」として、保育所・幼稚園・図書館等で子ども読書に携わっている方々を対象に、絵本の魅力や父親が参加することの意義について講演した。	平成27年2月18日
53	岩田英作(総合文化学科教授)	西ノ島町教育委員会	しまね子育て支援プラス事業「おはなしレストランin西ノ島～絵本だよ、子どもも大人も全員集合!～」として、親子連れを対象に、絵本の魅力や読み聞かせの意義と方法、父親が参加することの意義について講演した。	平成27年3月6・7日
54	岩田英作(総合文化学科教授)	雲南市男女共同参画課	男女共同参画の絵本と他の絵本との違いについて、雲南市男女共同参画課でつくった絵本「ひかりん」「ハッシー」を中心に取り上げながら講演した。	平成27年3月22日
55	岩田英作(総合文化学科教授)	雲南市男女共同参画課	雲南市立加茂図書館で、親子連れを対象に絵本の紹介、読み聞かせを行い、絵本の持つ力について講演した。	平成27年3月29日
56	マユーあき(総合文化学科教授)	松江市立城北小学校 PTA 研修教養部	家庭教育研修会「子どもとともに、絵本とともに ～おはなしレストランの取り組み～」	平成26年9月25日
57	松浦雄二(総合文化学科教授)	松江市立中央図書館	平成26年度松江市立中央図書館定期講座 「小泉八雲に学び・親しむ」	平成27年2月27日

NO.	教員氏名	依頼者	内容(テーマ等)	日付
58	小泉 凡(総合文化学科教授)	島根県医師国民健康保険組合	全国国民健康保険組合協会中国四国支部総会特別講演「小泉八雲がみた出雲文化」	平成26年5月17日
59	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江大橋を守る市民の会	総会講演「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」	平成26年7月17日
60	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江怪喜宴実行委員会	松江怪談談義「怪談のふるさと松江で語る小泉八雲」講師	平成26年7月26日
61	小泉 凡(総合文化学科教授)	日本経済新聞名古屋支社	親子サマーセミナーin名古屋大学講演「妖怪と怪談に学ぼう—小泉八雲の世界から—」	平成26年8月13日
62	小泉 凡(総合文化学科教授)	島根県神社庁	神職夏季練成講習会講演「小泉八雲を現代に活かす」	平成26年8月17日
63	小泉 凡(総合文化学科教授)	知多市立中央図書館	講演「小泉八雲没後110年 小泉八雲・怪談の世界」	平成26年8月30日
64	小泉 凡(総合文化学科教授)	朝日カルチャーセンター川西	講演「知られざる日本の面影—没後110年小泉八雲がみた日本—」	平成26年9月6日
65	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市民館退職者館長会	第12回総会講演「現代に活かす小泉八雲」	平成26年9月19日
66	小泉 凡(総合文化学科教授)	東京松江会総会	総会記念講演「小泉八雲を現代に活かす」	平成26年10月4日
67	小泉 凡(総合文化学科教授)	語りと音楽の会ともだちや、新宿区	小泉八雲没後110年記念公演「漂流」 講演「現代に息づく八雲の心」	平成26年10月4日
68	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市城北公民館	小泉八雲講座「人間小泉八雲—オープン・マインドで生きた人—」	平成26年10月9日
69	小泉 凡(総合文化学科教授)	島根県退職公務員連盟松江支部	総会講演「『小泉八雲』を現代に活かす」	平成26年11月11日
70	小泉 凡(総合文化学科教授)	朝日カルチャーセンター湘南	講演「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン—ギリシャから日本へ—」	平成26年11月29日
71	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市立中央図書館	小泉八雲に学び・親しむ「八雲のいたずら—小泉家に起きた不思議なお話—」	平成26年12月27日
72	小泉 凡(総合文化学科教授)	八雲たつ風土記の丘資料館	風土記の丘教室講演「小泉八雲と出雲の護符」	平成27年1月10日
73	小泉 凡(総合文化学科教授)	兵庫県立図書館	阪神淡路大震災20年・県立図書館40周年記念講演「八雲のこころと防災学習」	平成27年1月31日
74	小泉 凡(総合文化学科教授)	山陰菱機会	総会講演「小泉八雲がみた出雲文化」	平成27年2月6日
75	小泉 凡(総合文化学科教授)	米子市教育委員会	米子人生大学講演「小泉八雲と怪談を楽しむ」	平成27年2月9日
76	小泉 凡(総合文化学科教授)	出雲市長浜公民館JK委員会	記念講演「オープン・マインドで地球をみる」	平成27年2月21日
77	山村桃子(総合文化学科講師)	山陰万葉を歩く会	山陰万葉を歩く会第二回総会講師「柿本人麻呂の魅力—石見と大和を中心に—」	平成26年7月21日
78	山村桃子(総合文化学科講師)	荒神谷博物館	荒神谷博物館講演会講師「新羅の王子、天之日矛の渡来」	平成26年11月8日

平成26年度 地域連携（貢献）活動の取組状況

2 審議会委員等

NO.	教員氏名	委嘱（依頼）者	役職名	期間
1	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県	松江圏域健康長寿しまね推進会議 委員	平成16年4月～
2	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県	島根県食育・食の安全推進協議会委員	平成19年4月～
3	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県	島根県健康長寿しまね推進会議 委員	平成17年 4月～
4	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県	島根県環境農業推進協議会 副委員長	平成19年 4月～
5	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県	島根県糖尿病専門委員会 委員	平成19年 4月～
6	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県教育委員会	学校給食表彰の推薦に係る審査会 審査員	平成19年 4月～
7	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県	「わが家の一流シェフin島根」料理コンクール審査員	平成19年度～
8	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県	島根県中山間地域等進行対策検討委員会 委員	平成22年 4月～
9	名和田清子（健康栄養学科教授）	雲南市	雲南市学校給食調理業務等委託評価委員会 委員長	平成24年4月～
10	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会 理事	平成24年5月～
11	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会生涯教育委員長	平成26年4月～
12	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県学校給食会	公益社団法人島根県学校給食会 評議員	平成24年 6月～
13	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人日本栄養士会	公益社団法人日本栄養士会 研究教育事業部企画運営委員会 副委員長	平成26年 8月～
14	名和田清子（健康栄養学科教授）	まつえ市民大学運営協議会	まつえ市民大学運営協議会 委員	平成25年 4月～
15	名和田清子（健康栄養学科教授）	公益社団法人島根県栄養士会	公益社団法人島根県栄養士会 副会長	平成26年6月～
16	名和田清子（健康栄養学科教授）	奥出雲町	奥出雲町食育推進委員会 委員長	平成25年8月～平成27年7月
17	名和田清子（健康栄養学科教授）	島根県牛乳普及協会	平成26年度牛乳・乳製品料理コンクール島根県大会審査委員長	平成26年 9月～10月
18	名和田清子（健康栄養学科教授）	雲南市	雲南市健康都市宣言策定委員会 委員	平成26年5月～平成27年3月
19	名和田清子（健康栄養学科教授）	雲南市	雲南市健康都市宣言策定委員会 委員	平成26年5月～平成27年3月
20	名和田清子（健康栄養学科教授）	雲南市	第3次雲南市教育基本計画策定委員会 副委員長	平成26年6月～平成27年3月
21	酒元誠治（健康栄養学科教授）	島根県	平成26年度島根県調理師試験委員	平成26年5月1日～平成26年10月31日
22	赤浦和之（健康栄養学科教授）	島根大学	島根大学生物資源科学部生物資源教育研究センター農業生産部門共同利用運営委員会委員	平成26年4月1日～
23	籠橋有紀子（健康栄養学科准教授）	中国地域産学官連携コンソーシアム	中国地域産学官連携コンソーシアム連絡会議委員	平成25年4月1日～
24	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市子育て支援ネットワーク会議委員	平成19年5月～平成27年3月
25	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市心身障害児小規模療育事業検討委員	平成19年5月～平成27年3月
26	山下由紀恵（保育学科教授）	松江市	松江市教育委員会専門巡回相談事業相談員	平成23年8月～平成27年3月
27	山下由紀恵（保育学科教授）	内閣府	内閣府男女共同参画推進連合会議委員	平成25年9月～平成26年3月
28	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県	島根県障がい者自立支援協議会委員	平成23年4月～平成27年3月
29	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県	島根県障がい者施策審議会委員	平成23年4月～平成27年3月
30	山下由紀恵（保育学科教授）	島根県	島根県子ども・子育て支援推進会議委員	平成25年10月～平成27年3月

NO.	教員氏名	委嘱(依頼)者	役職名	期間
31	山下由紀恵(保育学科教授)	島根県教育委員会	島根県しまねのふるまい推進連絡協議会会長	平成25年7月～平成27年3月
32	岸本 強(保育学科教授)	島根県教育委員会	島根県スポーツ推進審議会委員 副会長	平成22年8月～平成30年8月
33	岸本 強(保育学科教授)	島根県教育委員会	文科省委託事業地域を活用した学校丸ごと子どもの体力向上支援 事業実施委員会委員	平成25年6月～平成27年5月
34	岸本 強(保育学科教授)	島根県健康福祉部	福祉・介護人材確保対策ネットワーク会議委員	平成25年6月～平成27年5月
35	岸本 強(保育学科教授)	島根県障害者スポーツ 協会	障害者スポーツ支援助成金審査委員	平成23年7月～平成27年6月
36	岸本 強(保育学科教授)	雲南市教育委員会	幼児期運動指針実践調査研究委員会委員	平成24年4月～平成27年3月
37	岸本 強(保育学科教授)	島根県体育協会	しまね広域スポーツセンター企画運営委員会 副会長	平成17年10月～平成27年9月
38	岸本 強(保育学科教授)	島根県体育協会	医科学サポート委員会委員	平成18年5月～平成27年4月
39	岸本 強(保育学科教授)	島根県体育協会	普及委員会副会長	平成24年5月～平成27年4月
40	岸本 強(保育学科教授)	公益財団法人松江市ス ポーツ振興財団	理事	平成25年5月～平成27年4月
41	岸本 強(保育学科教授)	公益財団法人ごうぎん 島根文化振興財団	評議員	平成23年5月～平成27年4月
42	岸本 強(保育学科教授)	社会福祉法人島根県社 会福祉協議会	保育の就職支援プロジェクト会議委員	平成25年5月～平成27年3月
43	岸本 強(保育学科教授)	島根県バレーボール協 会	統括アドバイザー	平成23年5月～平成28年4月
44	岸本 強(保育学科教授)	中国大学バレーボール 連盟	理事	平成13年5月～平成28年4月
45	福井一尊(保育学科准教授)	島根県保育所(園)・ 幼稚園造形教育研究会	顧問	平成19年年度から平 成26年度現在
46	福井一尊(保育学科准教授)	しまね文化振興財団	島根県民会館名画劇場運営委員	平成21年年度から平 成26年度現在
47	福井一尊(保育学科准教授)	島根県社会福祉協議会	障がい者アートを活用した商取引に係る著作権等保護に関する検 討委員会 委員長	平成25年9月～現在
48	福井一尊(保育学科准教授)	益田市	益田市子ども子育て会議 委員	平成26年1月～現在
49	小山優子(保育学科准教授)	大田市	大田市子ども・子育て支援推進会議委員長	平成25年12月～
50	小山優子(保育学科准教授)	松江市	松江市施設指定管理者選定審議会委員長	平成26年6月～平成 28年5月
51	藤原映久(保育学科講師)	松江市	松江市障がい者総合支援協議会委員	平成25年7月30日～ 平成27年3月31日
52	藤原映久(保育学科講師)	社会福祉法人島根県社 会福祉協議会	社会福祉法人島根県社会福祉協議会評議員	平成26年6月1日～平 成28年5月31日
53	岩田英作(総合文化学科教)	島根県	島根県子ども読書活動推進会議委員長	平成26年6月～平成 28年6月
54	岩田英作(総合文化学科教)	島根県	文部科学省委託平成26年度「確かな学力の育成に係る実践的調査 研究②学校図書館担当職員の効果的な活用方策と求められる資 質・能力に関する調査研究」事業委員会委員	平成26年4月～平成 27年3月
55	岩田英作(総合文化学科教)	島根県立図書館	「絵本でつながる親子の絆、地域の絆」協議会委員	平成26年8月～平成 27年3月
56	岩田英作(総合文化学科教)	島根県	島根県調べ学習プレゼンテーションコンテスト審査員	平成26年11月
57	岩田英作(総合文化学科教)	出雲市	出雲市立図書館協議会委員長	平成26年12月～平成 27年3月
58	岩田英作(総合文化学科教)	松江市	松江市「小泉八雲をよむ」作詞・詩募集事業審査員	平成27年2～3月
59	マユーあき(総合文化学科教授)	島根県	島根県個人情報保護審査会委員	平成26年4月～

NO.	教員氏名	委嘱(依頼)者	役職名	期間
60	マユーあき(総合文化学科教授)	島根県	島根県情報公開審査会委員	平成26年4月～
61	マユーあき(総合文化学科教授)	松江市	松江市総合計画検証委員会委員(副委員長)	平成26年8月～
62	マユーあき(総合文化学科教授)	松江市	松江市歴史観運営協議会委員	平成24年12月～ 平成26年11月
63	マユーあき(総合文化学科教授)	松江市	松江市個人情報保護審議会委員	平成25年9月～
64	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市観光振興部観光文化課	小泉八雲110年祭まつえ実行委員会委員長	平成26年4月～平成27年3月
65	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市観光振興部観光施設課	小泉八雲記念館顧問	平成26年4月～平成27年3月
66	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市観光振興部観光施設課	小泉八雲記念館再整備展示設計ワーキング会議アドバイザー	平成26年4月～平成27年3月
67	小泉 凡(総合文化学科教授)	松江市観光振興部国際観光課	アイリッシュ・フェスティバルin松江実行委員会委員長	平成26年4月～平成27年3月
68	藤居由香(総合文化学科准教授)	島根県	しまね景観賞審査委員会委員	平成26年4月1日～平成27年3月31日
69	藤居由香(総合文化学科准教授)	松江市	松江市都市計画審議会委員	平成26年4月1日～平成27年3月31日
70	藤居由香(総合文化学科准教授)	松江市	松江市緑地及び自然環境保全審議会委員	平成26年3月14日～平成27年3月31日
71	藤居由香(総合文化学科准教授)	松江市	松江市歴史まちづくり協議会委員	平成26年4月1日～平成27年3月31日
72	藤居由香(総合文化学科准教授)	安来市	新安来庁舎建設基本設計プロポーザル審査委員会委員	平成26年2月1日～平成26年5月31日
73	藤居由香(総合文化学科准教授)	島根県建築住宅センター	一般財団法人島根県建築住宅センター評議員	平成26年4月1日～平成26年3月31日
74	山村桃子(総合文化学科講師)	島根県教育庁文化財課	島根県立八雲立つ風土記の丘指定管理者候補選定委員会	平成26年8月～
75	山村桃子(総合文化学科講師)	島根県教育委員会	島根県古代文化センター企画運営委員会委員	平成26年8月～

平成26年度 地域連携(貢献)活動の取組状況

3 その他地域連携(貢献)活動等

NO.	教員氏名	相手方	内容	日付(期間)
1	酒元誠治(健康栄養学科教授)	日本栄養改善学会	教育講演座長: 講師 厚生労働省 健康局 がん対策・健康増進課 栄養指導室長 河野美穂 「これからの栄養行政と管理栄養士のあり方」	平成26年8月21日
2	酒元誠治(健康栄養学科教授)	日本栄養学教育学会	一般口演座長	平成26年8月23日
3	酒元誠治(健康栄養学科教授)	公益社団法人宮崎県栄養士会	管理栄養士国家試験対策講座講師	平成26年8月30～31日、11月23～24日
4	福井一尊(保育学科准教授)	島根県社会福祉協議会	島根県立美術館において開催した島根県障がい者アート作品展オープニングセレモニー及び授賞式にて、障がい者アートの魅力と、作品審査会の講評について言及する。	平成26年12月6日
5	藤原映久(保育学科講師)	松江市健康福祉部保健福祉課家庭相談室	「障がい者虐待防止に関する検討会」に参加し、障害者虐待防止に関するアンケートの作成等に助言を行う	平成26年7月～

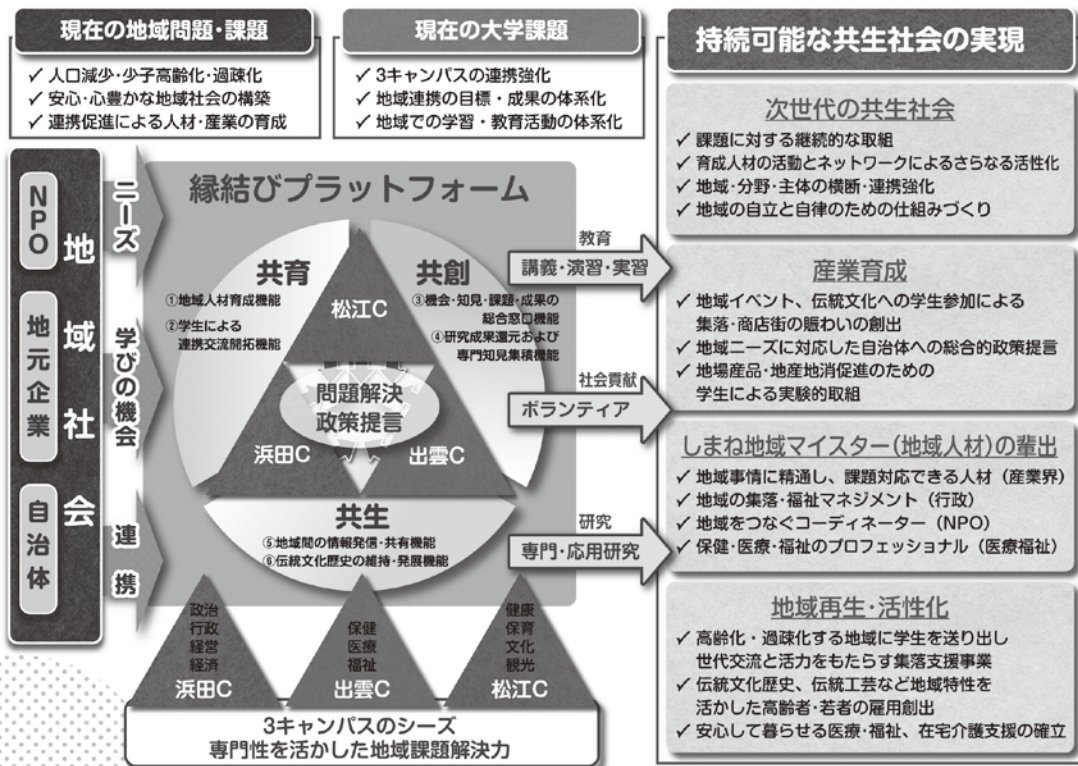
Ⅲ. 縁結びプラットフォーム事業

1.事業概要

3キャンパス共通の事業概要

公立大学法人島根県立大学は、総合政策学部(浜田市)、看護学部(出雲市)、短期大学部(松江市)の3キャンパスを有し、各キャンパスの専門分野を活かした地域貢献に取り組んでいます。本事業では、島根県の人口減少、少子高齢化、過疎化という地域共通問題へ対応するため、地域ニーズと大学シーズのマッチングを図る「縁結びプラットフォーム」という「場」を構築します。

地域と大学の共育・共創・共生に向けた 縁結びプラットフォーム



「共育・共創・共生」 とは

- 「共育」…地域とともに人材を育む
- 「共創」…知見を集積し、住みよい地域の姿を創造する
- 「共生」…地域の良さを活かし、持続的・自律的に発展する

教育・研究・社会貢献活動での3キャンパスの連携事業を発展強化させ、全学の専門性と総合力を存分に活かした効果的な課題対応等を展開していきます。

地域課題に接近しつつ教育では、過疎先進地島根県で高い専門性と実践力を有する人材を育成するために「しまね地域マイスター」認定制度(島根県立大学)、「履修証明プログラム」(島根県立大学短期大学部)を新設します。各学部で実施されてきた教育・研究・社会貢献活動を段階的に整理し、その目標・成果を全学で体系化するとともに、共通問題を多角的に研究し、市民や学生の地域活動を支援して、地域に開かれた大学として、地域社会へ貢献しています。

2.事業の主な具体的取組



島根県立大学

1 共育 (教育)

人材育成の目標:島根県における地域問題に対して様々な取組を通じて、

- ①地域事情に精通し、
- ②地域主体を繋げるコーディネート力のある人材を育成し、
- ③熱意をもち課題解決に取り組める実践力を持った人材を育成する。

○「しまね地域マイスター」認定制度の創設

本制度は、島根地域のあらゆる分野へ精通した学生を認定する、本学独自の学士認定制度です。卒業時には、自ら課題に対して向き合い、考え、課題解決に向けた行動力のある人材として、社会に飛び出すことができることを目標としています。

2 共創 (研究等)

本事業では、研究等について以下に掲げる内容を目標として取り組みます。

- ①「縁結びプラットフォーム」を通じて、学内の教員同士、地域と大学との連携を強化する。
- ②広域的、分野横断的な地域研究の実施を促進する。
- ③域内での研究成果の共有化を図る。

○地域研究費の拡充

- ・「しまね地域共育・共創研究助成金」新設

3 共生 (社会貢献)

本事業では、島根県内に分散立地する各キャンパスを拠点とし、社会貢献の目標を以下のとおり掲げています。

- ①生涯学習機能の拡充に取り組む。
- ②ボランティアの広域的対応に取り組む。

○生涯学習機能の拡充

- ・COC²-Netを活用した遠隔講義の実施を通じた市民の受講機会の拡大

カリキュラムマップ

CURRICULUM MAP

学年	1年	2年	3年	4年
演習科目				地域共生卒業研究
		地域共生演習		
専門科目	選択専門科目			
		地域課題総合理解		
基礎科目	しまね地域共生学入門		ステップアップ!!	

島根県立大学短期大学部

1 共育 (教育)

学生に対する「地域志向」教育改善は、

- ①「しまね地域共生学入門」と「地域志向」科目による地域課題への基礎教育構築。
- ②「地域共生専門コース」履修証明プログラムの選択履修による問題意識の深化。
- ③卒業研究における学域共同研究への一部参加による課題解決への展望。

○現場専門職者向け「地域共生専門コース」新設

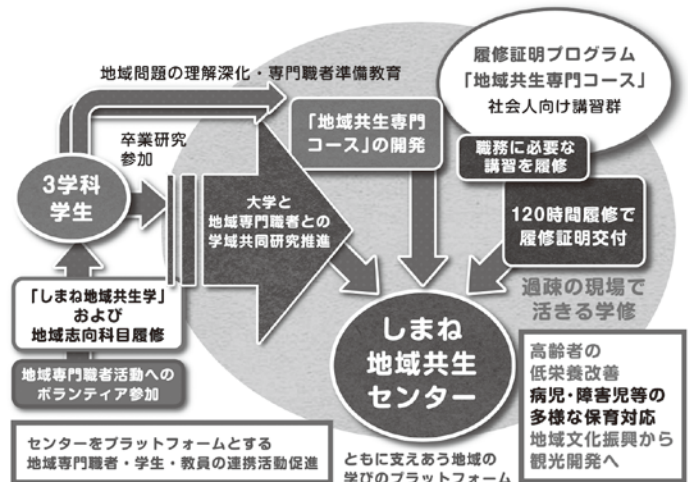
現場専門職の社会人向けの、極めて実践的かつ具体的な個別的課題の解決に結びつく知見と技術の集積としてのプログラムです。少子高齢化集落の職務に必要な講習の履修、ならびに120時間コース履修による履修証明の交付(履修証明プログラム)をおこないます。

2 共創 (研究等)

- 「しまね地域共生センター」における共同研究の推進
- 「しまね地域共生センター紀要」の発行

3 共生 (社会貢献)

- 社会人向け「地域共生専門コース」での人材育成
- 生涯学習機能の拡充
- ボランティアの広域的対応



IV. その他の活動

1. 地域貢献プロジェクト助成事業

本学では、中期目標に掲げる「地域活性化に対する支援」を推進するため、平成20年度から北東アジア地域学術交流研究助成金に「地域貢献プロジェクト助成事業」を創設している。包括協力協定を締結した浜田市、松江市、出雲市及び益田市との共同事業のほか、本学教員が地域協力者(自治体、NPO、自治会、郷土研究者等)とともに行う、大学の地域貢献活動(調査・研究等)に対して助成するものである。年間6件程度のプロジェクトを採択し、各種事業の実施や成果の還元等を通じて、地域振興への取組を支援している。

平成26年度の地域貢献プロジェクト助成事業 交付決定状況

代表者氏名 所属キャンパス	プロジェクト 協力者氏名	研究課題名	交付金額
ケイン・エレナ (浜田)	—	石見トラベル・ガイド	621千円
石橋照子 (出雲)	高橋恵美子 松谷ひろみ	園芸アクティビティを通して地域-障がい者-学びの場をつなぐプロジェクト	714千円
高橋恵美子 (出雲)	小村智子 石原香織 山下一也	発達障害をもつ子どもと家族のためのサマープログラムのシステムの構築	720千円
赤浦和之 (松江)	—	西条ガキ冷凍熟柿および冷凍ドライ熟柿生産技術の開発	713千円
籠橋有紀子 (松江)	川谷真由美	しまね和牛を利用した高齢者向けの食肉開発～理化学分析による検討～	800千円
岩田英作 (松江)	—	島根県の民話資料の保存と整理	774千円

2. 島根県との連携

島根県立大学と島根県は、地域の振興に貢献するため、これまでも様々な連携事業を実施してきたが、情報の共有化・連携のより一層の推進のため、平成24年から連携企画会議及び連携調整会議の開催により、定期的に意見交換を行っている。

1. 第4回島根県・島根県立大学連携調整会議

(1) 日時 平成25年6月3日(火)10:00～11:30

(2) 場所 島根県職員会館多目的ホール

(3) 概要

- ① 平成25年度の連携状況の報告
- ② 平成26年度の連携計画の報告
- ③ 県立大学の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の説明
- ④ 県立大学の地域連携活動に関する意見交換

2. 第5回島根県・島根県立大学連携調整会議

(1) 日時 平成26年11月7日(金)10:00～11:30

(2) 場所 島根県職員会館多目的ホール

(3) 概要

- ① 連携現状の報告
- ② 県立大学の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」実施状況の報告
 - ・9月連携会議で出されたニーズとシーズのカップリング状況
 - ・平成25年度COC事業成果報告書(概要版)
- ③ 連携を期待する事項についての提案
 - ・県からの提案……学生によるボランティア活動の促進
- ④ 情報提供
 - ・県からの情報提供……人口問題に関する県の対応状況

3. 中村元記念館と公立大学法人島根県立大学との連携に関する協定書締結

松江市出身でインド哲学・仏教学の世界的権威である故中村元博士の蔵書などを収める中村元記念館と公立大学法人島根県立大学本学は、次世代を担う研究者の発掘・育成に貢献すべく、広報等の分野において相互に協力し、地域社会の発展に寄与することを目的として、平成26年10月6日(月)に連携協定を締結しました。

当日、連携調印式がおこなわれ、本学の他に大正大学、東京大学(インド哲学仏教学研究室)、佛教大学、武蔵野大学、立正大学、龍谷大学もこの連携調印式に出席、同様に連携協定を締結され、1年前に締結済みの島根大学、その後締結の大谷大学、東洋大学も加わって、全10大学と中村元記念館が連携協定を結んだことになります。

なお、当日は企画展「中村元著作展」開催の初日で、中村元記念館設立の目的の一つとして掲げる「学術振興」の一環として、「中村元東洋思想文化賞」の創設が発表されました。



連携調印式の様子

中村元記念館・前田館長(左)
地域連携推進センター副センター長・小泉教授(右)



連携調印式出席の皆さん

おわりに

本学の地域の「知の拠点」としての活動は、文部科学省の平成25年度「地(知)の拠点整備事業」に採択された「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」事業に基づく活動のみならず、従前から実施してきた地域連携活動もこれに含まれると思われることから、両者をあわせた報告書としてとりまとめを行っているところである。重複もあるが、平成26年度の活動をふり返ってみたい。

「地(知)の拠点整備事業」に基づく活動として、まず、「共育」の取組としては、平成27年度から先行して浜田キャンパス(総合政策学部)の学生に向けて開講することになっている1年次必修科目「しまね地域共生学入門」の準備作業を行った。その他、しまね地域マイスター認定制度の構築を進め、おおよその形が整った。松江キャンパスのしまね地域共生センターでは、履修証明プログラムの開発に着手している。平成26年度は、本事業による教育改革が大きく動き出した年といえよう。

「共創」の取組としては、しまね地域共育・共創研究助成金は、地域活動経費12件、しまね地域共創基盤研究費19件を採択し、さまざまな活動・研究が行われた。2月17日に開催した「全域フォーラム」では、そのいくつかの成果が報告され、具体化はまだこれからとしても、複数の学部・学科の教員・学生が関わった取組の方向性も示された。また、9月30日に開催した「9月連携会議」には、連携いただいている団体等から地域の課題(ニーズ)を本学からはシーズをもち寄り、次年度の活動・研究に向けたマッチングを試みた。21件のマッチングが成立し、非常に有意義ではあったが、さらに仕組みを改善していく余地も残されている。

「共生」に向けた活動として、3キャンパスの学生が協力してボランティアの企画を実践したり(6月28日出雲キャンパスにて実施した)、「COC²-Net」を用いて、複数キャンパスを結んだ公開講座等の開催も頻繁に行えるようになった。

従前から行ってきた地域連携活動も、着実な実施ができたと思われる。公開講座は、例年どおり3キャンパスそれぞれで開講され、多くの受講者にお越しいただくことができた。ひとつの試みとして、浜田キャンパスでは「特別公開講座」も開催した。学生のボランティア活動も、ひき続き活発に行われている。地域連携推進センターで支援し、開催してきた3キャンパス合同での学生ボランティアの研修・交流・報告の会について、あらためて開催の仕方を整理したので、次年度からもさらに充実した形で継続できそうである。その他にも、産公学連携や他の教育機関との連携など、それぞれのキャンパスで多くの活動が実践されている。

「地(知)の拠点整備事業」に基づく活動にせよ、その他の活動にせよ、3つのキャンパスの特長を活かしつつ、協力体制を強め、連携いただいている地域のみなさまの声も参考にさせていただき、一段と充実させていきたいものである。

地域連携推進センター

センター長 林 秀司

参 考

島根県立大学は、21世紀をになうべき創造性豊かで実践力ある人材を育成し、教育研究を通して地域の発展に資するため、2007年4月、既存の島根県立大学（浜田）、島根県立島根女子短期大学（松江）、島根県立看護短期大学（出雲）の3つの大学を統合して開学した。

ここに島根県立大学は、従来3キャンパスがそれぞれ歴史的に蓄積してきた成果を継承し、21世紀における新たな飛翔をめざす大学の姿勢を内外に示すため、島根県立大学憲章を定めることとした。

島根県立大学憲章

島根県立大学は、地域の先人である西周が標榜した“「純理の学」から「実践の学」にわたる諸科学の統合”をめざし、各専門領域における研究活動を深め、それにもとづく創造的な教育活動によって、現代社会の諸課題に国際的な視野からアプローチし、また、地域社会の活性化と発展に寄与する人材を養成することを使命とする。あわせて、これまで培った学問的蓄積と学際的ネットワークを活かしながら、「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を実現するとともに、北東アジアをはじめとする国際社会の発展に寄与する大学づくりを目標とする。

1. 市民的教養を高め、主体的に学び、実践する人材を養成する

島根県立大学は、幅広い市民的教養と高度の専門知識、豊かな人間性と高い倫理観を有し、主体的に問題を発見・整理・解決し、現代社会の諸分野において着実に貢献できる人材を養成する教育の府となることをめざす。

2. 現代社会の諸課題に対応した“諸科学の統合”を実践する

島根県立大学は、複雑化する現代社会の諸課題に対処するため、人間と社会に関する専門諸科学を総合的に研究する学問の府となることをめざす。

3. 地域の課題を多角的に研究し、市民や学生の地域活動を積極的に支援して、地域に貢献する

島根県立大学は、地域に開かれた大学として、その保有する豊かな知的資源を活かし、個性的で実践的な地域研究を市民や学生と連携しながら推進し、また、地域活動に積極的に参加することによって、地域に貢献する大学となることをめざす。

4. 北東アジア地域をはじめとする国際的な研究教育の拠点を構築する

島根県立大学は、今後ますます重要度を増す北東アジア地域、および世界の諸地域との教育的・学術的ネットワークの展開を通じ、国際的視野と豊かな研究蓄積を集約した北東アジアの知の拠点となることをめざす。

5. 自律と協同、透明性が高く機能性に優れた大学運営を行う

島根県立大学は、3キャンパスがそれぞれ学生と教職員一体となって独自性を発揮し、かつ、有機的結合を図り、たえず自己検証と改善に努めながら、情報を積極的に公開し、社会や時代の変化に即応できる大学運営を行う。

公立大学法人島根県立大学と浜田市との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、公立大学法人島根県立大学と浜田市とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの諸分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して別に定めるものとする。又、この協定に定めのない事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成20年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この協定締結の証として本書2通を作成し、各自1通を保有する。

平成19年5月18日

公立大学法人島根県立大学
理事長

宇野重昭



浜田市
浜田市長

宇津徹男



松江市と公立大学法人島根県立大学との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、松江市と公立大学法人島根県立大学とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して定めるものとする。また、この協定に定めのない事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成21年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了の日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

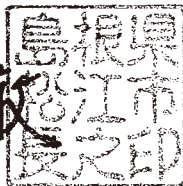
この協定の証として本書2通を作成し、各自1通保有する。

平成19年10月30日

松江市

松江市長

松浦正敬



公立大学法人島根県立大学

理事長

宇野重昭



出雲市と公立大学法人島根県立大学との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、出雲市と公立大学法人島根県立大学とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの諸分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成22年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了の日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この協定の証として本書2通を作成し、各自1通保有する。

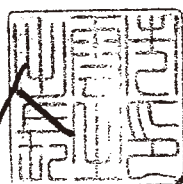
平成21年10月8日

出雲市

公立大学法人島根県立大学

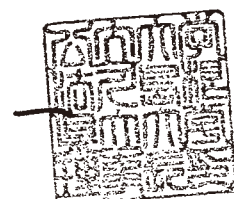
出雲市長

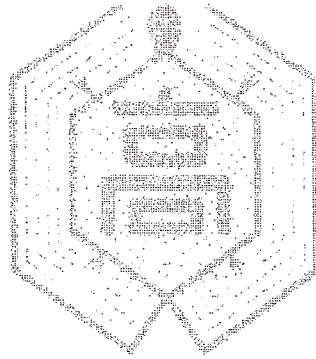
長岡秀人



理事長

本田 雄





島根県立大学と島根県立浜田高等学校との高大連携に関する協定

島根県立大学と島根県立浜田高等学校とは、次のとおり合意する。

- 1 島根県立大学と島根県立浜田高等学校とは、相互の教員・職員・学生・生徒が連携して「魅力ある大学・高等学校づくり」を推進することを目的とする高大連携事業を実施する。
- 2 この協定に基づく具体的な連携事業は、島根県立大学と島根県立浜田高等学校の協議を経て決定する。
- 3 本協定は、島根県立大学学長及び島根県立浜田高等学校校長による調印の後その効力を生じ、3年間の有効期間を持つものとする。本協定は、有効期間が終了する6ヶ月前までに、島根県立大学、島根県立浜田高等学校のいずれか一方が、相手方に終了または改正を希望する旨を書面により意思表示しない限り、更に3年間有効期間が更新されるものとする。

平成16年11月18日

島根県立大学

学 長

宇野重昭

宇 野 重 昭

島根県立浜田高等学校

校 長

三浦正樹

三 浦 正 樹

島根県立大学と島根県立江津高等学校との高大連携に関する協定

島根県立大学と島根県立江津高等学校とは、次のとおり合意する。

- 1 島根県立大学と島根県立江津高等学校とは、相互教員・職員・学生・生徒が連携して「魅力ある大学・高等学校づくり」を推進することを目的とする高大連携事業を実施する。
- 2 この協定に基づく具体的な連携事業は、島根県立大学と島根県立江津高等学校の協議を経て決定する。
- 3 本協定は、島根県立大学学長及び島根県立江津高等学校校長による調印の後その効力を生じ、3年間の有効期限を持つものとする。本協定は有効期間が終了する6ヶ月前までに、島根県立大学、島根県立江津高等学校のいずれか一方が、相手方に終了または改正を希望する旨を書面により意思表示しない限り、更に3年間有効期間が更新されるものとする。

平成19年6月1日

島根県立大学

学長 宇野重昭



島根県立江津高等学校

校長 尾村幸行



島根女子短期大学・松江商業高等学校・湖南中学校の 三者連携に関する協定書

島根県立島根女子短期大学、島根県立松江商業高等学校及び松江市立湖南中学校の三者は、次のとおり合意する。

- 第1 島根県立島根女子短期大学、島根県立松江商業高等学校及び松江市立湖南中学校は、相互の教員・職員・学生・生徒が連携し、「より魅力あるキャンパスづくり」を推進することを目的とする三者連携事業を実施する。
- 第2 この協定に基づく具体的な連携事業は、三者で協議して決定する。
- 第3 この協定は、島根県立島根女子短期大学長、島根県立松江商業高等学校長及び松江市立湖南中学校長の調印の後その効力を生じ、その有効期間は3年間とする。
- 2 この協定は、有効期間が満了する日の6か月前までに、三者のいずれもが更新しない旨を他の二者に書面により通知しない場合は、さらに3年間有効期間が更新されるものとし、以後も同様とする。

平成18年11月 1日

島根県立島根女子短期大学

学 長 有 馬 毅 一 郎



島根県立松江商業高等学校

校 長 月 森



松江市立湖南中学校

校 長 曾 田 秀 雄



島根女子短期大学・松江商業高等学校・湖南中学校の 三者連携に関する協定書

島根県立島根女子短期大学、島根県立松江商業高等学校及び松江市立湖南中学校の三者は、次のとおり合意する。

- 第1 島根県立島根女子短期大学、島根県立松江商業高等学校及び松江市立湖南中学校は、相互の教員・職員・学生・生徒が連携し、「より魅力あるキャンパスづくり」を推進することを目的とする三者連携事業を実施する。
- 第2 この協定に基づく具体的な連携事業は、三者で協議して決定する。
- 第3 この協定は、島根県立島根女子短期大学長、島根県立松江商業高等学校長及び松江市立湖南中学校長の調印の後その効力を生じ、その有効期間は3年間とする。
- 2 この協定は、有効期間が満了する日の6か月前までに、三者のいずれもが更新しない旨を他の二者に書面により通知しない場合は、さらに3年間有効期間が更新されるものとし、以後も同様とする。

平成18年11月 1日

島根県立島根女子短期大学

学 長 有 馬 毅 一 郎



島根県立松江商業高等学校

校 長 月 森



松江市立湖南中学校

校 長 曾 田 秀 雄



島根県立大学短期大学部（出雲キャンパス）出前講座の

収録・放送に関する覚書

公立大学法人島根県立大学（以下「甲」という。）と石見銀山テレビ放送株式会社（以下「乙」という。）とは、乙が島根県立大学短期大学部（出雲キャンパス）の出前講座の収録、放送を実施するにあたり、次のとおり覚書を締結するものとする。

（事業内容の分担）

第1条 事業内容の分担は以下のとおりとする。

- （1）甲に所属する職員は、出前講座の台本及び資料を作成する。
- （2）乙は甲に所属する職員が作成した台本をもとに番組を収録し放送する。
- （3）乙は番組収録に係る著作権使用許可等の必要な諸手続をすべて行う。
- （4）乙は作成した番組をDVDに出力し、甲へ受け渡す。

（本覚書における出前講座の定義）

第2条 本覚書における出前講座とは、甲乙協議の上で定めた主題について、甲に所属する職員が企画構成する講座とする。

（事業に関する経費）

第3条 事業に関する経費については以下のとおりとする。

- （1）出前講座経費 出前講座に関する経費はすべて甲が負担する。
- （2）収録放送経費 収録・放送に関する経費はすべて乙が負担する。

（著作権の取扱い）

第4条 作成した番組に関する著作権は甲乙が共有する。

- 2 作成した番組を甲乙が非営利目的で使用する場合は相互の許可は不要とする。

（協議）

第5条 この覚書に定めのない事項については、甲乙協議の上これを定めるものとする。

(有効期間)

第6条 この覚書の有効期間は、覚書締結の日から平成22年3月31日までとする。ただし、この覚書の有効期間満了の日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この覚書の締結を証するため、本覚書を2通作成し、それぞれ記名押印の上、各自1通を保有するものとする。

平成22年2月4日

甲 島根県浜田市野原町2433番地2
公立大学法人島根県立大学

理 事 長

本田 雄



乙 島根県大田市大田町大田口1089-4
石見銀山テレビ放送株式会社

代表取締役

杉谷 雅禎



看護連携型ユニフィケーション事業 基本協定書

島根県病院局（以下「甲」という。）と公立大学法人島根県立大学（以下「乙」という。）とは、看護連携型ユニフィケーション事業（以下「ユニフィケーション事業」という。）の実施に関し、次のとおり基本協定を締結する。

（趣旨）

第1条 この基本協定書は、甲及び乙が協働で実施するユニフィケーション事業に関して、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第2条 ユニフィケーション事業は、甲が設置運営する臨床の場である「島根県立中央病院」「島根県立こころの医療センター」と、乙が設置運営する教育の場である「島根県立大学短期大学部出雲キャンパス」が協働して実施することにより、看護ケアの質の向上及び看護教育の向上並びに両施設の機能を向上させることを目的とする。

（事業の範囲）

第3条 ユニフィケーション事業の範囲は以下のとおりとする。

- 1) 看護の学習会に関すること
- 2) 患者や家族のケアに関すること
- 3) 看護教育に関すること
- 4) 看護研究に関すること

（実施場所）

第4条 ユニフィケーション事業の実施場所は、甲が設置運営する「島根県立中央病院」「島根県立こころの医療センター」及び乙が設置運営する「島根県立大学短期大学部出雲キャンパス」とする。

（協議会の設置）

第5条 ユニフィケーション事業を運営する機関として、甲及び乙の職員を構成員とする「看護連携型ユニフィケーション事業協議会」（以下「協議会」という。）を設置する。

（実施要領）

第6条 ユニフィケーション事業の実施および協議会の構成、運営に係る細目等は、「実施要領」として別に定めるものとする。

(実施計画の策定)

第7条 ユニフィケーション事業の実施に当たっては、協議会においてユニフィケーション事業に係る事項を明記した「看護連携型ユニフィケーション事業実施計画」を策定し、事業実施2か月前に甲及び乙に提出し、承認を得るものとする。

(活動企画書の作成)

第8条 主担当者は、前条の実施計画に基づき、活動内容、実施場所、従事者、日時等を記載する「看護連携型ユニフィケーション活動企画書」を協議会に提出し、承認を得るものとする。

(個人情報の保護)

第9条 ユニフィケーション事業の実施に当たっての個人情報の取り扱いについては、別記「個人情報取扱特記事項」を遵守するものとする。

(基本協定の変更)

第10条 この基本協定書及び第6条の実施要領に関して、疑義又は定めのない事項が生じた場合は、甲乙協議して定めるものとする。

(有効期限)

第11条 この協定は、締結の日からその効力を発揮するものとし、甲又は乙が文書を持って協定の終了を通知しない限りその効力を持続するものとする。

本協定の証として本書2通を作成し、甲乙記名押印のうえ、各自その1通を保有する。

平成23年1月6日



甲 島根県出雲市姫原4-1-1

島根県病院事業管理者

乙 島根県浜田市野原町2433番地2

公立大学法人島根県立大学理事長

中川正
本田雄一



公立大学法人島根県立大学と益田市との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、公立大学法人島根県立大学と益田市とが包括的な連携のもと、人材育成、共同研究、知識基盤社会の形成などの諸分野において相互の協力関係を一層深化させ、もって地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) まちづくりのための連携
- (2) 国際交流推進のための連携
- (3) 人材育成のための連携
- (4) 産業振興のための連携
- (5) 保健・医療・福祉の向上のための連携
- (6) 教育・文化の振興のための連携
- (7) 学術研究のための連携
- (8) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な事項については、両者が協議して別に定めるものとする。又、この協定に定めのない事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成26年3月31日までとする。ただし、この協定の有効期間満了日の1月前までに、両者いずれからも改廃の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

この協定締結の証として本書2通を作成し、各自1通を保有する。

平成25年5月27日

公立大学法人島根県立大学
理事長

本田 雄一



益田市
益田市長

山本 浩



公立大学法人島根県立大学と学校法人大多和学園との連携協力に関する協定書

(目的)

第1条 この協定は、公立大学法人島根県立大学と学校法人大多和学園（以下「学園」という。）が連携し、生徒・学生の科学的思考と発表力の段階的育成を行い、もって創造性豊かな国際的に通用する人材の育成を図ることを目的とする。

(協力事項)

第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1) 学園の実施するスーパーサイエンスハイスクール事業（以下「SSH事業」という。）における連携
- (2) 教育についての情報交換及び交流
- (3) その他両者が協議して必要と認める連携

(協議)

第3条 この協定書の実施に関し、連携協力の細目等の具体的な実施については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期間)

第4条 この協定の有効期間は、平成26年4月1日からSSH事業が終了する平成30年3月31日までとする。ただし、SSH事業の指定期間が延長された場合、その終了日までとする。

この協定の証として本書2通を作成し、各自1通保有する。

平成26年3月27日

公立大学法人島根県立大学

学校法人大多和学園

理事長

本田 雄一



理事長

大多和 聡宏



公立大学法人島根県立大学と中村元記念館との連携に関する協定書

(目的)

第1条 本協定は、公立大学法人島根県立大学（以下「島根県立大学」という。）と中村元記念館が連携し、広報等の分野において相互に協力し、地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(連携・協力)

第2条 島根県立大学と中村元記念館は、次の事項について連携・協力する。

- (1) 広報および情報提供に関する事項
- (2) その他両者が必要と認める事項

(協議)

第3条 この協定の実施に関し、連携の具体的な事項については、両者が協議して定めるものとする。

(有効期限・改廃)

第4条 この協定の有効期間は、協定締結の日から平成27年3月末日までとする。ただし、この協定の有効期間満了の日の前月末までに、島根県立大学と中村元記念館のいずれからも改廃の申し入れがないときは、更に1年間有効期間を延長するものとし、その後も同様とする。

2 島根県立大学と中村元記念館は、この協定の有効期間中であっても、双方協議してこの協定書を改廃することができる。

この協定締結の証として本書2通を作成し、両者記名押印のうえ各自1通を保有する。

平成26年10月6日

公立大学法人島根
理事長 本田雄一



中村元記念館
館長



お問い合わせ先

浜田キャンパス（地域連携推進センター）
〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2
TEL:0855-24-2396 FAX:0855-23-7352
E-mail:tiiki@admin.u-shimane.ac.jp

出雲キャンパス（しまね看護交流センター）
〒693-8550 島根県出雲市西林木町151
TEL:0853-20-0220 FAX:0853-20-0227
E-mail:kango@izm.u-shimane.ac.jp

松江キャンパス（しまね地域共生センター）
〒690-0044 島根県松江市浜乃木7-24-2
TEL:0852-28-8322 FAX:0852-28-8366
E-mail:kyousei@matsue.u-shimane.ac.jp

平成26年度 地(知)の拠点整備事業 成果報告書 (地域連携活動報告書)

編集・発行

島根県立大学地域連携推進センター
〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2
TEL:0855-24-2396 FAX:0855-23-7352
E-mail:tiiki@adomin.u-shimane.ac.jp